女人藝術



六月號

三上於菟吉・長篇小說集 第一卷

激流

現下長篇界の覇者三上氏が會心の長篇を集めて傑作全集を作る。第一卷は東日・大毎に連載され、更に映畫となつて、目下異常のセンセーションを起しつゝある『激流』となす。

著者曰く

これは從來の私の作に比べて、より奔放、より自由に、大に趣の變つた世界を描かんとする決心の下に筆を執つたものである。人間の心の奥に巣食ふ欲望の種々な顯現への探求は、私として止むに止まれぬ熱情で、努めて現實の社會相に觸れ、努めて人情の根柢を突きとめて見たいのが我が本願である。私は此の度こそ死力を盡くす覺悟だ――かう執筆前に宣言した此の『激流』は果して讀者の期待に酬い得たらうか何うか。切に熱讀を待つ次第である。

日活秋季超特作映畫

伊東深水氏畫・四六判最上製全一册・美本 壹圓五拾錢 郵送料拾貳錢

東京市牛込區矢來町 振替東京一七二四番 新潮社 電話牛込・八〇六・八〇八 長八〇五・八〇七・八〇九

三上於菟吉・長篇小説集 第二巻（新刊出來）

惡魔の戀

黒髪
颱風

「惡魔の戀」は僕が、二十七八歳になつて始めて人生の苛辣な姿に憤怒を感じたころ書いた長篇だ。僕は總ゆる醜惡と野卑とを、奥齒を嚙み締め乍ら、その中に叩き込んだことを覺えてゐる。大向うは大分受けた。「黒髪」は前者に比較すれば大分落付いた三十五歳の作で、愛慾の解剖に於いては、僕半生を通じて最も成功し得たと信じてゐる。この二作は各々異つた意味で作者偏愛の作と言つてもいい。「颱風」は淫蕩な女性の生活史だ。よくもこんな淫らな世界を描いたと自分でも呆れてゐる。が、ある讀者の興味を繋ぐだけの力は持つてゐるだらう。總紙數一千數百枚。いづれも心血は注いであると自信する。（作者）

▼四六判特製
▼六百四十頁
▼壹圓八拾錢
▼送料拾貳錢

第一巻

激流

著者が心血を吐露せる大長篇傑作である。

▼價壹圓七拾錢
▼郵送料拾貳錢

東京牛込 新潮社 振替東京一七四二

女人藝術六月號 目次

―禁轉載―



初夏風景

應接室



発行所 女人藝術社

振替東京七五八二五



――ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと惱ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの變貌を見て來た。そして彼女はかなり十分に内省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な痼癖に、内なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期――展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る――

三上於菟吉氏序

内容

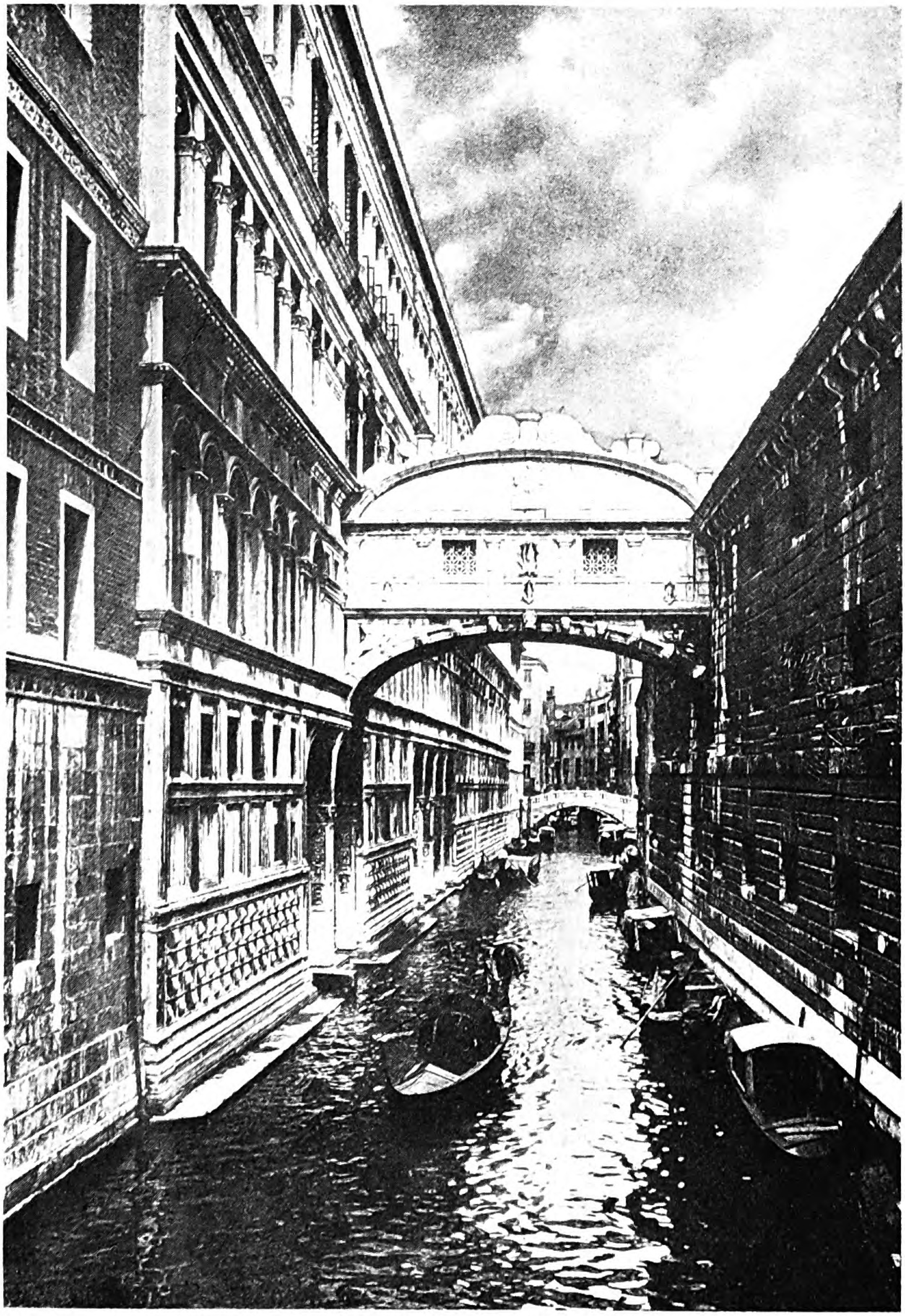
近刊

時雨脚本集

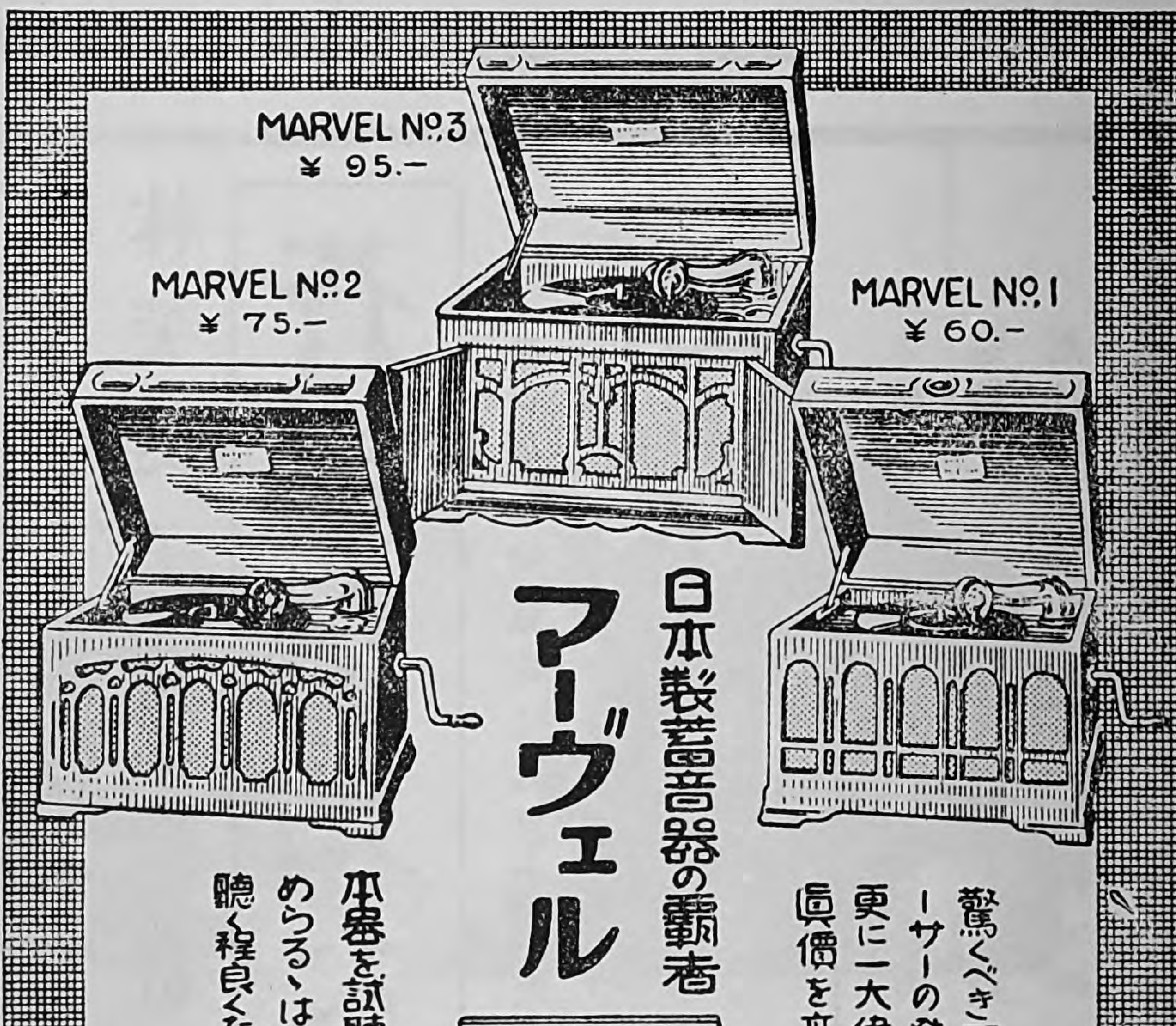
第一輯



ソヴエート・ロシヤ勞働者農民の母、無學者撲滅運動の指導者としてのレーニン夫人、クルプースカヤ



I stood in Venice, On the Bridge of sigh.


MARVEL No.3
¥ 95.–
MARVEL No.2
¥ 75.–
MARVEL No.1
¥ 60.–
日本製蓄音器の覇者
マーヴェル
驚くべきマーヴェルレプロデューサーの発明によって本器は更に一大偉力を加へ一段と眞價を高めました
本器を試聴せずに蓄音器を求めらるゝは早計なり。聴けば聴く程良くなる蓄音器はこれ
MARVEL No.4
¥ 150.–
東京銀座三丁目
十字屋楽器店



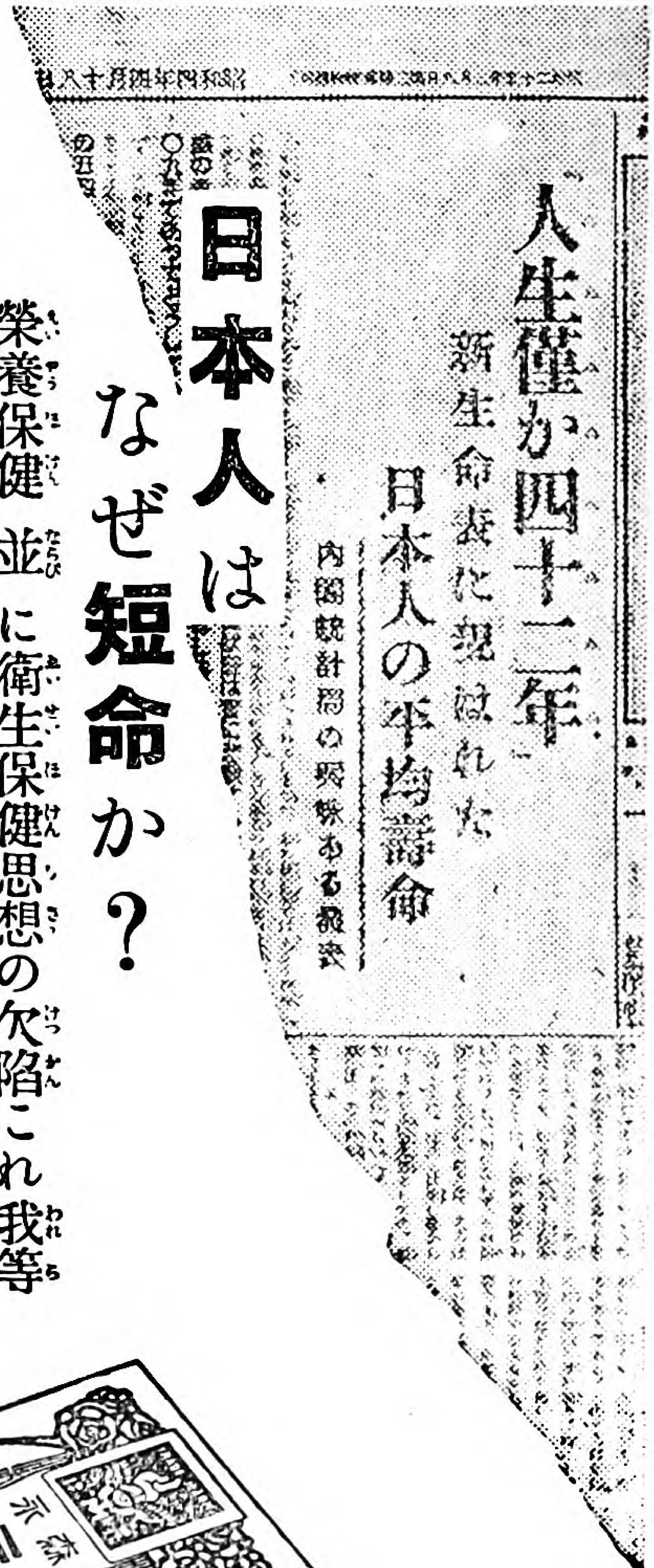
泣いた日の翌朝うつした寫眞。
でもあれは
朗らかな天氣の日だつた。

三宅やす子



静かなる春の朝に指をくみ
さて、何からいたしませう
蟲の音の小夜のふしどに指をくみ
ありがたうよ、今日はぶじ
健かにあらんかぎりは指をくみ
おまへの力はもつと出ますよ

生田花世


人生僅か四十二年
新生命表に現はれた
日本人の平均壽命
内閣統計局の興味ある發表

日本人はなぜ短命か？

榮養保健並に衛生保健思想の欠陥これ我等の健康を害ふ根本的原因です　弊社は茲に大いなる自信を以て完全なる衛生設備の下　合理的に榮養價値づけられたる森永ミルクキャラメルの御愛用を貴下並に貴下の愛兒の長壽の爲に…切にお推め致します

一個　五錢・十錢・廿錢

森永ミルクキャラメル



プロレタリア娯樂雜誌 大衆

六月號が出た!!!

・金持・貧乏人・其他・

實話 安田は儲かる家鴨は逃げる……井東憲

マルケードの跳梁……本莊可宗

壇上の指導者……田所輝明

時代の尖端に動く人々……DEF
——社會運動者の卷——

問題のプロ大衆文學

大長篇 加波山……落合三郎　松山文雄畫

ローマ議會の血戰……皆川眞　一刀研二畫

維新の先驅……馬上英一郎　渡邊三樹畫

半ズボン團奮闘記……藤枝丈夫　永田侑畫

マルキストのからくり……前田欣一

連載 フローレンス奇談……辻恒彦譯　村山知義畫

童謡・詩・民謡

早鐘 野良かへり……槇本楠郎

十一月……仁木二郎

朝の仕事場にて……淺野純一

空の星……落合幸太郎

死んだつて糞……一勞働者

畜生奴等……一勞働者

アブレ……一勞働者

芝公園十號の四
振替東京八〇五〇一

大衆社

定價三十錢

女人藝術

六月號



全女性進出行進曲を募る!!

――すでに女性は重き足枷を蹴放して、暗き心の牢獄を脱出した。今やわれ等の前にあるのは陽光雨の如く降りそゝぐ街頭である。轟音耳を聾する工場である。屹立して天空を摩する思想の尖巓である。あらゆる人類に伍して、われ等はすべての生き動くものの世界へと前進する。友よ、かかる時われ等の爲めに、讃め、勵まし、歡こび、突き進ませる「歌」がなければならぬ。疲憊して路傍に仆れた「母」と「娘」とをも蘇へらせる「歌」がなければならぬ。激越にして而も優雅に、燦爛として而も素朴に、裸らはにして而も賢こき「歌」がなければならぬ。本社が「女性の歌」を偏ねく募る所因はここにある。全國同性の寄稿を待つ!

I 應募者女性に限る
II 歌詞隨意 但し群集の合唱に適するもの
III 締切 昭和四年五月三十一日
IV 賞金 壹等金貳百圓 貳等五拾圓

V 附屬賞品 1 雜誌三ケ月券二十枚・メヌマポマード三十個文藝春秋社 2 圖書券百枚 平凡社 3 同 改造社 4 同 新潮社 5 半襟百掛 高島屋呉服店 6 松屋呉服店 7 十字屋樂器店

VI 應募歌は七月號（女人藝術一週年記念號）誌上にて發表。

VII 當選歌詞は作曲を附し、全國女學校、及工場に寄贈す。

VIII 作曲者の選定を讀者の指定に待つ。各自推選せる作曲者氏名を別行規定の欄内に記し投票をこふ。

選者は知名なる各階級の女人を網羅す

女人藝術社

全女性進出行進曲	
推薦作曲者氏名	推薦者
	住所
	氏名

女人藝術 一年間批判會

平塚らいてう
富本一枝
今井邦子
新妻伊都子
生田花世
伊福部敬子
望月百合子
上田文子
中本たか子
平林たい子
林芙美子

○

八木秋子
熱田優子
素川絹子
小池みどり

トクキユウノリオクレタザ　ダンカイマニアワヌオワビ　ヨロシクタノムシグレ

生田　女人藝術も一周年になりますから、初めから、理解と同情を持つてゐて下すつた方々に、この際、この雜誌が步いて來た道に付て、どうぞ御忌憚なく勵ましいまし め、育てて頂くやう仰しやつてほしいと時雨さんもそんなに云つていられましたから、どうぞお氣樂に十分に言つて頂きたいと思ひます。

今井　私、直接編輯に携はらないでゐて、樂ばかりしてゐて、彼是眞つ先に申しては申譯ないのですけれども、此間の神近さんの御批評は、大變良い御批評だと思つたんです。聰明に、さうして眞實に私達も感じてゐた所に觸れて、はつきり仰しやつて頂いたと思つて、嬉しく思ひました。一時少しだれはじめやしないかと大變心配して氣になつた時があつたんですが、又この一二月それが直つて來た。立直らうとして來た氣分も見えて來た時に、神近さんの御批評が出ましたから、一層効果的に宜からうと思ひまして、大變喜んで拜見しました。

新妻　私もあなたに贊成です。

生田　雜誌の事に付きまして、平林さんから直接はつきりと伺つて居るわけではないのですが、雜誌と云ふ物を公器として愛して下さるお氣持ちは、大變有難いと思ひまして、斯う云ふやうな際に眞實に心から言つて頂きたいです。

素川　平林さん、それをなるたけ具體的にお願ひします。

平林　私もやつぱり今、今井さんが仰しやつたやうな事で、今までの雜誌に無かつた、女の人が男の人のやうに大膽にやる所……さう云ふ所が珍しいから、そこに引かれて行つたのぢやないかと思ひました。さう云ふ傾向が大變見えた。たゞ珍しいとか、面白いと云ふばかりで雜誌が生み出されて、眞面目な方向に進む所が見えなかつたやうに思つた。それは勿論雜誌の全體の頁から云ふと、少しの頁ですが、全體の色彩をそれが支配して居るやうに私共には見える。一頁でも警戒しなければならぬ。其の意味で、勿論良い頁もありましたけれども、其の一頁の爲に汚されてゐたやうな傾向があると思ひましたが、この一二月非常に良い雜誌になつたやうに思はれます。

生田　神近さんも先月號は氣に入つたと云ふお話でした。是非今日の會にも來たいと云ふことでしたが……

今井　いつか「戀愛座談會」を初めてやつた時は、戀愛座談會でも神聖なものがあつたがさう、何と云ひますかね、あれが境になつて、あすこからもう一歩出たら、いけない所に行きはしないか……

生田　つまり「男性訪問」の頃から……

今井　あれが分岐點でせうね。

平林　『自傳的戀愛……』あれがいやでしたね私葉書を上げましたが……

生田　平林さんが、苦言を呈しますと云ふお葉書を書いて即時にお寄こしになつた、

素川　あれを、云はれる意味が、全然分らないぢやないが、或る點までは販賣政策もあつたんで、一概に不眞面目なつもりはないけれども、どうなんです?

伊福部　あの表紙なんか……

熱田　繪としては好いですね。

今井　それは藝術的には……內容が眞面目でも一寸した所で……

熱田　さう云ふ觀方をしてはね。

平林　自傳的戀愛の小說をかこうとして、人間が小說を書けるものぢやない、小說と云ふものを藝術とすれば……。自分のゴシップとしてなら、それは私でも自分の事を書きますけれども。小說に對する意味であれは誰だつて眞面目でせう。さう云ふ意味で、あれは女人藝術ぢやなかつたやうに思ふ。有名な女性のゴシップを讀ませると云ふ興味はあるかも知れないが……

素川　自傳的戀愛は、小說に書けないと云ふのですか?

平林　いゝえ、書けないと云ふのぢやなくつて、さう云ふ意圖の下に戀愛を書くことはありますけれども、たゞ戀愛そのものゝ面白味を書く爲に、ゴシップ的な面白味を書く爲に、小說と云ふものは書けないと思ふ。

素川　でも、此方の氣持ちはゴシップ的の興味で書かせたのではない。書く人もみんな、そんな氣持でお書きになつたんではない。

平林　それはさうでせうが、さう云ふ感じがするですよ。

生田　例へば窪川さんの物とか、何とか云ふ英國にいらつしやつたあの方のなんか、自傳的と云ふ表題を除いて、獨立して見れば大變上品な物ですし、又他にもいろ／＼な傾向で、いろ／＼ありますが、自傳的戀愛號と云ふ中に入らない小說も半分以上はあ

りました。着想點の違つた物が……

八木　「自傳的戀愛小說號」でも必ず自分の體驗をお書きになつたものでない、大分創作の人もありませう。

新妻　自傳的戀愛號と云ふことも、否定はしない、惡いとは思はない、販賣政策としては……。併し作る人から云へば、さう云ふつもりで書いたんぢやないのに、さう云ふ風に見えるとすれば、作者の方でおいやではないでせうか。今度の婦人世界ですか、三宅さんの事が書いてありました。あれ、お書きになつた方は、あんな廣告を出されると思つて、お書きになつたんではないだらうと思ふ。

素川　それとは少し違ひます。

新妻　それは違ふ、でも自傳的とおつけになつたのが、販賣政策とすれば、一寸同じやうな意味にもなります。

素川　必しも販賣政策だから、いけないと云ふことにはならぬ。廣告のし方がいやだつたと云ふのと、自傳的小說が……

新妻　大變に違ふ比較かも知れませぬけれども、行方は同じぢやないかと思ひます。賣る爲に自傳的と云ふ名を付けて賣るのなら大別してみればさうぢやないかと思ふ。一種の販賣政策として……此方にはもつと、女性の爲にと云ふ根本的の意義があつてやつていらつしやるから、墮落的な事をなさる氣遣ひはないけれども、たゞ賣る政策として、自傳的でない物も入つてゐるかも知れないのに、自傳的とつけられた事に於て錯覺を生じて來た譯ですね。でそれは、初めつから、お書きになつた方、自傳的戀愛號と云ふ名前のこと御承知ですか？

素川　無論さうです。

新妻　御承知でやつた事なら相對的ですね、書かない人からみれば一寸變に思ひましたけれども……

平林　初めから自傳的戀愛を書いて下さいと云ふ御註文だつたんです。

今井　小說と云ふものは、自分の過去の經驗


平塚らいてう、富本一枝、生田花世、平林たい子、上田文子、中本た



前列向つて左から伊福部敬子、新妻伊都子、林芙美子、望月百合子、
か子、今井邦子、熱田優子、後列、素川絹子、八木秋子、小池みどり

と、それから又自然に、藝術的に生れて來るものとある。自傳的となると‥‥小說の中には虛實があるでせう、その虛の方まで實にされさうで、私が書いた點から云へば非常に書きにくゝなると云ふことはあります。それだから雜誌がどうだ、斯うだと云ふ意味ぢやない、一寸軌道に外れた所の話なんですよ。

新妻　私、一番聞きたい事は、販賣政策として、「自傳的戀愛小說號」とつけて、それかどの位賣上つたか、それだけの効果が上つたんですか？　その政策に合つたかどうか聞きたい‥‥

素川　隨分賣れました。その事を唯一の目的にしなかつたのですけれど、兎に角賣れることは賣れました。

八木　賣れたけど、新聞や雜誌が非常に、新しい時代の劃期的の一ッの相を見たと云ふ意味で大變あちこちから‥‥

素川　無論惡くも言はれたんですよ、惡く言はれながら或る意味で好意を持たれた。好く云はれても惡意を持つたのもあるかも知れないが、かなり見た〳〵と言はれました。

生田　つまり「女人藝術」がさう云ふ現實にブッかつたんです。自傳的戀愛號に依つてワッと非難の聲が高まつた。（笑聲）

熱田　非難されたんでも、問題にされたと云ふことは宜い。

生田　最初の現實にブッかつたと云ふかたちになつた。

今井　そこが考へなければならないんでせう今のやうな系統で行くと、もう一ッ前にワッと云つた時は大井さち子さんの里見さん訪問記、あの時ワッと來て、それからこの自傳的戀愛號でせう。

生田　大井さんの事件は‥‥

今井　あの中には大層問題になつた言葉がありましたね。あれは私も首をひねりました

生田　あの時に、大井さんに附添つてゐたのは實は私なんです。で傍でその言葉を聽いたんですが、其時私もそれを伏せたいと思

ひました。けれどもいろ〳〵の意味で……私の氣持ちもその時にもつと徹底さして置けば宜かつたんです。自己辯解をする譯でもないですが事實を語るのですけれども…

今井　私は、大井さんの里見さん訪問記は、大變問題になつて、伏せたい所もあるけれども、里見さんて方をあれまで自由自在に揉みあげた所が面白かつた。あの一問一答は人が何と云つても、矢張り今までに見たことの無い或る才女の新しい、目ざましい何ものかを見せた點で、確に面白く讀みました。あゝ云ふ物は一切いけないとお思ひになつたでせうか。さう云ふやうな事と、自傳號と一寸相通ずる所はないかしらん。新しい、女の雜誌としては、誤解され易いでせうが、それだからと云つて、あれはいけないと云つてしまへないものがあるんではないかしら？　或る方面の新しい人の、一ツの手腕と云ふか或る相を見ることが出來ると云ふ……

八木　私は大井さんの一問一答、あれはエロテイシズムとしては少し理智を缺いて居ると思ふけれども、一ツの時代の生活感情として非常に面白い。

生田　そこの所になつて來ますと、評論家風に立つて居る人と、藝術派側に立つて居る人との、解釋の仕方が違つて來る譯でせうあの事件に付ても、平塚雷鳥氏の所で話したことがあるのですが、雷鳥氏が、私は多少世間の事を見たり聞いたり味つたりして來て、昔ほどものを固く考へない、「女人藝術」が動いて行つてる事に對しても、理解もして居るつもりだし、分つては居るつもりだけれども、大井さんのあの箇所は、どうも女の人としては出して貰ひたくない。蔽ふて貰ひたい所を、あんなにして出すので、辛く思ひながら見たと云うて居られました。評論家としてのらいてう氏が云はれるのは當然で、長谷川時雨さんの藝術家、脚本家としての立場からは、今までは齒に衣着せた人間が多かつたのに、眞實にそこまで突込んで行く――そこに見所ありとした、長谷川さんの立場も分ります立場々々の違ひで、兎に角あれが一番最初の波でございました。

八木　私はあれを、良い悪いと云ふやうな道德的な價値の批判から考へるのでなくて、一ツの、今流れて居る時代の感情として受け入れる時に、興味ある問題だと思ひます

田生　そこで二派に分れるのですね。

八木　私はイデオロギーから判斷しない。別な立場から考へてゞすよ。

平林　八木さんの云はれるのは、「女人藝術」がどう云ふ色彩のものであるか、ヂヤナリステイツクな雜誌か、又は婦人の地位の向上の爲に進まうとする、一ツの目標を持つ雜誌であるか、其の二ツのどつちかであるかに依つて、あゝ云ふ風な記事が宜いか、悪いか決まると思ひます。さう云ふ立場をはつきりして頂いたら自然問題も解決して行きませう。勿論、婦人の向上と云ふ目標に進んで居られるのは知つて居りますが、併しそれだけでは統一されない部分があると思ふんです。

林　あの人の私は嫌ひだつた。もつと良い何かを書かして上げたいやうな氣がした……

中本　「自傳的戀愛小説號」と云ふ事で、皆さんの御批評がございましたが、戀愛を主題にしましても、藝術的に出來てゐたらどうでせう。やつぱり御不滿でございますか？

平林　それは宜いです。

中本　藝術的內容が少い爲に、御不滿が多いですか……

林　一ツづつ離したら非常に好いのですが、皆集めるから匂ひが強くなるんぢやない？

自傳的戀愛と云ふ表題がいけなかつたんではないかしら？

八木　平林さんの仰しやる、自分の戀愛の體驗をそのまゝ、小説にかけるものぢやない・・・・

平林　さう云ふ意味ではない、自分の戀愛的興味を人に語らうとして、小説を書くと云ふことはヘンだ・・・・

八木　それには贊成です。恐らく私は、あの中にそのまま自分の戀愛をブチマケて書いた人は澤山あるまいと思ひます。

平林　勿論それは、一人位はあるかも知れないけれども、あとの人は皆小説のやうに書いて居たと思ひます。皆眞面目にね。

上田　自傳的と云ふことがいけなかつたのね

中本　自傳的と云ふ言葉は、あまり嬉しくなかつた。

窪川　雰圍氣がいやだつて云ふんでせう！讀まない人に云はせると、いやだつて云ふんですが、讀んだ人は・・・

平林　私の云ふのは、さう云ふプランを持つと云ふことが、いかぬと云ふので、眞面目な人もありました。窪川さんの非常に好い面白いと思ひました。

八木　自傳的戀愛號のプランを立てたのは長谷川さんで、長谷川さんのお氣持ちとしては、今までの戀愛小説は實に皮を被つた、美化された、自分を或る點まで僞つたものであつたから、眞實の時代の女性が、一切をブチマケた、正直な、血の出るやうな相を見せて貰ひたいと云ふやうなお氣持ちから、一ッやつぱり、時代意義を持たせたい意圖の下にやつたんです。

上田　それは自傳的と云ふやうな題をつけないでも宜いですわね。

窪川　つけた所が商賣政策であつて、内容そのものをさうするやうにしたんではない・・

平林　もつと何か柔かい名前はなかつたんでせうか（笑聲）さう直接的に云はなくても・・

新妻　一寸伺ひたい事は、之を「自傳的戀愛小説號」と付けないで、出したら、是ほどまでに賣れなかつたでせうか？

八木　それは賣れませんね。販賣政策としては上乘のものです。

生田　その點に付て私は長谷川さんから斯う云ふことを聞いたです。女人藝術の道は難かしい、いろ／＼の意味で、損害とか・・・賣れないと云ふ上から來る痛みは初めから覺悟はして居るにした所で、努力しても努力しても、何も反響の無い道を、淋しく歩いて行くと云ふことは、一面の努力ではあるけれども、又或る意味で、何と云ひますか、はつきりした形を何等かに現して、右へ行つてみたり、左へ行つて見たり、採むと云ひますか、昇つたり降つたりする道を踏んでみやうと云ふ、試みも、かなり或る意味で勇敢な試みと思へば思はれる。そこに「女人藝術」の惱みの道もある譯でございます。

今井　それは私もよく分つてゐて、贊成もして居るんです。たゞ例へば「男性訪問」もあの時一回で止めると宜かつた、あとは濃過ぎたと思ひます。兎に角いろ／＼の試みをして行くうちに、假令その中には贊成の言葉も不贊成の言葉も、あるでせうが、だん／＼と良いものが出來て行く、いろ／＼の苦勞もしてみてこそ、良いものが出來上つたと云はれるので、初めから善惡に分けると云ふことはしたくないですわ。

窪川　それで、その「自傳的戀愛小説號」だけでなく、「女人藝術」から別に何か他のものを取出してみて下さいませぬか。もつと他にもあるだらうと思ひます。戀愛事件だけでなく・・・・

八木　「女性缺點摘發座談會」は如何ですか？

何とかお考へになりましたか。

平林　文學に關係した座談會はどうかと思ひます。

中本　座談會が余り續過ぎはしないでせうか

新妻　性質の違ふ座談會は差支へないと思ひます。いろいろの方面の方がいらつしやつて‥‥

八木　座談會は是非一ッ入れなければ‥‥實は二日にいろ〳〵な方面に勞働してゐる職業婦人達に集まつて頂いて、さう云ふ人達の體驗をいろ〳〵話合ひ、其の人達の氣持なぞも宜く話合つて、非常にプロレタリア的な座談會を試みやうと云ふ譯だつたんですが、生憎其人達が皆都合が惡くて流會になつた。それをば是非近く實現するやうにしたいと思つて居ります。

生田　先月號の座談會など、いろ〳〵な意味で啓發された、迚も讀んで氣持の宜いものと思ひました。

八木　つまり要約して云ふと、皆樣の御意見は「女人藝術」がエロテイシズムにあまり走り過ぎると云ふことに御不滿なんでせう？

林　あまり‥‥かたいものが欲しい、買つて讀むからには‥‥

新妻　編輯者に伺ひますが、評論は、毎月間題をあなたの方で拵へて、誰にお頼みすると云ふ方法にしていらつしやるんですか？

素川　さう云ふのもありますし、來た物の中に幾分でも良いのがあれば載せてゐます。わざ〳〵お頼みするのもあります。

生田　兎に角私などの耳に入つた事は、新しい、眞實に考へた今の時代と云ふものを知りたいと、女の人達が深く要求して居る事で、男の人が又それを知りたいと思つてゐるやうですから、この「女人藝術」に對する期待が非常にある譯なんです。此間などは德富蘇峰先生から、「女人藝術」に依つて、今の時代の女の人を知りたいから、雜誌をくれないか――と云ふお話で、毎號續いて差上げて居りますが、此間小生非常に啓發された――斯う云ふやうなお言葉があつたですが、さう云ふお年を召した方が、「女人藝術」を讀んで、今の女の人が考へたり、書いたりして居る事を知らうと云ふ期待が、隨分この雜誌に集まつて居る譯であるだけ、お互に重大な責任があることになります。

中本　社會的な評論はありますが、文藝評論がございませぬから‥‥從來の女の人は文藝的評論の頭が無いと云はれて居りますが、頭がないのはそれはしないから癖になつて、だん〳〵出來なくなると思ひます。

素川　文藝評論は今非常に難かしい時ではないのですか、社會的にも過渡期で‥‥

中本　難かしいから、自分の立場から主張すれば宜いではないですか。ブルジョアならブルジョアの立場から書けばよし、平林さんがお書きになれば、プロレタリアの立場だし、御覽になる方が、自分で取捨するからなのを書いて行けば宜いでせう。

林　難かしいたつて、其人々々の考へるやうとして、プロレタリアでも、ブルジョアでも、どつちが困ると云ふことはない其人々々に依つて違ふ、神近さんは神近さんらしい事を書き、宇野さんは宇野さんらしい事を書く。それで宜いぢやありませぬか。

素川　創作を書いて下さる方はあつても、文學の方の評論はして下さらない。それはしようつちう言つてたんで、文學時評でも入れやうかと思つてゐます。どうぞ是からお願ひします。

今井　最初に平林さん、忌憚のない所を書いて頂いたら‥‥

八木　本當に、しつかりした評論が欲しいと

思ひます。

上田　も少し澤山出ると宜いですね。

平林　書く人がなかつたら、文學に關する座談會をやつたらどうでせう。

今井　非常にそれは賛成ですね。

平林　評論が落ちるのです。小説は本當に良くて、面白い。

新妻　ガッシリは書けないけれども、斯ふ云ふ問題に付て書いてみたいな。と思ふ事でも、今月載せて頂きたいものが、其次の月になると腐つてしまふことがある。

寒川　必ず載せきれるとは云へませぬが、腐るものは目を通してみて、なるたけ注意してゐますが、さう云ふ事がありましたかしらん？

新妻　それからもう一つは評論に付いてよすが成べく時事問題に付て書いて欲しいと思ふいつでも宜いやうな評論だと、誰も讀んでみる氣がしないのではないかと思ふんです。

八木　私、神近さんの社會時評に求めることは、「改造」や「中央公論」に出るのからもう一歩進んだ、もう少し女性の生活感情を織込んだ、もつとデリカなものが入つても宜いと思ふ。

新妻　仕方がないのぢやないですか、短い中に、色々幾つも書くんですから……

平林　やつぱり社會主義的立　場から書けば斯うなるではないかと思ふ。

伊福部　皆それ〴〵の面を持つて居るんですから……

生田　神近さん隨分いろ〳〵な材料を集めたり、大變な盡力ですよ。此處で傳へるですが、隨分力を盡していらつしやる。

新妻　さうでせうとも、斯う云ふ風に種々の項目に付て書くと云ふことは骨が折れます。

生田　御自分でも言つていらつしやるし、私共が拜見しても、是だけ集めるには……

八木　私神近さんに正直な所を出して頂きたいと望んで居る。と同時に女性の生活感情の動きをはつきり出して頂きたいと思ふんです。

平林　併し神近さんは矢張り、社會主義者なんでせう。だから特に女性と云ふ者を……

八木　評論がもつとイデオロギーを尖鋭にして、はつきりさせる一方に、今云つたやうな、さう云ふ細かい時代を貫いて居る、イデオロギー以外の、氣持ちの動きが迚も複雜でせう。……

新妻　けれども社會時評となると、今月を見れば、「議會終了す」「濟南事件の解決」と云ふやうな事になると、さう云ふ風な事を云へなくなるでせう。項目にもつと女性に必要なものを持つて來た方が宜いと、仰しやるんですか？

八木　廣汎にして貰ひたい。さう云つたやうな時評なら、大抵みな他の雜誌でも讀み、新聞を見れば……

新妻　例へば新聞に出てゐた、姦通事件を持つて來るとか、戀愛事件で斯う云ふやうな破綻があつたから、それを持つて來るとか云ふんではないんですか？

八木　いゝえ違ひます。もつと時代の理智を出して貰ひたい。神近さんの獨創をです。

生田　神近さんに、社會時評以外に、自分として、纒まつた物を書きたいと云ふ意思は十分あるんです。あの人、社會時評の形で始めたのを、一と區ぎりつけなければと云ふので……社會時評を他の人に代つて貰つて、さう云ふものを書かうと云ふこと、を聞いたことがあるんです。兎に角あの人、責任觀念から續けていらつしやるんです。

望月　二人が毎號書くか、毎號違つた人が書くかすれば……神近さんにさういろ〳〵な

ことを望んでも駄目ですね。

平林　今日は「女人藝術」の批判すべき點ばかり批判するのですか。

素川　無論將來の事も……。今度は「棚卸し」と云ふ題にしようと云つてる位なんです。成るたけ澤山參考になることを仰つしやつて下さいまし。

今井　私の希望として文藝評論など、眞面目にやつて下さいよ。平林さん切にお頼みします。

平林　もつと「女人藝術」に書きたいと思ふんですが、これまで一向書かなかつた。

生田　私などさう思ふ。女人藝術から今の文壇人に……兎に角文壇は推移がひどいでせう。さう云ふ事に對して一言女人藝術の一部から言ひかけると云ふ熱意を持つやうに進めて行きたいと云ふことを思ふ。

八木　讀者から愛讀者券にいろ／＼の註文や感想を書いて來る、それを纒めて見て一番多いのは、一般讀者からの投書を採用するやうにと云ふのと、イデオロギーをはつきりさせてプロレタリア的色彩を持つやうにして欲しい。それが一番多いのです。

生田　プロレタリア的色彩を濃くして欲しいと云ふやうなことは隨分方々で言つていらつしやる。

素川　濃くと云ふより統一しろと云ふんではないですか。

望月　濃くと云ふことは非常に曖昧ですね。統一すると云ふと……

新妻　出來ますか、それが。

素川　「女人藝術」の立場は、背景に實際運動があるではないし、出發點が少し違ふ何時かは何うなるかも知れませんけれども、今日直ぐに統一すると云ふことは一寸考へものですね。書くことはプロレタリア的のものが隨分入つて居ると思ひます。

生田　長谷川さんのお積りでは、統一しないで各派の純文藝的の……總ての人が言ひたいだけのことを言ひ切つて貰ひたいと云ふことが、最初からのお考だつたんです。

望月　「女人藝術」と云ふのはオール女性の爲めと云ふ考でせう。

今井　立場々々で銘々が本當のことを言へばいゝのでせう。

望月　銘々三つなら三つの立場の人が、それぞれ自分の方を濃くして行けばいゝ。

八木　イデオロギーを持つて居る者は皆それをピシ／＼やる……

素川　もつとピシ／＼言つて貰ひたいと云ふことは、長谷川さんも始終仰つしやる。ところが片方がどし／＼言ふと反對側が止してしまふ。で長谷川さんにもう一遍、「女人藝術」の立場をはつきり書いて貰ふ積りですが、寧ろ皆さんが「女人藝術」を利用しない觀がある。もつとどん／＼書いて下さつたら……それこそ尖鋭にして下さつたらいゝと思ふ。陰で言つてるよりどん／＼持つて來て下されば、どれを出さないとは言はないんです。

望月　それは長谷川さんの仕事にしないで、皆の仕事にすればいゝ。氣に入らないから知らないわと横を向いてしまはないで……

八木　投書も隨分來ますが……いゝのがあれば載せるのです。

中本　さう云ふことを書いたらいゝでせうと思ひますね。さうすれば安心するでせう。

素川　特に投書欄にすることを避けて、投書の方からもかなり採つて居ります。投書とか何とか言はないだけで。

林　それが偉いと思ふ。隨分投書が多いやうですよ、小說なんか。

生田　兎に角「女人藝術」は若い人を隨分紹介しましたから、その效果は皆が認めて居るだらうと思ふ。

素川　傳手がなくてもどん〳〵いゝのは採つて居るんです。

新妻　それはいゝことですね。投書家として特殊部落を作らないで……

小池　讀者から投書を採つて與れるかと云ふことを尋ねて來ると、いゝものだつたら採ると云ふことを隨分丁寧に書いて返事して居ます。

生田　それは誠に旨く創刊號以來順調に行つて居ます。要するに今「女人藝術」は若い人を旨く收めて居ますが、もつといゝ原稿を書いて居る人を十分に得ない、十の所を望むが八位しかまだ女人文壇に無いと云ふことに結局なるでせう。

小池　文藝春秋では「火の島」を褒めて「女人藝術」はエロチックで、下品だつて貶すけれども、これは立場が違ふんではないでせうか。

望月　それは違ふ。そんなことを言ふ方が無理よ。餘程いろ〳〵のことを知らない人だ同人雜誌と賣る雜誌とは違ふ。

中本　少くとも雜誌を出すからは、商賣的な儲けると云ふことも、それは許されることだと思ふ。

素川　儲けると云ふことよりは、收支が償ふことが……。

中本　つまり「賣れる」と云ふことですね。

八木　皆が思切つたことを主張し、思切つたことを書くのがいゝんですね。

望月　さうでなければ、世界中の人間を自分と同じにしようと云ふ考と同じでせう。だから銘々の立場を尊重して自分の立場を伸ばすと云ふことを考へなければならない。若し自分と同じものが欲しければ、自分達で同人雜誌でも拵へればよい。

生田　女人文藝市場と云ふやうなもので、公器ですからね。

今井　確に公器ですね。「女人藝術」はどこまでも各派の寄合ひ……。

望月　それは確に一つ位あつていゝと思ふ。總ての人が寄つて行く。

生田　それはもう「女人藝術」を買うて下さる方は無論、此處に集まつた方でも、それぞれ皆違つてゐますもの。兎に角一つの女の公器の爲に、集まつて言ふだけのことを言ふと云ふやうに進んで行けば、有難い一つの舞臺だと思ふ。

熱田　片寄らない所がいゝのですね。

平林　それから、例へば何う云ふ原稿が多過ぎるとか、表紙が何うだとか、さう云ふことを言ひませうか。

素川　結構です。表紙から先づ始めて下さい

熱田　繪の方も女の藝術として入れて頂きたいと思ふ。

素川　赤い表紙だと中との感じが違ふと云ふ批評は受けた、それで換へてみたんですが、初め表紙は一つの繪として女の人のものを採つたんですが、中との感じが違ひますから、やつぱり表紙は表紙としてのものが必要になつて來るんです。藝術的だからいとばかりも言ひ切れない。

平林　今月のは大變いゝです。うまいですね是は。

生田　あれを見ると徹底的な感じがある。

平林　長谷川春子さんの繪は大變うまいですね。感心しました。

林　カットが非常にうまいですね。

生田　「女人藝術」のカットは評判ですもの。「彙報」を愛讀して居る人があるから。あれは出來るだけ多く集めたい。

平林　よく集めると思つて私感心する。

林　繪の評など……春子さんが先に書かれたやうなのが欲しいと思ふ。

熱田　やります、今度。

平林　短歌も少ない。

素川　詩を二つ位入れると割合頁を取るんです。

今井　歌の不平を言へば、「女人藝術」だけでなく、一體に‥‥全國の雜誌に書きたい。

（平塚氏、富本氏着席）

生田　今雜誌についての皆さんのお考を一通り伺つた所です。忌憚なしのお氣持でどうぞ‥‥。

平塚　面白いと思ふんですが、あの「男性訪問」は、も少し內容が違つたらいゝと思ふ男性訪問そのものはいけなくない。非常によいお思付と思ひますが、人を選んで取組をもう少し‥‥

生田　あの男性訪問は、實は開地さんを賴んで陪審法を聞きに行く筈だつたんです。それが編輯間際になつていゝものがない爲に止めになつた、その時丁度私の家へ大井さんが遊びに來てゐて、伴れだつて此處へ來た、その時突然男性訪問が湧いた――本當に湧いたんです。

平林　あれは全く眞面目な意圖もありました私にも後藤さんだか田中首相の所へ行つて吳れと云ふ話があつた。私は適當でないけれども誰かもつと勉强して居る人が行つてくれたら、後藤新平さんなど面白いではないかと思つたんです。

素川　單にあゝ云ふ意味でのみ始めた譯ではなかつた‥‥

生田　富本さんも熱を持つて下さつて‥‥

富本　大井さんの時怒つて來ただけね。（笑）

生田　あれは又里見さんと云ふ方が‥‥（大に拍手）

今井　しかし新しいものを見せられたと云ふ點で、內容の贊成不贊成、善惡は兎に角として、やつぱり面白く見た。全體が贊成ではない、でもそれだからと云つてやつぱり面白く讀み、又興味あることで、一つの肯けるものがある思ふ。

富田　表紙はいつでも斯う云ふやうな油繪でなければならないと云ふことはないでせう

素川　無論さうです。

富本　線だの何かやらないですか。

素川　さう云ふことも考へるんですが、いゝものが出來ないものですから‥‥

富本　表紙が日本人から西洋人に移つたのはいゝのが集まらなかつたんですか。

素川　マア一口に言へばさうなんです。內容に合ふ表紙をと思つて‥‥。そんなに大きい理由があるのではないのです。

富本　非常によく合つてゐます。前より非常にいゝやうに思ふ。表紙が變つてから「女人藝術」がうまく行くやうに思ふ。今創刊號を見ると古新聞と云つたやうな感じがするんですね。

新妻　「女人藝術」の寫眞は隨分よく出てゐますね。玄人が褒めてゐますよ。

伊福部　寫眞が少し多過ぎるではないですか

生田　雷鳥さんに、今までお讀み下さつたもので、これはいゝ原稿が載つて居るなとお思ひのものがありましたら‥‥。

平塚　どれか一つが特にいゝと云ふことは問題にならない、編輯の全體としての方針と云ふことに重きを置いて行かなければ、一つの非常に優れたものが出ても‥‥どこまでも婦人と云ふことを中心にして進んで行くお積りでせう、色々の方面に。

素川　「女人藝術」に對する希望について、成るたけ澤山、‥‥

平林　多方面に網羅すると云ふやうなこと‥

素川　今の所さうです。あらゆる方面の婦人を網羅するのがいゝと思つてゐます。

中本　「女人藝術」の美點として‥‥勿論私共それで喜んでゐるのですが、無名の人をどん〳〵採用していらつしやることは大變‥

平塚　一番それが意義があります。

素川　なるたけ色々の方に、出來るだけ尖鋭に云ふんですけれども……何でも仰つしやつて下さればいゝ、別に片寄つてゐないから、成るたけ雜誌を利用して下さることを望んでゐるんです。そして斯う云ふ方面の原稿だからと云ふやうな區別は今の所つけてゐない。別に無名の人だけと云ふのでもなし、舞臺のある方はその必要もないけれども、何でも赤裸々に眞劍に言へる所にしたいと云ふのです。

平塚　投書、寄稿と云ふのは、多く創作の方ばかりですか。評論は？

素川　評論も大分來ます。今まで可なり澤山評論の應募はありましたが持に投書としないで出してゐるんです。毎號一つ宛ぐらゐ、餘り長いものは來ませんけれど……。

平塚　賣らなければならんと云ふことで、いつも隨分御苦心なさらなければならん狀態ですか。

中本　賣らなければならないのですから、新進ばかりではなく、舞臺のおありになる方にも書いて頂くやうに……如何でございますか。

生田　一巡は名前のある方がお書き下さつた譯で、今度は二巡を……、そこをどうぞ宜しく願ひます。

宮本　この「編輯後記」を見ると、いろ〳〵大變よく分りますね。私雜誌を貰つて直ぐ彼所を見ます。

生田　私など遊軍で、本當に出られる時にプラッと來る譯で、分つたやうな分らないやうなことで、外から一歩距離がありますけれども、ぐつと隨いて行く氣持で……。

八木　編輯の方ばかりでなく、長い間のことを考へると、營業政策のことではつきりした方針を立てなければならないだらうと思つてゐるんです。

生田　いつも長谷川さんから聞くことですが損失は初めから覺悟の前でかゝつて居る。けれども斯うして雜誌を出す上からは、いいことを書いて下さる論文なり小說なり、出來得る限り澤山の人に讀んで貰ひたいと云ふやうな望と、書いて下さる人にそれに依つて出來るならば澤山のお禮をしたいと云ふことは、それがやはり雜誌を賣りたい一つの重大な理由で、出來るだけ書いた人に對して本當の「女人藝術」の立場からの御禮を十分出來るやうになれば嬉しいがなと言はれるんです。

八木　雜誌の經營から言ふと、廣告をどんどん入れなければならないことになるのですが、長谷川さんの御意見では、成るべく外部の專門的な男の人の廣告募集員などを頼まないで、女の內部の人にやつて貰ひたいと云ふ意見で、私達伺つたんですが、中々時間もありませんし、氣持の問題などで、思ふやうに成績が擧がらないんですが、皆さんに紹介して頂ける所がありましたらどん〳〵お知らせを願ひたいと思ふのです。

新妻　初め私忌憚なく申せば、藝術家の方が多い爲めか、經營の方に非常にルーズな所が見えた。どの位續くか、幾ら損失を補つて行くと云つても、どれまで續けられるかと思つて、成るべく收支が償ふやうにして行かなければならないと思つたんです。

八木　四月號から發表しましたが、女人聯盟を作りまして、讀者の支部を設けて五人以上ある所には一つの支部を許けると云ふ風にして、支部のは雜誌を向ふからの註文に依つて送つて、取次販賣をする方法を採りたい、と、云ふ風な經營方針にしても色々御意見を伺つてみたいと思ひます。

平林　取次販賣ですね。それは地方で通信でやりますとお金が集まらないんですよ。どうしても是は前金の制度に……長谷川さん

などさう云ふことは不愉快だと仰つしやるかも知れませんが、必ず前金制度にしなければ絶對に駄目です。私の經驗に依ると、「文藝戰線」でも、本屋が、地方で顏を見ないと、お金が無いのではなくても送つて寄越さないんです。送り始めて途中で止めることも出來ない。結局此方の損になる。だから必ず前金制度でなければ駄目です。

新妻　さう云ふ點は中々皆さんお孃さんでいらつしやるのよ。

新妻　編輯會議が大切の如く、經營方面の會議をして、いい方法にしなければならないと云ふ事は、前からさう思つたんです。

望月　成るべく早く自給自足の出來るやうにあらゆる手段を講じて……

八木　それは誰でも考へるんですが、それの手段です。

素川　成績としては良い方なのに、大量生產で律しられて行くから、雜誌の成績は良い方でゐて損して行く。

平塚　座談會でお金がかゝるではないですか

新妻　それが初めから……これは長谷川さんの棚卸になるが、座談會が始まる、お茶とお菓子が出て御飯が出るんでせう。あんなことは必要ないと申すんですけれども、やはり出さなければお氣持が惡いらしい。

八木　大賣捌などで評判を聞くと、返品が少ないと云つて驚いてゐる位ですが、それで以てやつぱり……

素川　さうかと云つて本を七十錢、八十錢に賣る譯にも行かないし……。

平林　生產費が高過ぎるんでせう。

富本　表紙にお金がかゝるでせう。私一度表紙を書きたいと思ふんです。これだけお金をかけないでももつとよく行くと思ひますこれは隨分印刷にかゝるでせう。私は自信があるんです。

平塚　あなたが初めて書いて下さつた「青鞜」の表紙が……

富本　八木さん、廣告はどんな廣告をお集めですか、制限があるのですか。

八木　限制はないんですが……

熱田　しかし本の體裁を壞さないやうな……

八木　本屋の廣告ばかりでは單調に流れますから化粧品、食料品、旅館、カフェーとか……どうぞ皆さんいゝ所がございましたら御紹介を願ひます。

富本　食料品にはお菓子も入りますね。早速紹介しませう。

新妻　女人聯盟のことについて、あなた方どうお思ひですか。

平塚　よく私まだ拜見してゐないですが……

平林　私もよく伺つてゐない、雜誌で見ただけですが、頒布網としてお拵へですか。

八木　販賣と云ふより、長谷川さんのお氣持では、結束とか、一つの組織と云ふものにまでやりたい、それは思想的なものでなく一般的な……急進的な婦人の組織を持つたらいゝと云ふ氣持から、さうして讀者同志の親密を圖つて愛讀者を殖やさうと云ふ販賣政策にもなりますが、「女人藝術」と云ふものが中心となつて、各地の讀者が一つに結束した組織を持ちたい、さう云ふやうな意圖から聯盟を作つたんです。聯盟と云ふものは考へように依つては非常に將來面白い──望の多いものだと思ひます。

平林　マア讀者會ですね。

望月　唯急進思想と云つても違ふでせう。少しでも思想的な事があると提携出來ない。

平林　「女人聯盟」は一寸大袈裟ではなかつたですか。私一寸吃驚したんですが、讀んでみたらハヽア これかと思つた。

林　あれは隨分考へたのね。

新妻　女人聯盟でもいゝと思ふが、實際運動に持つて行くと云ふ考か、或は讀者會位で

吸收して行くか・・・・

八木　實際運動の母體となるではないですか

富本　神近さんは實際運動にまで持つて行きたいやうな考らしい。

平林　さう云ふ考を持つてゐる人もあつてもいゝでせう。

新妻　しかし根本を纏めてゐる人は、その思想が現はれますから、或一つの團體が纏まると動きたくなる。やはり方針と云ふことは定めて置かないといけないと思ふ。

素川　さう云ふ考方で見て居る人があつてもいゝでせう。簡單に動ける筈はないですから。

新妻　筈があるないに拘らず、根本をちやんと定めて置くがよいと思ふ。

望月　先に行つて動くなら其時のことでいゝでせう。

富本　今は動く意志は全然ない譯ですね。

新妻　無くて行つたが賢明な策でせう。

素川　女人聯盟が大きくなつたら、女人聯盟の頁を作らうと思つてゐます。

生田　販賣政策から言ふと非常に大切なものでせう。半分は地方から非常によい原稿が來るかも知れん。又思想的でなくても團結することは、オール女性として團結する——手を繋ぐことはよい。非常に固い——團子みたいにならんかも知れんが、時と事件とに依つては何う變化するかも知れん。

生田　今でも「女人藝術」の寄稿家同志が丸くなつてゐるんですから、又讀者がその週りを丸く圍むやうになつて行く。

望月　「女人藝術」は非常に時代遲れのやうで又今の時代をずつと飛翔して行つて居る所もあるし、・・・・女だから一緒になると云ふやうなことになると、それだけ聞くと非常に時代遲れだなと感ずる、それと同時に非常に進んで居る感じもある。

素川　それは先の方を目指してゐるんですよ

望月　それでなければ仕方がないと思つてゐる。先の方を目指して行きませう。

新妻　それはさうですともね。

素川　何か新しい今までにないもので御希望を聞かせて頂きたい。

平塚　劇評は？

新妻　女の方の劇評と云ふことは、例へば新しい芝居を見ても舊劇を見ても、女形が非常に不自然に見えるとか、藝術家の立場からは隨分あるが、女の立場からもあると思ふんです。長谷川さんは、劇評になると一ヶ月遲れるからいけないと云ふのですか。

上田　劇評と云ふ意味でなく芝居と云ふことに就て・・・・

新妻　女の見方も非常に面白いと思ふ。

上田　劇ばかりでなく映畫の方もね。

新妻　「演藝畫報」の今井さんを見て、女でなければ斯うは見れないと思つた。此方にも木村さんもいらつしやる、上田さん達も、男の方と違つた鋭い見方があると思ふ。

生田　追つけさう云ふ所にも手を伸ばしませう。

富本　追つけでなく卽刻・・・・

平林　全體から言つて隨筆的なものが多くて、飜譯とか、日本の女の人が書いた研究的なものが少ないと思ふ。

富本　科學的ですか。

平林　科學的とは言ひませんけれど・・・・女の人は隨筆を多く書くものですね、全體から言つて。

素川　一つは中間物で雜誌を面白く緩和しやうと云ふのですが・・・・

生田　又雜誌の眞中の所に讀者を遊ばすものもいゝと思ふ。氣持を遊ばすやうな・・・・

新妻　さう云ふものもなくちやいけないと思ひますね。

平塚　歌だの詩だの今だけで十分ですね。

新妻　隨筆と論文と小說がいゝ鹽梅に入れてありますね。

望月　日本にだつて女の人で專門的に科學など研究をして居る人があるでせう。

素川　割合見つからない――．云ふとをかしいが、可なり氣をつけてゐますが‥‥

新妻　學校の先生なんかに‥‥

上田　私はさう云ふものを望んでゐるんですがね。

平塚　中々さう云ふ人がね‥‥憶劫にして斯う云ふ雜誌に發表して呉れないんですね。

富本　學校が亦干涉するんではないですかね先生は私決して輕蔑しないですが、師範學校の敎育と云ふものは人間を同じやうに造つてしまふ、だから考もきつとそんな影響があるかと思ふ。

上田　先月號の中本さんの「機械の美觀」は大變はつきり分つていゝと思ひました。

生田　今度平林さんが文藝方面でパリ〳〵した所を見せて下さると、御自分でも仰つしやいますから、お賴みしたいと思ひます。

富本　「女人藝術」はさう云ふ人が思想的に多いやうですね。

生田　それ〴〵中々勢ひ逞しいです。

素川　ではこゝらで大變有う難存じました。

パンの表皮

下飯綾子

水藥に　散藥　そして錠劑と
藥責めの日が續く
だが　明日になれば
また　物置きのような室內に
一日中呻吟しなければなるまい
それより　何時までたつても永久の夜が
續くような藥を
何故に呉れないのか
何時までも眼を醒ましたくない
何時までも眼を醒ましたくないものに‥

手も足も　まるで機能は止まつて居る
だのに　たゞ心臟ばかりが
激しく搏つて働いて居る
若やいた血汐をさへ
もうとつくに顫え落して仕舞つた筈なの
にこの情けない焦心は
久永の夜を願ひつゝも倘
硫黃の海のような人の生へ
燻しパンの表皮のような
一沫の哀愁を括着させて居る‥‥

六月中旬
於日比谷公園音樂堂

創刊一週年紀念 藝術祭開催

本誌七月號發表

講演
舞踊
音樂

本誌創刊一週年紀念特輯號豫告

◆全女性行進曲當選歌發表◆

文藝時評	平塚らいてう
社會時評	永嶋暢子
評論	山川菊榮
同	神近市子
同	菊池小夜子
平塚雷鳥論	富本一枝
ロシア見聞記	大竹せい子
パリ見聞記	長谷川春子
ロシアの實狀	ソフイイ・クロポトキン
マウント・ホリヨーク大學から	西村あや子
新長編（新女の一生）	平林たい子
短篇小說	野溝七生子
同	松井締子
同	山本和子
同	村山籌子
同	山川朱實
戯曲	岡田禎子
同	弘津千代
劇評	時雨
公開狀	女流七氏

◆其他毎號所載長編・續篇・詩・歌・俳句◆



白紙の頁

——釣棹のさきの蜻蛉——

時雨

明日の命も知らないくせに、私は妙に遠いところに目的をおいて甚だ命長いもののやうにボヤリとしてゐる。殊に現代向きでないので、テンポの早い、急流に棹さす人々からは、何しても變な存在に見えるに違ひない。併し自ら慰め得るのは、ある日江戸川を舟行したをり子供たちが、河心に細かく戰へて立つ細竹を見て、私が居ると指さしたことがある。實に適切な表現だと、今でも三上於菟吉氏は感服していふ。その私が、いまや、釣棹のさきの蜻蛉と、自ら諷するほど、のびやかなる心持ちをもたうとし、幾分でもさうあるならば寧ろよろこばしき事だと信じてゐる。何故ならば、感情家が自己の感情をむきだしにし、しかも我儘で、疳癪もちでしかたのない自分を、陶冶することが出來ないで、どうしてこの大きな渦の中に入り、手をつないでおなじ足並に歩むことが出來やうか。「女人藝術」が持つ使命の重大さを考へる時、私は痛さも愁さも忍ばなければならないと痛切に感じる。

特種な立場におかれる「女人藝術」について、何を今更いふ必要があらうか。ではあるが、ふと、近頃強く胸を打つたことは、言ふべき口をもちながら、不用な言葉は弄しながら、肝心いふべき事は言はずに過して來た悔を切實に知つたので、或は明日を待たぬ命であるかも知れぬ身の、獨合點の、自ら「よし」とすることは、却て泉を濁すものであるかも知れぬ恐れを感じたからである。

私は、私の乏しい經驗ではあるが、何かしてきたたびに、あまり資金のことなどに顧慮しないできた。何事も熱と力——自らの信念が基だと考へてきた。誠意と努力、さてそれからの金であると考へてきた。いふまでもなく私自身は、何らのものも持たぬ無産者であるから、金を積んでかゝらうとしたならば、何時になつても「よし」といふ機會は惠まれはしない。それに又かうも考へる。少々の金を持つてする仕事はすぐ淺い底がくる。そしてまたそれを惜んでゐたならば、なんにも仕事は出來はしない。そこで強いのは無手である。なんにもない、ないから掴まうとする。その力は大きなものだと思ふ。その押をもつてやらなければ眞に働いたとはいえはしない。「女

人藝術」はさうした考へのもとに、諸女史の支持をねがつて立つた。

且て私は新舞踊、劇研究の主宰者となつたが、その時一ぱいの力と熱を集中して、決していい加減のものだつたとはいはないが、それらはみな、この女人藝術へくる行路であつたと思ふ。私はそこで一つの仕事の煩はしさを知り、小我を捨てなければいけないといふ事を學んだ。傳統的に古い因習の殘る芝居道であつたから、私ごとき理想一點張りのものは、事毎に冷たい壁に突當り堅い砂を噛んだ。

一夢想家の空想が、實現されたので有頂天となつてのぼせ上り、反省を忘れたもの言ひをするかと思はれては困るが、私はいま欣びに一ぱいなのである。時代は急速な進歩をし、且て「青鞜」にその若々しき叫びをあげ、第一の火烽をあげた女性たちは、今や健實なる成長を遂げ、思想に藝術に堂々たる地歩をしめてゐる。さう思ふだけでも目の前の明くなつた氣がする。まして進出する新進婦人は、いと健やかに目覺ましく機會を摑まうとする機運は孕んでゐる。私は悦びいさんだ。此時だと思つたからである。私の夢想の實現は、其人々にも必用の舞臺だと――なんで私の心がこんなに欣びに跳むか！　なんとこの僅かな時間に、かくも目覺ましき、誇るにたる同性を多く見出し得るやうになつたことか！　あたしは私の前に堰止められてゐた奔流を、この人々の上に見やう、押流すやうな時の歩みの大きな流れを！　押流せ、押流せ、せきとめる限りのものを――さう思つたからである。何がなし鬱積してきた私の反逆心が鎌首をあげたのである。輝かしく洗ひだされる新女性の世界を一目見たいからであつた。小包にして送る品物のやうに、ギッシリ動かないやうに詰めものをした、身動きのとれない女性を解放するために、詰めものを押し流す激しい流れの姿を見たいと祈つた。そしてその取るべき手段は？　それは尤も穏健に、尤も勇敢に、女人の所信を告げ語る武器として、文筆にまさるものはなく、そこに必用の紙がなければならない。

今も昔も乏しさに變りはないが、幸に私を養つてくれてゐる三上於菟吉が、紙の代を稼いでやらうといつてくれた。原稿紙の升目を一字づゝ埋めなければ得られない勞苦の汗を、贅澤に費すのは心苦しいが、これは辭退するものではないと潔よく貰ふ臍を固めた。しかし、文章を賣つて生るといふことが、私自身にもそれにたづさはるだけ、並々ならぬ、身肉を削ることを知りつくしてゐる。岡目八目と一緒になつて、好い氣になるわけにはゆかない。――しかも、それらの氣持を押殺して、ある折は無理な捻出をさへ頼んだ。これは私の私事ではあるが、さうであるために私の心は痛みながらに、一層勇猛心はつのるのであつた。損失が大きければ大きいだけ恩を思ひ、德を仰ぐ。かくして、その心苦しさの中に無力なものが一つの白紙の頁、幾千かの部數をもつことを得た。そして「女人藝術」とは、その幾千かの白紙の頁につけた名である。

なにが故に藝術ぞ？　むづかしいことはいはない、宇宙は一つの大藝術である。宇宙には何もかもが盛られてある。

白紙の頁、「女人藝術」が、全女性の前に出されたをり、我友たちは、このブヨ〳〵の、生れたままの無味なものに、思想を盛り、智識を注ぎ、文學美術の肉をつけた。世人は瞠目した。その未來はいふ迄もなく洋々と、希望は爛々と燃えてゐる。

歡喜。私は息づまり、感謝の念に胸は一ぱいにふくれあがつてゐる。だが、その欣びを自分一人で專有してよいか？　もつてのほかである。全の女性の支持を待つ「女人藝術」は、おごそかな公器で

ある。これは、全女性の頭に捧げらるべき光冠であらねばならぬ。朗かなる笑ひを、ありつたけの聲で私は笑ふ。そこに邪心もなく少しの疑念もなく、暗影もない。すべてがあからさまである。

女人萬歳！

地形ならしに從事してゐる土方の一員が、仲間全體にむかつていふ、わだかまりのない挨拶なのである。さて、これからがお骨折ですと——

地形は出來上つたが、これからが息を一つに集めなければならない大切の時となつた。つまり、一女人藝術のけつまづきは、今後起る女人團結にケチをつけなければならない大事の責任をもつてゐる。女人の手になり、女人の思想、藝術を充分に、自由に伸しうる特種なるものは唯一つ「女人藝術」があるばかりである。これは單に、一つの雜誌だとだけいひきれるものではない。經濟において、販賣において、みな婦人の力を試す目標になつてゐる。大きな謎を示してゐると思はなければならない。

幸にして、總てのことはみな女性の手でやり通した。たゞ資力において、まだ三上氏の援助に甘んじてゐることがなんといつてもはづかしい。私はこの庇護のかげに安んじてゐる事を快しとしない、一日も早く、一錢の利益を見ずとも、自給自足の域にまで進みたいと思つてゐる。社人一同みな其心であり、支持される人々またみなその意見である。

些末なる小感情を捨てよ！　短をおぎない、長をみとめ、激ましあはなければならない。由來婦人はとかく侮られてきた、また自らも卑下しすぎた。しかしながら、女人の團結力のあなどられぬを見ると、男性と互してこそ有意義なのに、女人のみあつまるは偏狹であるとの聲をも聞く。もとよりその望みなのである。男子と互格ならんとして、女子自の充實を計る集りなのである。勉強なのである。男性に拮抗し爭けうといふ集りではない。

また一部に、賣らんがためにエロチシズムになつたとの難をうけてゐる。これは主に三月自傳的戀愛號の、自傳的といふ文字かららしいが、廣き襟度をもつてその小説號の內容選擇について見て頂きたい。自傳的ならざる小說は世になくはないかと思ふ。いかなる空想架想の小說でも、作者の經驗をへない世界は書けない。——それは場處や人物のことではない、作者の胸から湧く人間性をいふのである。

だが、燭とるものの手許は暗いといふことは知つてゐる。針の穴を見詰めるやうな狹さを避けたいものと祈る。或は誇大妄想狂とし、或は大野心をもつものと罵しられるかもしれないが、明日の命をもほしいと思はぬものが、何を欲しよう。私は何處までも透明であることを誓ひ、保證する。あまりに無軌道を走る故に危いとの難ならば悅んでうけとるが、熟練した綱渡りとなり、放れ業に達者となることを恐れると同時に、あぶなくない軌道の上を、用心して渡るマンネリズムになることも恐れてゐる。そして願ふところは、私に對する惡評ありとすれば、逢つて直にぶつつけて言つて貰ひたい。疏通これ大なる道をなすと思つてゐる。代辯といふことは、被告をかばう良き辯護士か、使者にたつてはづかしめぬ木村重成でなければまづ歪みがちなものであるから避けたい。そして何處までも、女人公道を明るい道にして頂きたい。そして時折、安閑と釣棹のさきにとまつてゐる極樂とんぼを、ひつぱたいて下さい。



戀愛揚棄

芦谷冷子

一、戀愛至上主義と戀愛揚棄

「戀愛揚棄」とは云ふ迄もなく故山本宣治氏がその著書に始めて用ひた新熟語である。同氏の序文に書かれた樣に、同書の內容は寧ろ產兒調節論であつて、戀愛揚棄と云ふ主題に就ては序文の中で若干述べられてある丈である。今其の部分を引用すれば、

『然るに此度の「戀愛揚棄」は、それが先づ第一に「戀愛の揚棄であるべき事を、私は望んでゐる。卽ち只今の轉換期に際して今更厨川白村式の「現代の戀愛」でもあるまいと、有閑沒落階級に警告するのが此の本の一の任務である。之と同時に、無產階級の本讀み秀才がブル文學の中に引込まれて一廉の文學靑年や哲學靑年になり濟さぬ樣、出來るならば、一杯の冷水でも頭から浴せかけ樣と試みた。』（五頁）

『封建的夫婦關係を揚棄してブルヂョア自由主義「戀愛」を提唱した厨川白村の功績には、恐らく今でも多數の男女は感謝するであらう。然し乍ら彼の「戀愛觀」は事實上愛の無統制に基づく「戀愛の生產過剩」を惹起し、更に上に述べた如き靑年の如き戀愛恐怖や戀愛破產に至らしめてゐる有樣はさながら資本主義制全般の愛慾界に對する一つの投影、一つの縮寫、又は戲畫である。』（七頁）

此の短かい二節は併し乍ら最も簡單に且正當に第一にブルヂョア的戀愛自由の獲得、第二に戀愛の揚棄への過程と必要とを云ひ盡してゐる。

モルガン及びエンゲルスの硏究によつて吾々は眞の一夫一婦、戀愛至上は社會主義社會に於て始めて、實現するものであると云ふ事を知る。其して其時の戀愛至上はブルヂョア自由主義によつて個人の自由と云ふ根據からの（徒らに唱へられてゐるもの）とは違つて云はずとも實行出來る性質のものである事を知る。

卽ち其處には戀愛至上があつて戀愛至上主義はない（要らない）それと異なる今の社會、資本主義の社會では戀愛至上主義はあるけれども戀愛至上は豐臣秀吉やナポレオンや紀文やフオードの如き成

り上り者や成金と同じ様に拙い。それでも「戀愛至上主義」と云ふ看板は「普通選擧」や「婦人參政」や「公娼廢止」等々と共にブルヂヨア民主々義的スローガンとしては全然無用ではなかつた。そして前の諸スローガンとは違つて此のスローガンは別に法律に制定して貰はなくとも好都合な場合には實行し得るものであつた。そして日本では(厨川白村氏の沒すべからざる功績に依つて)此のスローガンは唱へられる丈唱へられ宣傳の普遍と云ふ點では餘蘊なきに至つてをる。其處でプロレタリアート及その前衛はこの問題に對して如何に處すべきか? ブルヂヨア自由主義者と共同戰線を張つて戀愛自由主義を唱へ且つ實行すべきか? 否――玆に山本氏の論旨があるのだ。プロレタリアート及びその前衛は戀愛至上主義に反對するのでなしに、其れを揚棄しなければならぬ。幸ひ玆でも、封建的資本主義社會で戀愛至上が或程度實行せられる如く社會主義的夫婦關係も或程度實行せられ得る、戀愛するならせよ。そして喋らずに實行に入れ。然し乍ら戀愛にこだはつてをるな。そして戀愛に仕事の邪魔をさせるな。この事はプロレタリアートの前衛にとつては特に緊要なことだ(ウイットフオーゲルの戯曲「理性を持つた男」は正にこの點を警告するものだ)此の事こそ山本氏が其の短かい句の内に意味したものでなければならぬ。之を要するに戀愛問題に對するプロレタリアートにとつて、特にその前衛にとつて最も適切なスローガンこそは――

戀愛揚棄だ!

二、產兒調節論の協調性

山本氏は序文に全く正當に書いてをる。『斯く揚棄されるのは、厨川式「ラヴ・イズ・ベスト戀愛」であるが、昔々の「星と菫」式牧歌的戀愛から始めて大正式のそれに至る迄、我々は既に行爲によつて過程してしまふて、今やショタイじみた現實政策たる產兒調節を行はねばならぬ段階に入つたのだから、結果「戀愛揚棄」は「揚棄され終つた戀愛」の問題になる。之が戀愛揚棄の第二段であり、其處に調節法問答も述べてゐる』(八頁)

產兒調節の正當なる行使は正しき優生學的見地に於てのみ是認され得るものであり、そして後者(本稿第三項參照)と共に亦社會主義社會に於て始めてなされ得るものである。現在の場合に於てプロレタリアートにとつて產兒調節が必要な唯一の場合があるとすればそれは山本氏の述べてをる通りに戀愛揚棄の爲めに又はその結果としてのみである。

この正しい論據からでない處の產兒調節論は其の口實の如何にしろ全然協調的な性質しか持ち得ない。何故なら資本主義社會に於ける產兒調節論は勞働階級にとつては其の理由の如何にせよ結局「資本主義圈內での資本主義の人口需要に對する逃避反逆及び同時に反逆し乍ら此の需要の中への順應」(タールハイマー)に外ならないからである。即ち資本主義社會に於ける產兒調節論は直接には勞働者階級の家計の困難の緩和を齎らす(筈の)ものであり、即ち全然協調的の効果のみしかなく、結局相對的人口過剩を見誤まれる見解に基く新マルサス主義と同じことに歸着するのである。

ストープス博士一派の產兒調節運動が新マルサス主義者と違ふことを辯じ立て、生計困難や兒童衞生等と漠然たる理由を擧げてをるが、さういふ口實は彼等の唱へる產制論の協調性を少しもなくする

ものではない。（山本氏著書二六二頁二七四頁參照）

若し又「勞働者の側で產兒調節を要求する聲が起るではないか」と云ふならば、それは恰も無產者が慈善事業の僞善である事を知り乍ら、生產逼迫の際には之に期待を持つかも知れない如きことゝ、等しい現象に外ならないのである。即ち要するにプロレタリアにとつては、戀愛揚棄の爲めに必要ならば產兒調節もよし。然し產兒調節論を宣傳するものはこの唯一の理由――戀愛揚棄を常に同時に明確にその論據としておく義務がある。其して若しさもない時には――資本主義の人口需要に大いに呼應して――プロレタリアートはどしどし彼等の階級を增員して可なりである。人口が少なければ給料が增し生活が樂になると夢想しても駄目だ。私なら寧ろムッソリニーと一緒になつて叫ぶ、生めよ、殖せよ。

子供が殖えて生活難に陷つたら團結して增給を要求せよ。と

三、優生學と國粹主義

優生學――これに就ては山本氏は極く簡單に述べ若干の參考書を擧げるに止めてをる。この問題もその正當な意味に於ける實現は社會主義社會で始めて可能であることは明かだ。第一今の社會では餘程の金持か權力者でゞもなければ澤山の花嫁或は花婿候補者の中から申し分のない一人の白羽の矢印を取り出すことは思ひも寄らない。第二に優生學の實行は產兒調節を俟つて可能であるが、現在では其れは元より一般的に行はれ得ない。そればかりではない。もつと重要な事は現在の優生學はブルジョア學者の手に在つて彼等の階級の優秀さを證明しようとする役目を務めてをると云ふ事である。さもなければ優秀なる（資本主義の發達が一歩先じてをると云ふ意味にとれ！）民族が繁殖權を獨占しようとする計劃に利用されてをる。此等の事情は優生學に關する雜誌の目次を一見したゞけでも分る。プロレタリアートは現在に於ては優生學はその內容と共にブルジョアジーの手先になつてをると云ふことを知る必要がある。そして人の體育改良と云ふ意味での點の優生學は社會主義社會では可能であると云ふ事も知る必要がある。實際上例へば勞働者農民の子弟の學校成績がブルヂョア知識階級の子弟に劣ることもあらう。併しそれは素質の低劣を意味することゝは限らない。家庭教育の不充分環境の不良、衞生狀態の不良、等々の影響はこれらを充分說明し得らる。之を要するにブルショア國家主義の優生學は差當りプロレタリアートには用はない。それよりも先づプロレタリアは要求せよ！

姙產婦の保護、乳兒所と託兒所、住宅の改善等を

終りに臨み僭越乍ら山本氏の著書名を拜借して玆に此の小文を草した所以は一に、同書の本文で、序文に書かれた主要なる論點の敷衍を殆んどみないことは聊か物足りない感じがしないではなく、同書を先きに讀んだ者の一人としての老婆心から今後同書又は同氏の著書「戀愛革命」を讀まれる人々に一應の注意を喚び起さうとするに外ならない。そして最後に山本氏の序文を揚棄する句を利用して、私もこの小文を終らう。『揚棄なる哉、揚棄なる哉、こんな世の中に「戀愛揚棄」等は、全體的揚棄の極小部分である。』と。



女人の社會的使命

望月百合子

この頃の世界は憂鬱で困る。生活は不安だ。世の中が不安だ。貧乏だ。鬪爭だ。厭世だ。何んと云ふ陰慘な人生であらう。

どうしたらもつと明るい世界に生きられるだらう？　だがさう考へる前に、省みなければならないことが一つある。一體闇は光明の半面ではないか、夜は晝の半面ではないか。無限の時間の中に棲息する有限の生命、電光石火の如き儚ない生命が、憂鬱であるのは當然なことではないか。科學が進歩して、機械力が發達して、自然の征服といふ思想が人間の中に生れて來た。諸行無常といふ意識に代つて、人は萬物の靈長といふ思想の方に重點が傾いた。人間は地球の主人公となり、地球の意識は人間に依つて代表されると言ふことになつた。人間の眼界は擴がつた。無常觀の憂鬱さが去つて、征服の愉快さが代つて來た。人間はかうして桃太郎のお伽噺のやうに寳の國を想像して突進して來た。そして到着したのが今の世の中である。明るさを求めて、暗黑を得たのが今の人生だ。かうして人間を主人公とする地球をかへり見ると、その地球には、暗い密雲が掩ひかぶさつてゐる。

自然を征服し、地球の主人公となつた人生は、如何にも明るい爽快なものであるに相違ないが、併し、吾々の思想の翼は不幸にして無限の世界に飛んでゆく。そしてその翼の疲れた時は、やはり淋しさに襲はれる。それが宇宙の無常觀をくりかへしてくる。けれどもかうした淋しさと、自然征服のために人間自ら築き上げた人間世界の淋しさとは些の相異がある。人間は光明を求めて、暗黑を捉え、自由を求めて、束縛を與へられ、生きるために努力して死を贖ひ、理想郷を建設しようとして、却つてバベルの塔を築いた。これが五千年來の人類の歴史なのだ。萬物の靈長は、かうした愚かしき生活を五千年も繼續して來たのである。

この頃社會改造の議論が喧ましい。世の中をもつと明るくするんだといふ。貧乏をなくして平等の理想郷を來らすのだといふ。かうした運動は、有史以來五千年の間絶えず繰かへされたことなのだ。一それがいつも求められるものを與へずに終つてしまふ。何故であら

うか！　自然界に晝夜があり、春夏秋冬のあることを吾々は否定することが出來ない。從つてそれを改造することも出來ない。花咲く春がよいからと云つて、時間の行進を中止するわけには行かない。淸盛の權勢も、日沒を阻止することは出來なかつた。人間が自由を求め、平等を望む時、それは人類本來の聲として權威あるものでなくてはならない。それは淸盛の如き威力を以てしても阻止することの出來ないものである筈だ。日の西に向つて進み、地球が東に向つて廻轉するのと同じものである筈だ。けれども人間の生命は、無限の中の有限物であり、渺たる蒼海の一粟であつて、宇宙のあらゆる諸原因諸要素によつて支配されてゐる。從つてその自由も、その平等も決して絶對的であることは出來ない。宇宙一切の生活は、相對性と、連帶性とを以て自治されてゐる。

然るに世の所謂社會改造論は、絶對的權威の妄想に憑かれて突進して行く。そこに强權主義の萠芽がある。古い暴壓制度を破壞して更らに新らしい暴壓制度を建てる事になるのはこの發足點にある。人類有史以來五千年間に繰返へされた社會改造が、いつも同じ轍を踏んで、徹底的の眞の自然的解放をもたらさないのはこれがためである。絶對觀は、强權思想を生み、强權思想はそれ自身、保守となり、反動となるのである。

春夏秋冬極りなき吾々の相對的生活は空間の上にも時間の上にも流動的でなくてはならない。それが自然の生活なのである。諸行無常に則した生活は淋しくはあるが眞實である。眞實に生きてゐるのである。强權に依つてこの流動性を阻止しようとする思想は、それが革命となつて現はれても、又は保守反動となつて現はれても、それは吾々の自由を阻害するものであり、解放を防害するものである

吾々の社會的生活は、大きな船の航海生活のやうなものである。その最も愉快な間は、たとへば油の如き印度洋を、辷るが如く緩やかに流動して行く航海にある。船の碇泊中ほど、怠屈なものはない。だから船客は些かの時間をもぬすんで上陸しようとする。停滯の社會が怠屈なのと同様である。併し緩やかな動搖は船上生活に愉快なリヅムをもたらすものであるが、暴風と云ふ暴君に遭ふと、その動搖は非常な苦痛を船上生活にもたらすのである。强權に依る社會の暴君もやはりこれと同じことである。只自然の暴君を避けることはむつかしいが、人間の暴君は、人間自らの覺醒によつて、除くことが出來る筈だ。宇宙を意識し、地球の主人公となつた人間が人間自身の社會の主人公となり得ないわけはないではないか。凡ての人が、各自の主人公であるといふ意識に生活する時に、どうして暴君などが現れ得るであらうか？　自分の主人公、それ程簡單明瞭な心生活はない筈だ。その當然な生活を誰もが各々の上に打ち建てる。それ以外に自由の世界、光明の世界は求められないであらう。

無限の中の電光石火の如き生命だ。せめてそれを各々が自分のものにして生きたいではないか。

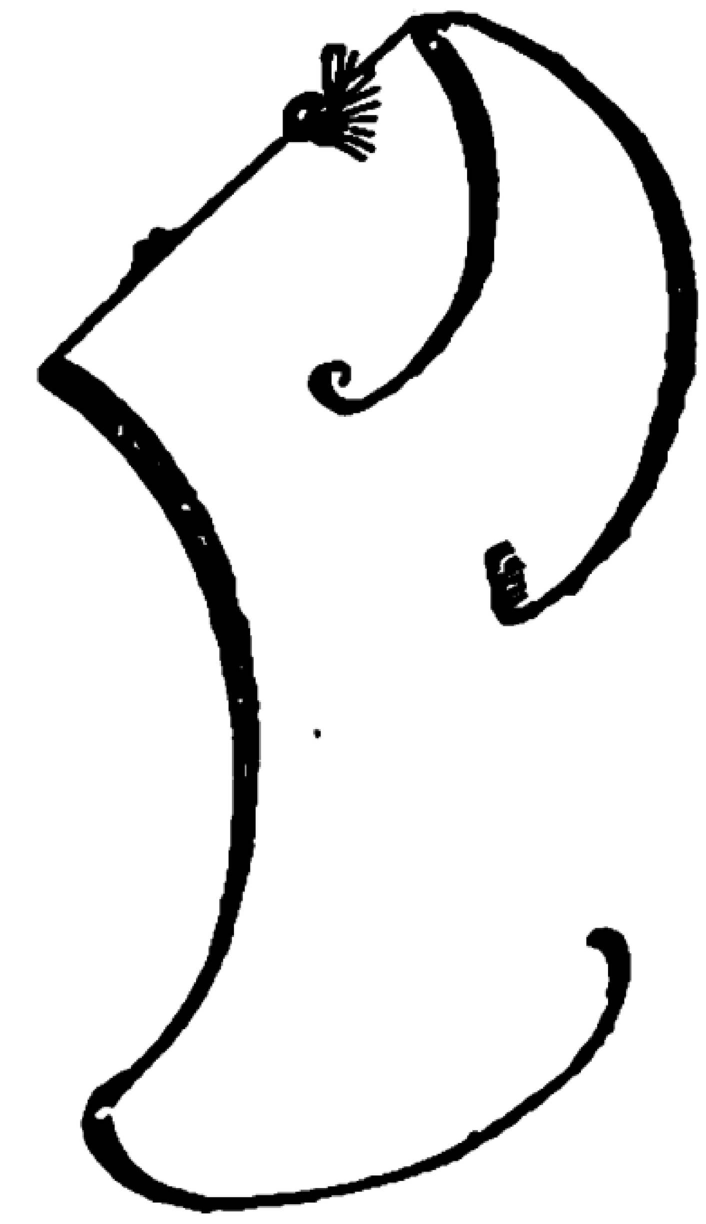
このやうな强權を拔きにした自由社會等は空想だと言はれるかも知れない。五千年來奴隷生活に馴れて、病ひ膏肓に入つた現代の人類から見ればさうも言へよう。けれども人間の生活はそれ以前、幾萬年自由境に於て行はれたか知れない。それは歴史を持たない、或は歴史の上に片鱗を留めた社會生活によつてうかゞはれることである。その時代に於ては人間は、自然を征服するといふ思想も、地球の主人公といふ意識もなかつたかも知れない。だが、人間同志の生活に於て、彼等は平等であり、自由であつた。それは歴史をもたな

いで、而も最近まで存續した所謂未開人の社會生活に於て、證明される。たとへばモルガンの『古代社會』に依つて紹介された新大陸のイロキユアス民族の如き、その他、數多き旅行家に依つて記された諸國の未開人の自然にして健全な社會生活の如き、何れもそれを證明するものだ。モルガンはこのイロキユアス民族のことを紹介して『ヨオロツパ文明人が非常に苦心してさへも實現することの出來ない、自由、平等、友愛の生活を、彼等は極めて單純に、當然のことゝして實行してゐる』と讃嘆してゐる。又北米西北の沿海にアレウト島といふ島がある。その島の土民と共に十年間も共同生活をしたイノケンチ大司教は、その土民生活に就て、言つてゐる。『私共の共同生活（アレウト人との）の間、かつて只の一句と雖も粗暴な言葉を彼等の口から發せられたことがなかつた……彼等に吾々の祈禱語等を教へる必要があるか？　彼等は吾々よりも遙かに優れてゐる。』

ダアキンと同時に進化說を發見したと言はれるワレエスもその著『マレイ群島』中に次の如く言つてゐる。『若し吾々の社會的理想が吾々の智力、德力、體力の適當に均衡ある發達に依つて實現される綜合意志と、個人の自由との調和にあるならば、文明の程度の最も低いところに於て、その完全に近い狀態を發見するのは驚ろくべきことではないか。私は久しい間南米及び極東の未開人の村落內に生活したが、彼等はその住民の自由に發表する輿論の他に法律的の裁判所をもたない。これ等の諸部落に於ては各人がその隣人の權利を注意深く尊重し、殆んど完全なる自由平等が行はれてゐる。そこには勿論富を集積し、利益の紛爭を釀すところの分業法は行はれず、執拗な强制も、生存のための鬪爭も行はれない。もし吾々の民衆全體に就て言へば、吾々は到底これ等未開人に優越する等と自惚れることは出來ない……』

生物生活の連帶的自治性は、人間ばかりでなく、諸動物の中にも行き渡つてゐる。例へば、蜜蜂の生活の如き、蟻の生活の如きはそれだ。蜜蜂が自分達の母親を中心として、平和な自由な幸福な社會を作つて、春から夏にかけて、全員一致して勞働にいそしむ有樣はこれを觀察した人々の等しく讃美するところである。晴れた美しい日には朝早くから自分達の村落を出て、一里も二里も遠くまで花粉を漁りに行く。そしてその花粉で甘い蜜を造り、冬越しの糧とし、又新らしく生れてくる子供達の糧に備える。かうして彼等が働らくために誰も命令したり强制したりするのではない。にも拘らず、一匹の蜂と雖も怠けるものはなく、みんなが自由に、みんなが勞働する。そして若し一度彼等のこの自由な幸福鄕に外來の掠奪者、强奪者が侵入しようとすれば、その勞働蜂全體は非常な勇敢さを以つて決死の戰を辭せない。これこそ眞の愛國心、愛鄕心と言ふべきである。

蟻の共同生活も亦これと同じである。『働らかざるものは食ふべからず』と云ふ原則を守つて幾千萬といふ群衆が共同村落生活を維持する有樣と云ふものは、實に素晴らしいものではないか。野蠻人が以上の如く、虫けら共が以上の如く、そして文明に誇る現代の人間社會が陰鬱で、險惡で、不安で、不平等で不義であつたのでは面目がないではないか。虫けらの社會にも、野蠻人の社會にも、强權制度といふものが行はれない。文明人だけが自ら强權制度を建てゝそれを改造するにも亦、强權思想を以てしようとしてゐる。恐ろしい迷ひだ。この迷ひを解くこと、それは强權といふ思想に最も緣の遠い私達女人の責任ではないか。强權制度は男子中心社會の特長である。女人の使命としてこれ程輝やかしいものはないであらう。



文學の生産と需要

中本たか子

1

「藝術は常にその時代の反映である」といふ。而して、藝術は常にその時代を統率しなければならぬ。此處に於て、現今の文學を論ずる前に、少時眼を轉じて、現今の風潮を顧みて見よう。

我々の生活の右岸に立つアメリカニズムの高層建築と高速度文明――がある。これは資本主義の最高峰であり、新しい經濟學の開拓地であり、新しい世界觀の遊歩場である。

アメリカニズムの繁榮の第一步は、工業の隆盛であつた。自ら供給する原料が、莫大な資本に結び附いて、着々と生産品は增大し且その完全なはけ口を、自國に、ラテンアメリカに、さては歐洲に見出した。これに伴ふ、大量生産、能率增進、さては生産の標準化等に從つて、新しい機械の發明はしきりに起つた。工業品の生産と、これに伴ふ消費とから、必然に新經濟學が出發して來た。曰く、繁榮經濟――フオードとフウヴアによつて完全に樹立されたこの新經濟學は、資本主義を普遍化し、勞働資本家運動及び勞働銀行を産み更にトラストの出現、金融資本主義に迄發展した。

かゝる環境にある人々には、過去の唯心論に立つ人生觀はもはや用をなさなくなつた。彼等は樂天的であり、健康を愛し、スポーツを好み、明朗であり、建築を尊び、集團性を持つて來た。だから人生觀を投げ棄てゝ代りに世界觀を把握して來た。資本主義經濟による所の、メカニズムによる所の世界觀を。

この世界觀が生み出した所の代表的な藝術に、かのキネマがありジヤズがある。二つとも能率增進的であり、標準化的であり、心理抹消的であり、高速度である。この藝術の投げた洗眄は、ヨーロツパ文明に培はれた藝術に恐慌を生じさせた。從來の藝術は齊しく、キネマとジヤズの前に跪拜した。この時、フオードは叫んだ「レンブラント――これは何の役に立つか、たつた一つしかないではないか。レンブラントを百萬倍にせよ！」

工業の齎した高速度と生産の意慾とは、從來の藝術を象牙の塔か

ら引摺り下ろして、颯爽たるアメリカニズムの主流へ投げ込んでしまつた。この主流の中で、浪漫主義、神秘主義、印象主義、個人主義、象徴主義が石鹸のやうに溶けてしまつた。これは、我々の生活の右岸に起つた明確な現實である。

我々の生活の左岸に立つマルキシズムの、細菌性の繁殖力とそのイデオロギイの發展も、明確な現實である。

これの發生は、工業の發展に伴ふ資本主義の隆盛に反目してゞある。この思想の體系の樹立は、誰によつてなされたかは萬人熟知のことである（これの定義的な説明、發展の經路は、此處では省く。）

マルキシズムの今日の繁殖は、ロシアに於ける共產黨の政權獲得に始まる。そして、世界の資本主義暴壓の許にあつたプロレタリアが、政權獲得を叫び出し、この聲に呼應して集つた多くの仲間が、鬪爭意志によつて結束した。だから彼等も、個人主義的な人生觀を一蹴して、マルキシズムに立脚した世界觀を把握した。從つて、集團的であり、機械による生活であり、建設的であり、現實的であり健康であり、心理抹消的であり、科學的明朗さを持つ。

又、プロレタリアートの生活は、商業的ではなく工業に、足場がある故に、資本主義打開を運動とするマルキシズムは、アメリカニズムと非常に異り乍ら、又非常な類似點を持つ。即ち此處に於ても、浪漫主義、印象主義、個人主義、象徴主義、神秘主義は、氣體のやうに吹き飛ばされてしまつて、明確な現實のみが殘つた。

2

今日、毎月の雜誌に載る文學の生產を見るに、その大部分はまだ自然主義系統の心理描寫萬能の作品であり、人生觀に立脚した內容に滿ちてゐる。

私は、何も此處で、自然主義系統の文學が齎した顯著な功績である心理描寫又人生觀の把握を惡く云ふのではない。これは、過去の非科學的であり、ロマンチシズム萬能であつた文學の行き詰りを打開して、近代藝術の一大記念碑を築いた、大いに讃美すべき功績である。

併し、藝術の姿、即ち美といふものは、何時までも固定したものではない。これは古來からの長い藝術史を繙いて見るまでもなく、常に流動して止まないものである。其處に藝術の生命があり、生命あるものゝ進展があるのだ。

心理描寫なくしては藝術とは呼び難い程、一世を風靡して來た心理描寫文學も、今や行き詰りの姿を曝し始めた。狹い自己の直接經驗を再現し、その心境や或は事件の描寫にとどまつてゐるに過ぎなくなつた。それは狹い生活範圍內の取材であるが爲に、頗る數が小く、興味が狹隘であり、限定的である。或は自己慰安に陷り、或は悠々閑日月を樂しむ風流的趣味に墮してゐる。プチ・ブルの閑靜な生活に起つた、僅かな波動、心理の陰影、少し許りの社會的關心、さうした唯心論的な生活の反映である。

かうした作品を檢討して見るに、非常に普遍性に乏しく、迫力が薄く、積極的意志がない。そして、テンポがのろく、構成が平面的である。そこにはまだ、浪漫の絃が慄へ、神祕の抹香が棚曳き、印象の淡いかげろふが燃え、象徴の霞が現實を仕切つてゐる。そこにはまだ多分に唯心論への未練が漂ひ、メカニズムに對する喰はず嫌ひが意地を張り、個人主義の殼を破ることを卵のやうに怖れてゐる。それは、生活の兩岸に起つた現實のテンポに耳を塞ぎ、兩岸の

現實の事象に眼を閉ぢてゐる。彼等にとつて、地球が廻つてゐることは解つても、それを肯定することは怖いのである。それを肯定することは自己破産である。自分がしがみ附いてゐた浮標を放さねばならぬのである。カフエーへ行つて女給と戯れても、女給を自分の妻とするのは怖いのだ。サーカスを見ても、彼等はそのメカニズムを藝術へ盛ることは忘れるのだ。工場の門へ彼等は唯靴の後塵をかけて過ぎる。

そして云ふ「もつと自己を掘り下げなくてはならない。」と。そして又「新しい文學の內容は空疎だ、何と心理描寫の手薄なことであらう。」と。

かうした唯心論に立つ心理描寫萬能の作品が、今尙盛に生產されるのは、かのヂャーナリズムにも因する。それは、雜誌・新聞の商業政策から云つて、突飛なものを出すことを恐れるのだ。何故なら小心な彼等は、從來の物に反逆したものを突然出す前に、社會への迎合を考へて逡巡する。それは非常に姑息な考へではあるが――。そして又、かの圓本の普及によつて、圓本の讀者を雜誌・新聞の方へ吸收しようとする爲に、その讀者に耳慣れた名前を羅列する方がより得策だと考へてからである。(この圓本讀者は、事實は圓本から漸次興味を失ひつゝあるのだ)

3

此處に於て、將に冬枯れに入らんとする心理描寫萬能の文學も、僅かに變態的な十一月の櫻みたいな狀態を保つことが出來てゐる。

「生產の需要を決定する」――これはアメリカの新經濟學が生み出した一つの命題である。この言葉は、今日の文學の生產に於て、果して妥當であらうか、先にあげた生產狀態である場合に。

我々の生活は今日、アメリカニズムか或はマルキシズムかに支配されてゐる。その何れにしても、機械に生活を要約され、建設的な意志を持ち(それは假令沒落するものを取材としても、その底には建設的積極的な意志がある)普遍性を尊び、生產的物質に關心を持ち、かくて世界觀に根柢を置いてゐる。

我々の生活は高速度だ。我々の生活は複雜だ。だから感情の單純化を歡ぶ。代りに、運動量の多いのを歡ぶ。テンポの早いのを歡ぶ。メカニカルな展開を歡ぶ。そして、我々の求めるものは、常に現實に卽してゐることである。我々は着物として着てゐた藝術を、皮膚に五官に感覺せねば濟まされなくなつて來た。そして、唯單なる人生の現象の再現でなくして、人生の現象によつて構成した表現――立體的な機構を持つ表現でなくては滿足しなくなつて來た。

我々は建築を歡ぶ。それは構成的であり、積極的であり、集團的であり、明朗であるからだ。又我々は工場に美感を持つ。それはメカニカルであり、非感情的であり、生產的であり、總合的であるからだ。又、我々は都會に集合する。それは發展的であり、總合的であり、普遍的であり、且テンポがあるからだ。

かくして、我々の美感を觸發さすものは、氣分や感情が薄くなりフォルム(形式)が重大となつて來た。フォルムが我々の美感を喚び、我々を歡ばして吳れるやうになつて來た。スポーツの樂しさはフォルムの樂しさであり、サーカスの面白さはフォルムの面白さである。キネマの繁榮も亦然り。このフォルムは常に明朗であり、メカニカルであり、總合的であり、構成的であり、普遍的であり、且テンポがなくてはならぬ。そして、このフォルムが直ちに藝術の內

容となり、美となる。何故ならば、スポーツに於てそのフオルムを除いて內容はなく、サーカスに於てそのフオルムを省いて何が內容を意味するであらうか。フオルムは即ち內容であり、新しい藝術を決定するものである。

心理や感情を抹消する新しい美感が、フオルムによらずして、何によつてその內容の表現が出來ようか。フオルムこそは今後の藝術に於て、最も重大であり、發展を意味し、藝術の個性（これは前述の個人主義と混同されたくない。藝術の個性と、藝術の持つ個人主義とは甚だ距離のあるものだ）を開くものである。

フオルム――これは、今日の藝術に於ける需要となつた。そして文學に於ける需要である。然るに、文學の生產に於ては今尙、氣分的、感情的、心理描寫萬能のものが多數である。この生產品は果して需要意向を抹殺し、征服して行くだけの力があるであらうか。今日、我々は文學へ親しむよりもキヤツチボールか或はドライヴをする方が面白くなつて來た。これは、每月の雜誌が何れも同じく心理描寫萬能文學滿載であり、我々の求めるフオルムによる藝術の乏しいことを立證するのだ。この需要意向を壓倒して、あくまで獨り勝手な生產品で押し通すことは、產業に於ても、商業に於ても不可能なことである。それは、生產と需要との機構を成立しない暴擧だ。

今日の工業品の大量生產は、確かに需要を決定するものではある。これは明確な經濟の結論である。併し乍ら、その生產も、常に需要意向に敏感でなくては永續しない。常に需要意向に敏感である生產のみが、明確に需要を決定するのである。

4

我々の需要意向が、もはや心理描寫ではなくして、フオルムであることを見てとつた敏感な文學の生產者がある。世人はこれを名づけて新感覺派と呼んだ。これは、未來派、立體派、表現派、構成派如實派等の分派を含んだ、文學に於ける新運動の總稱である。この派の擡頭は實に眼ざましかつた。新感覺を我々の皮膚に五官に植ゑ込んだ。そして、新しいフオルムを持參した。それは明朗であり、總合的であり、メカニカルであり、構成的であり、且テンポがある。

そのフオルムは即ち內容であり、即ち美である。例へば體操の內容とは何であるか、之れは體操のフオルムで表現されたものである。このフオルムを除いて體操は成立しない。機械に就いても同じことが言へる。然らば新感覺派の內容とは、そのフオルムであらねばならぬ。フオルムを碎いた時に、飛行機の機體を分解したと同樣に內容は成立しないのだ。橫光利一氏の「園」は力學的な構成によるフオルムである。その內容は即ち、そのフオルムから受けた美感であり、その內容の新しさはフオルムの新しさによるのである。久野豐彥氏の「或る轉形期の勞働者」は、經濟的物理的なフオルムを持つ。之を置いて、その內容を探すならば、尺八を割つてその內容を探すに等しい行爲だ。村山知義氏の「勇しき主婦」は、力學的に技術的に構成されたフオルムである。彼の新しさを認める前に、我我は先づそのフオルムの門を潛らねばならぬ。

この敏感なフオルマリスト等が我々の需要意向を見拔いて、新しい生產品を齎して與れた。此處で、我々はキヤツチボールの手を休めた。ドライヴする車を止めた。此處に於て、生產は需要を決定した。フオルマリストの出現は、始めて需要者に微笑を與へた。

又、フオルマリストのもたらした新しい生產品は、マルキシズム

文學の生産に影響した。マルキシズム文學はそれの唯物論に立つ必然性から、フォルムを持たねばならぬのであつたが、かなり長い間それを忘れてゐた。彼等は、新しく生産された文學の影響から、そしてそれの必然性から、それ獨特のフォルムを持ちつゝある。これは祝福すべき現象である。

今日、フォルマリスト達が叫ぶ聲は何を意味するのであるか、我我は一考して見ようではないか。彼等の擡頭が、今日のマルキシズム文學に獨特のフォルムを與へたと云つたら、マルキストは怒るであらうか。遮莫、若きマルキシズム文學のフォルムと、その有爲なる若き作家の着眼點とを我々は如何に解釋すべきか。

アメニカニズムとマルキシズムとは、今日我々の生活の右岸と左岸に立つ明確な現實である。非常に立場を異にし乍ら、又非常に共通性を見出す現象である。これ等の思想の根源は工業に起因し、新しい藝術を決定したのは又工業である。工業が、藝術のフォルムと内容を決定したと云つても過言ではなからう。

今日、先に擧げた二つの思想の何れによるべきかは各自の自由意志と認識に基づく。私はそれの良否を今論ずるのではない。この二つの思想が、これからの文學の生産と需要を如何に決定して行くか瞎目して見るべきものがあると信ずる。四、二五

食慾禮讃　山本はる

新しい野菜、チサ、キヤベヂ。
甘い肉の香り、
油の香り、
酢の刺激。
美しき卵黄よ。
紅提灯の大根よ、
なんとおまへらの魅力のあることは！
私は一日の半をおまへらを空想してすごす。
しかし醫師はいふ。「それは藥のおかげだ」と。「たべられるだけつめこんでおけ！」といふ。
私は彼を信用するだらう、
それでもかまはないからだ。
それは大きな愉快でなくてどうしよう！
なんとたのもしいことなのだ！　くふといふことは！　はらいつぱいつめこむといふことは！

ある道程

私はいひすぎたのかしら？
私は彼が好きなのだ。
好きだからこそつまらぬこだはりをとるために　それをいつたのではなかつたか？
彼は變におもつただらう。
それでもいゝ、それでもいゝ。
いづれ通らねばならぬ道すぢだ。
私は云はずにゐられなかつたんだ。
やつぱり、
私があんな事をいひだしてきまずくしてしまつたけれど、
やつぱりあひたいのだよ、きつと。
一日に一度でいゝから、あの聲をききたいな。一寸あの顔をみればそれでその日は滿足できやうに！
又用事をこさへて行つてやらうか。



婦人と階級鬪爭

中島幸子

過去の女權擴張論者――それが如何なる形式の解放論であつても――が女性を其の桎梏と鐵鎖から解放を望んだ時、彼等は一樣に、男性のむごたらしい束縛を斷つことを熾烈に欲求し、且つ理論づけ體系づけたのである。

然しながら、夫れ等が如何程過去のフェミニズム運動に對し、絕大なる貢献を賦與したとしても、單に歷史的發展に隨伴した段階的なものであつて、究極的な其の解放を齎らすことは出來なかつた。

其の理由として究明するなら、彼等の主張には、殆んど嚴密なる科學的な認識を缺いた處の、素朴な要素をば多分に包含してゐたからである。その故に吾々の尊敬するエレンケイ女史が、如何に輝やかしい業績を歷史に殘したとしても、まだ充分なる滿足な結果を與へなかつた。

一切の理論體系に於ける根本的な誤謬は、何であるかといふならば、過去の悉皆の解放原理の哲學的な背景、若しくは思想的な根源はいつも觀念論的な立場にあつた。例へば、サンシモン、フーリエ、オーエンの如き形而上學體系に屬する樣な人々と相等しいものであつた。觀念論の哲學にとらはれてゐる限り、其の解放は決して達成せられないであらう。

少なくとも、女性解放の武器は、社會科學なくしては不可能である。なんとなれば、過去の婦人は「社會」の認識に甚しく劣る處があつた。否寧ろ誤つてゐたのである。彼等は社會の構成に就いては餘りに盲目であつた。

吾々は婦人解放の武器としての階級鬪爭の科學的理論を把握しなくてはならぬ。だが忘れてならぬとは過去の一切の歷史が階級鬪爭の歷史だといふことを認識しても、吾々は爭鬪しつゝある階級が協調に導くといふことを、提唱するものでない。それは最惡な反動的な立場を支持するもので、何時の時代にも、支配階級・被支配階級・搾取階級と被搾取階級の二個の階級が融合しあつたとはない。

一方が克服されるか、或は共倒れに終止したのである。であるとするならば、資本主義社會の現在も亦、被支配階級たるプロレタ

リアートは、必然に究極迄戰ひ盡さねばならぬ。いたづらに上からの協調を夢見てはならぬ。卽ちプロリタリヤの獨裁は人類解放の契機である。

今婦人解放の當面の主要問題に就いて、簡單に敍述したい。ブルジョア婦人の先覺者は大槪は婦人大衆に呼びかけるに、婦人一般の解放を目標とする、然し此れはいたましい理論の終焉を導くものである。ブルジョア婦人とは、階級構成を根本的に異にする限り、プロレタリヤ婦人の欲求は階級爭鬪――マルクス主義的勞働運動に合流すべきである。

眞の婦人解放を戰ひとるための運動は、マルクス主義的に理論づけなくてはならぬ。そしてより執拗になされた階級爭鬪のみが、一切の人類の桎梏を揚棄するであらう。

マルクス主義理論は婦人に何を敎へるか？　資本主義社會の沒落のみが、良く婦人に自由を與へるとは自明の事實である。ブルジョア婦人の呼びかけの樣に、資本主義社會の枠內では、幾多の人形の家は曝露され、且つ多くのノラは生れるかもしれぬ。然し婦人一般の解放はマルクス主義の理論把握にのみ依據する。社會科學は支配階級にとつては、陰鬱な科學であるかもしれぬが、婦人に解放の理論を敎示するマルクス主義は悅ばしき科學である。

吾々の社會生活の經濟構造の理論は、容易に資本主義社會組織のみが婦人の極惡な仇敵なることを示すことが出來る。

新興科學の認識能力の威大さを知つた婦人は、自己の過去の傳統的な誤まれる觀念にとらはれた運動を去つて、マルクス主義の階級運動に合流しなければならぬ。資本家的階級に勞働力を見るプロレタリアートには何等男女の社會的差別は無い、すべてがそれ自體のための階級として存在する限り、プロレタリアの組織された力をば勞働階級の最後の解放――それは、女性の最後の解放ともなる。―卽ち勞賃制度の究極の廢止にむかつて一槓杆として使用することなくば、全般的に失敗する。女權擴張の現代的意義は資本主義社會內に於いて選擧權の獲得、勞賃の相等しき支拂要求をなすことが全般的な要請でない。吾々の云ふ女權擴張は資本主義社會の次に來るべき未來社會に於いて、婦人が男子と對等によりよき向上した生活を營むことである。

此の事は當然に新興科學の旗のもとに集へる婦人運動家の爭鬪をば、改良主義的ブルジョアイデオロギーから脫しきらざる婦人運動家のそれと尖銳に對立せしめる。

女性をば、最も汚辱な生活にとゞめおく「神聖な財産」制度のマルクス主義的基礎づけに依る廢止は、現在の嘔吐を催させる性的關係、結婚關係の矛盾を解決せられるであらう。

――(一九二八・十二・十五)――

雜詠

河瀨美子

金のことは心配すなと云ふ父の
　言葉の裏をよみついぬるかな

老いし父の借財(おひめ)つのるとしりてより
　我が身いとひてやむまじとぞ思ふ

巡禮へ報謝をこばむ我が母を
　とがめずなりぬ乏しさに馴れて



ガスや蟹罐を喰ふ重役

―社會時評―

神近市子

一、メーデー行はる

メーデーは、日本に於ける第十周年を各地とも盛んに行はれた。東京、大阪に於いては各一萬數千、その他全國數十ヶ所に於いて多數の男女勞働者がこの示威運動に參加した。これを十年前、始めて智識階級の輸入によつて行はれた當時と比較して見る時は、その數に於いてそのスローガンに於いて、又それが計畫的に行はれる點に於いて實に隔世の感がある。

日本に於ける勞働運動は、昨年三月十五日の日本××黨の檢擧以來、相亞いで行はれる暴壓の下にその最も戰鬪的な分子を奪はれた。しかもそれら幾多の彈壓と威嚇とがあるにも拘はらずかく盛んな勞働者の自發的な參加と勇敢な鬪爭的精神の發露を見るといふことは、又もつて注目すべき氣運であると云はなくてはならぬ。

歐米で行はれてゐる祝祭で最も大々的に日本に輸入されたものは、前にはクリスマスがあり今はメーデーがある。兩者ともその理想に於いて世界同胞の精神を高揚するものであり、又その事が直ちに凡ての國民によつて盛んに祝祭される理由となつたのである。しかも前者は今日ではその革命的性質を喪失してブルジョア階級の『あそび』となり了せた觀があるのに對して、メーデーのみは眞にプロレタリヤ的のものでありプロレタリヤ精神の盛んな發露を見るのである。

ところでメーデーがこのプロレタリヤ的の意味でのみ祝祭されることに不滿であつたかどうかは知らないが、一部婦人の間で古いメーデーの祝祭を模倣して、美しい女王を選びメーデーポールを飾る遊びを企てゝゐる人があるといふことである。

それが單なる有閑婦人たちの『遊び』であるのみなら、わたくし共の關する限りではない。しかしその企てに幾分でも今日行はれてゐるメーデーに對抗的な意味をもつものであるとしたら、それは又餘りにも愚かな且つゐはれた反抗であると云はなければならない。

二、ガスの値下げ問題

東京市會に始めて選出された無産議員團が、ガスの値下げをその選出第一番の問題としてとり上げたことは、市民に對して實によい印象を與へた。それは無産議員團の最初の成功であつた。

何となれば、それに刺戟されてガスの値下げに關する重要な記事が次々に新聞に現はれ出したからである。そしてこれまでこの種の問題については全く無關心で來た市民に一大警鐘を鳴らした結果となつたからである。

ガス會社の鈴木某といふ重役は、値下げ問題にからんで、

『この事業は公益事業ではあるが、慈善事業ではない。だから利益のない仕事をする譯には行かぬ』

と、大つぴらに反對の態度を示してゐる。

それはその通りである。ガス事業は慈善事業ではない。しかしそれは水や日光と殆んど同様に、都會に生活するものにとつては生活上の必需品である。この點が他の生産事業と大きな相違がある點で、その獨占事業化に對して市との間に特殊の契約が存してゐる所以である。

この點は、ガス會社自身がよく知つてゐる筈である。これ迄ガス會社が常に取つて來た態度、――市會の最も有力な團體と結んで自己の會社の利益を擁護するとか、市吏の買收をするとかいふやうなことは、その事をよく語つてゐる。そして今回の市會の改選は實にかうした市議の腐敗と墮落とが摘發された結果として行はれたものであれば、ガス會社が市民に積年の年貢を今日納めしめられることは、又當然のことである。

しかるに、明白な數字が公表されて、その高い配當率、多額の重役收入が市民の間で問題となつてゐるに拘らず、ガス會社の重役は『慈善事業に非らず』としらを切つてゐるのである。慈善事業ではなくとも公共事業である。公共事業である以上市民の利福を無視して行はれる程度をこへたる配當、理由のなき増資は、共に公盜として市民全體の反抗によつて阻止されなくてはならぬ。

三、田中内閣を頂けば

さきに濟南事件の解決を見た日支間では、更に南京事件、漢口事件が解決され條約の改訂といふところまで漕ぎつけた。

政友會では對支外交の成功とか、我黨内閣の手腕を見よ！　とかいひたいところだらう。そして實際に一と頃の兩國間の險惡な雲行にくらべて見れば今日の狀態はやゝ優しだといふことも云へると思ふ。しかしそれを對支外交の成功といふことは、かの山東出兵がいかにして行はれ、その將來どんなことが起つたかを全然忘却してゐる健忘症の政黨員のみが云へることであらう。

民政黨は、政友會の事とし云へば何でもケチをつけずには納まらない。大となく小となく同じことを飽きもせずくり返してゐるところにさもしい政黨根性が見へて反感を起させるに充分であるが、しかし對支出兵に關する限りそのいふところは正しい。國帑を費やすこと一億、そして敎び得たことは對支問題は强がちに强硬政策一點張りではダメだといふ一事であるとすれば、事實世にも類少ない浪費をしたものと云はなくてはならない。無能無策、時世の動くところを知らぬ總理大臣をいたゞく國民の不幸は、決して不幸にのみ止まらない。それは經濟的にも實に大きな負擔である。

しかも支那との關係は、各種懸案の一時的解決とは反對に更に複雜なものとなりつゝある。今日の解決は一時的政策的のもので、それは決して眞の解決でもなければ、眞の和平でもない。わたくし共が對支外交を監視することの必要は、今後更に重大化しこそすれ寸毫も減少しはしないと思ふ。

四、政商のいがみ合ひ

田中內閣は、その存在そのものが反資本主義的に覺醒しつゝある國民に、實に無數のよき自己教育の教材を考へてくれた。その意味に於ける限り、田中內閣の存在は日本××黨の一年乃至は二年の活動にも匹敵すべき一般の効果を擧げたと思ふ。

田中內閣が最近國民全體に公然と與へた政治上の教材は、かの日魯漁業に關する落札問題である。即ち日露戰爭の結果として、利權を獲得した露領北海の漁區を、露領水産組合なる三井系資本の色彩濃い資本のブロックに獨占せしめ、それらの資本家は實價に比較して無償にひとしい價格をもつてロシヤ政府よりその權利を讓渡され、年々巨萬の富を得て來た。ところが他の資本家の中に、その利得を嫉視しその分け前にあづからんとする者を生じ、過般來紛擾を極めてゐるのである。

しかもその資本家の背後に、閣內にある久原遞相が糸を引いてゐるといふ噂は、三井資本を代表する山本某をいきり立たせた。そして事件は公然の鬪爭となり、資本家共はその利益を追ふの餘り相互の醜事實を自分たちの敵たる無産階級の前にバクロしつゝある。

兩派間の妥協の色は濃厚である。何れは水産組合派も島派も相當の利益を收めることを條件として（彼等がその場合ですら、自分たちの腹を痛めないだらうといふことは保證できる）納まるのであらう。しかしわたくし共は、彼等が他國民に屬する漁區に於いて、國家を背景にどんな巨額の利得をしてゐるかといふことを目のあたり事實によつて學ばせられた。これらの漁區にはたらく者は、誰れであるかを知らんとすれば、『戰旗』五月號の小林多喜二氏の『蟹工船』を見よ。ギシ〳〵と軋しむ老朽船と粗惡な食料と共に北海の荒海に送られる多數の勞働者ではないか。これらの事實を見て、何等の貴重なレッスンを學ばない精神は、ブルジョア教育に毒された鈍感な人々のみであらう。

まことに、

『利を逐ふ資本家間の鬪爭が、プロレタリヤに乘ずべき幾多の機會を與へる』のである。

五、眉唾ものゝ國粹論

メソポタミヤであつたかと思ふが、そこの古墳を研究した人の發見であるが、そこに太古に住んでゐた一人種の間では、禿頭無髯が流行であつたものゝやうである。王とか王宮の中の住人たちの像が石に彫られたものが時折り發見されるが、それらの人物は全部丸頭ださうである。恐らく原始時代の支配者の中に虚榮心の强い支配慾の熾烈な王があつて、それが禿頭であつたかなんかでそれが自分の禿頭を目立たなくする爲めに、役人たちの中に丸頭を流行せしめたのであらう。

わたくしは、この話を思ひ出す毎に小川平吉といふ男のことをよく思ひ出す。それは單に頭がはげてゐるといふ丈けのことではない。その原始人のやうな支配慾の旺盛なことがそれと關聯してわた

くしにメソポタミヤの未開國の王を思ひ出させるのである。

この支配好きで出しやばりの男が、鐵道大臣に納つてからした改惡事業は、決して數少なくはない。凡てが自黨派の利益の爲めに計畫され、議會中は屢々問題となつたのであつたが、最近には又驛名の假名遣ひを文法通りにすると云ひ出して天下の嘲笑を買つてゐる。

文字のことに少しでも留意してゐる者には知られてゐることであるが、文法は決して言語の前にあつたものでもなければ、文字の前にあつたものでもない。言語があり、文字があつて後、それを何等かの形で統一して置くことが便利であるから、統一され類別されたものに外ならない。それで言語がひどく流動的のものであり自由なものであるのに對して、それは靜止的であり不自由的である。たゞそれが意義を喪失しない爲めには、言語の變動に相應じて一定の時が來ればその形をかへて行くことが必要であつて、それは言語發音に從屬するものである。それを文法的であるといふ理由にならぬ理由で現代人に難解な文字をワザ〳〵使用し、それで國粹的であるとか愛國的だと考へて居られるのは、オメデタサの限りである。

この男は又、國府津とかに（そこを選んだのは、日本で一番旅行者が多數通るところだからださうだ）觀音菩薩の一大像を建立して、國民に國粹精神を宣傳する計畫の發案者である。しかもその觀音像は、金又は銅をもつてすれば高價につくところから、內部は木か代用金屬かをつかひその上に貴金屬を貼布するのださうである。何とケチな愛國者ではないか。

しかし、國粹論なんかと云つても皮をはいで見ればどれもこれもこれ位がオチであらう。

だから國民よ、國粹論なんかとなへる奴があつたら、そいつは獏にでもくはしてしまへ！　そいつは木に銅をはつたまやかしの銅像ものでなければ、認識不足の常識にプラス虛榮心ほどの代物でしかないのだから。愛國家氣取りの野蠻人だの、蟹鑵をバリ〳〵喰ふ政商賣大臣だののさばる日本は、ジメ〳〵と何時も梅雨期のやうにうつとうしいことではある。燒けるやうに暑くてもいゝから、もつとカラッと空が心まで晴れたやうな政治が欲しいものではある。

讀者通信

大分縣　**永田壽美子**

女人藝術!!　いつもなつかしく拜見致して居ます　私等の居るこの田舍では　女人藝術は皆無です　それで門司からいつも送つて頂いて居ります

直接講讀をと思つてますが　まとまつた金子が出來ませんので仕方なく姉の方から送つて貰つてる樣な次第です　今度金子が手に入り次第すぐ誌代を拂込むつもりで居ります

私は今迄ありふれた婦人雜誌を見てアキアキして居た所に　女人藝術を手にした時　ほんとに　嬉しうござゐました　これこそ自分等の天地だと叫びました　田舍の事で誌友とて無く　勸誘すべき友を見出し得ません　然し根氣よく探し出し進めて見る積りで居ます故　何卒吉報おまち被下ませ二十一の若輩に取つて女人藝術はこの上なき師でござゐます

徳島の愛讀者

前略——徳島の書店に御誌の出てより、毎號愛讀してゐますが、我々女性のために御奮鬪、又は指導遊ばされてゐる事を愉快に感じます。愛讀者劵に早速記名同封して置きます。就ては當地に於いて女人藝術直接讀者は幾人位居られますでせうか。都合によりましては支部を開き、將來講演會等も催して見度いと思ひますから御一報下さいませ。



草つぱら

京芙美子

河原堤の草の上に
五月の陽をあびて
牝牛、子牛が放たれてある

草を食む、草を食む
牝牛のはちきれそうな
乳房に、仔牛は、喜々と
たはむれて居る
五月の風なごやかな草つぱら

あの乳を——
牧舎でしぼり取つた
あの乳を、どこの幸福な
病人がのむのだらう——。



やせこけた病床の友が
その乳を、のみたいと
小いさな聲で
私にさゝやいた。

ふた親もなく兄妹とも別れて
病持つ、ただ一人の友も私も
一文のお金さへ持たなかつた
あの頃のみじめさ——。

乳を、その乳をのまずに
淋しく、死んで逝つた
不幸だつた友を——
あゝはちきれそうな
牝牛の乳房のたはむれに
遠き日の、それを思ふ——。

陽は明るく
風なごやかな
五月の河原堤だ——。

一九二九、五

地獄の反逆者＝人生記錄＝3

松村喬子

かるたの決心

細い細い絹絲の樣な雨が果しない高い處から地上までヅ…ツト垂れて、煙る樣な空も梅雨明けと同時にカラリと晴れた。贅をつくした中庭の、新芽の艶々しい柳や葉櫻に生々とした太陽は强く〳〵照りはえて、それが廊下や室へも反射して、かるたが寢てゐる濕氣の多い薄暗い室の中も青い光りが一ぱい射込んで、三月に余る重苦しい床の中の生活にも何となく晴れ〳〵とした爽かな感じを與へた

朝から晩迄同じ處ばかり見つめて失敗に終つた三ケ月以前の出來事を繰り返しくり返し考へてゐる事は自由のきかない體になつてゐるだけ餘計に苦しい事であつた。

訪れてくれる人もない此の頃をあき〳〵して只、歌子に賴まれた絽ざしを刺す位であつたが、天氣の好いのになんとなし歩いてみたい氣もして、久しぶりに、まだ充分癒えきらない右の足を引づりながら二階へあがつてみた。――明日は皆が歸つて來る日だ――。

そう思ふと嬉しい樣ななんとなく苦しい樣な思ひが、胸を一ぱいにした。

――原因はみんな私にあるのだけれど、營業停止になるには、やつぱり主人だつて惡いからだ、それに、あのエゴイストの染之助さんや主人に忠實な小町さんは、『私だけが惡いのだ』と云つて、私ばかりいぢめる、室の前を通る時はあてこすりばかり云つて通る、でも、高奴さんや、川柳さんや歌子さんは私の同情者だからまだ、心强いし、嬉しい、かるたは、久しぶりに、晴々とした氣持で獨りごとを云ひながら階段を上つた。

客商賣の家で、いつも三十人以上の娼妓が居る、賑やかな榮梅も三月の營業停止に、全部他へ一時あづけられ、掃除もほんの申わけに、廊下を掃除の番男が朝一寸やる位であつたから、常にきれいにみがかれてゐるだけ、一段と目立つて、ガランとしてゐた。二三日前から、四人五人と、各自の室の掃除に歸つた者もあつたけれど、かるたの待つ歌子は、まだ顏を冒せなかつた。

「どうして歸つて來ないのだらう?。もう五日程、來てくれないのだけれど…何か怒つてゐるのか知ら?」そう思ひながら、痛む足を引づりながら二階の歌子の室の方へ、歩いた。

「まさか歸つてゐて、私の室へ來ないのではあるまい」

歌子の室は、閉つてゐた、それでも、一度室を開けて見た、長い間人氣のないがらんとした室は、處々疊に、黴が細く浮いて、閉切つた風の通らない室の中からはプーンと濕氣の香が鼻についた。

「あんなにキレイ好きな歌子さんが、こんな處へ歸つてきたら、どうするだらう」

いつも大掃除でもやる樣に、手拭を姐さんカブリにして、口を新しいガーゼのきれで、掩ふて、天井から疊まで一生懸命に、雜布がけしてゐる姿を思ひ浮べてみた。そして、なんとなく淋しい心で、ボツ〳〵と、カベや柱につかまりながら室へ歸つた。

室にはさしかけのロザシが、彼女の歸りを待つてゐた樣にキチン

とフトンの上に、中の綿が浮んでゐた。彼女は、もう後、いくらも殘つてゐない、チユウリツプの赤い花の處を亦熱心に刺し初めた。

丁度その年の一月十五日、お正月と云つて廓では、また一しきり人が澤山出て、田舍客の多い日であつた。近在から若い衆が、連れを誘つて遊びに來る日で廓の書き入れ日である、榮樓も、いつもより客筋は惡いが、ボルのには都合の好い日で、主人は、ホクホクとしてゐた。

かるたは、正月からの無理なつとめで、とう／＼倒れてその日はどうにも起き上れなかつた、主人の不氣嫌な顏をみたり、叱言を聞くのがいやさに、元日から、可なり、無理して、店へ出てゐたのであつたけれど、立ち上ることさへ横腹から太股へかけて、筋がつれて、痛くてようゐではなかつたので、とう／＼恐る／＼帳場へ願つて休みにしてもらつた。けれど、娼妓が足りないと云ふので休んでゐた娼妓は全部、起されて客をとらされた。かるたも、もちろん、こんな時でないと、なじみの客のない彼女には、稼いでもらへないと云つて、無理に室へ客を連れて來られた。然もなるべく、みなりのきたならしい、他の娼妓が、いやがつて、客にしない樣なのばかりを連れて來られて、もう夕方から三人もだつた。その爲め、苦痛は劇しかつた、朝客が歸る迄はがまんして居樣と思つても、どうにも、がまん出來なくて、とう／＼朝送り出すことさへ出來得なかつた。客が室を出る時も痛みの爲めに、口さへきけないで、打伏してゐた。客は不きげんな顏をして室を出たが、廊下で、丁度同じ朝歸りの他の客が、娼妓と並んで、有りつたけの甘つたるい言葉でだらしなく寄りかゝつて歩いてゐるのを見ると、昨夜からの余り、冷たい態度のかるたを考へて、何かしら、田舍者だから馬鹿にされた樣な氣がして、使つた金が惜しくてしかたがなかつた。そして、引かへして、何か云つてやり度いのをがまんして玄關迄やつてきたが、そこにも、二組程、いかにも別れを惜しむ樣な場面を見せつけられて、とう／＼そこに居た仲居をつかまへて爆發させて了つた。けれど歸りの客ではあるし、風さいを見ても餘りよくない客であるしするので、物なれた仲居の爲めに、體裁よく云ひ丸められて、ブツブツ云ひながら出て行つて了つた。かるたの爲めには、不幸にして、その時の當直の仲居が一番意地の惡いお春であつた事だつた、だから、その場をだまつてすます譯がなかつた。

「何や、朝つぱらから、ゲンの惡い、かるたさんやナー、ほんまにあの人は、どんな氣でゐるのやろう客の事で何か、ゴタ／＼がおきると、いつもあの人や、仕樣がないナー」客に叱言を云はれた腹いせに、かるたに當らうとお春は大きな聲で怒りながら二階へ上つて行つた、荒々しく室を開ける音に、ジツト打伏して、下腹部を押さへて歯を喰しばつてゐたかるたは、一寸頭をあげたが、亦すぐ顏をふとんにつけて了つた。

「かるたさん、あんたは亦、お客さんを怒らしなはつたナー、そして、送り出しもしないで少しや、他の娼妓さんに羞かしいと思ひなはれ。一人のなじみも出來ないくせに——」お春のけんまくに、凄い程青ざめた顏をやつともたげてかるたは、

「おばさん濟みません、また體が惡いもんやよつてに、送り出さうと思つてゐたのやけれど、とても起きられんので……」

細いきれ／＼の聲で之だけ云つたのだつたが、

「フン、亦病氣か?! 何か云ふとすぐ病氣々々と云つて人をゴマ化して、あんたの病氣は、あんたが勝手にこしらへるのやからしかたがおまへん。人並に客もないくせにお客をふるからや」

ピシヤンと戸を閉めて行つて了つた、かるたは今、その事で腹を立てる事も考へてみる事も出來ない位、痛みの方へ氣を捉れてゐた。

おなじ雇はれてゐても、一方は中間搾取者の仲居であつた、仲居にさへ可愛がられてゐれば、客はつけてくれる、客を一人でも多くとる事によつて、主人にも可愛がられる、だから、自分の小づかひを創つても仲居には、心づけをす

ゐのが全部の娼妓の習慣になつてゐた。主人から借金を增してまで仲居に金をやる者さへあつた。そして月の稼高によつて、店の寫眞が陳列されて、第一位になる事が彼女等の誇りであつた。だがまだ稼高を競つて働く者は幸福な方であつて、どんなに、一生懸命稼ぎ度く共、體が惡くて、借金が澤山あつて、稼げない者程みぢ目であつた。客がたとへ寫眞を見て「この女を」と云つても金が有り相だなと思へば、いゝ加減に胡麻化して、外の娼妓にふり當てゝ了ふのであつた。仲居はある程度迄主人と同じ位の權利を持つてゐた。

　かるたは苦しみながら、床の間の時計を見た、まだ七時すぎたばかりで、廓としては夜中であらう醫者も寢てゐる樣、使ひに行つてくれる豆衆も十一時頃でなければ起きて來ない、しかたなく、はふ樣にして、茶棚のひき出しに入れてある、モルヒネの頓服藥を二つ程服用して、三拾分もウト／＼と眠つたと思ふ頃、歌子が入つてきて枕許に座つてゐるのに氣がついた

「アラ、いつきたの」

キョロ／＼として邊りを見た、藥の爲めに感じがなくなつてゐるのか、痛みは止つてゐる。

「體は變らないの」

「いゝえ、今、余り痛むから頓服をのんだ處なの、」

　この藥をのむ事をなるべく、止める樣にと口やかましく云ふ歌子は一寸まゆの處に小皺をよせてゐたがすぐ赤氣をかへて、

「そう大變だつたワネ、醫者もまだ起きてゐないし、困つたワネ、――」

　かるたは橫に寢たまゝ、頭に手をやつてゐたが、細い聲を一段と細くして歌子には聞き取れるか取れないか分らない話をしだした。

「歌子さん私もう辛くて／＼どうにも辛棒出來なくなつたすやワ、一そ一と思ひに死んで了ひ度い、とも思ふのやけれど死ぬ位なら一言でもこの家へ恨みを云つて死に度いとおもふの、今迄あんたはんには、色々とお世話になりました事は決して忘れしまへん、私の樣な、人に除け者にされてゐる者を、ようく親切に世話してきてくりやはりましたナ、何か御禮をして死に度い。そう思ふのですけれど今の私にはどうする事も出來ませんのやよつて堪忍しと與やすナー」

　泣きじやくりながら一生懸命で云つた、歌子もつい悲しくなつたいつも口では强く云つてかるたを慰めては居たものゝ之迄は二人でどんな事にも堪えてきた、自分乍ら「よく忍耐したナー」と思ふ事も一度や二度ではなかつた。けれど、今、一人の方が死ぬと云つたどうせ、生きてゐても望みない體だから一しよに死んでもかまはない、決して死ぬ事は躊躇しないけれど、たつた娘一人を、賴りに生きてきた母親の事を考へるとどうしても死ぬ氣にはなれなかつたまして、どうにかして、何かの動機に、頑迷なこゝの樓主に少しでも、目覺めさせる樣な機會を自分の力でこしらへる事が出來ればまだ、死ぬにも死にどたへがあるが、このまゝで死んだつて、犬死だしその心を取りなほした。

「かるたさん世の中はみんなこうなのよ、こゝの家ばかりではないワ、まして、娼妓ばかりでなく女中だつて、ソーだ、女工だつて、使はれてゐる人間は皆、苦しい思ひで世の中に生きてゐる、死ぬにも死なれない人は多くさんあると思ふわ、それよりか、一つ勇氣を出して、何か犧牲的に私達ばかりの都合の好い樣にでなく、困つてゐる人達皆の爲めになる樣な事考へませう？」

　その言葉に力を得たかるたは、すぐ答へた、「歌子はん、私警察へ出度いと思ふのどすがどうですやろうナー」

「警察へ？　あんたが、その勇氣があつて」かるたの意外な言葉にかへつて歌子が驚いた。

「エヽ、私決して自由廢業し度いからではおまへんけど、余り體が惡いから暫く休ませてくれつて、」

「そうね、それにあなたには立派に理由があるのだから、いゝでせう、けれど、同じ行くなら、休ませてくれなんていふ位なら、もう働けないから廢めさせてくれつて云つてやるのよ、どうせ三ケ月なり四ケ月の休み位で、少し位よくなつても、またすぐ働かされたんぢや、もとの體になつて了ふわ」

「そうね、警察へはどうして行か

うか知ら、：：：」

二人はしばらく顏見合せてゐた嚴重なこの家を、一人では一歩も外へ出さないこの家をまして警察へ行くなんて云つたら、どうして出すものか？それが二人の難問題であつた、かるたはその時、思ひ付いた事がある樣に一寸顏をあげて歌子を見てから、

「ズット以前に人から聞いたのやけれど警察へ手紙を出して呼び出して貰つてはどうですやらうナ、」

「ア、それも好いワネ、病氣で體が動けない位重いのに主人は無理に働かせるつてネ、そして、客をとらないと云へば大變叱られて、御飯もろくに食べさゝない樣にするつて事、このまゝ長く居れば死んでしまふより外道がないつて、だから一度どうか私を呼び出して下さい、外にも澤山苦しんでゐる人もありますし、不正な事もありますから、お話申し上ますつて書いて出せば好いと思ふワ」

「エ、、そうしまつさ、でも警察へ行つて叱られる樣な事はおまへんやらうか」

と不安らしい顏付であつた。

「何が怒られる事があるの、警察では、弱い者を助けるのが役目ぢやないの、こちらには少しも惡い事はないのだもの、どうして叱られる？持主は、キット怒るでせう、赤くなつてあのおそろしい顏をも一つおそろしくしてネ、然し、もう、二度とこゝへ歸つて來なければ好いぢやないの、警察へ行つたら、もうどんな事があつても歸らないと云ふ覺悟をしてネ、歸れと云はれても、いやだと云つて押し通さなければ駄目よ、歸れと云はれて、ハイそうですかと云つて歸つたら最後、どんなヒドイ目に逢はされるか解らないからネー」

「そうやナー」

實行し樣と迄は決しかねてゐた只上の空で返事をして、結果がどうならうともどれ丈けの注意をしなければならないものかも考へて見なかつた。だが、一人になつて靜かに考へた時、現在のまゝではとうてい、生涯堪え得られない苦しい事とは思つてゐた。が亦、若し、警察へ行つても、不首尾に終つた時は：：と考へると、恐怖心はジットしてをられない位神經を嵩ぶらせた。

だが、また、イヤ〳〵、決してそんな事はない、キット警察でも私に同情してくれて私を親元へ歸して下さる、キットそうだ。こんなに私は體が惡いのだもの、都合よく事は運ぶだらう、そうすれば一生懸命に養生して、元の丈夫な體になつて、血色もよく、肥つて生々とした人間らしい體になれるそうしたら頭もよくなるから、勉強して本も讀み、少し位世間へ出てもはづかしくなくなれる――彼女はつとめて善い方にばかり解釋して、少しでも自分の心に勇氣づけ樣とこゝろみた。

ない筈のかるたの草履が

三四日は歌子と逢つても、少しもその問題についての話はなかつた。お互ひにどちらからもその話にはふれまいとする心があつた、どちらも切り出す事を怖れてゐる樣に――五日目の夜おそく、かるたは歌子の室へ靜かに入つてきた

「歌子さんもうお寢やしたの」

「いゝえまだ」

引けてからもう一時間余りも經つて、邊りはシンとしてゐた、時折、客をとつてゐる娼妓が洗滌に行く爲め廊下を草履を摺らしてだるそうに歩く足音が聞えるだけで、その後は亦シンとしてゐる。外には、どこかで客でも採んだ歸りらしい按摩が、杖をたよりに、日和下駄を引ずる音がしてゐる。

小說に夢中になつてゐた歌子はかるたが入つてきたので、すぐ床の中から起きて長火鉢の前へ坐つて敷島を一本つけた。

「どうかしたの？」

「いゝえ別に！只あの此の間の事ナ、警察へ出す手紙、今夜、とし子さんのお客で私知つてゐる人がおますのやワ、その人が丁度歸らはる時に、頼んで出してもらふたので：：：」

「アラそう、そりやよかつたのネー、」

「エ、只、『私を一度呼び出して下さい、私は長い間病氣で床についてゐます、それに、客をとらされて、いやだと云へば、大變叱られます、いろ〳〵と申上度い事もありますが、一人では決して外出させませんし、警察へ行くと云へば

よけいに出しますまい。ましてそんな事云へば、どんなにされるか解りませんから』って書いたのどす、どうですやらうナ呼び出してくりやはりまつしやろつか？」

何となく不安な樣な氣がして歌子に尋ねた、

「さあネ、必ず何か云つてきます」

責任のある返事はし得なかつたのでさう答へるより外仕方がなかつた。

翌日は手紙が屆いただらうけれど、それは午後の配達であるからその次の日には必らず何か云つて來るだらうとかるたと歌子は心待ちしてゐた。かるたはもう外の事は何も頭に浮んでこず只警察へ行つてからの答辯をのみ考へてゐたまるで被告が檢事の前に立つた時の氣持で……二人が考へてゐた樣に警察からの呼び出しは手紙を出した一日おいての朝早く、主人の木浦がまだ寢てゐる時電話がかかつてきた。だが木浦は別に大して狼狽もしなかつた。この社會によくある客の使込みか何かの取調べ位に考へて――。

その時の電話では必ず主人とかるたが出頭する樣に、主人は代人ではいけない、との事であつたから、午前十時に行く事をかるたの室へ仲居がつたへてきた。かるたは、――とう〳〵行く處迄行つた樣な氣持で、今迄の不安や危惧はかへつて落付に變つた樣な氣がした、度胸も定つた樣な氣がした。

之から出かけると云ふ時、そつと歌子の室へやつてきた。

「歌子さん、とう〳〵行く處まで行きました、之から親爺と一緒に警察へ行きます。では萬事は手紙で御知らせしますから、あなたも御達者でお暮しなさい、あなたに御世話になつた事は決して忘れまへんよつて、もし何かの事で私に出きます事は必ず手紙を寄しとくれやすナ、私もこんな甲斐性のない者だすけど外に出たら又こゝに居る樣な事もおまへんさかいに」

いつもの弱々しいかるたとは別の人を見た樣に歌子は思つた。

「有難う、亦、色々とお願ひします。あなたも體を第一になほして下さい。警察へ行つたら、勇敢にいつもの樣に親爺にまけてゐないでやつて下さいね――」

「エヽでは又、後であなたがあやしまれるといけませんから私これで行きます」

「氣をつけてネ」

これでいつ逢へるだらう――と云ふ氣もないではなかつたが、判きりとした別離の意識は起らなかつた、首尾よく自廢出きるかどうかも心配の一つであつた。

けれどかるたが室を出て、自動車で榮樓の主人とこの樓の前を離れると同時に、歌子は寂しい樣なそれでゐて、何かしら肩の荷が下りた樣なホツトした氣持になつた何がなしに、荷厄介にしてゐた事も濟まないと思つた。

歌子は、夕方、豆腐屋のラツパの聲にふと目がさめた。午後になつて床の中で本を讀んでゐたのがいつとはなしに眠つてゐた。ポツポツと娼妓は湯に入りかけてゐた歌子は便所へ行かうと思つて何氣なくかるたの室の前を通りかけるといつもの通り室の前には、草履が二つキチンと竝んでゐる。然もかるたの紫の濃い緒が、クツキリと暮れかけたにぶい光りに浮き出してゐた。歌子は思はず立止まつた。口の中では、アツ!!と叫んだ

――たしかに朝十時に警察へ行つた筈だのに草履があるのをみれば、室にゐるのだらう――、それでは、どうして歸つてゐたのか知ら……だが今行つては人にいろいろと云はれる、それでなく共、どうせ私は共叛者とみなされてはゐるがなるべく、そんな處をみられまい、――

歌子は氣になつて〳〵しかたがなかつたが、そのまゝ用をすまして室へ歸つてきた。間もなくかるたがやつてきた。けれども少しも悲しんだ樣子はなくかへつて元氣な顏付であつた。

「どうしたのさ、今便所へ行つたら、あんたの室の前に、チヤンと草履があるのでせう、私驚いて了うたのさ、何時歸つてきたのどうだつたの」

片方が落付いてゐるので歌子はイラ〳〵して來た、そして何もかもの質問を一度にしてしまつた。

「今日は署長さんは御留守でしたんやで、それでその次の方が逢つて色々と尋ねて、親切に云つてくりやはりましたの、私も今日は思

ひ切つて何もかもお話してきましたんや、そやけど何しろ署長さんも御留守やし自分獨りでは、承諾する事が出きんから、明日でも、署長が來られたら、亦呼び出してやるから、今日はこのまゝ歸つとれと云やはりましたの、それで私は、どうしても今日は、歸らないこんなに、あらひざらひ、云つてしもふたから、歸つたら、どんなに主人にひどい目に逢はされるか解りまへんよつてに、歸るのはいやだす、どこへでもかまひまへんよつてに泊めて、明日署長さんが來やはつたら逢はしとくれやす、と頼んだんやけど、警察は宿屋ぢやないし罪人は留置するけど、惡い事せんもんは留める事は出きんと云ふて泊めてくりやはらんよつて、そんなら御存知の宿屋へ紹介して下さいと云ひましたんやけど兎に角、俺を信用して今日だけ歸つてくれ、明日は必ず呼び出すからと云やはるし、主人は〳〵で、今日だけ、どうぞ歸つとくれやすと、ペコ〳〵してゐるのやらうしかたがないので明日行く事にして歸つてきたの、先程、室へ來たのやけど、あんまりよく眠つてゐやしたので後でと思つて、室へ歸つてゐたのやワ、」

そこで一寸言葉を切つて、廊下の足音に耳をすましてゐたが、足音は隣の室へ消えたので、

「まあ、そやけど私、今日位オヤヂの優しい態度を見た事がないワ自動車が着くなり『さあ、かるたさん、降りとくれやす、』と云つて手を引張つて私を下ろして、玄關へ來ると、仲居やら、娘や、おかみが出迎へたら仲居の方へ向つて『おゝかるたさんの草履は――と一番先にそう云つてから、かるたさんは、體が大分惡いから、二人で、支えてあげて、室へつれて行つてあげなはれ、ソーッとやで』

と一人で騷いでんので、外の人達はアッケにとられて、ウロ〳〵してゐるのやワ、私おかしいやら癪にさわるやら、」

「そう、明日亦行かれて、どんな事云はれるかと思つてゐるのでせう？そして、今日はどんな事云つてきたの」

「始め行つたら主人と私の前で、主人に向つて『お前の樓では大變娼妓を虐待すると云ふではないか病氣の者を無理に働かせたり、なんかして、』と、云つたのが次席の方だつた。

木浦は想像の餘りにちがつてゐるので、驚いて、一寸返事が出來なかつた。それにかまはず、

「お前は一寸あちらで待つて居てくれ、」

と云つて、おやぢは、裏の方へ連れて行かれて私だけになつたやワそれから、私、思つてることみんな云つてきてやつたの、肺病の人も働かせてゐる、月末の勘定には炭代もとるし、いろ〳〵の不正のある事を云つたら驚いてゐたわ。それから主人を呼んで、尋ねてゐたが、ペコ〳〵して、いつもあんな、傲慢のおやぢが、可愛想な程ペコ〳〵してゐたので、氣味がよかつたわ、そして、皆、帳場まかせで、私は家に居ませんので、少しも様子が解らないなんて、白々しい事を云つてゐるのやワ、ずゐ分癪にさわつたけど、明日行つた時云つてやらうと思つてゐるの、そやけどナ、今日は自動車で歸る時、こんな事云つてるの『明日からでも、あんたの好きな處の病院へ入れてあげるよつて、ゆつくり養生しなはれや』つて

全部を聞いてゐた歌子は、何んとなく今日かるたが歸つた事は、不吉な様な氣がした。たとへ明日にも呼び出してやるとは云つてゐるが、そして、呼び出しがなかつた場合は、だまつて、出て來てもかまはない、もし止めたり邪魔する場合は、邪魔する方が罪になるのだから、處罰はとつてやると云ふ情けある言葉であつたが、――然し歌子は、何んにも云はなかつた。その夜、かるたは再び樓主の前に呼び出された。その席へ小町も居た。そして、明日警察へ行く事は思ひ止まる様に、亦、呼び出されても、今日の言葉を取り消す様にと、くれ〴〵も云はれた、最後に、主人は、之は誰にも云はない様にと云ふ前提の下に、

「あんたも長く家に居てくれてる事やし、體も弱いのやから、借金を少しまけてあげるから、之から氣を入れかへて、もう一度、昔の様に一花咲かせとくんなはれ」

と、憤りと怒りにもえた目を、か

くして、口だけやさしく云つた。いつもの木浦としては容易な事ではなかつた。だが、警察での言葉を信用しきつてゐるかるたは、それ位の事では買收されなかつた。長い年月の、恨みは、爆發したのだもの、僅かの、それも借金のわずかを棒引にすると云ふ事だけでは、到底がまんが出來なかつた。

——いつも歌子さんが云つてゐた樣に、私だけの爲めではない、今日警察へ行つた事は、たしかに全部の人々にも、ためになつた事がある、それを、どう して、撤回する事が出來樣——。

樓主會議

その夜おそく迄、親類筋の稻川樓と、望海樓、それから第一榮樓の主人が集まつて、何か密かに相談し合つてゐた。稻川樓の主人はなか〳〵のやり手で、交際上手、商賣上手であつたから警察の署長が替る每に招待し接待してゐた。

歌子は、下で、樓主達が相談し合つてゐる時、物干の誰も居ない處で、小波と新高とを誘つて來て今日の出來事を話した。けれど歌子は決して自分が勸めて手紙を警察へ出させたとは云はなかつた。

一寸何かこじらかしたら、どこまでも橫に出る小波は、亦、頼まれたり、相談を持ちかけて下手に出て行けば、何かと世話してやると云ふ質であつたから、今度の事も、歌子が話したので、大分かるたに同情してゐた。そして、まさかの時は、いつでも、どんな手傳ひでもすると云つた。

自分自身では逃げ出さうと云ふ氣は未だ少しも起つてゐなかつたが、「若し誰かそんな氣の人があつたら、いつでも、私の室の前は一番逃げいゝ處だから逃がしてあげるわ」とも云つた。

翌日一日かるたは警察からの電話を待つたが何の通知も呼出しもなかつた。歌子の室へは、主人の云ひつけで、小町が來て、遠まわしに、今度のかるたの問題を、あなたから、思ひ止まらせてくれと云ふ意味でくど〳〵と云つた、けれど歌子は、何も知らなかつたし何の話もきかないからと云ふ事で取り合はなかつた。他の娼妓にはなるべく秘密にしてあつた。

かるたは、もう心配でならなかつた、何かしら、惡い暗示でもあつた樣に思へて、二時の引けを待つて歌子の室へ入つてきた。

「あれ程堅い約束をしたのやから よもや次席さんは嘘はいやはらんやらうウナー歌子さん、あんたどうおもいやすか？」

「そうね、まさか嘘は云はないでせうよ警察の方ですもの、何か外に忙しい事件があつたかそれ共署長さんが居ないのかでせうよ」

「もう一日待つてみて、何の音沙汰もなかつたら、私行きまつさ、」

「それも好いけれど、昨夜遲く迄稻川樓や海望樓の主人が寄つて何か相談してゐた相ですからネー、」

それ丈けで、かるたは察しての み込むだらうと思つて、歌子は、意味ありそうに云つたのであつたが、解せない顔付で、目をパチパチさせてゐた。

それから亦三日目に、呼び出されたが、署長は、次席と大分違つた言葉で彼女を追ひかへした。もう一生懸命で、署長に頼んだが、空頼みであつた。けれど、頑强にかるたは、署から、樓主や、番頭に引きづり出されても榮樓へは歸らないと云つて、電車道まで來たが、そこには、いつの間に誰が連れて來たか、荒くれた暴漢が四五人かるたを取かこんでゐて、抱える樣にして、自動車に積まれて了つた。家へ歸つてからの木浦は元の木浦であつた、何んとなく、自信のある樣な底意地の惡さで呶鳴りちらした。然しかるたも、もう決して、オヅ〳〵してゐなかつたやけくそで、ふてくされてゐた。

二度も失敗して、二人共、なんとなく心細くなつたので、物干へ行つて、ユックリ、相談をやりなほそうと云つてあがつて行く時そこに、小波が、太郎兵衞と二人で髮を洗つてかはかしてゐた。人一倍髮の多い小波は夜おそくに洗つて、いつも物干へ上つて、干かしてゐた、おとなしく、人の惡口や無駄口を一つも云はなかつた太郎兵衞は、小波の云ふ通りになる女であつた。それでゐて、心はしッかりしてゐた。四人は、始め、色色と冗談口をきいてゐたが、いつか、かるたの身の上へ話がきてゐる

た。そしてかるたの二度の失敗に二人共同情した。

「初ちやんからきいたのやけど、稲川楼のおとうさんが、初ちやんの、伯父さんの處へ、聞きにきたんだつて、この問題でネ、初ちやんの伯父さんと云ふのは元、大須に廓があつた頃、大須の方の署長もやつた事のある人でなか〳〵腕のある署長だつたんだそうな、今は辭めて、酒屋かなんかしてゐるけど、」昨夜小波の所へきた初ちやんは、同じ廓の清川楼の一人息子であつた、小波とは七ツ年下であつたが、小波が好きで、いつも學校時代から小波の許へきてゐる客であつた。二度目の警察行きから、かるたの問題がそれとなく廓の楼主仲間には知れてゐたのと、初ちやんの伯父さんの許へ事情を話して、こんな場合はどんな方法を取る事が一番策を得た事であらうかとの相談を、持ちかけたので初ちやんは、よく事情を知つてゐたのであつた。同じ女郎屋をやつてゐたが、若いだけに、娼妓の方へ同情して初ちやんは小波にその話をしたのであつた。まだ部屋住の身で、小波を身受けする事は出來なかつたが、何とか小波に小づかひ等もやつてゐたので、小波は初ちやんをきらひではなかつたその初ちやんから聞かされた事を話したのであつた。

「そうでせう、何か曰くがありそうだと思ふワ、いくら次席の方と署長さんとは別の人だと云つても次席さんが大さう娼妓に同情してゐるのに署長さんが、全く同情しないつても、一日ちがひに、余り變つた態度では、そこに、何かゞ有りそうだわネ、」

歌子は自分獨り解つてゐる樣なそれでゐて、ハツキリとは云ひ現せない事を要領を得ない事を云つて自分獨承知してゐた。

「それで、今度、あんた、どうする氣や」

小波はかるたに尋ねた。かるたは少し考へてゐたらしかつたが、

「私も一たんこゝまでやつたんやから、どうしてもやるつもりだすから、笹島署はそんな風やさかいに、とうてい駄目やで、名古屋の本署へ行つて頼んでみまつさ」

と云つて、自分はもう決心してゐると云ふ風な態度を見せた。

「そうやナ、笹島署はもうあかんナー、そんなにあんたがされたのやつたら、さうや本署へ行つてみた方がエ、やらう」

四人はしばらく無言で、思ひ思ひの心でゐた。

二三日經つと小波は、二日程ゐつゞけの客で室へ引込んだ限であつた、夜になると藝者が入つたり、太郎兵衞に揚花をしたりして遊んでゐた。歌子は相變らず客がなかつた。寐苦しい眠られぬ儘に、國元の母へ手紙を書いたり友達や、大阪の客に手紙を書いてゐて、床に就いたのは三時すぎて四時に近い頃であつた。それでも、ウトウトと明け方から眠りに入つたと思つたが、すぐ仲居に起された。

「歌子さん〳〵、あんたかるたさんを知らんかナモ、」

土地の生れの青ぶくれのお竹がそう云つて少しあはて氣味で歌子の枕許へ入つてきた、ハツト思つたが、歌子は何氣ない聲で、

「知らないよ、人がようやく眠りかけてゐるのに……」

歌子は少し怒つた顔付で云つた

「そうきやあも、かるたさんが見えんので、旦那はんが探してりやあすのえ──も、」…

疑り深い目で歌子の顔をのぞきながら、しかたがないと云つたかつこうで立ちかけた。

「そう、下を探した？お湯は、便所は？では、髪結場は？」

「どこにもゐりやあせんが！」

その夜の當直は、お米、とお竹とであつたので二人が探し歩いたがやつぱり居ないと云つて歌子の室へ歸つてきた。

歌子は心の中で無事を祈つてゐた。時計は八時半を長針がさしてゐる。

「今頃何かかるたさんに用事でもあつたの」

「今、警察から電話で、かるたさんが、大川町の警察へ行つてゐやして大分ケガしてゐやあすそうナツて、それですぐ迎へにくる樣にと旦那はんに架つてきたんで、エライ旦那はん怒つてゐりあすわエも」

アー亦失敗したのぢやないか知ら──。

女の吸殼

―放浪記―

林芙美子



深湖紅子

七月×日
丘の上に松の木が一本
その松の木の下で
ぢつと空を見てゐた私です

眞蒼い空に老松の葉が
針のやうに光つてゐました
あゝ何と云ふ生きる事のむつかしさ
食べると云ふ事のむつかしさ

そこで私は
貧しい袂を胸にあはせて
古里に養はれてゐた頃の
あのなつかしい童心で
コトコト松の幹を叩いてみました。

この老松の詩をふつと思ひ出すと、とても淋しくて、黒づんだ緑の木立ちの間を、私は野良犬のやうに歩いた。

久さし振りに、私の胸にエプロンもない。お白粉もうすい。日午傘くるくる廻わしながら、私は古里を思ひ出し、丘のあの松の木を思ひ浮べた。

下宿にかへると、男の部屋には、大きな本箱がふへてゐた。女房をカフエーに働かして、自分はこんな本箱を買つてござる。いつものやうに貳拾圓ばかりの金は、原稿用紙の下に入れると、誰もゐないきやすさに、くつろいだ氣持ちで、押入れの汚れものを見てみる。

「あのお手紙でございます。」

女中が持つて來た手紙を見ると、六錢切手をはつた、かなり厚い女の封書。

私は妙に爪を噛みながら、只ならぬ淋しさに、胸がときめいてしまつた。私は自分を嘲笑しながら、押入れの隅に隱してあつた、かなり厚い、女の手紙の束をみつけ出した。

――やりぱり温泉がいゝわね、とか。

――あなたの紗和子より、とか。

――あの夜泊つてからの私は、とか。

私は歯の浮くやうな甘い手紙に震へながらつゝ立つてしまつた。

二人の間はかなり進んでゐるらしい。温泉行きの手紙では、私もお金を用意しますけど、貴女も少しつくつて下さい、と書いてあるのを見ると、私はその手紙を部屋中にばらまいてやつた。

原稿用紙の下にしいた貳拾圓の金を袂に入れると、涙をふりちぎつて外に出た。

あの男は、私に會ふたびに、お前は薄情だとか、雜誌にかく、詩や小説は、あんなに私を叩きつけたものばかりぢやなかつたか。

豚！

インバイ！

あらゆるのゝしりを男の筆の上に見た。

私は、肺病で狂人じみてゐる、その不幸な男の爲に、あのランタンの下で、「貴方一人に身も世も捨てた……」と、唄はなくちやあならないのだ。

夕暮れの涼しい風をうけて、若松町の通りを歩いてゐると、新宿のカフエーにかへる氣もしなかつた。

ヘエ！使ひ果して二分殘るか、ふつとこんな言葉が思ひ出された。

「貴方！私と一緒に温泉に行かない。」

私があんまり醉つぱらつたので、その夜時ちやんは淋しい瞳をして私を見てゐた。

七月×日

あゝ人生いたるところに西山ありだよ、男から侘びの手紙來る。

夜。

時ちやんのお母さん來る。五圓借す。

チウインガムを噛むより味氣ない世の中、何もかもが吸殻のやうになつてしまつた。

貯金でもして、久し振りにお母さんの顔でもみてこやうかしら。

私はコック場へ行くついでにウイスキーを盗んで呑んだ。

七月×日

魚屋のやうに淋しい寢ざめ。四人の女は、ドロドロに崩れた白い液體のやうに、一切を休めて眠つてゐる。私は枕元の煙草をくゆらしながら、投げ出された時ちやんの腕を見てゐた。

まだ十七で肌が桃色してゐた。

お母さんは雜色で氷屋をしてゐたが、お父つあんが病氣なので、二三日おきに時ちやんのところへ裏口から金を取りに來た。

カーテンもない青い空を映した窓ガラスを見てゐると、西洋支那御料理の赤い旗が、まるで私のやうに、ヘラヘラ風に膨らんでゐる。

カフエーに務めるやうになると、男に抱いてゐたイリウジヨンが
夢のやうに消へて、皆一山いくらに品がさがつてみへる。
別にもうあの男に稼いでやる必要もない故、久し振りに故里の汐
つぱい風を浴びやうかしら。あゝでも可哀想なあの人よ。

それはどろどろの街路であつた
こわれた自働車のやうに私はつゝ立つてゐる
今度こそ身賣りをして金をこしらへ
皆を喜こばせてやらうと
今朝はるばると幾十日目で又東京へ歸へつて來たのではないか

どこをさがしたつて買つてくれる人もないし
俺は活動を見て五十錢のうな丼を食べたらもう死んでもいゝと
云つた
今朝の男の言葉を思ひ出して
私はサンサンと涙をこぼしました

男は下宿だし
私が居れば宿料がかさむし
私は豚のやうに臭みをかぎながら
カフエーからカフエーを歩きまわつた

愛情とか肉親とか世間とか夫とか
腦のくさりかけた私には
縁遠いやうな氣がします

叫ぶ勇氣もない故
死にたいと思つてもその元氣もない
私の裾にまつはつてじやれてゐた小猫のオテクさんはどうした
らう・・・・
時計屋のかざり窓に私は女泥棒になつた目つきをしてみやうと
思ひました。
何とうはべばかりの人間がウヨウヨしてゐる事よ

肺病は馬の糞汁を呑むとなほるつて
辛い辛い男に呑ませるのは
心中つてどんなものだらう

金だ金だ
金は天下のまわりものだつて云ふけど
私は働いても働いてもまわつてこない

何とかキセキはあらはれないものか
何とかどうにか出來ないものか
私が働いてゐる金はどこへ逃げて行くのか

そして結局は薄情者になり
ボロカス女になり
死ぬまでカフエーだの女中だの女工だのボロカス女になり
私は働き死にしなければならないのか!

病にひがんだ男は
お前は赤い豚だと云ひます
芙美子さんの腸を見せてやりたい。
胸くその悪るい男や女の前に
矢でも鐵砲でも飛んでこい

かつて、貴方があんまり私を邪慳にするので、私はこんな詩を雜誌にかいて貴方にむくいた事がある。

浮いた稼ぎなので、焦々してゐるのだと善意にカイシヤクしてゐた大馬鹿者の私です。

そうだ、歸へれる位はあるのだから、汽車に乘つてみやうかな。

あの快速船のしぶきもいゝぢやないか、人參燈臺の朱色や、青い海、ツ、ンツンだ。

夜汽車、夜汽車、誰も見送りのない私は、スイッとお葬式のやうな悲しさで、何度も不幸な目に逢て乘る東海道線に身をまかせた。

七月×日

「神戸にでも降りてみやうかしら、何か面白い仕事が轉がつてやしないかな……。」

明石行きの三等車は、神戸で降りてしまふ人達ばかりだつた。

私もバスケットを降ろしたり、食べ殘りのお辨當を大切にしまつたりして、何だか氣がかりな氣持ちで神戸驛に降りてしまつた。

「これで又仕事がなくて食へなきあ、ヒンケマンぢやないか、汚れた世界の罪だよ。」

暑い陽ざしだ。

だが私には、アイスクリームも、氷も用はない。ホームでさつぱりと顔を洗ふと、生ぬるい水を腹いつぱい呑んで、黄ろい汚れた鏡に、みずひき草のやうに淋しい姿を寫して見た。

さあ矢でも鐵砲でも飛んでこいだ。

別に當もない私は、途中下車の切符を大事にしまふと、楠公さんの方へブラブラ歩いてゐた。

古ぼけたバスケット。
靜脈の折れた日傘。
煙草の吸殼よりも味氣ない女。
私の戰鬪準備はたつたこれだけでござります。

砂ほこりの楠公さんの境内は、おきまりの鳩と繪ハガキ屋。

私は水の枯れた六角の噴水の石に腰を降ろして、日傘で風を呼びながら、汐つぱい青い空を見た。あんまりお天陽樣が強いので、何もかもむき出しにぐんにやりしてゐる。

何年昔になるだらう——

十五位の時だつたかしら、私はトルコ人の樂器屋に奉公してゐたのを思ひ出した。

ニイーナといふ二ツになる女の子の守りで、黑いゴム輪の腰高な乳母車に、よく乘つけてメリケン波止場の方を歩いたものだつた。

クク…クク…鳩が足元近かく寄つて來る。

人生鳩に生れるべし。

私は、東京の男の事を思ひ出して、涙があふれた。

一生たつたとて、私が何千圓、何百圓、何拾圓、たつた一人のお母さんに送つてあげる事が出來るだらうか、私を可愛がつて下さる行商してお母さんを養つてゐる氣の毒なお義父さんを慰さめてあげる事が出來るだらうか！何も滿足に出來ない女、男に放浪し職業に放浪する私、あゝ全く頭が痛くなる話だ。

「もし、あんたはん！暑うおまつしやろ、こつちやいおはいりな……。」

噴水の横の鳩の豆を賣るお婆さんが、豚小屋のやうな店から聲をかけてくれた。

私は人なつゝこい笑顔で、お婆さんの親切に報いるべく、頭のつかへそうな、アンペラ張りの店へはいつて行つた。

文字通り、それは小屋で、バスケットに腰をかけると、豆くさいけれど、それでも涼しかつた。

ふやけた大豆が石油鑵の中につけてあつた。

ガラスの蓋をした二ツの箱には、おみくじや、固い昆布がはいつてゐて、いつぱいほこりをかぶつてゐた。

「お婆さん、その豆一皿ください。」

五錢の白銅を置くと、しなびた手でお婆さんは私の手をはらつた。

「ぜゞなぞほつとき。」

此お婆さんにいくつですと聞くと、七十六だと云つた。

虫の食つたおヒナ様のやうにしほらしい。

「東京はもう地震はなほりましたかいな。」

齒のないお婆さんはきんちやくをしぼつたやうな口をして、優さしい表情をする。

「お婆さんお上り。」

私がバスケットから、お辨當を出すと、お婆さんはニコニコして、玉子燒きを口にふくらます。

「お婆あはん、暑うおまんなあ。」

お婆さんの友達らしく、腰のしやんとしたみすぼらしい老婆が、店の前にしやがむと、

「お婆あはん、何ぞえゝ、仕事ありまへんやろかな、でもな、あんまりぶらぶらしてますよつて、會長はんも、えゝ顔しやはらへんのでなあ、なんぞ思ふてまんねえ…。」

「そうやなあ、榮町の宿屋はんやけど、蒲團の洗濯があるいふてましたけんど、なぼんう…廿錢も出すやろか…。」

「そりやえゝなあ、二枚洗らうてもわて食へますがな…。」

こだはりのない二人のお婆さんを見てゐると、こんなところにもこんな世界があるのかと、淋しくなつた。

たうとう夜になつてしまつた。

港の灯のつきそめる頃は、眞實そゞろ心になつてしまふ。でも朝から、汗をふくんでゐる着物の私は、ワッと泣たい程切なかつた。

これでもへこたれないか！これでもか！何かゞ頭をおさへてゐるやうで、私はまだまだ、と口につぶやきながら、當もなく街をひら

つて歩いてゐると、バスケツト姿が、オイチニイの藥屋よりもはかなく思へた。

お婆さんに聞いた商人宿はぢきわかつた。

全く國へ歸つても仕樣のない私なのだ、お婆さんが、御飯焚きならあると云つたけれど、――

海岸通りに出ると、チッチッと舌を鳴らして行く船員の群が多かつた。

船乘りは意氣で勇ましくていゝなあ――

私は商人宿とかいてある行燈をみつけると、ジンと耳を熱くしながら、宿代を聞きにはいつた。

親切さうなお上さんが、帳場にゐて、泊りだけなら六十錢でいゝと、旅心をいたわるやうに「おあがりやす」と云つてくれた。

三疊の壁の青いのが、變に淋しかつたが、朝からの浴衣を着物にきかへると、宿のお上さんに敎はつて、近所の錢湯に行つた。

旅と云ふものはおそろしいやうで、肩のはらないもの。

女達は、まるで蓮の花のやうに小さい湯舟を圍んで、珍らしい言葉でしやべつてゐる。

旅の錢湯にはいつて、元氣な顏をしてゐるが、あの青い壁に押されて寢る今夜の夢を思ふと、私はふつと悲しくなつた。

七月×日

坊さん簪買ふたと云うた・・・

窓の下を人夫達が土佐節を唄ひながら通つて行く。

ランマンと吹く風に、波のやうに蚊屋が吹きあげて、まことに樂しみな朝の寢ざめ、鄕愁をおびた土佐節を聞いてゐると、高松のあの港が戀ひしくなつた。

私の思ひ出に何の汚れもない四國の古里、やつぱり歸へらうかなあ・・・御飯焚きになつてみたとこで仕用がないし・・・。

オイ馬鹿！

メス！

赤豚！

別れて來た男のバリゾウゴンを、私は唄のやうに天井に投げとばして、バットを深々と吸つた。

「オーイ、オーイ」船員達が呼びあつてゐる。

私は宿のお上さんに賴んで、岡山行きの途中下車の切符を、除虫菊の仲買の人に壹圓で買つてもらふと、私は兵庫から、高松行きの船に乘る事にした。

元氣を出して、どんな場合にでも、へこたれてはならない。

小さな店屋で、瓦煎餅を一箱買ふと、私は古ぼけた、兵庫の船宿で、高松行きの三等切符をかつた。やつぱり國へかへりませう。

透徹した青空に、お母さんの情熱が一本の電線となつて、早く歸つておいでと呼んでゐる。

不幸な娘でございます。

汚れたハンカチーフに、氷のカチ割りを包んで、私は頰に押し當てた。子供らしく子供らしく、すべては天心ランマンと世間を渡りませう。



長流記（その十一）

山田邦子

結婚後の一二年は、佐千子の一生のうちで一度あつただけとも言ふべき女らしいやさしい心とその甘さにすごして居た年と言つてよい。それはおそらく平凡な、甘い結婚物語にすぎないからこゝに書く事は省く事にする。唯佐千子は其後いろいろな家庭生活の難所に遭遇してそれらの日を思ひ出す時、我ながら由井氏とさうした甘い一年でも二年でもの年月がすごされた事が不思議でならないのである。

さうした一二年程の間に佐千子たちは谷町の家を赤坂に引移つて、そこで佐千子は女の兒の母親となつた。子供の名を伊津子とつけた。そこまで由井氏と佐千子の夫婦生活は隔てのない、ぴつたりと相寄つた生活であつた。

「今日ね、のどが渇いてサイダがのみたくて買つて來てのみましたの」

さういふ小さなお金の出入まで、佐千子はちゃんと由井氏に話した。知らん顔して百圓もお金を動かしてしまふ事のある後年佐千子は此若き妻の日を思ひ出して我ながらそのしほらしい妻であつた日を思はずには居られなかつた。

子供を生んでからの佐千子は短かかつた妻の生活から自然に引はなされて母の生活にはゐつて行つた。ひたすらに夫にすがり、夫のなかに沒頭してゐた心は、いつか自分の頼る心、從ふ心、甘える心を失つて、獨立した母の心にならうとしてゐた。乳くさい自分の懐に、子供を抱いて授乳してゐる時のはりつめた氣持は昨日のやうな甘えた言葉を夫に向つて言ふ氣持をのりこえてしまつてゐる…そ

の頃から家の空氣は荒みはじめたのであつた。

夏の或る夜、佐千子は寢つきのわるい伊津子を神經質に、物音一つさせないやうにして一生懸命寢かしつけてゐた…と門の戸があいて誰れか音なふ聲がする。…由井氏はそつと起きて玄關に出て行つた…丁度女中は錢湯に行つてゐた…。

「オイ、新木さんだよ」

玄關で何か話してゐた由井氏は引かへしてまた蚊帳の外から聲をかけた。それは佐千子の女友であつたが、滅多に佐千子の處へなど遊びに來ない、お互にさう好きでもない人であつたから佐千子は心で迷惑に思つた。折角眠りかけた子供を起こしてしまつては、又一二時間寐つかないだらうし、さうするとまだおしめは丸きりたゝまないでゐる。讀みたい本もあるさういふ事を思つて早速には立ち上れないでぐづ〳〵伊津子をたゝいてゐた。

「オイ、お客樣じやないか」

「わかつてゐます」

寐入りかけた子供がビクリと目をあいてしまつたのに佐千子はカンシヤクを起してやけに言葉を返してしまつた…と由井氏は突入するやうに蚊帳なかに這入つて來ていきなり佐千子をウンと力まかせになぐりつけた…さうして二人は一時に千里も飛びはなれたやうな形でにらみ合ひになつたのであつた。…これがそも〳〵佐千子が由井氏になぐられたはじめであつて、同時に物心ついて人に打たれた初めでもあつた…。佐千子は其晩の光景をいつまでも忘れなかつた。由井氏の心を狂暴にしたのは、單に佐千子のカンシヤク聲の返事そのものではなかつたのだ、其頃の佐千子が由井氏には不足であつた。佐千子には又由井氏が一寸荷厄介であつた。そこの不平均が小さい處から爆發したやうなものであつた…。

赤坂から郊外の代々木へ引こして來たのは子供が弱い爲であつた代々木にはお慶さんが病氣がちの川端さんを連れてもうその時は移つて來てゐた。佐千子たちはお慶さんとは道一つ隔てた阪の入口の靜かな古い原に移つて來たのであつた。

代々木の家に移つてからは烈しい喧嘩は時々はじまつた。原因をつきとめてゆけば一體何だつたろうと考へねば分らぬやうな些細な事から始まつても互に烈しい氣性を持ち合つて、家庭や社會で苦勞して來た二人は互にひどく强情でどうかすると一週間も口をきかない事があつた。互に心では不自由で、喧嘩にあき〳〵してゐても一方が少しゆづれば一方ではつけあがつてゐるので喧嘩はずゐぶん長引いて互に强情の秘術をつくすやうになつた。佐千子はよく子供をおいて外を出歩いた或る時も佐千子が出歩いて歸つて來て見ると由井氏は大きい柳行李を取りだしてそれにせつせと座敷の道具を片付けてはつめて居る、もう床の間の抽物も卷いて行李のなかに有つた

「どうしたんです。」

佐千子は眞から狼狽して由井氏の前へ座つた。

「どうせ下宿住居をしてゐると同じやうな家ならおれは下宿へ移る‥‥」

由井氏は一層勇氣づいたやうにあたりのものを其大きな行李につめはじめた。佐千子は其由井氏の袖にすがつて泣きながら詫びた。

或る時は佐千子の方がさつさと支度をして行く氣になつた。簞笥の鍵を一つ〳〵かけて

「ではいろいろの鍵はこゝにありますから‥‥道具は後からとりによこしますから‥‥」

さう言つて思ひ切つたやうに佐千子は玄關の方に歩き出した。

「オイ‥‥待て」

それまでだまつて怒つた顏をしてゐた由井氏は起きて來て佐千子の袖をとらへた。

「おれにはまだ未練があるんだ」

さすがの由井氏がさう口を切つた時もあつた。

又或る時は橫濱に居る由井氏の姉さんに伊津子をあづけて二人は別れる相談をした。大きなトランクが持ち出されて美しい友禪の着物やちやん〳〵の類は座敷の隅につみ上げられた。子供の着物は片言を言ふやうな小さい袖をはみ出させたり愛らしい付紐をのばしたりして無邪氣に美しく活き〳〵と座敷のすみにあつた。佐千子はそれを見たばかりで、張りつめた心も一時にバタリとくぢけて、子供と別れて何の自由、何の幸福があろう‥‥とさめ〴〵と泣いてしまつた。

「出て行き度い、自由な天地に‥‥けれどもこれをどうしやう‥」

その泣き聲にはかうした心の訴へがあつた。

佐千子を可愛がつて親がはりになつてゐる松田の小父さんといふ親戚の小父さんが上京してゐる時もとう〳〵二人は其小父さんを旅館から二人の家に連れて來て別離の話を持ち出した。若勞人の其叔父さんはてんで二人の話を笑つてゐるかのやうで二人が肩をはつて各々の不平を並べてゐるのを煙草を吸ひながら聞いてゐた。

「あなたがたはね、樂すぎてそんな事を考へ出すのサ、由井さん貴方も少し大人氣ない、家を出て子供をあづけてどこに行かうと言ふんです。」

「僕はもう日本もいやだからアメリカあたりへ行つてしまはふと思ひます」

「かくして居ても惚れ切つてゐますね」

此小父さんの高飛車には由井氏も恐れ入つてしまつた。佐千子は六疊の方で小父さんに出すお酒の用意をしてゐたが長火鉢の前に座つてお銚子の燗をつけてゐると、もう喧嘩にもつくづく飽きてしまつて、此まゝどこに行き度いとも思はなくなつて來た。そこへ由井氏が何か用事に這入つて來た、

「一寸‥‥」

佐千子は急いで立ち上つて由井氏の胸をつかんだ。

「私の事をごめんなさい」
佐千子は早口に言つてしまつた。由井氏は急に笑ひ出して、
「あのトランクをさげてトットと行けよ」
一人はさすがに小父さんの手前醉をしのんで笑つてゐた。そこで二人の喧嘩はすんでしまつた。小父さんはおみやげに好物の筍をさげさせられてニコ／＼夜行の汽車に乘つた。

かうした喧嘩はさいげんもなく續いた。後で思ひ出しても何が原因でさういふ喧嘩になつたのかは皆んな忘れてしまふのだが、二人の性格が烈しいだけに喧嘩になると家のなかは暗憺として荒みはてたさうしたなかに不きりやうな伊津子は怜悧に可憐に成長していつた。

佐千子の不平は由井氏が藝術に憧憬のない事に歸因する事が多く由井氏の怒りけ佐千子が家庭婦人でない處にあつた。然しそれはもう結婚前に二人充分にたしかめ合つてそれでもなんでも相寄つた夫婦であつた、それを二人は忘れてゐた…否考へてゐても目の前に事件が起つて來ると今更二人は各自に失望した。それが喧嘩のいつも根本であつた。

由井氏はそれまでずゐぶん女遊びもしたけれど血緣の外は素人の女に知人を持つて居ないらしかつた。自然冗談を言ふ時など堅氣の家に育つた女、殊に學生々活をし本をよむ近代の女などは一言きいたゞけで汗が出る程野卑な言葉を時に用つて冗談を言ひかけたり、ひどい皮肉や駄じやれを言つて佐千子のやうな當時の文學熱を持つて眞劍に一方を見つめたきりゆうづうのきかぬやうな女性の心に押して來た、由井氏の笑ふ事はさうした時代の佐千子にはムッとして口のきかれない事が多かつた。佐千子の心の愛情が柔かく美しく湧き出でやうとする心を此冗談や皮肉や駄じやれが、さうした粗野な氣分が一たまりもなくひしいでしまふ。と言つて佐千子の方には又其立居ふるまひ、家庭の取まかないのやうな事に、ほんとに從順でない、女らしくない處があつて、唯本をよんだり物を書いたりさういふ事にのみ熱中してゐる。それが内井氏を嘆息させた。

その頃は白樺派の運動が盛んだつた頃で、ロダン、ゴッホ、ゴーガンなどの漸く紹介されはじめた頃だつたが其展覽會を見に行つた若い藝術家たちは、實に得がたい興奮に心を動かせられた。

お慶さんの家では川端さんがお金を友達から借りてロダンの「考へる人」の繪(木版)を買つて來て床の間にかけた。佐千子は心でそれを羨んで、同じやうな繪の小さい額を座敷のかべにかけておくと社から歸つた由井氏は
「こんな裸かつぽよせ／＼」
かう言つて一も二もなく額をはづして片付けてしまつた。佐千子の燃えるやうな新しい藝術に對するあこがれは無慘におしつぶされて熱情的な佐千子の心が一時にまつくらになつてしまふ…かういふやうな事であつた。…佐千子の心は何ともしれないすきが出來

て來た。そしてその心のすきに何物か絶えず動くあやしい欲求があらはれて來た。

お慶さんの家では家で又別な倦怠の危機に立つてゐた。川端さんが極端に病氣に神經を病んで少ない收入のうちからずゐぶん多い金高をツベルクリンの注射に拂つてしまつたり、さうかと思へばお慶さんの小說ばかり賣れるので川端さんが不快であつたりデリケートな藝術家同志の夫婦生活のなやみがやつて來てゐた。そこで二人は――お慶さんと佐千子は連れだつて一時の明るさを追ふやうに外出する事が多くなつていつた。川端さんもそれを喜んで居なかつた。

「お慶さん！」

或る日も佐千子はさう言つてお慶さんの家の門をあけて行つた。お慶さんは井戸ばたで下駄の泥を洗つてゐた。

「神樂坂を步いてみない‥‥牛込館に椿姫が來てゐるから見ませうよ」

お慶さんはニヤ〳〵として下駄の泥を洗つてゐたが

「あゝ、やつぱり行くかな‥‥私ね、もうしばらく出まいと思つて昨日は一日友達の處を廻り步いて今日はかうして下駄の泥を洗つてゐたの‥‥」

自らを嘆息するやうに言つてお慶さんはぬれ手をふいて家にはいつてゐつた。川端氏は顏を見せなかつた。

たま〳〵家に居る日でも一日のうちには幾度となく下のお慶さんの家に佐千子が行つたり、上の佐千子の家にお慶さんがやつて來たりして外から尋ねて來る人はもうみんな心得て、家に居なければどちらかの家に尋ねて來るやうになつた「今日はお上屋敷ですか」とか「今日はお下屋敷ですか」とか時々はかう言つて二人をからかふ人もあつた。‥‥藝術家でない由井氏を入れて兩家四人で遊ぶ時分は、勝負事より外に一緒になれる事はなかつた、はじめ川端さんの持つてゐたドミノの勝負を四人でしてなじみの薄かつた川端氏と由井氏が心安くなつて來てから後にはトランプとなりつひに花がるたにまで移つていつた。碁石を數にしてピカ一だのミクだのといふやくの名を佐千子もお慶さんも敎へられておぼえはじめたらば面白くなつて每晚々々十二時から一時まで遊び暮してしまふ事が多く、たはひもない日がすぎて行つた‥‥それをめい〳〵の心はみんな悲しんで居た、由井氏は、明日の仕事が勞れる事に於て、外の三人は勉强も出來なく無駄な時をすごす事に於て‥‥しかも四人顏を合せると必ず「やりませう」と誰れかたのしさうに聲をかける。そして一同は異議なく贊成してしまふのであつた。それを誰れの罪とも言へなかつた、誰れの爲にとも言はれなかつた。四人よればさうなつてゆく‥‥さういふものがそこに動いて來た。此ぐうたら氣分のなかにやがて水木氏がまぢつて來た事によつて、空氣は一層遊蕩的に流れていつた。――がそれも後で思へば誰れのおかげで――と言ふ言葉では言ひ盡せない自然のなりゆきであつたのである。



紫陽花

草野明子

わが邦子ひとり手を拍ち歌うたひながめてゐたりあぢさゐの花

幼兒が見よと指さす方みれば庭の隅邊に玉のあぢさゐ

雷雨(らいう)すぎし狹庭(さには)の隅の夕闇に浮き立ち咲けるあぢさゐの花

庭の木の芽ぶき明るきこの夕べあまり淋しきわれと思へり

遠雷(とほいかづち)をりをり光る深曇り雨をはらみて夜に入りにけり

一面の松葉牡丹は花とぢて夕かげり來(こ)し庭の涼しさ

年古りて黒光りせる大き家戸をあけ放ちひつそりとせり

あけはなつ大き座敷の奥庭に咲きかがやける丹つつじの花

滿庭のつつじの花の眞盛(まさか)りや座敷に及ぶその朱(あか)き光(ひかり)



この頃思ふこと

鷹野つぎ

等しく社會思想に覺醒された女性の作品のなかでも、種々の立場の相違から、激しく或ひは寂しく、または朗らかにまたは苦しく、色々に表現される。一見して甚だしいのは相反した觀點に立つ者のやうにすら、その立場の相違によつては、正睹逆睹して、蹠立する如くさへ見える。しかし同じ社會觀に到達した以上、何等か共通に進出してゐる點はあるべきで、私は此の點を近時の女性作品に、思ひのほか望みえないのを不思議に思つてゐる。

女性の傑れた作品に接する毎に、多士濟々と云つた感じはある。が、同時に社會觀に立つ作家の中でも、極めて限られた特殊の作家の活躍のみに偏してゐるのは、時代の表識上當然としても、多少寂しい感じを持たせられずにはゐない。たとへば近時の若い女性たちの生活態度の覺醒には目覺ましいものがある。少しでも在來の因習的羈絆から脫して、合理的に生きて行かうとする意企の旺んなのは何んと云つても歡びに堪えない動向であるが、しかし此の傾向が多くの女性を驅つて、只管金錢勞働を力とするやうに見え、且女性進出の道が、その一途に集中してゐるかに見えるのは（無論その女性たち當事者にとつては必然的過程ではあるが）一般女性に見て、不可能な感がないでもない。

此處では私は論議をもち出すつもりではないからむづかしい省察はしないが、經濟觀に立つ女性の環狀關係は、世を擧げて激變しつゝあるものと思ふ。たゞ現今でも生産的仕事に携はつてゐる婦人と、消費的仕事にたづさはつてゐる婦人との差別は、明らかに存在してゐる。たとへば多くの職業婦人、勞働婦人等が、賃銀報酬によつて生活してゐるに反して、一般家庭婦人——育兒、家事等に携つてゐる婦人は、その職分上止むなく消費的生活を送る事を餘儀なくされてゐる。

しかし嚴密に云へば消費生活と云つても、究極の目的は育兒、家事等みな生産職務のそれであつて、たゞ此の二分類にしてみても、表面上の單なる樣式別に過ぎない。

だが今日の女性の作品に表現されて、力あるものと見做されてゐ

るのは、事實は證驗行動の本質的女性觀に（男性と識別される成育過程に）立脚しないものが多くはないかと思つたりする。時代の歩みは或ひはこのやうな說を迂遠ともし、弛緩したものとも笑殺するかもしれない。しかし現今の女性は、しつかり足を地につけてその目標に志す餘裕すら與へられてゐない、と云ふ方が眞相ではないだらうか。女性の作品に見る力あるものほど、此の種の焦燥と亂舞的凱歌の聲のあるのは否定されない。ほんとに正義感を把持する女性の行く道は此の一途しか許されてゐないとすれば、それまでである。私はむしろ悲愴な時代の病弊にも直面する氣がする。そしてそれ故にこそそれらの作品の氣魄、勇敢、魅力には價値を認めずにはゐられないのである。

これと共に亦私に云はしむれば、實行突端に立つ能はない女性でも、思ふに一端は立場の相違から、事實は想像に過ぐる時代的影響をもつた女性のある事を思ふに難くない。前者が主に社會生活に進出した報酬勞働婦人に見るものでありとすれば、此の後者に匹敵するものは、實に消費系の家庭婦人及び母性生活に從事するもの等でなければならない。

しかも時代の經濟觀から見る時は、これらの女性には、前者にも後者にも一般的過激な波浪は押し寄せてゐるのである。前者が進んで勇敢なる樣式を採つてゐるに反して、既に與へられた使命の前に別途の樣式についてゐるものが、時代に無覺醒なもの或ひは追隨者としての位置しか分擔しえないと云ふやうには、考へられないのである。否、ある場合それらの女性に社會觀の覺醒がはげしければはげしい程、そこに何らか女性生活に對する大なる矛盾が想起せしめられずにはゐないのである。私には二重の時代的惱みであると思ふ。

これらの眞相が女性の作品に、比較的かげを潛めてゐるのは何故であらうか。思ふに理由は明瞭であると思ふ。彼女らが實行的であるよりも內潛的であること、動的であるよりも靜的であること、しかして時代の急速な表識テンポは、鮮やかな響音によらなければ、事實は一要素たる音響をも、恰もかき消すやうに見えるが爲めである。

だが、私は怖れずに時代の覺醒に立つ女性はたとへ、華々しい行動的な立場にある者ではなくても、進んで眞の表現に努力すべき時だと思ふ。

新刊紹介

侯爵の服 ——深尾須磨子氏著——
改造社・定價貳圓

著者が滯佛三年の家づとの一つであるこの「侯爵の服」の美しさよ、私は初夏のあしたにこの新著をうけて、爽やかな眼ざめを小鳥のやうに欣んだ。瀟洒たる裝幀はその著者の新清、爽颯たる風姿のごとく未だ一行をも繙かざるに、湧出る清泉のごときさはやかさとうるおひとを感じさせる。私はこの幾日を樂しい讀ものをもつことに豐富な感じをうける。「柊の葉」は、いつぞやの冬、非常に愛讀した著者の通信である。私のこんな不文の紹介ではあるが、幸に一本を求められる方もあらば、私の讚美はまだ盡してゐないといふことを知られるであらう。

（時　雨）

勞働祭の日

そぼ降る雨の中をメーデーの歌が響きわたる。行列は丁度日比谷から大手町を經て、越中島へ進行しつゝある。メーデーの此の催しがプロレタリア運動上に大して重要視されて居ないかもしれないが、此の樣な偉大な存在があると云ふ事を世に示す爲に丈でも大きな效果があるだらう。赤旗の流れはひらめきつつ力強くおし流れてゆく。元氣に滿ちた人々の列は蜿蜒として盡きない。私達の歩みもいつか彼等に一致して居たのを知つてほゝゑんだ。

赤き旗おしたてて進めはらからよ
民衆の力とみに示しつゝ（優子）

日比谷へ行つたのは一時頃であつた。メイデーの青白い工場の顏がもう半ばまで進んでゐた。時折の雨に女の一團は色取々のメリンスの風呂敷やハンカチを冠つて勞働歌を歌ひながら行くのが赤い小旗の間に交つて和やかな氣分を出してゐた。帝劇の前には七八人の正服巡査が腕組みしながら手持ち無沙汰に行列を見送つてゐる『御苦勞樣』にと言ひ度かつた。東京會館の前に仕事著のまゝのボーイやコンクリート建築場の足場の上に手を休めて覗いてゐる土工の群に列から送る萬歳の聲

日本橋 —3—

時雨

源泉小學校は大傳馬町の裏にあつて、格子戸がはまつた普通の家造りで、上つて玄關、横に二階をもつた座敷と臺所。たぶん臺所と並んだ玄關の奥へ教場の平屋を建てましたのであらう。玄關の横の八疊には通りにむかつて窓があつた。ここの疊へ座る人種は我々と違つてゐた。特別の机が配置してあつて、手焙りが冬は各自についてゐる。窓の下のところには、紙だとうに針山もおいてあつた。

お午近くなると女中さんや小僧さんがお供をして、この八疊間の御門弟たちがやつてくる。お孃さんたちは、芝居の八百屋お七や油屋お染だと思へばまあ間違ひはない、御大層なのは友禪の座ぶとんを抱へさせてくる。お手習だけしてゐるのもあれば、讀ものをしにくるのもある。お針仕事をしにくるのもある。息子さん連もまじつてゐたやうだが、子供心にも、そんな青い、ウヂヨ〳〵してゐた男の子は輕蔑したからよく覺えてゐない。

校長秋山先生は、臺所口の一枚の障子のきはに納まつて、屛風をたて、机をおき——机の上に孔雀の羽根が一本突立つてゐた。火鉢に鐵子の湯をたぎらせお茶盆をひきよせて、出來上つた人の格好を示してた。山茶花の咲く冬のはじめごろなど、その室の炭の匂ひが漂つて、淡い日が蘭の鉢植にさして、白い障子に翼の弱い蚊がブンブンいつてゐるのを聞

に彼等は何の感動も起らない様に顔の筋一つ動かさない。

十字路では交通巡査の呼子によつて句切られてゐた一團がゲートル巻の巡査を前に四縦列を守りながらしつかり腕を取つて一齊にワイショ〳〵とかけて行く。

人道にゐる私達にもその行列の聲が覆さつて來て立留まつてゐられない衝動をうけて越中島へ行くの行かないのと言つてゐたが社へ歸る用事があるので最後の列の白旗を見送つて別れた。（その子）

聞け萬國の勞働者…：頭から手拭や風呂敷を被つた女の人達がハンカチを振りながら聲高らかに叫ひ合せる。私は思はずこみ上げて泣き笑ひの様になる顔を傘の蔭で紛らした。

ビルディング作業場の足場の上から隙いてゐる法被のお仲間に向つて、赤旗の一隊から喚聲の御挨拶が上る。無表情なお巡りさんの眼だけがぢろり。壕端の木の下で、前を行く行列に熱心に帽子をふつてゐる紳士がある。

――入り度いわ、中途から飛び込めないのが殘念ね――同行Aの言葉。

――日本のメーデーも整然として來たものだとつく〴〵思ふ事よ――十年前、第一回の行列に參加したといふN。

雨にぬれた舗道の上を學生服の三人五人、鳥打帽にレインコート、たま〳〵私たちのや

きながら、お清書の直しに朱墨の赤丸が先生の手でつけられてゆくのを見てゐると、屛風の繪の寒山拾得とおんなじやうな息吹をしてゐるやうに、子供心にも老人の無爲の樂境を意識せずに感じてゐた。

さて教場の方は？　これは區役所の控所とも、授産場とも、葬儀場ともいへる。後には六人一並びぐらゐの板張り机になつたが、各自寺小屋式の机を持つてゐたころ、あたしが一年生時分は、放り出しておく幼稚園といつてよかつた。しかし別段庭も空地もないので机場におさまつて遊んでゐるのだが――まづ硯箱からおもちや箱にして轉化させて、水入器にお花をさす。硯箱一ぱいに千代紙をしいて、硝子を――ガラス屋がさうはなかつたから、機械の龜の子や其他の玩具の箱の蓋を集めて具合よく敷きこんで、金、銀の丈長や、金銀をあしらつた赤や綠の巾廣の丈長を、種々の透しを切り込んで屛風をこしらへて、姐さまを飾りはじめる。姐様は、半紙で小さな坊主つくりを作つて、千代紙の着物をきせることもあるが、多くは、繪双紙店で賣つてゐるのを切りぬく。自分ひとりではつまらないが、向側も隣席もみんなしてするのだから面白い。さて、このアンポンタンがどんななりをしてゐたかといふと、黑毛繻子がはやりだした時分なので、加賀紋（赤や、靑や、金の色絲で縫つた紋）をつけた赤い裏の羽織、黑羅紗のマントル（赤裏）を着て、下駄は鈴のはいつたポックリだ。

學校と露路を間にして、これも元祿年間に建つた表町通りの紙店の荷藏がある。その裏の何かを取りはらつて空地が出來た時、どんなに兒童たちはよろこんだかしれない。向ふの方に靑い樹が五六本、教室の窓の竹格子にむかつて柘榴の花がまつかだつた。兩側が土藏と土藏で、突當りが塀で他の庭木がこんもりしてゐた。

子供たちは鬼ごつこで無中になつたが、なかで一番大童なのが校長秋山先生だつた。先



うな女の群、赤い組合旗をひるがへした本場の行列と反對側を行く一列の非公式行列、區切り〳〵にお巡りさんがゐな、だけの話。――堀江さん〳〵――男の人の間に、殆んど引づられるやうに馳け拔けて行く堀江さんが見つかつた。生田さんも、永島さんもゐる筈だと思ふのだが――（M）

生は運動場をもつたことと、子供たちが悦ぶのとで欣びが二倍であつたと見える。お附合ひで困つたのが通ひの先生だつた。この通ひの先生は――初め來たのは若い人で、この商業町に、といふより其頃はまだ法律家などは珍らしかつたものと見えて、私がさういふ家の子だと知ると、特別にあつかひはしなかつたが、少し待つてお出といつて、家の角まで送つて來てくれた。何か家のことでも聞いたりしたのかも知れないが覺えてゐない。ある日秋山先生が訪ねてきて、父と長く咄してゐたが、それは私を送つてくれる先生が書生にしてくれといつたのだとあとで聞いた。

その次に來た先生が、鬼ごつこで恐縮してゐた人で、このおとなしい先生を子供たちまでが、校長と一緒になつて氣持ちでさいなんだ。士族上りの先生は弱げで、細い鼻のさきが、いつも冷たさうに赤ばんで、水鼻がうるんでゐた。色白の女のやうに色の白い人で、お能役者のやうな摺足で歩いて、小倉の袴を引きずり、さほど年もとつてゐないのに背中を丸くしてゐた。よほど困窮してゐたと見えて、初めての日の中食に、竹の皮へ包んできた握飯と梅干をつまんで食べたので侮つてしまつたのだつた。千住から歩いて來るので、朝早くから出るのに、雨が降ると草鞋を穿いてゐた。秋山先生の弟子煩惱は大變なもので、ある折、市の聯合の大運動會が、櫻の盛りの上野公園で催された。小さいながら代用學校と認められて參加を許されたのだから、先生は宇頂天なほど悦んで、一層空地の鬼ごつこや旗とりが奬勵された。その日は區內の細かい學校が一かたまりになつて、大きな公立小學校に對抗するので、源泉學校と染めた旗も出來上つた。女の子は赤い緒の草履、男の子は白い緒の草履、お辨當はみんな揃へてお壽司の折詰を學校からあつらへ、お菓子や飮料のことまで世話人を定めたところが、あいにく其日は朝から曇つて、八時ごろには地雨になつてしまつた。無論子供たちも落膽して泣いたが、附添ひや何かに慰められて歸ら

第十回メーデー參加記

今年こそはメーデーの廣場の中に入りたい、出來れば行列にも參加したい、私の希望は、この無產團體の大コースの中に、無產婦人大示威を支持したいのだつた。そして私がどうして〳〵有產婦人であらう！私は月曜會の歸りの夜、畏友平林たい子女史にこの事をうちあけ、其次に親しき長い間の友人なる前田河廣一郞夫人咲子氏にも話し、若き友・伊福部敬子女史にも語りして・この三女史よりの十分なる配慮の中で、ブジ、滿足に、私の所期はとげられたのである。多謝！この日の火のやうな洮汗の感覺は一生涯、私の脊すぢを洗ふであらう。

七時までに來なくては會場に入れないといふ前田河夫人のソクタツであつたので、四時から仕度してゐたが、伊福部氏を六時半すぎまで待つたので　おくれては大變と大急ぎ、芝の協調會館前にかけつけて見ると、平林たい子氏前田河夫人、其他文戰鬪士諸氏の若いマダムの方々が、雨中たゝずんでゐられるのにあつた。十分位して伊福部敬子氏がやはり急いで來られた。雨はやまない　寒い。

九時頃、會場の廣場で、この西郊消費組合の女軍は、パンとサイダーを二手に別れて賣つた。私は、會場入り口の所で・平林たい子女史、若杉鳥子女史、前田河夫人其他の方々

うとした。すると先生は、歸つていけないと叫び出した。といつて雨が降りやんだからとて、其日運動會が催ふされる筈はないし、もう何處の學校でも子供は歸したからと、誰がいつても先生はきかなかつた。それでも、一人二人と歸つてしまつて、敎場はガランとなる、其處此處に赤や白の鼻緒の草履の山があつて、おすしをもつていつたものも、食べたものもあるので殘りすくなになつて殘つた手傳ひが跡片附けをはじめても、先生は竹格子の窓に兩手で顏をはさんだまま空を見詰めてゐた。さようならをしにゆくと、急に先生はたまらなくなつたやうに淚をこぼしだして、激しいすすりなきになつた。

また、こんな事もあつた。丁字髷に結つたお侍と男の子のむきあつてゐる繪の讀本の時間だつた。なんでも大變吝嗇な武士で金錢ばかり數へてゐる者で人に嘲られてゐたが、ある事變が起つて、人を助けなければならない時、日頃愛する金錢を、すこしもかへりみなかつたので、前に罵つた者共も讃めたといふところで質問した。割合金錢のことに興味を持つ——店の買物の代價を、客から受取つて錢箱へ入れることや、賣上げの勘定に馴れてゐる子たちも多かつたので、話はよくきいてゐたが、なぜ褒めたかといふ質問には答へが滿足でなかつた。先生はヂリヂリして、褒めたくつてたまらないのが褒められないので機嫌がわるくなりかかつてゐた。先生の底の方に光る眼が私の上にギョロリときたが、暫くたゆたつてから

「ヤツちやん。」

と指さした。子供は卒直だ、あたしの家ではあまり金錢の顏を見せない、あたしに金錢の貴さを知らせるには無理だつた。だからこの場合、あたしはその武士がお金をならべて樂しむのは、あたしが姐樣を飾るのとおなじ位にしか見へなかつた。だから皆が考へかねてゐるのが不思議で、却て自分の考へが間違つてるのかも知れないとさへおそれた。それ

のはづれに、白い割烹着で一本十二錢のサイダーを、パンパンとぬいては勞働者諸氏に賣つてゐた。十一時頃、サイダー箱の演壇の上に辯士が立つ、赤旗、朝鮮人の赤黒旗が林立する中から　無慮二萬（いつこんなにこゝへ蝟集しえたらう！それは短時間の驚異でなくてはならなかつた）の群衆のカンセイは嵐のやうだ。平林女史が聲をかけてみちびいてくれるまゝゴム產業組合の旗の下に入り込むと山本和子女史、其他七八の女の方がむかへてくれた。同志！このいい親愛なる世界的な二字が胸にしみじみする感激だつた。

一時頃、芝公園から、愛宕下町を日比谷公園の方さして大行列はねり出した。私は、橋浦女史に腕を扼していたゞいて、テッテイ、行からうと勵む。下駄だつて、着物だつて、汚れろこわれろ裂けるにまかせろの意志だ。其中に平林女史の呼吸を感ずる。勞働歌をうたひつゞけて來る、この人の朗らかな鬪志と、明るい血色とは私の意を強めてくれるのだ。

大手町で、私は　配給部の水のコップを伊福部敬子女史からのまして貰つた。輕部女史と握手した、やがて行列はやや急調になり始めた。ビルディングの高い高い數十丈上の足場ですゞなりになつてゐる人夫が手を振る。こちらでは旗を振る。「ライネンデテコイ・・・」といふ叫聲が空へとび上る。それは爽快だつたし、又力づよい唱和でもあつた。

でも言つた、

「ふだんはお金が好きだが、人を助けるためには・・・」

そこだ！　と先生は飛上つて卓を打つた。堪へかねるほど待兼ねた答を豫期しないアンポンタンから得たので、先生の褒めかたは氣狂ひぢみてたほどだつた。

「偞い、偞い。その武士も偞いが、ヤッちやんも負ずに偞いぞ。小錦關だ、やがて日の下開山の小錦關だ。」

小錦といふ力士は後に横綱になつたが、まださうならないうち、新進氣銳で賣出しかけてでもゐたのであらう、さういつて褒めあげた末に、人間は大將を望んでやつと兵卒位にしか出世をしないものだといふ事や、恐らく〇〇先生も世が世であれば大名を志望てお出だつたであらうがなぞと、呆れ顏に佇んでゐた、例の助教師の方へ嫌味をふりかけて、そのくせ人の好い笑顏をむけたりするのだつた。

この教室の窓の格子のところへ、夏になるとお辨當をみんなが並べておいた。運動場へは臺所口から出るのだつた。臺所には、みんなが持つてきてある小さい土瓶が、せとものやのやうに幾段にも釘にかけてずらりと並んでゐた。お午になると御新造さんがお番茶を酌み入れてくれるのをみんながとりにゆくのだつた。

ところがこの二三日、午飯時になると、屹度誰かしらのお辨當が紛失つてゐる。今日も眼玉の痡とあだなされてゐる、あたしの妹の分がなくなつた。

年子のやうなあたしの妹は、一年ばかり間をおいて學校へ上つた。色の白い凉しい眼の子だが、出額なので前髮を深くきつてさげてゐたので、眼玉の痡といはれてゐた。男の子なんぞに負けないので憎まれつ子でもあつた。

日本橋邊りでは、ひどい駈足になつた。私は一方橋浦女史とともどもに腕を一つにし一方の手はいつか傍をヨチヨチと走る肥つた巡の脊中の服をひん攫つてゐた！かまふことか、かけろ、かけろの巡査君！とおもつてる。
　永代橋のところで、水、水、水、十數人のさし出す水のコップがかゞやく！本能の手は若衫女史のさゝげ出すコップをグイグイグイグイとのみほしてた。うまかつた。このあたりから、橋浦女史が腦貧血をおこされたので男の人がかけより、親しい女の人がよりそつた。私は一人、かける。いつか下駄の前齒が碎けてヒヨコ〳〵だつたからコロリところげるにはもつて來いの準備中だ。それでも後からの大迫力が押すので走つて走つて走り進む『女の人をたすけろ！』といふ聲が耳にとびこむ。私はいつか左右に二人の鐵腕を翼にしてゐた。メーデーの强い翼だ。もうこの翼をもつ以上、走るといふよりもマシグラに飛べる私の氣分だつた。
『きけ萬國の勞働者……』
　といふ歌は、みな口にしてゐるのだ。そしていつか私だつてうたつてゐたが、この二人の補助を要する時分には火のやうな呼吸ばかり、ハ、ハ、とあえがれた。生れてはじめての大感覺と大感激であつた。(私は永く忘れぬであらう。)
　越中島へ到達、旗と、カンセイとは、嵐の

お附きの女中のついてくる、八疊の間の方のお孃さんは、下駄箱も特別なら、課業も午前ぎりでお迎へがくるので、お前もまだ年がゆかないから午前だけにしろと祖母にいはれたのにきかないで、お辨當にしてもらつたばかりの初の日に奪られたのだつた。
　おまつちやんは糸で編んだ網に入れてある、薄い硝子の金魚入れから水が洩つて廻るやうに丸い大きな眼に涙を一ぱい溜て堪へてゐた。奪られたお辨當箱は、祖母が根負けして買つてくれた、朱塗りの三ツ重ねの、小いさい丸いので、女中が持つてきて置いていつたばかりのだつた。中身には御飯の上に煎鷄卵と海苔をかけて、隱元豆のおかづに、味噌漬がはいつてゐる約束になつてゐたのだ。お辨當の袋をとるのが待遠しくつてならなかつたのだつた。となりにならんでゐる女の子と、副食物の分配つこの相談までしてあつたのに――机の上には、新らしい小さな箸箱と茶呑茶碗が出てゐる――
　おまつちやんは露路の方を眺めて泣きたいのを堪へてゐた。大紙屋の白壁藏の壁には大きな壁痕があつて、反對の算盤屋の奥藏は黒壁で、隅の方のこんもりした竹が冷しく吹いてゐる。石榴の花は赤く散りこぼれてゐる。
　女中がお辨當を持つてきた時に、
「御飯が炊きたてですから、惡くならないやうに、風通しのよい場處へお置きなさいまし。」
と念をおしていつた。それでおまつちやんは竹の風の吹く、窓の敷居の上へのせておいたのだつた。昨日奪られた子も、一昨日奪られた子も、窓に近いお座だつた。
　あたしは自分のお辨當をおまつちやんに持つていつてやつたが、おまつちやんは見向きもしないで、窓に石盤をのせて、色石筆であねさまを繪いてゐた。あたしも仕方なしに佇んでゐた。すると、窓に並んだ勝手口の方で、カタンと金屬の音がした。あたしも見た、

やうに起つた。私は手を上げた。平林女史も山本女史も上げてゐる。私の左右の貌はもうどこにもない。こんな助けは、天來のものだといへよう。とうとう弱い小さい私だつて、さうだ、私だつて、かうしてこの行列にサイゴまでついて來られた。

『まあ、生田さんよくねえ！』

こゝではじめてばつたり逢つた親友堀江かど江女史の握手をうけて汗の私は顔一杯で笑つた。萬歳、メーデー萬歳。

分裂後の築地及び心座を看る

熱田優子

ゝかくの世評を捲きおこした築地も遂に分裂して、殘留組は第一回公演としてドストエフスキー原作「カラマゾフの兄弟」を演る。この脚本は佛國の演出家ジャック・コポー氏が、要點をつかんで脚色した五幕物である。

から云ふ思想的なものは表現方法が相當困難であるにもかゝはらず俳優諸氏の熱演によつて豫期以上の成績にまで漕ぎつけて居た事は、二三の重要な俳優を失つた同劇團に對して讚辭を呈してもよいと思ふ。

先づ東屋三郎の父親フイヨードルは正に當り役である。

瀧澤修の長男ドミトリ――大膽にも盛な生活力と强烈な情熱、詩的に敏感な直正な心等

おまつちやんも見た。

露地の出口を、乞食のやう老人が出てゆく後姿が見える。その老人のさげてゆくものがカタンカタンと鳴る。

「鍋が――鍋が、鍋が。」

おまつちやんは出來るだけの聲をだした。

秋山先生は御飯後の苦いお茶を喫んで、蘭の葉色を眺め入つてゐた。

老人は溝板をドタドタと駈出した。鍋がガチヤンとぶつかつた音がした。臺所からも御新造さんが怒鳴りだした。生徒たちもワーツと聲をあげた。

秋山先生は袴の股立ちをとつて飛出した。生徒もみんな加勢に飛出した。表通りからも、裏通りからも、番頭さんや小僧や、權助さんまでが火事と間違へて駈けつけてきた。

泥棒はあはてて、向ふ裏へ逃げこんだが、それでも鍋はさげてゐるので、逃げだした道筋には味噌汁がこぼれてゐた。老人の泥棒はまごついて外後架へ逃込んで、中から戸を押へてゐた。先生は持つてゐる鞭で、戸をはたいて、

「出ぬか、出ぬか。」

と怒鳴つた。見物の彌次馬は笑つたが、生徒たちは眞面目で先生のいふ通りに怒鳴つたさうすると泥棒は髭をかくしたまま、戸の上から鍋だけさしだした。先生はその手首をグイとひいたので、味噌汁を肩から浴びてしまつたが、カツとした勢いで引出したので、汚い老人は、ブル〳〵顫へながら出てきた。

先生は勝誇つて揚々と、片つぽの手に鍋をさげ、片つぽの手で老人の肩をひつつかんで引摺つた。大得意で先生は大通りを人形町の交番へと、老人を引渡しにいつた。生徒も彌次馬も後からぞろ〳〵とつゞいた。

複雑な諸分子が入混つて居る——は其複雑さは出しきれて居なかつたが熱情的な彼をよく表現して居た。次男イワン（汐見洋）——非常に理知的で且ニヒリスチツプで一切の神秘的分子を排斥した——は此の脚本によれば長男よりむしろ最後迄重要な役割をつとめて居る。こゝへ汐見を用ひた事は當を得て居たと云はなければならない。彼の演技は常に自由で深刻味がある。三男アリヨオシャは父の神の存在を否定しようとする努力の陰に屢々頭を持上げる神に對する心、センチメンタリズムを受繼いで居る。嵯峨はまだ年若であるが其純眞さ可憐さは人の心を捕へるに充分である。父親が路傍の女に生ませたスメルジヤコフ、限りなく歪められた彼の性格はあらゆるものを憎惡し且つ呪つた。楠田はもつと臺詞に力があつて欲しい。杉山は熱心にやつて居るが芝居をして居ると云ふ意識が強くうかゞはれて何となく重苦しさを感じさせる。これなどはさしづめ山本がすべき役だつたのだらうに。東山のグルーシエンカ、商賣女であるがどこか純なところがあるやうに思へた。藝は中々うまい。

カラマゾフは芝居そのものとしては上出來だつたと云つてもよいと思ふが、此の程度の脚本を操返へすだけでは外國劇の紹介劇場であるのみで新劇としての何等の意味もなさないのではあるまいか。もつと現在民衆の心か

おまつちやんもあたしも其時だけは先生を憎んだ。なにをきかれても答へなかつた。

祖母は秋山先生一家を信頼しきつてゐた。時折訪問したが、孫たちの方へは目もかけずに歸つた。臺所口から家の使が、お盆へ乘せてふくさをかけたものを持つて來てゐたが、嚴しくしてくれと頼んでゐる様子だつた。

おまつちやんは强情だつた。二人がお灸を据えられるとき——私の家では、一日に二度も三度もお灸の出る時があつた。甚しい時は、お灸を据えられて後泣きをいつまでもしてゐるからといつてはまた据えられた。灸は藥だからと、灸好きの祖母が許すので、疳癖もちの母は、祖母へ對して不服な時も、父へ對して不滿なときも、子供の皮膚を燒いた。瘦せた女の股ほどもある腕をもつてゐる體格の、腕力の强い母親だつた。ドサリと背中へ乘りかけられてしまうと、跳返すことなどは出來なかつた。妹は秘藏つ子だつたが、それでも仕置の時だけは別で、强情な彼女は腕を脱いたりして、小傳馬町の骨接ぎの百々瀬へ連れてゆかれた。ある夏の夕方、彼女が麥藁帽をかぶつて、黄麻の帷子を着て、淺黄ちりめんの兵兒帶をしめて、片腕ブラリとさせて俥夫の松さんに連れられて百々瀬へ行く姿を、あたしは町の角で、夕靄にうすれてゆくのを見送りながら大聲で泣出したくなつたのを覺えてゐる。そんな風なので、お灸の時もあたしは瀧にうたれたやうな全身の膏汗にヘトヘトになつてしまつてゐるが、おまつちやんは何處までも反撥した。お小用だといふのが癖で、それで手をゆるめると逃るので、出たければしてもよいといふと、小さな彼女はもうお灸の熱さも、乘つてゐられる苦しさも忘れて、出もしないお小用を絞りだそうと一生懸命になり目的通りにやると、も一層激しい憤りを母から受けるのであつた。

だから學校でもよく殘された。あたしもお相伴をさせられる。課業のあるうちは、黑板

ら慾するやうな新しく力强いものをドシ〳〵消化して舞臺にのせて貰ひたいものである。そして眞の新劇運動に向つて突進して頂きたい。でなければ築地も遂に行詰る日が來よう。

本郷座で心座公演の「トラスト、DE」を觀る。心座の芝居は始めてみたのだからはつきりした事は云へないが、自分の知つて居る範圍に於て、在來の芝居の型式を全然破つて居る。こふ云ふ芝居も存在し得ると云ふ事を深く感じさせられた。又その善惡・巧拙は別としてあれ丈大膽な方法を取り得た事は感心に價する。その筋はかなり架空的であり且蟲のよすぎる程のものである。時日は一九四〇年から五十五年の間である。現在の資本主義社會がこのまゝ進展してゆくと終にアメリカにのみ資本が集中する。そこでアメリカでは種々の化學作用を應用して歐洲全國を滅亡させる爲「トラスト・DE」なるものを組織する。この中には世界最大の權威を有する各方面の人物――鋼鐵王、大學者を始め國王、大統領、大臣、銀行家、僧正等々――を組合員として網羅して居る。併し彼等はその眞の陰謀については何も知つて居ない。「トラスト・DEの陰謀によつて第一にドイツが滅亡する。次に英國は鋼鐵の顧客ドイツを失ひ、工場閉鎖・失業者を續出し危機に迫る。かくて全英國は大飢饉となり餓死する者は日に增し、遂には親友を殺してその骨肉までも食ふ

の下へ、お線香と茶碗の水をもつてたたされるのだが、彼女は笑ひながら水の中へ線香を突込んで火を消した。お殘りは、廣い教場へ二人だけ殘されるのだ。机を積み重ねた上を渡つたりして二人は仲よく遊んだが、臆病だつたあたしは、夕暮ちかくなると悲しくなりだした。あたしは別に殘つてゐなくてもよいのだが、どうしても妹を殘して歸れないので――そんな時、意地惡く家からはお禮を言ひに使ひが來たりした。

もうよい頃と見ると、秋山先生が、まづ、あたしだけを部屋へよんで、お茶をくんでくれて、ぼた餅をとつてくれたりする。すると、屹度あたしが泣き出すので、それからおまつちやんを連れにゆく。おまつちやんにもおなじやうにぼた餅をとつてやる。

暮れかかつた町を、二人の幼い姉妹が連れだつて歸ると、後の方から離れて、秋山先生がそつと送つてついてきてくださる――

秋山先生は女の子の仲間にゐると女親のやうにものをいつた。ある春の日、山吹きのしんをぬいて、紅で染めて根がけにかけてきた小娘が交つて、あたしのお座をとりまいてゐた。あたしはいつもの通り、石盤へ人間を〻の下へりの字をつけたやうな形に描いて、昨日の續きの出たらめ話をしてゐるときだつた。

「金坊、沈丁花の油をつけてきたね。」

と通りがけに先生が言つた。金坊とよばれたのは、古帳面屋の娘で、清元をならつてゐる子だつた。ニコりと笑つて、前髪から沈丁花の花をだして見せた。

この學校の向ふに、後日あたしが生花を習ひにいつた娘の家で、針醫さんがあつた。もすこしさきへゆくと、塀ぎはに堀井戸があつて、門内に渡り廊下の長い橋のある馬込さんといふ家があつたが、そこの女中がお竹大日如來だつたのだといつた。大傳馬町の神輿の祭禮の時、この井戸がよく飾りものに用ひられたが、ある時は團七九郎兵衞の人形を飾り、

やうになる。スカンジナビヤは恐るべき空氣傳染の睡眠病で一人の生存者も無くなる。トラストは又地球貫通トンネル會社を興す。勞働者はヨーロッパ人に限り、會社創立以來最早十四年にもなり、既に六千三百七十五人の犠牲者を出して居る。次第に全歐洲は滅亡に近づきつゝあつたが唯ソヴイエット・ロシアだけは取殘されて居た。併し、此のトンネルこそは彼のロシアを滅すためのものであつたのだ。が此のトンネルがレニン・グラードに通ずると同時にソヴイエット人が勞働者と共に反對にニューヨークに向つて進軍して來る。筋はこのやうなものであるが最後にロシアの勝利に歸納させるやうに仕組んであるので無理な箇所が見出だされるのはやむを得ない。私は筋よりもむしろ舞臺装置の單純さ、粗朴さに心をひかれた。舞臺の上方には二つの小さな映寫幕を作り、一つには説明を、一つには映畫を時々寫して芝居をたすける樣に出來て居るがこれは三つを一緒に眼の中へ入れなければならないので非常にせはしい思ひをさせられる。舞臺技巧の多くは電氣照明によつて行はれて居る　眼新しい芝居だがもつと〳〵研究し、洗練されなければならない。そこに期待出來る何ものかゞあらう。大膽さを失はず更に突き進まれん事を望む。(五月二日)

ある時はその家にちなんだお竹大日如來だつた。

その隣家に清元の太夫とかいふ瓢簞の紋の提灯をさげた駄菓子屋があつた。石筆や紙や學校用品を賣つてゐたが、賣手のおかみさんが上手なので、近いところよりも、生徒はそこに集まつた。おかみさんは學校用品よりも、青竹の筒にはいつた砂糖蜜入りのカンテンや、暑くなるとトコロテンの突いたのをお皿に盛つて買はせた。おかみさんはよく話した。清元のお師匠さんをしてゐる自分の旦那が、非常に聲がよかつたので仲間にねたまれて、水銀をのまされたので、唄ふ方が出來なくなつたので、仕方なしに三味線の稽古をしてゐるのだと、藝人のかなしみを、子供が感じるやうにしみ〴〵といふのだつた。だから、品物を買つておくれといつた。

そのすこしさきの町角に杯口屋のおくんちやんの家がある。お國ちやんはあたしとおみき德久利のやうに、長唄のおつきあい浚ひお師匠さんに連れてかれた少女だから、そのうちに書かなければならない。

學校の一軒さきに大きな人力車宿があつて、お勘ちやんといふ、色は黑いが瘦がたなキリリとした、きかない氣の、少女でも大人のやうに氣のきいた、あたしのために、あたしの家へよく忘れものや言傳を言ひにいつてくれた娘があつたが、後に吉原で奴太夫といふ名でつとめに出てゐるときかされたことがある。その手前に表通りの砂糖問屋の磨きあげた、黑塗りの窓のある住居藏があつて、お糸さんといふ豐かに丸つこい娘さんの琴の音がよく聞えてゐたが、隣りに、とてもみじめな乏しい母子二人の荒物屋があつて、小娘のおとめさんもお婆さん見たいにうつむいて始終ふるへてゐるやうに見えた人だつた。

その斜向うに花屋があつた。剝身のやうに幅の廣がつた娘と姉とが居た。二人が居るうちは花屋の店もよけい賑かに見えたが、馬喰町の群代の矢場女になつてしまつた。

◇女人聯盟へ御加入下さい!!

女人聯盟の發表は意外の反響を呼び各地の讀者の皆樣から非常な熱心をもつて加入の申込あり積極的に支持されることを表明して下さることは感激の外ありません。女人聯盟は本誌愛讀者を中心としてあらゆる婦人が思想境遇、地域、年齢等を超越して親密に團結し女性のめざましい社會的進出や向上のために何等かの力となりたい、將來は聯盟員のために研究機關も設けあらゆる方法によつて女性の親睦の綱となり智識の泉となる事を企畫してみます。奮つて聯盟に御加入下さいませ。

支部をつくりませう！

五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部と本社は特別の緊密な關係を保ち其地の通信、講演、本誌販賣等にもいろいろな便宜を得ることが出來ます。支部設置に就ては既に申込みや質問がたくさんありますが規定其他は追つて詳報いたします。

一**通信部**　讀者のために通信の便を設けまた御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄に掲載いたします。

一**講演部**　本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます。

一**質問部**　東京における學校、職業方面圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尚ほ交渉の便をも圖ります。

●**投書を募る**…聯盟員のみなずひろく愛讀者の女性から投書を募ります。從來も毎號創作や評論欄に新人を紹介してきましたがよき寄稿は喜んで掲載いたしますから力あるものをお送り下さい。

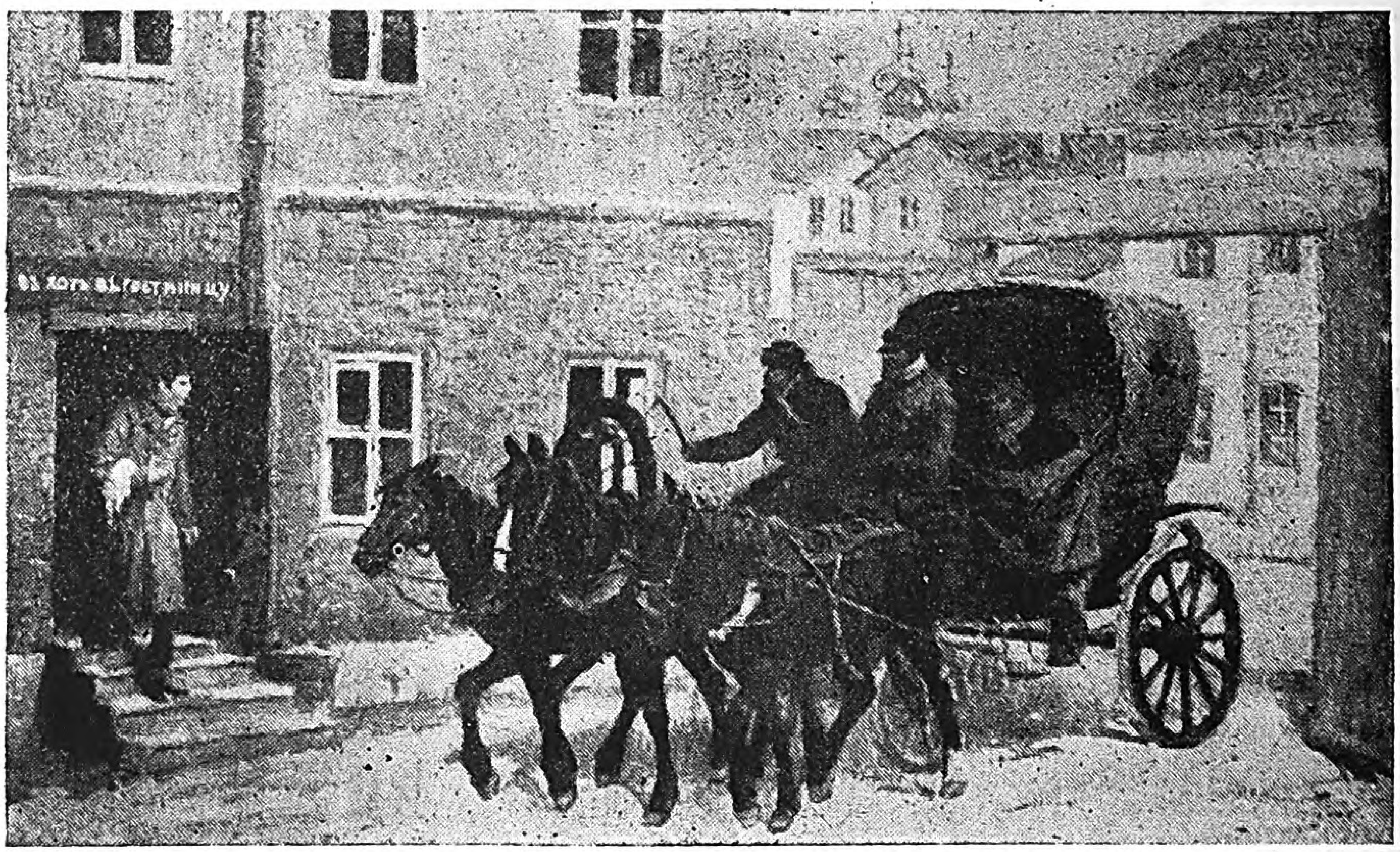
●**本誌につきての御希望を**…愛讀者諸氏の本誌に對する御感想は非常に興味深いものが多く集まりました。尚ほ本誌の内容及び將來に對しての御希望をどし〱おきかせ下さい。

女人聯盟
加入申込票

住所

氏名

◇女人聯盟に就き皆樣の御希望を御寄せ下さい!!



密輸入者と「毒鳥」

松本惠子

それはもう十年も昔の事になります。

シベリア鐵道の十日間の旅は、露西亞語も佛蘭西語も出來ない私には、隨分不自由なものでした。私の隣室には、張り出した胸に勳章をいくつも輝かせた露西亞の老將軍がゐました。朝夕顏を合せる度に、（今考へると）エミール・ヤニングスのやうな笑顏をして小さい私にうなづくのでした。面白い話を澤山して呉れさうなお爺さんでしたが、露西亞語が話せない計りに、とう／＼十日間一度も言葉を交しませんでした。私はその人の顏を見上げる時にはいつでも首をぐつと後に引いて、仰向けにならなければなりませんでした。狹い廊下の下の途中で會ふと、肥滿した將軍は私を輕々と抱いてくるりと後を向いて廊下へ下してゆくのです。將軍はきつと私を十五位の少女だと思つてゐたのでせう。

その列車の中で唯一人英語の話せる車掌がゐました。此青年はボストンに五年住んでゐたとかで、英語はなか／＼達者で、十八歳であるといふことをいつて私に自慢してきかせてゐました。ほんたうを云へば私の方がその青年より年上だつたのですけれども、彼は私を十三だときめて了つて、

『三五年經つたつて、貴女は現在の私ほど丈が高くならないでせう。』といつて五尺七寸の體格を威張りました。ですから私は、

『そんな劑で人間の身丈が延びていつたら、貴女なんか巨人(ジャイアント)になつて住む家が無くなるから……』と冗談を云つて笑つてやりました。
その青年は私の事を「日本の可愛いお孃さん」と呼んで、よく露西語を敎へて與れました。
私は他の事では露西亜語の出來ないのを、さう大して殘念には思ひませんでしたが、食堂で會ふ若い士官と話が出來なかつたのはほんとうに遺憾でした。その若い士官はいつも私の隣の席に就いて、食事中いろ〳〵と親切に世話を燒いて與れました。春の海のやうな瞳をしたその青年は私に、
『露西亜語は?』と頸を傾げてきゝました。私は青年の顔をいつぱひに視詰めながら頸を横に振りました。
『佛蘭西語は?』
『佛蘭西語も話せませんの』私は怪し氣な佛蘭西語で答へました。
そして『英語は?』と訊ねると、今度は青年の方で頸を振りました。私達は次ぎの日から食事中只顔を見合せて、微笑を交すだけでした。或時私は、その青年が林檎の皮を剝いて與れましたから、
『ありがとう!』と云ひましたら、その日本語が通じたと見えて、次に私が砂糖壺を取つて上げると、
『アリガ　ウ』といふのでした。ですから私も負けない氣になつて、何かして貰つた時に、
『スパシーボ』と云ひましたら、青年は、『スパシーボ、アリガトウ』と言つて快活に笑ひました。
翌朝私達は顔を合せると、
『スパシーボー』
『アリガトウー!』
といつて「お早う!」の挨拶をしました。いよ〳〵ペテログラードに着いた時にも、私達は手を握り合つて、「スパシーボ」「アリガトウ」とお互に何事にも通用させてゐた言葉を交はして別れました。それは革命の起る一寸前でした。私は今でもあの若い士官の事を思ひ出します。そしてラシヤ賣りの露西亜人を見かけると、若しかあの時の立派な士官がそんな姿になつてゐるのではないかと胸を打たれます。或はもう此世に亡い人となつてゐるかも知れません。
その汽車の旅の出來事で、もう一つ私の記憶に殘つてゐることがあります。或朝私は、英國大使館付の武官として赴任してゆく田川少佐ともう一人の紳士とが雜談してゐる傍でペイシエンスをしてゐました、
『隣りの露西亜人は密輸入者だよ。』と田川少佐が云ふと、益村といふ紳士は、
『さう云へば、ゆふべ夜中に僕が起きたら、あの先生、廊下の棚から酒の罎を幾本も下してゐた。』
『僕はあの時眠つてゐる振りをして樣子を見てゐたんだ。さうしたら酒罎を全部寢臺の下に隱したものだから汽車が搖れる度にじやぼん〳〵云ふので可笑しくて堪らなかつた。』
私は二人の話をきいて、隣りの男といふのはてつきり、例の肥滿した將軍の事だと思つて、それからといふものは將軍を惡人ときめて密かに恐れてゐました。すると或時私が車掌の部屋へお湯を貰ひにゆくと、チヨビ髭を生した黑い背廣の男がサモアルの傍で鳥の脚を嚙つてゐるのを見ました。變な男だと思つて氣を付けてゐると、その男は食堂へも出ず、いつもコソ〳〵して、誰とも口を利かないのです。けれども私が廊下のベンチに腰かけて、窓越しに雪景色を



眺めながら車掌と話をしたりしてゐると、よく傍へ來て立つてゐました。その日も三人で白樺の林を眺めてゐると二等車の車掌がやつて來て、しきりに何か談判を始めました。無論露西亞語ですから何を云つてゐるのか解りませんが、一等車の車掌の顔には當惑の色が現はれてゐました、例の背廣の男はおど〳〵してゐましたが、遂に彼は二等車の車掌と連れ立つて廊下のはづれへ歩み去りました。そして見てゐると男は田川少佐の部屋へ入つていつて、酒壜を一本抱へて來て、相手に渡しました。その時初めて私は將軍を密輸入者だと思込むでゐた自分の間違ひに氣がついて可笑しくつて耐らなくなり、聲を立てゝ笑ひました。車掌は呆氣にとられて、頻りに何が可笑しいのかと訊ねましたが、私はその說明をするのは惡いやうな氣がして默つてゐました。

密輸入者はその後も度々二等列車の車掌に脅迫されて、酒を卷上げられてゐたやうでした。

偖、いよ〳〵明日、ペテログラードに着くといふ前日でした。田川少佐は、

『僕の醬油の壜が紛失した。人から頼まれてもつてきたので、大使館の書記官のところへ屆けてやらなければならないのだから參つて了ふな。』と部屋を搜したり、車掌に談じたりしてゐました。車掌は、『ニッチエオー』を繰返して萬事吾が胸にありといふやうなことをいつて要領を得ませんでした。私はそれつきり自分の部屋で荷物をまとめてゐましたから、どんな成行になつたか知らないでゐましたが、翌朝、廊下へ出ると、田川少佐は例のチョビ髭の男と車掌を前にして、掌に何か壜から滴らして、

『酒ぢやアないぞ、日本のソースだ。』といつて舌の先でペロ〳〵嘗

めて見せてゐました。

その晩、ホテルの食堂で田川少佐は大使館の人達に、その密輸入者の話をして、

『奴は僕の醤油を酒だと思つて、僕を同類扱ひにしたんだね。道理で馴々しくすると思つた。それで僕の醤油壜を酒と一緒に寝臺の下へ隠匿して大に恩にきせるつもりらしかつた。二人に無理に嘗めさせてやつたら閉口してゐやがつた。』と笑つてゐました。

私達の一行はペテログラードに一泊して、翌朝は橇で氷に鎖されたネバ河を滑つて、ハパランダまでゆきました。晴れた空に鈴の音を響かせて、白い雪の野を走る愉快さは、私の多年の夢でしたが、ハパランダに着いた時、みんなに、

『どうでした詩人の夢は?』とひやかされました。氷結した凸凹路をゆくのですから、激しく上下に揺れて背骨が橇の背板にあたつて、その痛さつてありませんでした。その上馬の毛が風に飛されて顔にかゝる、折々は凄じい臭の風がくるといふ有様で、途中の景色など眺めるどころではありませんでした。それにたゞさへ寒いのに、風をきつて走るのですから、いくら厚着をしてゐても、まるで針のやうな風が肌を刺すのです。橇から下りた時には聲も出ない程、悄氣て了つてゐました。

スエーデンの汽車は露西亜と違つて部屋の掃除をするのも、食堂の給仕をするのも若い女ですから、凡が奇麗で氣持がようございます。こゝも平原計りで、山の尠い國ですから、シベリアのそれとは違つて小さな森、小さな川、小高い丘、傾斜した野などが程よく配置されてゐて箱庭のやうな美しい眺めです。殊にその朝は、木々の枝といふ枝に粉雪が凍りついて、それに朝日がきら〳〵と照り輝いて、まるで水晶の林を分けてゆくやうでした。

クリルボウで乗換へたノルウエーの汽車は山を分け、フヰヨードルに沿うて疾走りました。氷結した瀧や、海を珍らしく眺め、ところどころ氷が溶けて漣漪が寄せてゐるのを見て春の微笑を感じました。山の懐に抱かれてゐる海は湖水のやうに靜かで、青い水に映つてゐる白い山の姿が又なく美しく思はれました。穏かな景色を眺めてゐるうちに時間がすら〳〵と過ぎてゆきますので、この汽車の旅では何にも變つたことはありませんでした。

ベルゲンの港には私達を乗せてゆく、ヴヰナス號が眞直に煙をあげてゐました。他の人達はサロンでお茶を飲んだり、シャンペンの口を開けたりしてゐましたが、私は田川少佐から買つて貰つたチヨコレートの箱を抱へて甲板に出てゐました。

軈て汽船は白雪に輝く山々に圍まれてゐる美しい港を後にして、紺青の水の上に白い船あしを殘して走り始めました。

ふと氣がついて欄干から離れると、先前から、こつ〳〵靴の音をたてゝ歩いてゐたのは若い美しい婦人と、その父親らしい下品な顔をした老人でした。背が低くて肥つてゐるのに碁盤縞の大きなキャップを被つてゐるので、サーカスの親方か何かに見えました。婦人の方は船中を輝かすやうな晴々した菫色の瞳と、苺のやうな唇と、向日葵の花のやうな艶かな頭髪をもつてゐました。私は餘り美しいので見惚れてゐました。その婦人は日本娘がびつくりした顔をして黒い眼を瞠つてゐるのを見たのでせう、微笑して頷首ました。私もその親しげな顔に引込まれて微笑ました。私は甲板へ出る毎にその二人連が腕を組むで大股に散歩してゐるのを眺めてゐました。婦人はいつも私の顔を見て微笑しました。そして三度目かに會つたと

き、傍を通りしなに何か小さな紙片を私の手に渡してゆきました。開いて見ると、それには鉛筆の走り書で、ミス・ＸＸＸといふ露西亜名前と、英國の住所が認めてありました。何故そんなものを呉れたのか解りませんでしたが、ポケットへ押込むでおきました。

　すると、サロンではもうこの人が皆の話題に上つてをりました。

『あの二人は夫婦ぢやアないよ。』

『さうだとも、餘り年齡が違ひすぎる。』

『毒鳥だね。』男の人達がそんなことをいつてゐましたので、私は、

『毒鳥つて何に？』と訊ねました。

『毒鳥つていふのは、汽船から汽船へ渡り歩いて、男を餌食にする女の事ですよ。』と益村氏がいふと、田川少佐が横合から、

『よし給へ、そんな話はお孃さんのきく話ぢやァありませんよ。』といひましたから私は其儘唇を噤むで了ひました。でもあんな奇麗な人がどうして毒鳥なんて惡口を言れるのでせうと不服に思ひました

　その翌日、私がサロンへ入つてゆくと、益村氏を相手にトランプに夢中になつてゐた田川少佐が、

『いよ／＼あの女は毒鳥と斷定したよ。昨日の夕方、ある男が下の甲板に何か紙を投げたから、通り合せたボーイが拾つたら、春畫だつたさうだ。』といつてゐました。私は好奇心が一杯になつて、密に次の言葉を待ちましたが、二人は私の姿を認めて、その話を止めて了ひました。私は春畫つて何だらうと不思議でなりませんでしたから、田川少佐と甲板に立つた時に、

『春畫つて何に？』と訊ねました。

『叱！　馬鹿な！　そんな大きな聲を出すものぢやァない。』と田川少佐は愼めました。そして聲を潜めて、

『みつともないことを訊くものぢやァないよ。そんなことは貴女などの口にする言葉ぢやァないから、決して他人にいつちやアいけない。うつかりそんなことをいふと、又いつかの癩病の話みたやうに大恥をかくぜ。』といはれて私は眞赤になりました。曾て皆が黴毒の話をしてゐた時に、私は人の厭がる惡い病氣といふのだから癩病の事に違ひないと早合點をして、

『私の女學校の友達にばいどくの人が二人あつて眞實に可哀相よ、その人はね、迚も色が黑くつて、頭髮が赤いのよ。だから顏を日に焦からうと思つて、毎日太陽に曝してゐるんですつて……そして一人の方は學校を卒業すると間もなく、崩れて了つたんですつて、怖い病氣ね、手や、鼻が毀れて了ふんですつてね。』

　居合せてゐた人達は妙な顏をしてゐましたが、しまひに大笑ひして了つたのです。その後で私は田川少佐に蔭へ呼ばれて、黴毒の意味をきかせられ、二度とそんな話をしてはならないと叱られた事があつたのです。そしてこれから何か腑に落ちないことがあつたら、無闇に人の中できかないで、陰でそつときけといはれてゐたものですから、私はわざ／＼田川少佐を甲板に引ぱり出して質問した譯なのです。無論田川少佐は私に春畫の說明はしてくれませんでしたが、私は何かよくないものに違ひないと考へ、先刻婦人から貰つた姓名の書いてある紙片も持つてゐてはわるいやうに思つて、そつと破いて海へ投げ捨てゝ了ひました。

　私は今でもその美しい毒鳥が何故自分の住所姓名を記した紙片を私に呉れたのか不思議でなりません。私は女學校時代、新聞も小說も讀まされなければ、芝居にも行く事を許されないやうな家庭に育つたお孃さんだつたのです。

望郷素描

―阿州處々紹介―

生田花世



故郷の事をと問はるがまゝに、私はいつも鳴門の海について語りつゞけて來た。あの鳴門、あのドゥドゥと鳴りとゞろく情熱の潮音、そしてあの青い數萬の渦卷の連鎖をもつてみたさるゝ海峽の感情は、私の心をはげますものである。うづまけ、うづまけ、うしほのごとくに…かういふ風にくちづさまれてくる荒い海の呼吸があの鳴門の瀬戸にはたえず〳〵永い世紀にわたつてくりかへされて來もしたが、なほまたくりかへされてゆくであらう。

五年程まへ、私は夜、神戸よりあの海峽を渡り、はげしい甲板の動搖の中で、ぢつと青い渦紋を見たことがある。身にふりかゝる波しぶき…遠いかなたの燈臺の火、漁村のともしび、そして港へとこぎゆく小舟のかゝげる灯、すべては『土佐日記』中の海景をしのばせるものだつた。私はこの時のことをいつかおもひ出して歌つた。『女が一人身をおどらした、暗い暮れ方の荒海である、もの凄い靜かな渦が卷いてゐる、渦は無數にこまかによぢれて集合し、集合した渦がよぢれて大きい渦をまき、たゞ見えるのはその深碧の黑みがかつた、恐怖の海底の幻想である、月が上つた、仄白い女體が一つ渦に卷かれよぢれつゝ、通りすがりの魚群に觸るる。陸影はとほい、風は低い、渦はもの靜かに卷いてゐる。白魚は淡くよぢれて渦の中に舞ふ、死の誘惑を感じつゝ、月の下、ひとり鳴門のあら海を渡る面も眉も袖もしつとりと重くしめつた…。』

夜の鳴門海峽のあの神秘的な深刻な荒い感じはこの『幻想の白魚』の詩に、私の死を托したいやうな強い蠱惑力をもつてゐたのである。

こゝに掲ぐる鳴門の海のエハガキに私の郷里の青年は書いてゐる。『今度、鳴門の漁師の風俗を芝居に書かうと思つてその準備にとりかゝつて居ります。何だかこの頃、四國は日本のアイルランドのやうな氣がします。勿論氣候や風土はちがひますが。村の小學校に卒業式の唱歌を練習してるのが、妙に自分を涙ぐましくします』と。

春の日の鳴門、夏の夕の鳴門、そこにはひなびたのびやかな砂原があり、小松のしげる島がある。時來て怒るが、時去れば笑ふ、そこに鳴門の自然のいいところがあるといへよう。なほ私の好きなのはこの鳴戸のつゞきなる北泊浦の風光である。私は十九歳の初夏、そこにある遠緣の漁家へ二日ほど泊つてゐたことがある。落日の頃



大鳴門上己大干潮

濱へ出て、ひとり岩の上にたゝずむと、左の方に東讃の海岸が弧を描いてゐるのだつた。そしてそゝり立つ五劒山の英姿が夕霞の色づく中に崇高に見えた。今もその時の海に對する喜びと歡迎の心の波をまざ〳〵と想起する私である。

阿波を語れば、もう一つ、それは大河、吉野川のことをもらしたくない。いつもいつも水量がゆたかで、白帆のかげがうつくしい。私の生れた家の障子をあけて見るのがこの白帆であるのだ。晴日のもとにとほい白帆はメエルヘンめいて夢心地に人の心をさそふ。『白帆よく來た、どこから來た、とほい山から下りて來た、どこまでゆくぞ、とくしままで』こんな風に幼い時私はオカッパあたまをふりながら座敷からうたつたりもした。

新居格氏――この私の國の先輩は吉野川の下流のもつとも肥沃な一つの村に生れた人であるが、いつかこの吉野川の美をたゝへて、長堤流水、悠久たる大展望のほこるべきをあげていられた。この川の川原の石はみな白い石でみたされてゐる。今でも國へかへり、この川にさしかゝると、私は石を拾ふ。實に美しい白い石で、中には桃色の石もあり、みどり色のもある。靑い條の紋樣のある白石もあれば、赤い條の紋樣のある靑石もある。文鎭に手頃なのもあるのだ。中の凹んでゐるのは水をくむことも出來る。吉野川邊の石ひろひ、これは私の幼女時代のとつときのたのしみであつた。

川の上には、西方はるかに「オコウツさん」と私たちのよびならはしてゐる高越山が雲をよぶ。山の形で、實際以上に高く見えるのだ。そして、この山のかなたに劍山がひそむといふ。しかし、私はいまだその劍山に登つてをらない。

吉野川の上流には大步危、小步危の奇形勝地があるといふ。しか

しそれもいまだ私は知らない。非常に古い生活様式を今なほ傳へる平氏の落武者の部落だといふ祖谷郷は有名であるから、そこへは行つて見たいといつもおもつてゐる。

　私は何といつても郷愁が深い。故郷がいつも私の都會生活の中で夢を織る。徳島なんて、どれほどいいところか！それは自分ではいいのだし、人は平凡におもふだらう、しかし、都會の生活での幾波瀾は、鳴門の潮の狂激をもつて反抗し、吉野川の白い小石の明るい、こまやかな石の道をゆるゆると歩くやうに緩歩もしたいとおもふ。この間、私はあるところへかういふことを書いた。『私は今草の街道を十里二十里、巡禮する人々の鈴の音にしたがつて、ひばり鳴く野にぼんやりと身も心もやすらつたらとおもひます』と。四國巡禮の一群、又一群、それらは初夏の村より村をへめぐつてゆく。寺は、高地に聳え、又深い谷の杉林の中にもあり、見上ぐる山の中腹にも建てられてゐる。その一群の中にまじり餘念もなく歩いてゆく御信心は、古めかしいとはいへ、又いい健康法ではある。平均一日に四里位は、娘の足でも歩ける。一つの寺と一つの寺との間は約一里位私の村の附近でも極樂寺、常泉寺、十樂寺、切幡寺等々あるが、みな大きい寺だ。巡禮娘の白い菅笠、頰をくゝる緋のひも、腰にさげる紫の布、ねんいりなのは白いおひづる姿、うなじには豆のやうなお大師様のお草履をかけて、同行二人、御一人は影みに從つて加護なさるゝお大師さまのこと。

『りん、り、りりん、りん……』

『なあむ、だいし……』

『りん、り、りりん、りん……』

『遍照金剛……』

『り、りりん、りりん……』

かういふ風な巡禮道中ぶりなのだ。

疲れたならば、ころがるのは一杯の草の上、ひばりが空へ上つて上つて、どこかでさへづる。

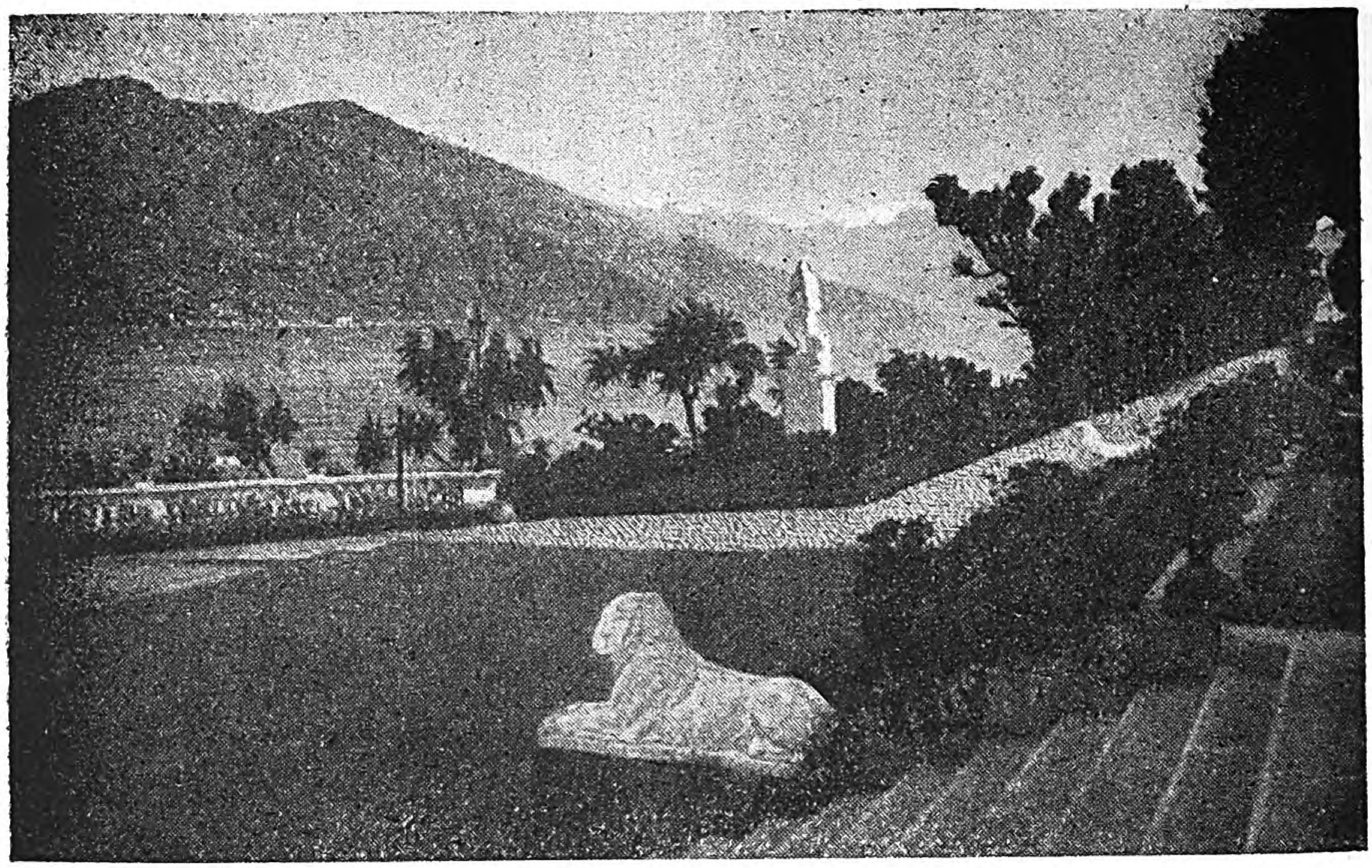
かへり來よ空のひばりよ
心は青し春の草いまやはらかし
空はいま白雲いくへ
さへづりの聲よいづくに
西かまた東か北か
かへり來よ空のひばりよ
心いまさびしくなりて
ひたすらに待つよ、ひばりよ。

巡禮娘はかう戀人をしのぶのであらう。

五月號の口繪鳥居きみ子氏の、吉林省に旅をして、の歌は、

ゆかしくも鶯鳴くか奧山の
森のしゞまをのり駒の行く

の誤植ですから訂正いたします。



コモの湖

シオンの花

徳富黄花

人類史上に曠古の大戰としてあとづけらるる世界戰が消ゆる如くに歇むで講和條約が調印さるゝ三月前の、西暦一九一九年春三月の末、私共は埃及の坡西土から歐亞の關門蘇西運河を東に渡つて、世界周遊の旅程を聖地エルサレムへつゞけて居た。

南進の獨軍を北に追ひ退けて、休戰の今も猶警戒を怠らぬ英軍が駐屯する東カンタラは、亜刺比亜沙漠の延長地、見るかぎり白砂の上に建てられた天幕村である。此處のY. M. C. A.に汽車を待つて、蒸さるるやうな腦ましい十二時間を過して、はふ〳〵の態で夜汽車に乘り込んだは午後の十一時。時時パッと地上を明るくして警戒する探照燈の外、天幕の燈火大方は消されて幾萬の將卒故山の夢に入りしなるべく、星のみ冴ゆる靜夜であつた。

切符を買るも軍人の、驛に着いて、土人の驛夫が導くくらがりに　黑い壁の如く眼を遮る列車の一小室は、私共にあてがはれた當時の一等室。戰時には將校室なりしなるべく、床は石のやう堅けれど、黑革新しく張りかへてある。"More light" 式ながら敵彈を避けて南に窓が一つ、上下に分れたベッドの外、何の設備もない。敵の眼を掠めて暗に運ぶ、全くの軍用輸送列車である。それでも夫は下に、私は上の寢床に脚をのばして、持參の膝掛を被つて

うれしくも身を横たへた。

アラビヤ沙漠が息つく夜氣は冷いものである。今し方、夫に窓を閉てゝもらつた自分は、慣れぬ瓦斯の爲にか、頭重くて眠りならず窓の白むを待ちわびた。

それでもいつからとく〳〵となりしと見え、眼を開くれば、窓がぼんやり白くなつて居る。夫は昨日の疲勞でまだ眠つて居るらしい。自分はそうつと起き出て、被けて居たセルの膝かけを、夫の上に加えて、靜に窓を開ける。

さあつと流れ入る薫風！　此世とも覺えぬ、幽雅とも何とも形容出來ぬ、香に醉ふとけ此事であらう。うつとりと眼も細うなる。

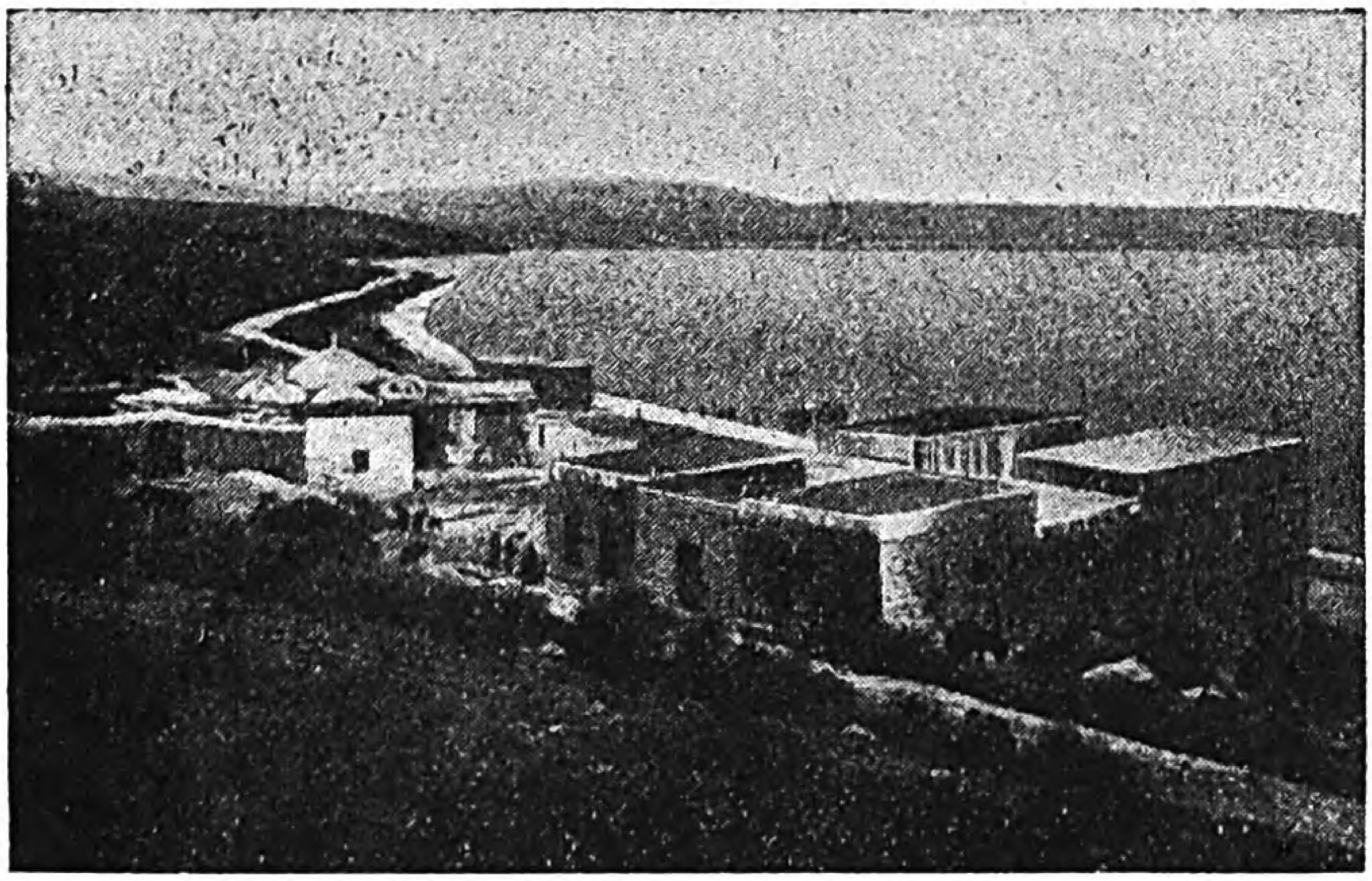
やゝに我に返れば、朝露をふくむ沿路の綠草地に一面の雛芥子！　濃紅淡紅とり〳〵の花野、朝の生氣を吸ふて、一枝として姿勢くづさず、汚れを知らぬ天上の輝きそのままである。

シオンの花野の曙！

ユダヤ民族が夢むる天上の樂園を語るシオンの野、汽車がすゝむにつれて里ちかくなりしか、一匹の驢馬さまよひ出て花野の草を喰む！

何といふ美しい畫趣であらう。其處に一點の醜惡がない。色は、形は描くすべもあらむも、此野の香を誰かよく描かんや。

コモ湖



チ　ベ　リ　ヤ

午后四時「ポルタ」は夏の裝した男女さまざまの人人を滿載してコモの町をはなれた。私共は日よけの下の甲板のベンチにかけて、或はFさんのダンテ談やレッコオの景色を小説に描いた伊太利の馬琴の談に耳傾け、或は刻々に移り行く湖上の景を眺める。

伊太利の湖水の中で、一番美しいと云はるるコモの湖。海拔は六五〇呎、瑞西の方から伊太利へ二叉のフオークを挿し入れたやうな形をして居る。東の股がレッコオで、西の股がコモである。私共の行くベラジオは、二股が一つに合ふ處にある。南端のコモの町から湖の北まで三十哩。高いのは八千呎に近い山山が屏風の如く圍ふて、幅は一番濶い處でも二哩半に出でず、而して深さは最深一三四五呎もある。此山の高さ、此谷の狹さ、此水の深さでは、陰氣な物凄い景色であらねばならぬ處を、陽氣な伊太利人は、其水に傍ふて色彩といひ樣式と云ひぴつたりと周圍に調和して而してそれを明るくする別莊やら寺やら住家やらを建て、樹色花容の美しい植物を植ゑ其嶮しい崖に自動車の走る路をつけ、其湖に輕く水を截つて往復する四五隻の美しい汽船と小さな帆舟と滑舟を浮べ、人なつこい遊園にして了ふた。

船は此深い綠の水の面を滑つて、東の岸から西の岸、西の岸から東の岸と、梭の如く忙しく行き交ふて、ベラジオまで二十餘ケ所に

寄港する。日傾いて東岸は明るく、西岸は陰になつた。眩しい日に赤のパラソルをさして若いレデイが立ち待つ東の棧橋に船が着く。踏板が直ぐ渡される。下る者は下り、乘る者は乘つて船はすうとまた斜に西へ行く。船が少し行くと陰になつた西の棧橋に最早乘客の顏が待つて居る。

支那風の石の丸橋に綠蔦這ひ、白糸の瀑とでも云ひさうな小瀑が掛つたり、藤の花が今を盛りに咲いたり、薔薇、グラヂオラス、蝦夷菊、ダアリア、杏竹桃、さまざまの花が色を競ふて咲いて居る。心憎い水莊、水門内にボオトを繫いで、誰が住むかと眺められる。葬送の行列なども見えた。

唯或る左岸のヴイラでは、桃色服の女主人が今し來訪の白服の老婦人と其孫娘を送つて出て、咲き盛つた園の花を色とりどりに折り採つて、少女に持たして居る。主客三人の笑顏が畫にかいたやう。水を出づる小閣、人待ち顏の石の女像を立たせて居るも憎い。

私共はFさんと此山此水此家此人此船を眺めて、自然を己が有にする事に於て、伊太利は殆んど行く所まで行き、我等の鄕國はまだ前途多望だと云ふに一致する。

Fさんが此處まで先日高さんと來たと云ふ邊まで來た時は、湖の大部分は陰になつた。船の日よけが捲くられる。快活になつた甲板のベンチに私共三人はうつとり夕景色を眺める。何處の寺でか鳴り出した夕の鐘の琳琳と好い音が水を渡つて響く。

モコ船上にて　　あい

相せまる　山ふところに・水の路
　たえぬと　見れば　又　ひらけ行く
赤く　白く　家居は　山に　水際に
　綠に　かくれ　花に　かこまれ
水神か　女像　立ちたり　コモの湖
　嫋々と　わたる　鐘の　夕ぐれ

人生の道づれに取遺されし一人旅の自分を慰めて、せめて旅の憶ひ出なりと記しみよ、との「女人藝術」の姉妹方のおすすめに、土鮮も春野に一座を給はる自然の趣向にもかならうべくやと、時足らず尻きりとんぼの文字を連ねて、御心に答ふる無禮を御許し下さいますやうに。

光成秀子

私はと申し上げたところで女人藝術の熱愛者の内の一人ですが……。私は郵便飛行將校の妻です、彼は(夫)大尉のホヤ〳〵で典型的の武人です。無自覺の内に結婚し五年目の新年を迎へました。

一時あきらめた文學にまた目を光らし初めたあはれな凡婦が光成秀子なのです。時代の思潮から取り殘された樣な軍人社會、そこに煩悶なしに生きて行けない反逆者の心の淋しさ、無自覺時代が幸福か、自覺した今が幸福か、苦悶が如何に大きかろうと生きる喜びを今本當に味つてゐます。惱みの鍵の何時取拂ふ事が出來るか。

兎も角今暗雲と戰ひながら先途に向つてプロペラをうならせて進んで居ます。

で今度は女人藝術禮讃

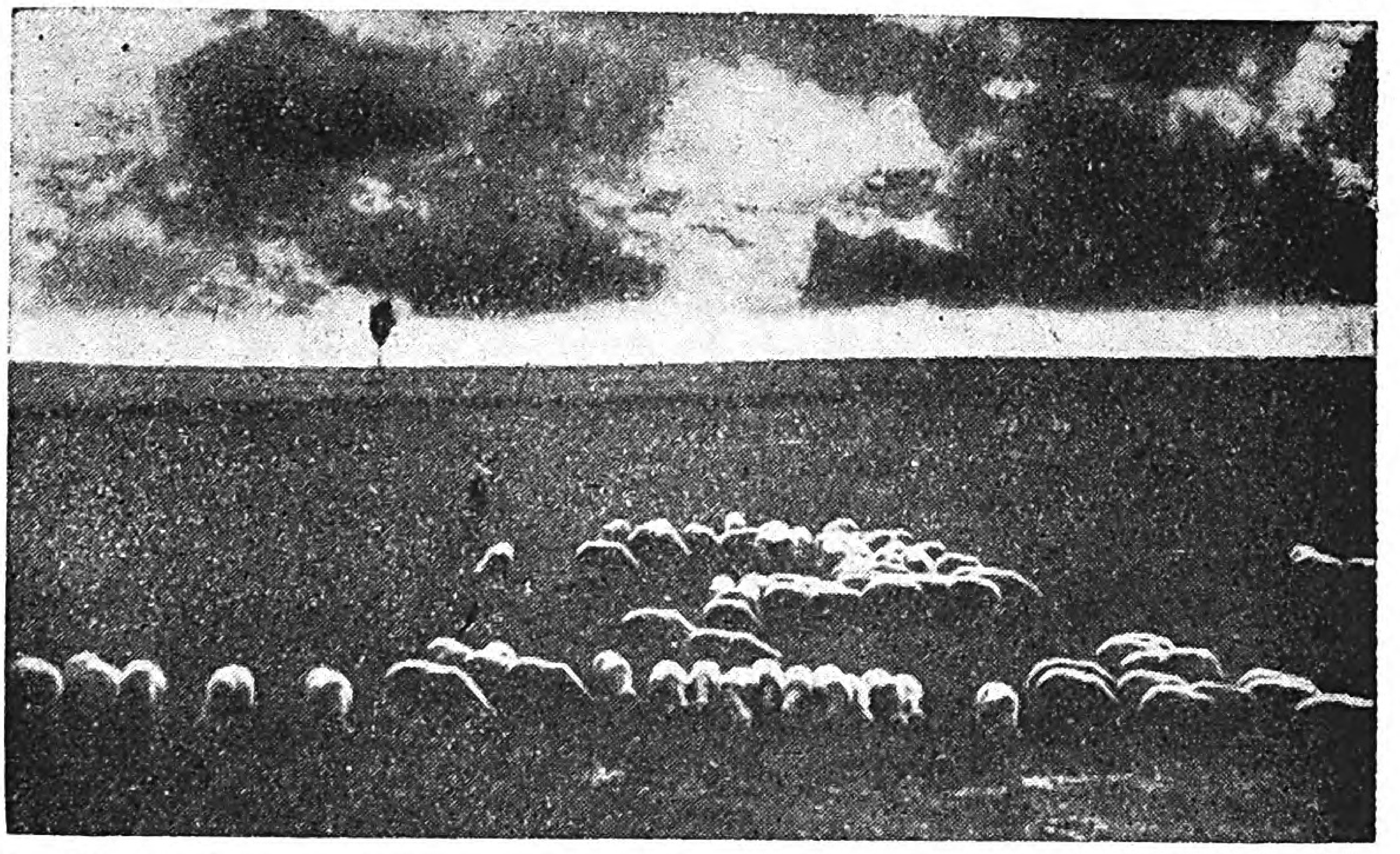
男も女も同等さ、つて女人藝術を見せたくなります。皆樣の努力の程も推察されます。毎月出るのが待たれます。表紙の感じもよい内容は云ふまでもありません。誌上議壇から色々数へられます。眠つて居る事が一番安全の樣です。陸軍大學生の結婚等といふものは隨分面倒な事ばかり自由戀愛などと言つてゐる人達には考へられないだらうと思ひます。

それはさておき、二月に社會時評がありませんでしたが毎號あつてほしいと思ひます。また文藝時評もあつてほしいと思ひますが。

どれを讀んでも男性に負けない頭のよさを頼しく思ひます。描かれぬさきに何か全く岸の働きの早さを感心しました。

向日葵のある朝餐

八木秋子



羊の群——牧場

1928年・AUGUST' 2・午後九時零二分。

一九〇〇年型廢朽車（おゝ、それは煙突つき鐵製すといいぶの設備のある四輪小型客車。大陸が雪に掩はれる頃は札幌に行く農夫たちが、それに白樺を焚くであらふ……」は、とつぷり暮れた石狩平野の夜を走る。

ごとごとごと……かたかたかたかた。

——夜汽車の車輪のノスタルヂア。

灯のない平原。漆のやうな闇。シネマ「人生の乞食」放浪・・

ぶうん、ぶうん、ノイズイな蚊だ。

かみのつぽろオ、かみのつぽろオ（上野幌）・・・

平原の小すていいしよんの黄色いランプ。枕木の柵、ねむつてゐるポプラ。ねむつてゐる驛舍、驛夫。

農場にゆく小驛の午後九時零二分は夜中だ。

——どにけ、S農場にいくのけ？この道をいつたらよかべよ……」

驛員との會話がぷつつり切れる。

しいんとなつて、じみじみ地虫がないてゐる。

闇、闇、うるしのやうな夜中。

野つ原——草が夜露にぬれてゐる。妾はひとりで歩いてゐる。

燐寸をすつて赤い火で腕時計を見た——午後十時。

けれど瞋めてゐるとにじむやうな灯が、ひとつ、ぽつんと見え。

あかしあの防風林にとりまかれた、柿いろの燈のもれる木造洋館の白い把手。

——ごめん下さい。ごめん下さい。こん晩は……。

寢鎭まつてゐるのかしら。

一分……二分……

——はあい、

かちり——金屬性の小さな音、扉からもれるにぶい光り。

——？

——あたくしですの、Yです。

反射鏡のついたニッケルの臺洋燈をかざした奧さんは、クローバの上に、安心でほほ笑んでゐる姿を發見した。

——Yさん!? おひとりで？どうしてまあこんなにおそく！でもよく來られましたね。

リズミカルな聲が野つばらの闇に吸ひとられる。

——冷々しますわ

大陸的な、晝と夜の急激な氣溫の差異。

夜更けの、丁抹風の食堂の窓硝子に白いレース・カーテンがをりてゐる。

——あちらの話はそれくらゐにして……

S氏は時計を見る。

——ほんとに、こんな時間まで！

——いいや。また明日。

た丁抹國立高等農業學校及びシャプラン農場留學當時の夫妻のは、午後一時の置時計が中斷する。

——こどもは八時になると獨りでさきに寢臺でやすむ習慣ですの

——まあ！

——では、おやすみなさい。

白塗の二階の寢臺で、わたしは、せきをした。トランクを床に軋ませたりして、それから豆洋燈を吹き消した。

……

若い四人の牧夫は、木製の粗末な寢臺でバットをすつてゐる。窓硝子のそとを濃い霧がながれる——乳色の黎明だ。

飴いろ作業服の牧夫の長靴がクローバの小さなあかい花瓣をふみにじる。霧が長靴を濡らした。

——ひとつぱしり、陽の出ねえうちによ。

ぴしり！鞭の音。二頭だての農場馬車が一散に霧の中に消える。

牛舍……はうす暗い。

馬舍……はうす暗い。

豚舍……はうす暗い。

床板をことこと鳴らしたり、霧を吸つたりしてゐる、まだ夜が明けないのだ。

やがて——

牧草と燕麥と、しつとりした露を載せた馬車が、枯草と朝のにほひを地平から搬んでくる。

臺所で――。

――ママ、ママ、

ねぶつたいこどもが大人のスリッパを履いて階段ををりてくる。

陽があがる。アカシア、ポプラ、エルモの葉末から露がしたたり露は水晶のやうに光る。

食器のかちあふ音、乳牛の朝の挨拶、豚の鼻息、扉のあけたての音、S氏と牧夫との會話。大ごゑで話す。

まつさをい晴れた朝の空。

光り、聲、律動！

――すつかり寐坊しちやつて……

――まだ寐んでゐればいいのに。いいお天氣ですよ。

奥さんの純白のハウス・ドレスの襞にこどもが、はにかんでぶらさがつてゐる。レース・カーテンをゆする爽かな朝風――。



ポプラ並木――北海道

――やあ、起きしまたねちよいと失禮。

S氏は芝生の前庭を大股に横ぎる。

わたしに馴れたこどもは、お祭日のやうにわたしの兩手をひつぱる。

奥さんがポーチで洋鈴をふつたとき、わたしとこどもは、こどもの言葉で話してゐた。

――Yさん、ゐらつしやい。

前庭のアカシアの下の、戸外の食卓だ。牧夫たちとわたしと、S夫妻とこどもたちはながい板の腰掛に向ひあつてかける。

向日葵が背のびをして、わたしのうしろから、みづみづしい毛の生えた葉と、黄色い大きな花瓣をのぞけてゐた。

足下には、月見草がいつぱい咲いてゐる。露が乾いてしぼんでしまつたら、また今晩咲いてくれ。黄味つぽい、墓場のにほひを夕陽に散らして――。

わたしは、パンとバタでいためた馬鈴薯と乳をたべやう。

——小麥粉だけは仕方がないから、札幌に註文します。

牧夫とゼルシー種畜牛の手入れりことについて話してゐたS氏はわたしにはなしかける。

バタ…地下室のバタ工場で作る。

乳…ふんだんに呑んで下さい。このごろやつとチーズの機械を据えつけて、試驗的に作つてゐます。銀紙につゝんだ黄色いチーズは東京に送ります。

馬鈴薯、トマト、玉蜀黍、玉葱、蔬菜…剪花…

食卓の白い磁器や、ニッケルの乳容器は、ぴかぴかして落付いてゐる。

——朝餐後の小憩。

S氏…外字新聞をよむ。

牧夫…燕麥の處置について話す。

虻と蜜蜂が花卉を訪問し出す。太陽がすこしあつくなる。

わたしと奥さんとは話す。

大きなこどもは——。

植物讀本の繪をみてゐる。

牧草の種類

（イ荳科牧草…レッド・クロヴア。ルーサン等。

（ロ禾本牧草…ケンタッキー・ブリユー・ザラス。レッド・トップ等。

（ハ家畜用胡蘿蔔…ベルギー太白。

陽がだんだん暑くなる。蟬がないてゐる。

——S氏はパイプに火を點ける。

午前九時…。

編輯室より

本號で、女人藝術の一年間を記念する意味で、一年間檢討座談會をした。先月には神近氏の激勵文を載せた。多くの本誌支持者たちが、如何に眞劍に本誌を愛し力を添へてゐられるかゞ、讀者にも感じられるであらうと思ふ。

自分達の雜誌の缺點を擧げた文章を載せるやうなことは、雜誌販賣政策上、他社では決してしない事だと聞く、今は宣傳と賣名の世の中だ。ジアナリズム全盛の時代に、かういふやり方は不得策だといはれる。

併し、私たちは飽くまでも眞卒に自分達の仕事を高揚したい。心ある讀者をして眼を被はしめるやうな美しい胡麻かしに瞞したくはない。世の熱心な讀者と寄稿家とによつて埋められる筈の女人藝術は、自分達の美點を高調すると同時に、缺點をも公平に勇敢に認めて、自分達女性のために手を取り合つて是正仕合はうではないか。

此の際改めて寄稿家と讀者とに希望したい。



比群島呂宋島の北部に住する蕃族イゴロト

比律賓の風物と私

山村八重子

フイリツピンへ行つて見たいといふかねての希望が果されて、私が兩親と共に日本を立ちましたのは大正十四年の春、彼地に滯在すること一ヶ年にして歸つてまゐりました。私がフイリツピンへ行きたい希望を持ちましたのは單に觀光とか旅行の興味だけでなく、もつと大きな希みがあつたからなのでした。

私は幼い頃から何時とはなしに自然科學に興味をもち昆虫類爬虫類、植物から魚貝類などの蒐集をするやうになりまして、女學校時代など朝夕の通學には停車場から宅までの往復を森や沼や草原などを餘念もなくそれ等のものを蒐めてはいろ〳〵な標本をつくる事を何よりの樂しみとして居りました。この蒐集癖とでも申しますか、研究心が熾烈になつて來るにつれ日本以外の、自然物の豐富な國に憧憬れることになりましたが、一つには私の父がフイリツピン群島中のある島に農園を持つてをり、度々の歸國にには必ず何等かの研究資料となるべきものを齎してくれましたりまた彼地に農園を經營してゐる兄も同じ趣味をもつところから、常に新らしい標本を送つてくれましたことが、一層私の研究慾を刺戟したものと見えます。從つて私の旅行は研究と蒐集の目的が主になつてゐたわけなのであります。

横濱を立つて神戸、上海、香港などへ寄港し十日目にフイリツピンの首都マニラ

市に着きますと直に船をかへて父の農園のある島へ向ひました。落ちつく間もなく、兄の指導にてかねての計畫にとりかゝりましたが、その自然物の豐富なることにはたゞ驚くの外なく、研究を志すものにとつて實に垂涎措かざる理想境であること、また人類學地質學上にも研究の資料は無限にあることを知りまして、心は躍るばかりでありました。

フイリッピンは大小七千餘の島から成つており、その一つ一つがそれ〲に異なる風俗習慣や傳統をもつてゐます。しかし私は觀光の方は後のことにして、朝に起き六時ごろには海邊へ出かけます。そして或時は砂地を掘つて貝るいを蒐め、ある時は小艇を浮べて魚類などを獲り、午後は多く野に山に赴いては植物だの昆虫るい、または爬虫類などを渉つて歸りますと夜は專らそれ等の處置整理に費して毎夜寐むのは大抵十二時から一時ごろになります。かうした忙しい緊張した生活を一ヶ年つゞけることによつてかなりの收穫を得、歸國する時には標本類その他研究上の私の荷物だけで大きな箱が七十に餘りましたが、それ等の荷物は便乘した外國船が特に好意を寄せて一つの損傷もなく、而も無賃で運んで來てくれました事は感謝の外ありません。

かうして蒐集しましたものはいつか專門の學者の方にも聞えましたものか、御下命によつてその中の貝類の標本三百餘種と鳥類とを天皇陛下の御研究資料として獻納いたす光榮を擔ひ、尚は東京博物館や農大にもそれぞれ寄贈いたしたのでございます。

フイリッピンの海の美しさ、野の豐さは鳥渡適當な形容詞も見出せないほどです。島から島へ往き來するランチが海のあちらこちらに點々と見え、海鳥が靜かに弧を描いて飛翔してゐます。舟の上から海面を見ますと澄明な碧の水面をとほして鮮影ひらめき、形の面白い魚が群りあそんでゐる。その美しさにはたゞもう言葉もなく魅せられてしまふばかりでした。

氣候は年中大差なく酷暑の頃で華氏の八十六七度、寒いといふ時は丁度日本の初夏のセルに移らうとする頃に適當してゐるのですが、大暑と申しても海風があり日本と違つて空氣の濕潤がありませんから非常に凌ぎよいので、從つて生活は實に簡易です。人々は數少い衣服を絶えず洗濯して着れば足りるのと、食物は豐富、住居は至つて素朴に出來てゐますから簡單です。私も彼地に在る間は專念志す仕事が出來ましたが歸つてからは、生活の一切が複雜なのと獨りだけ習慣を無視するわけにも行きませんので、何かと不便を感じてゐます。

歸つてからの仕事は蒐集したものを分類し整理することで、この爲めに三年を費し漸く此頃に至つて目鼻がついて來たのでした。海底にある貝類や魚類、珊瑚礁などは潜水夫を雇ひました。また鳥や昆虫の採收で山へ行く時には土人と共に馬に乘り、銃を擔つて行く、さま〲な危險を冒したのでした。

鳥類は捕獲しますと直に處置しなければ氣候の暑い爲めにすぐ腐敗します。私は夜は必ず書間のものの整理の時間にあて、小鳥など自分でメスを取つて剝製にし、その他のものをば分類し、アルコールの罎に漬けたりする等、只今から思へばよくあゝした冷酷に似た事が出來たものと考へられますが、すべてはフイリッピンの豐富な自然に刺戟されたものと却つて感謝の念が湧くのを覺えます。

日本では人口が年々何十萬と增加するので、狹い國ではそんなに殖えては困るといふので近頃は產兒制限などを唱へてをりますが、お隣りのフイリッピンでは人口が少なくて困るといつて增加することを奬勵して居るのを見て、その對照が一寸面白く感ぜられました。

フイリッピンは前記のとほり大小七千餘の島嶼から成りその面積十一萬五千方哩、人口一千百二十三萬餘であります。その內九割が基督敎徒即ち文明人で、他は回々敎のモロ族及び所謂蕃人に屬する者でありますが、人口の密度は一方哩に平均百人足らずでありまして、日本の密度に比べますと五六分の一に過ぎないのですから、人口が少なくて困るといふことになるのです。

フイリッピンに住つてゐる人種、種族は多種多様で文明人はタガログ、ヴイサヤン、パンガシナン、パパガン、イロカノ及びビコルの六種であり、非文明人は百種以上もありまして其言語、風俗、習慣等のごときも千差萬別ですが夙に西班牙人の感化を受け、よく泰西の風習を咀嚼し、米領となるに及んで米國式の自由主義が傳播して、起居動作から言葉や服裝、食物に至るまですべて米國流を摸倣する文明族もあれば、未だ僅に木の葉をもつて一局部を掩ふ外一糸を身に纏はぬ蕃族もあります。その智識程度においても大學に學んで最高の智識を實際に應用し敎養あるものもあれば、一方には今なほ原始時代をそのまゝに弓矢や槍をもつて野獸を獲りその肉を食し、野生の果實を常食とするものもあり、甚しきは今だに火食することすら知らぬといふ者もありますし、また海邊を撰び水上に居を構えて漁業で生活してゐる蕃族もあつて私共の想像も及ばぬ千様萬態の國であります。



ヴイサヤン師範學校生徒——フイリツピン婦人の服裝

フイリッピン群島は熱帶地で地質は大抵火山岩から成つてをり、山嶽の起伏してゐる地勢などは我國に似て平地は稀ですが、それでゐて土地は肥え、熱帶的な雄大な樹木やその他の植物で美しく掩はれてゐます。海岸はまた魚貝に富み其の種屬の多様なこと、天然の惠澤のすべては此島に垂るるとも謂ふべきでありませう。

前申したやうにフイリッピンは人口が稀薄で農工業とも發達致しておりませんために人口の增殖に國民一致大いに努め、第一に國民殊に青年男女に運動を奬勵し健康を專ら圖つてゐること、第二に貧しき階級の姙婦の出產期には數日前に一般病院へ無料入院せしめ、出產後も約三週間母子を保護し退院後も嬰兒を養育する資力なきものは、其

の嬰兒を養育院に收容し公費をもつて養育し、子の健康を保護すること。

第三に母乳量の不足やまた勞働のため母乳を適當に產兒に與えることの出來ない者、貧しきが故に嬰兒の榮養不良に陷ることを防ぐために、その家庭には公設市場において最低價をもつて牛乳を販賣すること。

第四に養育院を到る所の市町村に設け、孤兒や貧者の子女を收容し養育すること。斯くのごとく國民擧つて人口の增加し健康ならしめることに努力して居ります。

一方にはまた舊敎寺院內に養育院の設けがありまして中には最も異例なものがありました。例へば子供を分娩しても世間を憚り罪惡を犯す者のためには、最も容易にその子供の養育を托し得る寺院を私は參觀して深く感ぜさせられました。それはマニラ市にある千七百八十三年以來舊敎の尼僧によつて管理せられてゐる、サンホゼーといふ慈善養育院內の棄兒收容所です。

そのお寺は橋の袂の川邊に建つてゐまして門の外側の餘り人目につかぬ所に二尺角位の窓があつて、その窓の側にあるベルを押すと窓が廻轉して、綺麗なレース・カーテンが掛り白い羽根のクッションを敷いた寢臺が現はれ、其の中に棄兒をおいてまたベルを押すと窓は逆廻轉して、嬰兒はそこで養育院に收容されその父母は何等法律上の制裁を受けることなく、嬰兒は直に醫師の診斷を受け保姆の手に渡され溫情ある尼僧によつて育てられ敎育されます。創立以來この養育院に收容された孤兒は數萬に達し成人して社會的に地位を得てゐる者も少なからずとのこと。私の參觀した時の在院孤兒は五百人以上と聞きました。尼僧の努力を思ひ孤兒の將來の幸福を祈りつゝ私共の受けし大なる敎訓を謝す心にて聊かながら寄附をして辭したのでありました。私はこの理想鄕比律賓に再遊する日を、希望をもつて期待してゐます。

福岡　辻山ハル子

どうしてこう人間の生活つて忙しいのでせうか、朝から晩まで、仕事に子供に――女はつかれる、女はつかれる。つて叫びたくなります。

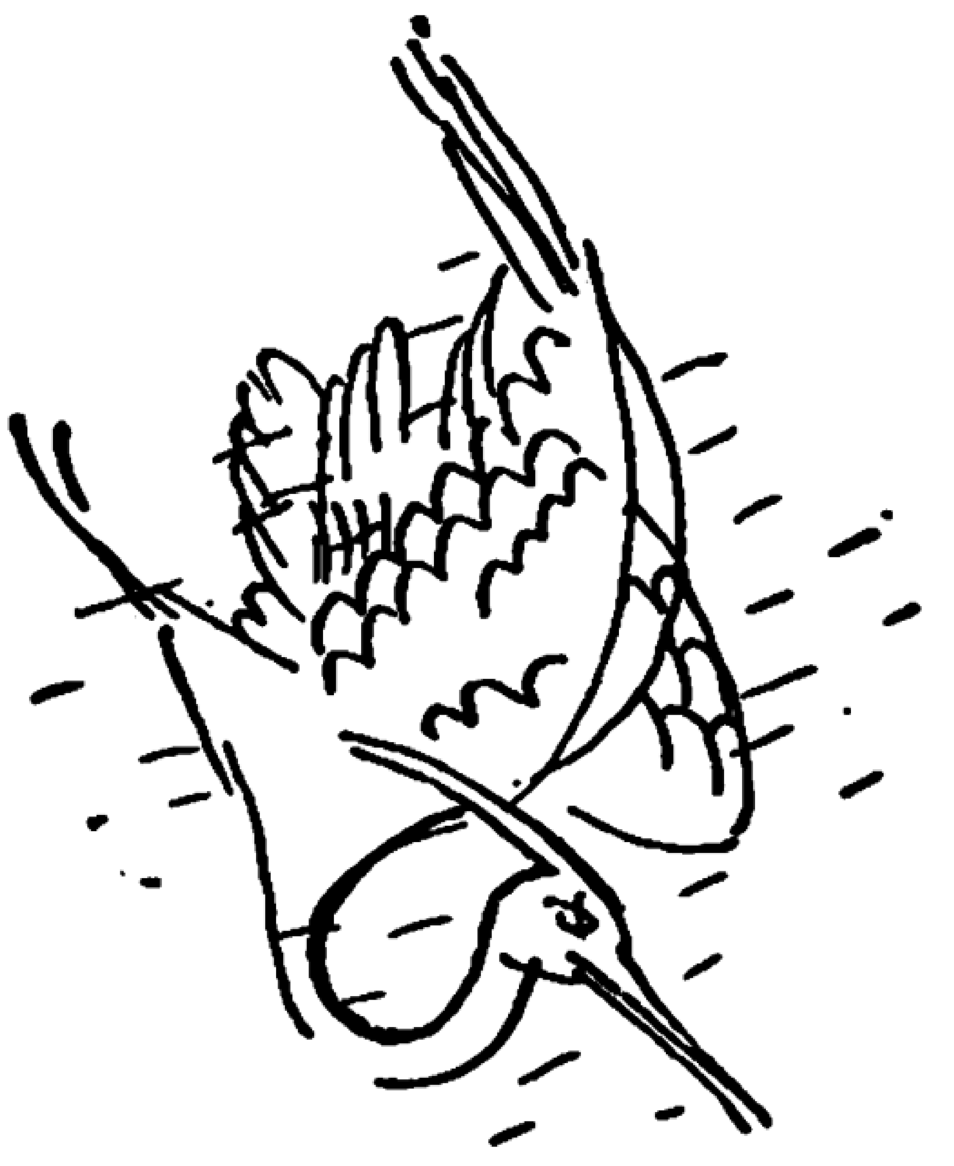
上田樣の「火」拜見しました、大變御勉强でうらやましくてなりません、私もあの方位の頃はよく書けてました。九大の劇の會の一週一度のあつまりに樂しく行つてゐましたし、うちはゆつくりしてゐましたし、ぐんぐんかけてました、でも仕方ありません。子供に手のいらなくなるのをまちますわ、かうして止めないで地方にゐながらも地方にむかないドラマに進んでる。それだけでもいいんだと思つてゐます。上田樣の、私はやつぱり晩春騷夜が一番すきでございます。出來から云へば三作共立派ですけれど、「火」は何だか淺いつてな氣がします。淺いといふより、作者の見方のゆがみ、が、たりないやうな氣がします。作者といふゆがみのある額ぶちに入れて再現した現實が劇ですから――

上田樣の私の作についての御高評でもありましたらおついでの時お聞かせ下さいませ、御願ひ致します。

二伸

甲府方面の講演旅行の記事面白く拜見しました、ぜひこちらにも一度來ていたゞきたいと思ひます。樂しみにしてまつてゐます。

女人聯盟支部の事始めは小さくしんみりした事からと思つてゐます。



紅子

大島の半面

松田解子

『夢の國！　綠の島！』

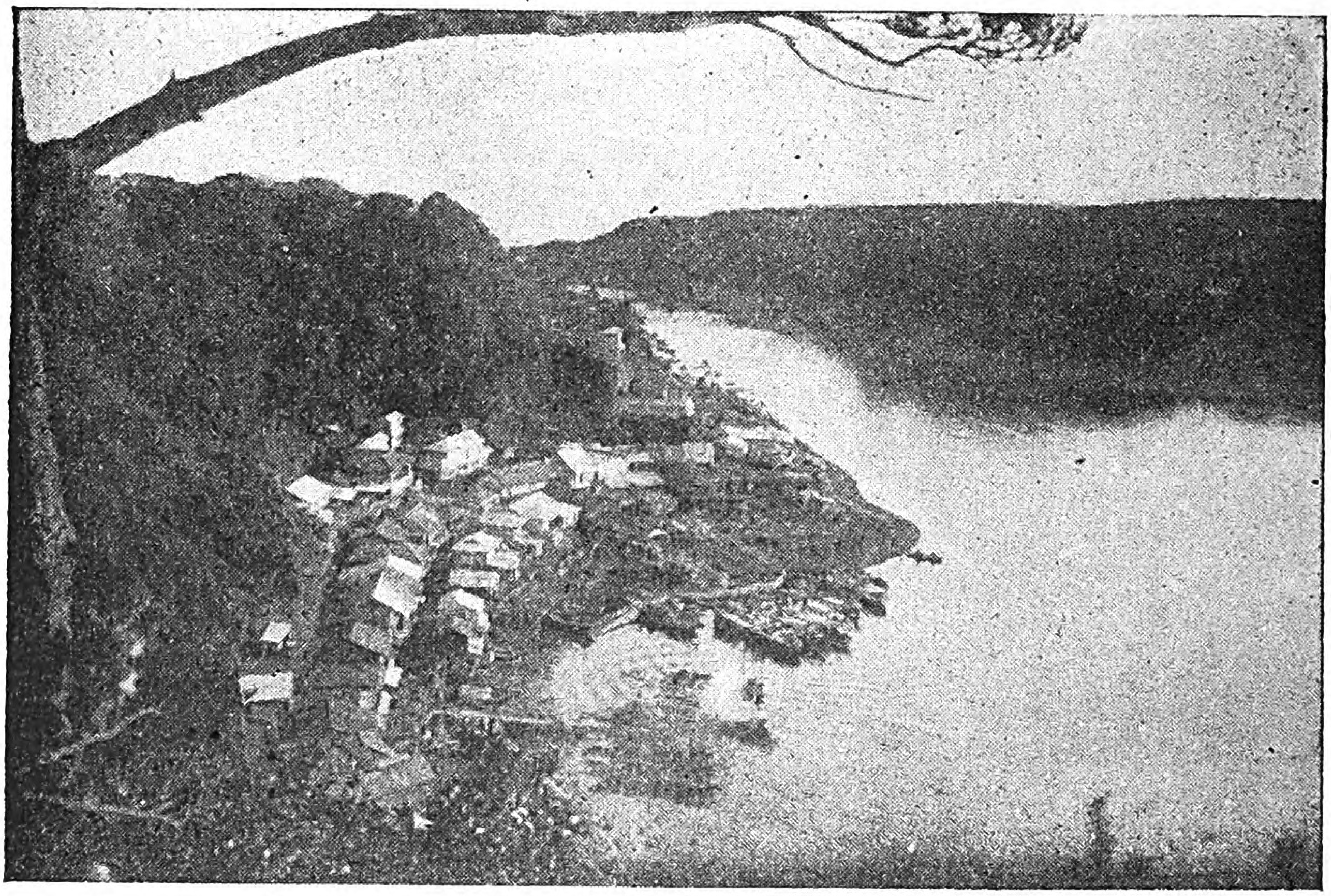
『御神火!!』

東京灣汽船株式會社のポスターは云ふ。

だが、活火山三原の噴煙——御神火は、其の下に屈從する山々の綠の髮を脫ぎ、樹木の思ふ儘な生育を妨げる。夜は薄紅の火柱を立てゝ嘗ての恐ろしい噴火を思はせ、地殼の中に潛む絕大な力が、赤褐色の岩塊でおてだまをとるのも近い、——眩しい程に葉の艷を見せて、執拗に椿は紅を閉く。紺靑を重ねた太平洋、その彼方にピラミットの影をうつす伊豆諸島。すべて之等の風景は、生活苦を忘れて見た瞬間には詩的であり得る。——けれど、トルストイの書いた女中はその敬愛する主人の子か死んだ時、彼女の臺所の用事に差支へない程度に哀哭した。どんな美しい自然も、私達の全精神を奪ひ去り恍惚の中に埋沒せしむべく、余りに生活に對する責務が重いのだ。激しいならひ（北風）に煽られて、どんどんと岸を嚙む太平洋の白い牙こそ、痛々しく敗殘した母をむちうつに充分である。

此處にも周到にさし伸べられた搾取の手。帝國主義的敎化の網。だから何を云はう。プロレタリアに祖國はない樣に、プロレタリアに安息の地がない樣に、『御神火ぐらし』の島の人々は『とぼしうてならぬ』生活に喘いでゐるのだ。

大產業の絕無——辛うじて、牛豚の封建的手飼飼養と、木炭燒きと海藻採取、小規模な職場に於けるバタ製造、椿油精製等によつて立つ此の島は、數人の船持ちと、それを介して肥る東京の大商人からとの二重の搾取に甘んじてゐる狀態——そして此の狀態から一步も脫出せしめない爲めの思想的封鎖の中に在る。傳統が僧衣を着て新時代の思想善導を說き「目覺めたる」青年團員に女子青年團員が伍して鐵砲を擊つ。『國家內の戰爭は出來るだけ避けねばならぬ。然し人生に何時どんな不幸が突發するかも知れない樣に、國際上どんな不詳事が突發して戰爭を余儀なくされるかも知れない。だから吾等青年は、常に國家の爲めに鬪ふ決意と肉體を用意せねばならない。』と云ふ青年訓練所の敎科書は、到る處に行き渡つてゐる。建國會のビラと共に。やがて又より適切有効な方法で、帝國主義的敎化はなされるだらう。が猶一つの希望を此處につなぐ。海を越えて響



波浮港

く被抑壓者の叫びを、一人のたつた一人の少年の口から聞いたから彼は紅椿でお孃さんのために椿油を作るよりは、その執拗な紅さを以て彼の旗を色彩するだらう。明らさまに云ふ。此處にも正當な反抗の形をもとめてゐる種子がある。

一條の川も持たない島では、雨水を桶又は井戸に溜めて飲用水にし風呂や洗濯、掃除等には凡て海水を用ひる。大きな水桶を頭でささげだんだら道を運び行く婦人の姿こそ獨特のものだらう。晴天が續けば飯さへも海水で炊く。陸稻が僅かに產するだけなのでテリコ、トマリクロウ等の甘藷が米穀に劣らず常用され、生活費を低下せしめる隨一のものとなつてゐる。

役の行者の洞窟、爲朝の遺跡、波浮の港の小唄情緒、三原の御神火等々、特異な水汲女と共に見るべきものは數多い。

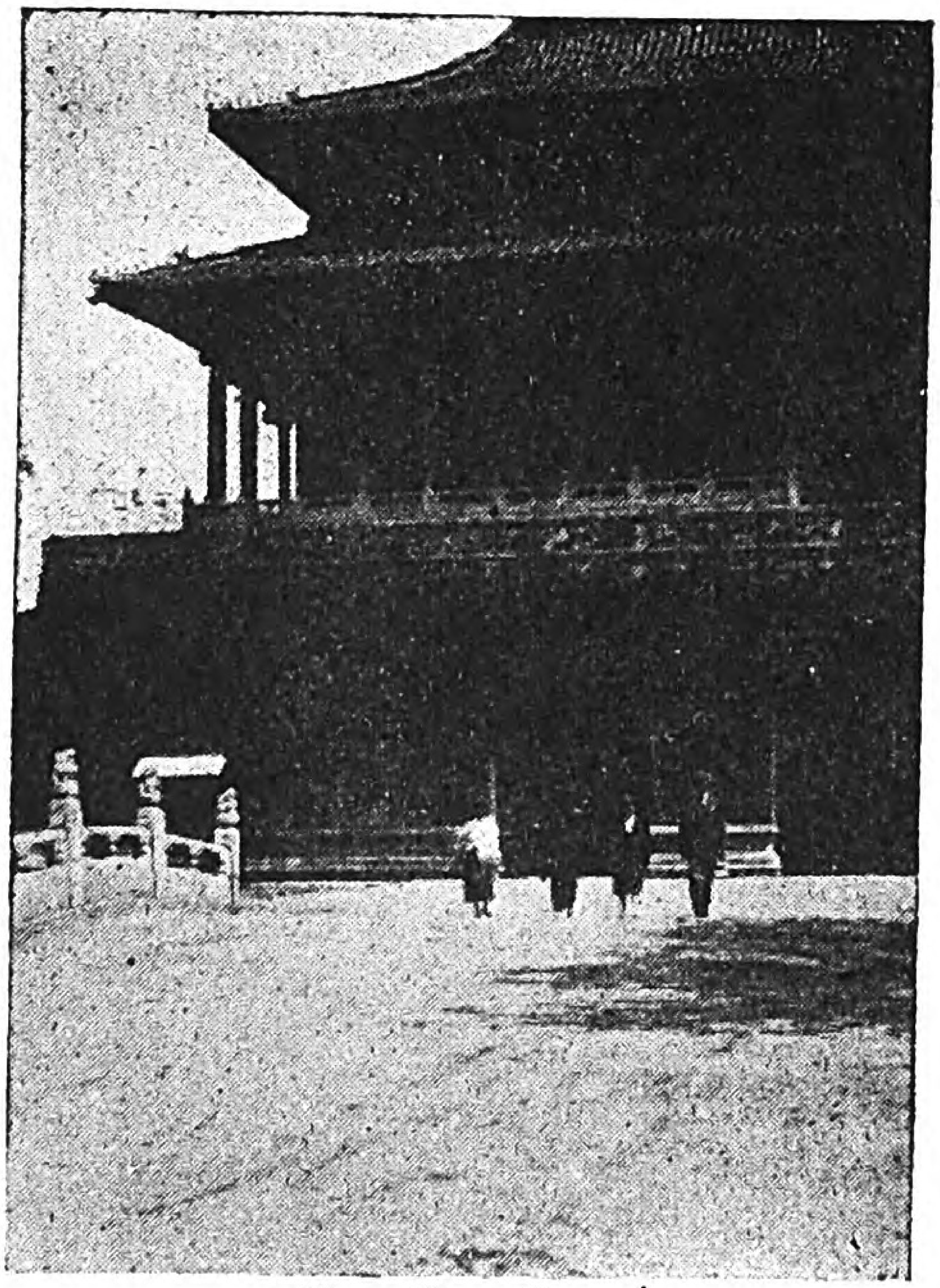
金と時間に倦いてる人々は遊びに來るがいゝ。そして金を流して行くことだ。『島で活(くら)すにや乏しうてならぬ。』その乏しさを生きてる人々に緣(ゆかり)はなくとも、絃歌さゞめくお茶屋も島の人々には不釣合に發達してゐる。

安成二郎

水汲んでかへるあんこや夏の月
短夜の御神火を見し旅衣
みゆきまつ島の夜明やほとゝぎす

白い風

しの・たけじ



内城禁宮

白河

白河の沿岸を、裕々と汽船で天津まで遡ぼつたといふ、二三年前だつたらよかつたらう。渤海あたりから海が濁つて、それが白河の水だときかされてゐたが支那人のジャンクがしきりに櫓を操つてゐる。併し今では、ほんの河の入口の太沽といふところで船はてる。

だが、これは惜いことです。沿岸に揚柳けむり、鴨子が浮いて、水牛がゐて、豚の子が轉がつてゐて、小兒がゐて——其處ではじめて北支那の風景とその生活が目にくるのに、不景氣な波止場へおろされて、いつ出るか知れないといふ汽車へ積みこまれては、急に旅情がこみあげる。もの淋しさと一緒に。でも仕方がないのです、日夜押下してやまないあの濁つた白河の流れが、どんどん埋めてしまうのだといふから、いまに日本まで海も埋めてしまうでせう。

船の事務長から天津までの汽車切符と通貨をくれる——船は天津行なのだから——室ボイやお風呂番ボイが荷物を運んでくれる。苦力は澤山に這入りこんでくるが、油斷がならないのだといふ。汽船ををりると、漠とした灰色の、眠つてゐるやうな邊土——かういつてはすまないが、大中華民國のお玄關口としては、あんまりさびしい。昔、流謫の刑にしよせられたら、こんな氣持ちで、船果てにけりと、おくげさんは日記をつけたらうと思ふほど悲しい。若い苦力がものうげにごろごろ寢轉んでゐる。波止場の構内から出てすこしゆくと、何處からがステーションなのかすぐ汽車が目の前に居て黒い煙りを出してゐる。天津までの仕立なので小さな車室が二ッ三ッつながつてゐるだけで、何時出發なのかわからないといふ。

線路に添つて日本の憲兵屯所がある。日の丸の國旗が立つて、兵隊さんが一人立番してゐる。その屋根を越して汽船の國旗が見える。向ふ側に、煙草店らしい支那の家屋と郵便局らしいものとが見える

から、停車場だらうと思ふ。

二ッ目の車室へ押込められると、ギッシリに詰つて身動きも出來ない。もう一輌連續してゐるのに、乘つてもいいの悪いのとゴタゴタしてゐたが、結局乘つてもいい事になつた。車室は廣軌だから中が廣くて、面白い格好に室がとつてある。窓のところに小卓がはりの板がとりつけてあつて、昔の油壺のやうなかたちの土瓶にお茶を入れて持つてきて置てゆく、汚ならしい。デブ／＼の老爺が、二三人代り／＼に廊下から覗きこむと思つたら、ワンタン屋の雑巾みたいなものを出してやかましくいふ。何のことかと思つたら、顔を拭けといふのださうだが、決して綺麗なものではないと教へられる。全く見てゐると、顔をふいて、最後に鼻をかんでつばを吐いて平氣だ。この汚ないおぢいさんが列車ボイなのだ。

ゴトン／＼と動きだすと、いやあ早いな、今日は素的だといふ。つまり發車時間が支那式でないといふのであらう。窓の外には事務長とボイと、立派な體格の憲兵伍長が立つて敬禮をしてゐる。オヤオヤと思ふと、同室の——汽船ではなみの人かと思つた乘客の一人が軍服で、長いサアベルが網棚に乘つてゐる。

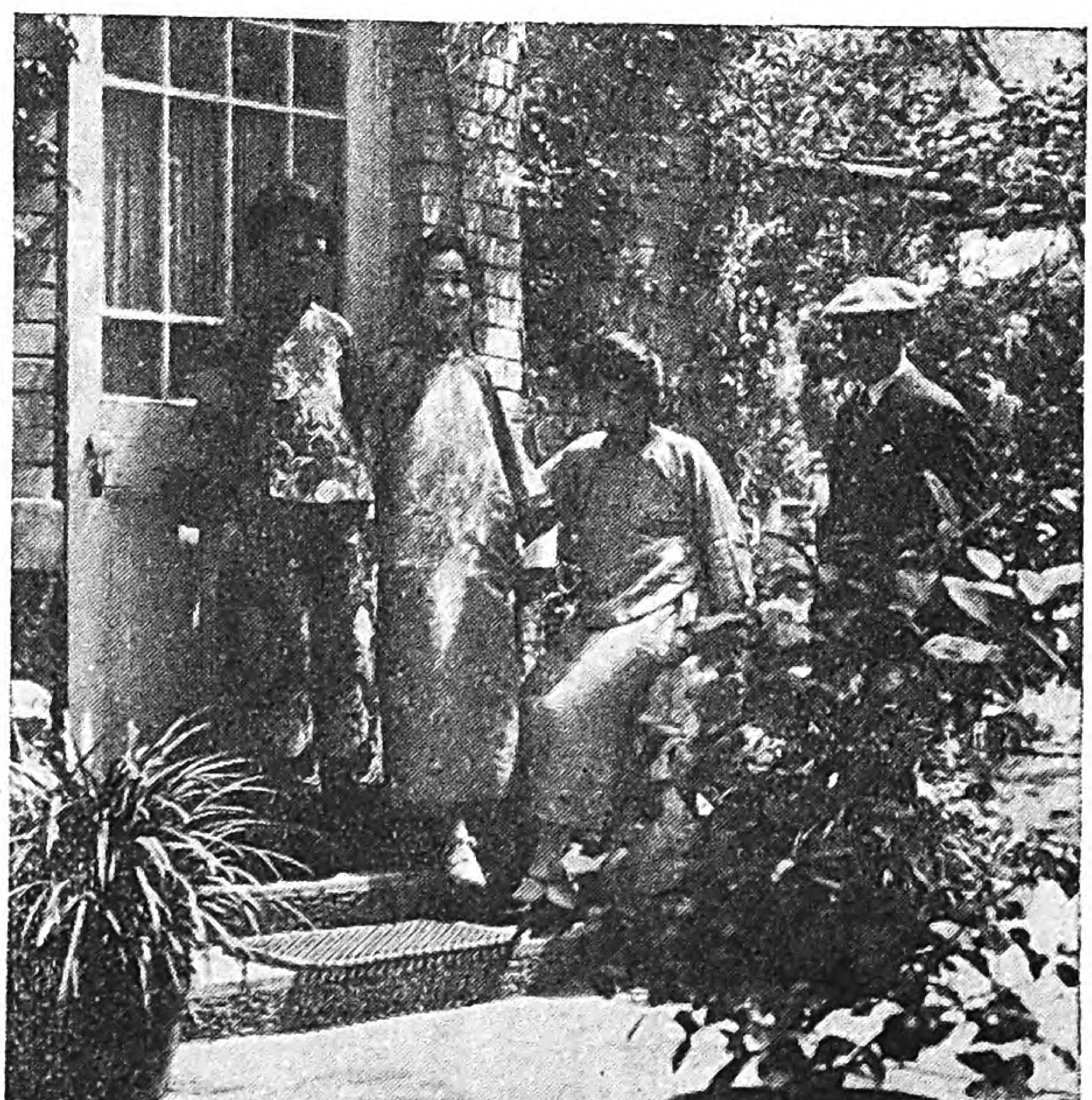
これから天津まで、茫漠としたものです。畑かと見れば鹽田、鹽田かと見ればその中に人を埋めた塚が壘々とあり——馴れた人遥か向ふを指さして、あの、楊柳がみどりに見える帯のやうな一線が、白河の岸の人の住む村だといふ。

アメリカの持つてゐる飛行機場の大規模なのに驚く。およそ、何機、飛行機が並んでゐたであらう、格納庫もあるが、支那は雨のすくない國故出しつぱなしでよいといふのである。あの廣い四邊で、あれだけ目についたのだから、たいした設備であることがわかる。

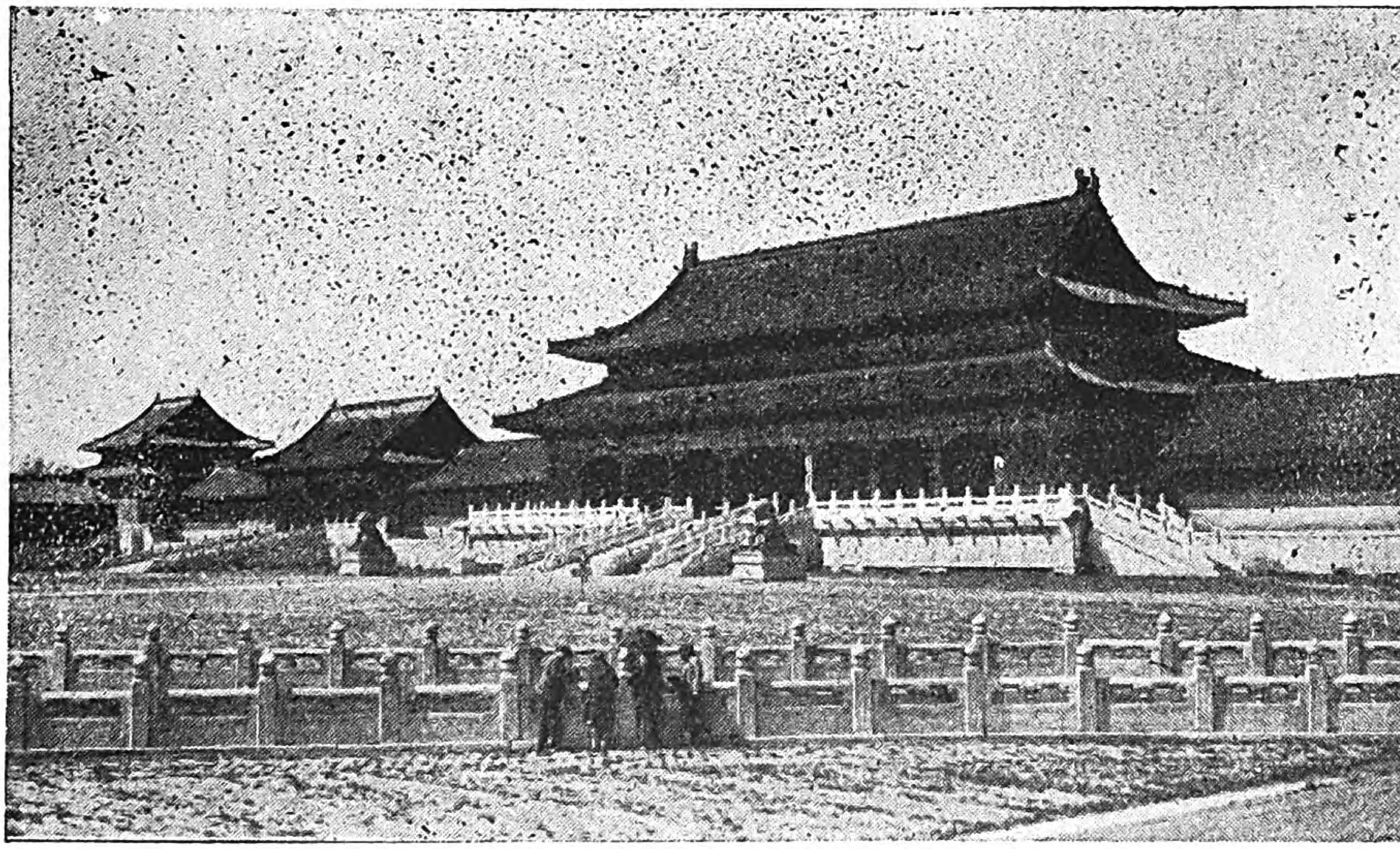
私共がアメリカに感心してゐると、十五年支那に巣くつてゐるといふ人物が憤慨して話すのには、

「アメリカの奴等、飛行機があるのに自働車なんぞに乘つて、平服で遊びに出かけるから、この間も十三陵の方へ行く道で馬賊につかまつて、何もかもとられてしまつて大騒ぎやつた。」

文明はおめかしだから、——ことにおめかしをして出かけた遊山氣分では——舊時代の掠奪方法でやつて來た野蠻人に、すつかりとつちめられてしまつたのだといふ。話してしまつて愉快さうだつた。



北平にて——堂十島、長谷川春子、時雨、三上於菟吉の諸氏



朝陽門內——北平

天津

途中、御所車を、ごくごくお粗末にした格好の乗物を、驢馬が曳いて汽車の通過を待つてゐる。車の中には若い女が居て、子供が後からも顔を出し、懷にも抱かれてゐた。

天津近くなると種々なものが通る。誰やら描く「職人百種」といつた昔の繪卷きものの中にある我古代の風俗と似通つてゐる。長い柄の天びん棒を、髯髭の長いおぢいさんが擔いだり、可愛いい唐子がワアワア叫んでゐたり、驢馬がつながり、人はみな裕長にポカンと口をあいて見てゐる。支那名物戰爭時期でもあつたせいか、木綿のぶく／＼綿入れの兵隊さんと、日本式カーキ色の新式服裝のとがブラ／＼警備してゐる。

セントラル天津といふのに停車する。客車から降りるとすぐ乘れるやうに、澤山な自働車が線路ぎはに並んでゐる。だが此處でをりてはいけないのだ、支那人街の下り口なので、知らないものがをりると非常に金をぶつたくられて、散々な目に逢はせられるといふことだ。すこしゆくと東口天津がある。此處がほんとうの天津の入口なのである。名物苦力が驅附けてくる。うつかりしてゐると荷物をもつてゆかれてしまふさうだが、肩から白布に、文句を忘れたが、運夫だといふしるしを附けてはゐるのだが、不思議なことに若い者がすけなくて、大きな爺さんが多い。出迎への旅館の人たちがグングン荷物の始末をしてゐる。私たちのは都合のよいことに同車した軍人さんが駐屯軍の歴々だつたので、荷物は預かつて貰つた。

天津は實に繁華な街で活氣だつてゐる。大阪と、明治中期の東京下町を一緒にしたやうな氣分がある。荷車をひいてゆく車力などを

見ると、廣重ゑがくの江戸橋ふきんの氣分さへ流れてゐる。河があるせいだと思ふ。河があるから豐かげだといふのも變だが、それほど過ぎてきた道が乾いてゐたのだ。といつて、今朝海から上陸して、ほんのちよつとの時間だが、灰色の天地がボヤとして、空氣が乾ききつてゐたせいでもあらう、橋を見て、水の流れを見たら、それが濁りきつてゐても大變生々した。それは天津といふ土地が、産業が發達して、商工業が盛んなのにもより、物資も豐かだからであらうが――。ある橋の袂に大倉組や三井の材木置場があつた。裸の苦力が玉の汗を流して、積みあげた木材を運んでゆく。一つの荷車に十五六人もたかつて――かこつて、みんな粒々たる汗だ。それらからも受取る氣分かも知れないが潑溂としてゐる。前だれかけ、唐機の着物の日本商人が歩いてゐる。町は、各國人の見本市のやうだ。

大きな洋品店にはひる。御婦人御用うけたまはりはフランス婦人が出てくる。何だかメチヤ〳〵に安さうなもので――松屋や丸善にくらべてさうでもないのだが、關稅がないといふと、品物が少し惡くつても安い氣がするのらしい――浪費ずきの日本人は何かと買はうとする。

日本内地にゐると、支那人は團結力がつよい、そして個性が强いから、何處へいつても一人でも二人でも自分たちの國を造ると――つまり環境によつて自己を變へないといふのであらうが天津へ來て見て日本人だつてさうだと思つた。しかも、妙なお國名物があることだ。天津に旅館兼日本料理の大きな家が幾軒かあり、別に料理店も澤山あり、華街をつくつて藝妓ガール見番まである。盛んなるかなではないか。

――寫眞は北平のですが、天津で紙數がつきました、またいづれ――

松村喬子

久らく御無沙汰致しました。こちらにまた一つストライキがあつて、その方のお手傳ひと五月の町會選擧の下準備の手傳ひとで忙しくして居ります。

實は先生には喜んで頂き度い事があります。それは名古屋の私の居た樓の娼妓から手紙が來たのです。しかも芝の日勞黨内として。

それには名古屋で「お客が持つて來てくれた女人藝術と云ふ本に姉ちゃんの小説が出て居て、何度も何度も御客様に讀んでもらつたのです。ほんたうにそうですわ、姉ちゃんの處へ一日も早く行きたいから今そのすきを見て居るのです。行く時は電報を打ちますからどうぞお願ひします。」と書いてありました。

私ほんとうに先生にも御禮申上げます。女人藝術に私のまづい文が出た事によつて、一人の娼妓でも出られたら、私どんなに喜しい事でせう。もう涙が出て……

それから先日女人藝術社氣付で私宛の手紙をこちらへ御廻送下さいましたのは、私の記憶にはありませんが、私を知つて居る客らしいのです。「女人藝術で君の健在を知つた。遙に敬意を表す。五月號の筆がどんなに展開するか、それを樂しんで居ます。」等と書いてありました

やつぱりこんなのはお世辭が半分以上だらうと思ひますが、それでも何だか始めてなものですから嬉しい氣もします。町會の選擧がすみましたら、ストライキを材料にして何か書いてみたいとおもひますから、また〳〵先生に御厄介かけますがどうぞお願ひします。

燃ゆる頭合評

私はあまりにテンポのゆるいものを好まない、生田さんの小說も、時代が違つてゐるせいか、大變テンポがゆるかつたが、小說の中に流れてゐる眞實は、かなり熱心に讀まれた。

風鈴の中にもつ、主人公のつゝぱなし方は大變に面白いと思つた。

最後の獅子は抗しがたし、は何かおそろしい力を感じる點で、好きであつた。

自然主義時代の一番つかれた影がないでもなかつたが、此人の根强よさと、落ちつきは一種の風格をそなへてゐる。（林芙美子）

――いかにさゝやかな足跡であるにもせよこれは私の花であり實であつた。そして、私はこれより外の私ではあり得なかつた。悲しさ、寂しさもあるが、喜び、慰めもある（自序より）「燃ゆる頭」の中の最も長い一篇「獅子は抗しがたし」についてある時私は愉快な空想を樂しんだ。「何十年、あるひは何百年の後に人も代り、時代も移り著者の名も知れず、ひよつこりと誰かの眼にふれた時、これは珍らしく赤裸に書かれた素晴らしい傑作だ、と呼ばれることがないだらうか。」と。

本が出版される喜びを語り乍ら、生田さんは「本が出來たらぜひ讀んでね。そして私を解かつてね」と云はれた。私は本を讀んで一層生田さんといふ人の好さを感じた。正直な記錄。私は讀んでよかつたと思つた。（素川）

林　芙美子――素川　絹子
望月百合子――今井　邦子
中本たか子――長谷川時雨
堀江かど江

一字一句が血のにじむやうな文字で、心で書かれてあります。讀む私もしみ〲と心に淚をにじませ乍ら、一氣に、夜が更けるも忘れて讀んでしまつたことでした。花世樣の步いていらした道が、詩人らしい美しい甘味のあるお文章で、つぶさに語られてゐるのが世のつねの小說とは異つて、一層身にしみて感じられます。そして花世樣は時代を惱む私達女性の、私達無產者の生活の、よき體驗者でゐらつしやることを思ひます。この正直な女性の姿、赤裸な魂の記錄を前にして、私は深く考へさゝれました。十行寸評の故に遺憾乍らこれだけで燃ゆる頭についての感想をやめます。（百合子）

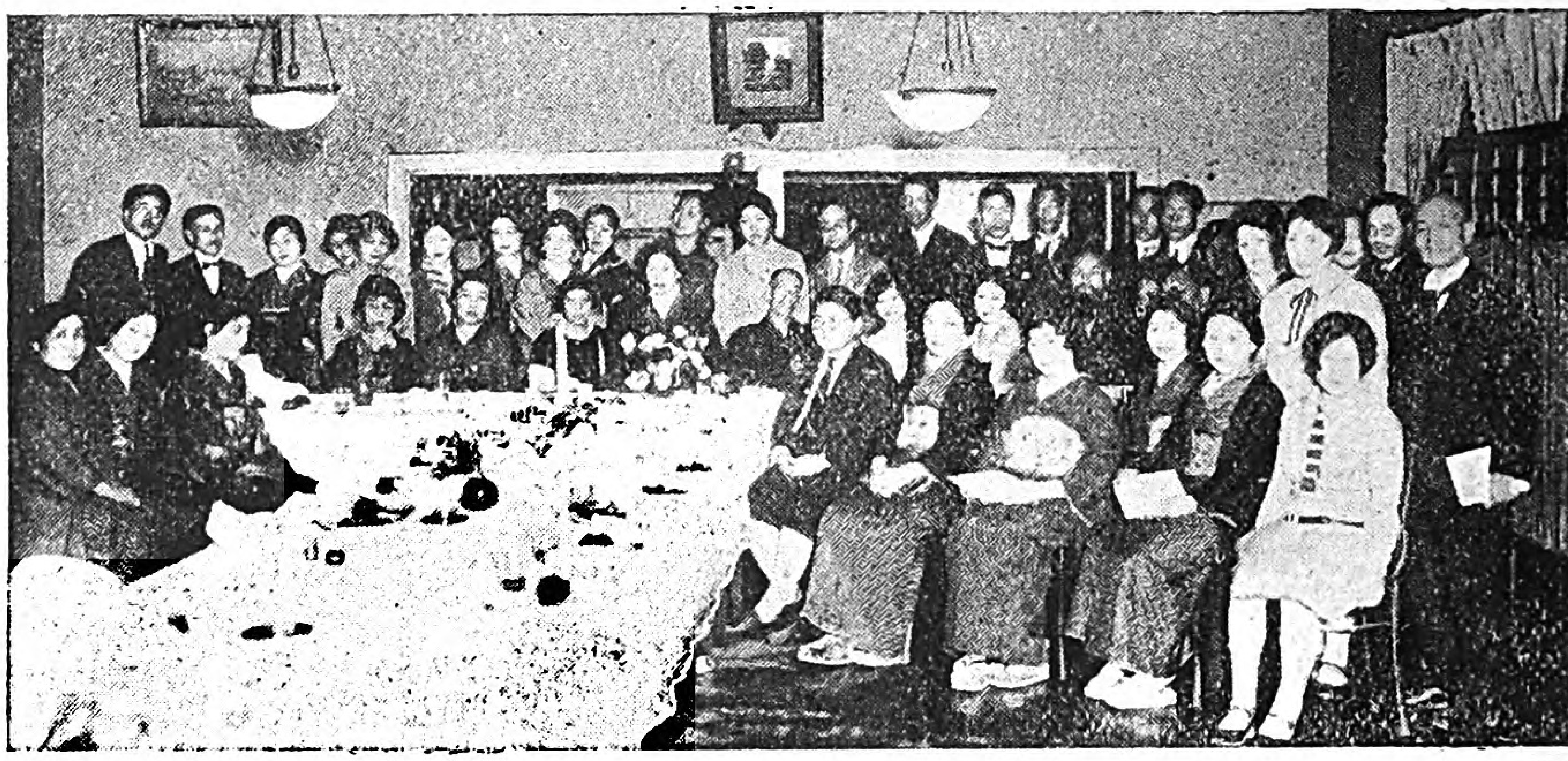
燃ゆる頭一卷におさめられた小說のなかでは、作として一番すぐれてゐるのはやはり「風鈴」であらう。これは諸君の說が一致してゐるやうだが私もたしかにさう思ふ。特殊な性格の二人の女が巧みに明暗をもつて描き出されてゐる。

問題になる作は「獅子は抗しがたし」であらうか、小說としては生地が出すぎてゐるけれど隨筆として讀んでゆくうちに小說的心理境地に引入られてゆく、惱みぬいてゐる女の心が執拗に點出されてその惱みのなかに見る外界のさま〲な動き、たとへば茶屋、神社動物園それ等のものがコマ繪のやうにおもしろく有効に浮び上つてくる、私はそこで息をつきながらうめく人の聲をきくやうに思つた。此作はたとへば仁左衛門や歌六の藝のやうに癖の强さから好く人も嫌ふ人もあらうと思ふ、私は第一に作者の惱みの根氣に感動させられた。

卷頭の燃ゆる頭、此の或る夕の事二篇は、花世さんを深く知つてゐる私には一番親しい同感の持てる作であつた。手法は風鈴等に比べて劣るけれど……私は同情同感の淚なしに此作を讀む事は出來なかつた。（今井邦子）

强い意志、反抗精神、烈しい情熱、この三つのもの〻燃燒が本著の紙背に徹してゐる。一體詩人の小說は力弱いものであるが、これには稀に見る力の充實がある。言葉の素朴さがある。かうした方面から讀む者をぐんぐん捉へて行く。本著に近代的な諸要素、或は明い色彩を求めることは無理である。何故ならば、著者の眼はひたすら思念の中樞にのみ走つてゐるから。隨分長い年月に涉つての作品が蒐められてあるときくが、この中の個々の作品に就いて、さほど年代の隔りを感じない。著者は元氣だ、そして若い。本著は實に時代と共に步く人の姿だ。（中本たか子）

「淺草の鐘」の十七になる娘のお七も、小さなお安も、お蓮も――萬太郎さんの作にもあらはれてくるスタイルであるが、世界はおなじでも、あのお絹といふ婦人が、感じたしみじみした人世は、この作者でなくてはもたないものである。しかし、暗いといはれる作風のなかで、この作の中には苦い中に朗らかさ



がある。押繪の羽子板で、お七がお安の頭をこつんと打つた。といふところである。だが汚れた座蒲團をほどき、細かな埃をあびながら、その古座蒲團の匂ひに、幾千度と乗せた様々の客の身の上を思ひ、心に深い哀愁を催すお絹が心は、人世の荒波に捲きかへされたものでなくては書けない悲しい乾いた動哭である。なんといふさびしい人の世の姿であらう。「群衆と母子」は後半がよく、「ひともし頃の會話」は姉の人世觀があまり深く徹底し、哲人めいたところに、田舎娘でない作者のかげがはつきり見えすぎるのを疵とするほかよいものである。「織子」もよい作で好きだ。その一節に、

肉體よりも長い生命を石に刻んで世に殘つてゐる文字は——と碑のことをいつてあつたのに胸をうたれた。

その他「ほそのを」は七重といふ赤子の死を書いたものに、無心の聖童を中にして、夫の死後に生んだ母親と、婚期のおくれてゐる姉娘が、自分が産んでもいいやうな赤兒に對する情とをなだらかに、誇張もなく、坦坦たる中によく出してゐる。ことに母親がよい。

（妄評多罪。時雨）

生田さんの著書を拜見して、私は、どのお作からも、しみ〴〵とした愛情が感じられました。一々の作品の批評はここには書く餘裕がありませんが、一口にいへば、個人主義的世界觀に立脚した作品だと思ひます。これはこれで意義があるとして、作者がここから社會主義的に働らきかけたなら何意義があると思ひます。私は今後の御作に十分の期待をかけるものです。（かど江）

「燃ゆる頭」出版記念會

四月十六日夜、神樂坂のレストラント尾澤の奥二階に開催された生田花世女史「燃ゆる頭」出版紀念會に、女人藝術社として社長さんと二人でゆく。

會する者、河合酔茗、石川三四郎、室生犀星、新居格、水谷まさる、三石勝五郎氏等々々の男性及び、平塚雷鳥、三宅やす子、岡本かの子、小寺菊子、富本一枝、深尾須磨子、今井邦子、長谷川時雨、若杉とり子、城しづか、望月百合子、加藤武雄氏夫人、中本たか子、輕部清子、中河幹子女史等々の女性合はせて五十餘名の盛會。心中、花世女史今宵の悦びを思ひ一人ほゝゑむ。

長い間ぢつとみつめ、ぢつと思ひ、ふみしめつゝ歩まれた途の身にあまる疲れもなやみも、今宵集まつた方達の心から祝ひたい氣持を感じられた時、花世女史の體の心のすべてからぬぐひ去られた事であらうと思はれる。

コーヒーの香のぼる時、花世女史の希望により參會者全部のテーブルスピーチがはじまつた。各人各樣思ひ思ひのはなしに、祝辭に、笑ひ、しんみりし、感心し、おどろき、心から生田花世女史が、多くのよき友を持たれた事をかんじた。散會十一時、終つて外に出れば春の夜の巷にはまだ人の波がみちあふれてゐた。（みどり）

應接室

貴誌益々御盛榮の段慶賀至極に存じます。さて突然ですが別便で拙稿「自由結婚者と戸主の扶養義務」をお送りしますから、よろしくお願ひいたします。編輯上にも種々御都合のあることゝは存じますが、此の一文の女主人公は、先日赤十字の施療病院で寂しく永遠の眠りにつきました。その追悼の意味でも、ぜひ之を誌上に發表させて頂きたいのです。ハガキで失禮ですが、何卒お願ひいたします——布施辰治

自由結婚者と戸主の扶養義務

布施辰治

この原稿は、私が現に訴訟代理人として、生活權毀後の合法的請求を、東京控訴院の法廷戰に續けてゐる控訴本人に與へた手紙なので、本來を言ふと、玆に公開すべき性質のものではない。併し、只今送達された第一審の判決を見ると、意外にもこの事件の爭點を余りにも時代錯誤な、反動的な戸主權專斷主義に引戻されてゐるので、自由結婚者、戀愛結婚者の戸主扶養義務に關する重大事件として、廣く一般婦人問題研究の公論に訴へざるを得なくなつた。

この事件の發端は遠く露西亞革命當時にさかのぼらなくてはならない。一九一七年ロシアでプロレタリヤ革命が成就した時、全世界のプロレタリヤは、世界革命の曙光として歡喜した。その當時、新潟の一青年は喜びのあまり、ロシヤ革命萬歳！云々と激越な文字を並べた手紙を大杉榮氏に送つた。ところが不幸にしてその手紙は大杉氏の手には屆かなかつた。その代りに青年は警察に呼ばれいはゆる不敬事件として四年の懲役を云ひ渡された。

彼は内藤太郎といつて、新潟縣の大地主内藤彦太郎の別家であつた。太郎の父親は、つとに社會運動に志して、つひに本家を出るやうになつた人で、太郎の手紙が警察の手に落ちたのも、土地の郵便局をしてゐた本家の内藤彦太郎が手紙を開封して密告した事によつた。とにかく太郎はその時やうやく十九歳の青年で、不敬事件の四年に、なほ他に出

版法違反を二年附隨されて、あしかけ七年の懲役に處せられた。

この事件が起る前、太郎には一人の愛人があつた。これが現在の訴訟本人で、越野たい子と呼ぶ女性であつた。たい子は、同じく新潟縣の千萬長者越野甚右衞門の嫡孫で、この甚右衞門といふのは、山林十餘萬町歩、田畑の法定時價二十三萬圓、現金千五百萬圓を擁して、北越の山林王、現金王と稱されてゐる大富豪である。この一家は、時代の風潮を全く他に、未だに家長專制時代そのまゝの家庭で、そういふ大金持ちにも關はらず、娘たちを嫁にもやらなければ、長男以外の息子に正式の嫁も迎へないのである。こゝでは、家長と、家長の嫡子――つまり家をつぐ者――のみが人間としての生活を許されるのみで、その他の子族は家畜と同様に、一生をたゞ飼ひ殺しにされるにすぎない。たい子の母親は同じ地方のやはり地主で須藤隆治といふのの妹で、甚右衞門の長男に嫁いでたい子以下三人の娘を殘して歿くなつた。その後に繼母として迎へられたのは、母親の妹で、現在四人の子供が生れてゐるが、父親はすでになくなつて、繼母と、七人の兄弟は、祖父の甚右衞門の下で生活してゐるのである。

そのうちたい子は、そうした不自由な家庭生活の中にも、太郎と知り合つて、二人は相愛の間柄であつた。太郎が七年間の監獄生活を終るまで靜かに待つてゐたたい子は、やがて太郎が歸宅したのを知るや、不自然な家庭の羈絆を脱し、いち早く太郎の下に走つて、二人は同棲した。

それを知つて強慾な甚右衞門の怒りは激しかつた。たい子の叔父隆治は、太郎の在職せる新潟毎日新聞の後援者で、太郎の本家にあたる內藤彥太郎に談じて、太郎を馘首失職せしめた。太郎が失業して土地を去れば、自然たい子とも別れる事になるといふ考へからであつた。

太郎が上京する時、たい子は母方の叔父に當る須藤與一の下に暫く謹愼滯在すれば正式の結婚をさせるといふ條件で引取られたが、勿論しば〱離別を强要された。やがてたい子がどうしてもそれを肯じないのと、すでに姙娠四ヶ月の身體である事を知つて、世間態を憚かつて止むを得ず上京させたが、心臟病の醫師認定で墮胎を決行せられ、その時は生命を危く取り止めたけれども、その後たい子はずつと病弱であつた。

たい子は郊外の太郎の家に同棲してゐたけれども、どん慾な甚右衞門は病弱で生活能力のないたい子を見返りもしなければ、といつて太郎との正式結婚を認めやうともしなかつた。そこで、甚右衞門の橫暴を憎んでこの生活扶助料請求の訴訟が提起されたのである。しかもたい子が病苦、及び姙娠のために自らの勤勞を持つて生活することの出來ない事實を、現住所轄警察署と、戶籍役場でも證明したので總てが官僚式な裁判所でさへも、「本扶養料請求事件は、訴訟上の救助を附與すべきものとす」といふ決定を與へて、訴訟費用を國庫負擔の下に進められた程であるにも關はらず、且つ被告甚右衞門は大富豪であるのに、たい子の要求が不正當であるとは誰にも認められないであらうと思ふ。

現代、婦人の經濟的獨立といふことが、どの樣に强く叫ばれやうと、又どの樣に廣い範圍の婦人職業が開拓されやうとも、まだ我國七千萬民衆の半數をしめる女性の大部分が夫か、父兄か、戶主の扶養なしに生きて行かれない今日、これは輕々に默過することの出來ない問題であると思ふ。

次に、たい子に送つた手紙を發表して、訴訟事件の成り行きを示し、讀者の批判を聞かう。

×　　×

あなたがどうしても了解出來ないと言はれた判決當日の電報「ホンジツノイヒワタシフリ」の謎を解く第一審の判決書が只今到着しましたから別便速達で御送りします。

この判決書を見られたら、あなたの所謂謎の電報「イヒワタシフリ」の意味をどう解說して居るかは、判決理由說明の當不當を別として、とも角も裁判所の態度方針丈はハッキリと之を了解し得た、夫れ自からなる今後の對策が、當然必然の控訴法廷戰を進めるであらうあなたの決意を疑ひません。だから、私としては、今茲にナマナカの判決批評や今度の對策に就いて、兎や角の意見を述べずに、あなたの判決書に對する所感と決意を伺ひ度いのです。

×　　×

だが、實はこの判決書と一緒に新潟から屆いた二通の手紙があつて、それを此の判決書と共に併せて讀んだ私は、どうしても判決書の大體を批判して今後の對策に關する私の意見をあなたの安心に献じなければならない責任を痛感させられるのです。

その一通の手紙といふのは、御良人太郎君の御親父からの發信で、典雅な達筆でいとも鄭寧に「冠詞御高免願上候、陳者これまで容易ならざる御誠意を以て御取扱被下候嫁の事件は意外にも不利の結果を見伏仰慨嘆の至に不堪候（中畧）甚だ恐縮の至りに御座候得共嫁女越野たい子が病氣の身、殊に姙娠の折柄意外の判決に悲觀して萬一病勢に支障を來たすやうな事ありては、寔に困惑仕候間、忰拜趨の折充分慰安の言葉を御傳へ被下度候又今後の對策に就いても氣の毒なる嫁女の爲御援助相成度萬々奉願候」と走らせてゐます。

然らば他の一通は――

夫れは本件訴訟の對敵でこそあれ、あなたの血を遡つた祖父甚右衞門氏の、昵懇者に放言せられたと言ふ其の放言の傳聞を通信して來たものですが、その余りにも對照の妙の甚しい放言を拔萃するに忍びません。が然し、私にはそれ丈太郎氏御親父からの愛情に感激せしめられるものがあるので、玆に判決書の批判と今後の對策に關する意見の大體を述べて、あなたの御安心に献げるのですから、どうか靜かに落着いてこの手紙を讀んでから、判決書を讀む様にして下さい。

×　　×

判決書の主文が、マザ〳〵と原告の申立てた壹萬貳千圓の請求全部を棄却して居るのが第一にあなたの胸を打つでせう、だが判決理由の事實認定は、些しの虛構も、誇張も無い原告主張の事實全部を殆んど其の儘に「(1)原告が被告の長男亡求長女直系二等親嫡孫にして且つ被告の戶主たる越野家の家族たることも、(2)繼母ミイが被告の扶養に依つて生活してゐることも、(3)被告が原告主張の如き富豪にして原告を扶養し得る資產家なる事も、(4)あなたが大正十五年十二月當時姙娠四ヶ月の身を以て東京に追ひ出されてから心臟疾患を發病し、醫術認定の墮胎手術に依り、辛じて生命を取り止めたる事も、(5)目下も前示疾患が、治療せず、且つ姙娠中なるが故に自己の勤勞に依りて、生活を支持することと能はざる事も、(6)あなたがヒヨッとして生命を保持し難き重體なる事も、全て原告の主張通りに認められて居るのです。尤も以上のやうな原告の主張は如何に非道い裁判所でも、相澤博士が「――越野たい子を診察したが、心臟瓣膜症（非常の壓症）と輕度の腎臟疾患で姙娠の危險な事を注意した――」と證言し、依田醫師は「小谷醫師の依賴により越野たい子の姙娠分娩を危險とし墮胎手術をしました」と證言し、夫れに警察署と町役場の

貧困證明が之を裏書きして居るのですから之を認めなければならなかつたのでせう。

斯うして判決書は立派に甚右衛門氏のあなたに對する「扶養義務の負擔を認めざるべからず」と說明して居り乍ら、昭和三年一月からの請求に就いて、さも原告が不當な請求でもしてゐるものの如く、「——過去に於ける扶養料は扶養權利者が扶養義務者に對し扶養を受けざるべからざる狀態にあることを通知し其の義務の履行を求めたるに義務者が之に應ぜずして遲滯に附せられたる場合以降の分に限り之を請求し得るものと解するを相當とす」と言ふて昭和三年一月から七月迄の原告請求を棄却してゐるのですが、これは何んと云ふ白々しさでせう。原告は此の點に關する請求を大正十五年十二月から工藤吳市の手を經て、あなたを上京せしめる際に、あなたが太郎氏の兒を姙娠した以上、必ず正式の結婚も取計ろうし、又將來の生活をも保障すると欺いて、病苦と生活難に陷れた事實を擧げて被告の扶養義務を求め、その事は內藤信太郎證人も「——生活に困つて此際何んとか補助して吳れ、と言ふて窮狀を訴へて來た事はありますが、甚右衛門が補助しないのです、太郎(たい子の同棲の夫)に對しては太郎の本家から暫らく補助して居たのですが、越野家からそんな事をしては故なく越野家が補助をしない樣で惡るいから止めて貰ひ度いと云ふので內藤家で停止した」と證言して立派に他からの補助さへも故意に妨げて居る甚右衛門の無情を立證し、甲第三號證工藤吳市氏の手紙にも「內藤太郎氏の件につき、重ねて御芳書に接し恐縮に存じ候が實は越野氏にては爾後たい子には決して構はざる事に致し居り‥‥」と其の扶養義務不履行を立證したのに、あらうことか、無いことか、判決書は內藤信太郎氏の證言も工藤吳市氏の手紙も措信しないと一蹴して居ます。だが私に言はせると內藤氏も工藤氏も被告の通謀者であり、又、資本家地主階級仲間の縣議と衆議ではありませんか、それでも被告に都合の惡るい事は信用しないと言ふのだから勝手過ぎませう。——知らず、控訴院の法廷戰は果して之を何んと裁判するであらうか? それは素より今後の鬪爭次第だと思ひますが、恐らく問題になりますまい。

× ×

次ぎに判決書では

(1) 七年久戀の結婚でも戶主の同意せざる所謂自由結婚は、不義の私通者として取扱はるべきものか?

(2) 年齡も、敎育程度も、すべて好配偶者たることを認められたる戀愛の爲にでも、祖父の同意を得ざる嫡孫は、所謂千萬長者の祖父に窮死させられても致方の無いものか?

(3) 親族相互扶助の生活權を保障する扶養義務の履行は、所謂飼殺しの捨扶持でよいものか?

を大いに問題にして、「相思相愛の男女が別居せざるべからざるが如きは素より情に於いて忍びざるものありと雖も、自から生計を維持するを得ずして他人の扶養を受くる場合に於いては、此の如き苦痛は之を忍ぶべきを當然の事理とするが故に」と說明し、一も二もなくあなた方達の自由結婚を根柢から踏み躙つて之を引き裂かうとしてゐます。

だが判決書は、さうした理由を說明する前に、原告は訴外內藤太郎と事實上の夫婦關係に在りて之と同棲しつゝあり、而して右太郎は年齡に於いて敎育程度に於いて原告の好配偶たるのみならず、兩者久しき想思相愛の間柄なれば右同棲生活を繼續すべきは當然であると認定して原告主張事實全部の眞正を如何ともする事の出來ない立證に服して

ゐるではありませんか。然かも、あなた方達の同棲を正當ならずとして原告の請求を棄却すると云ふ判決は、丸で戶主權專斷判決ではありませんか？ が然し、私が斯うした專斷判決の毒殺を發見した以上、控訴判決にまでも其の毒を盛り續けさせる事は斷じてないつもりです。

夫れは、あなたをダマして上京させた時に彼等が自から扶養義務を承認して必ず送金すると言ふてゐた事實と、彼等があなたの上京後澤山の金を送つて居るやうに虛僞の宣傳をしてゐた事實を最も確實に立證し得ると信じますから。

× ×

斯のやうに第一審判決書を批判して來ますと、矢張り問題は「相思相愛の男女が別居せざるべからざるが如きは素より情に於いて忍びざるべしと雖も」にあるのですが、此の雖も……は果して、夫れ程の問題たらざるを得ないものでせうか？

原告の妥點に關する主張は、あなたが訴訟提起の理由手記に綴られた戀の七年間をあらゆる誹謗と嘲笑の中に待ち遂げた事實を擧げ、然かも夫れは決して社會通常の好配遇たる事を許されないもので無い事を力說し、またカトリックの新潟教區長として、且つは新潟第二中學校創立の發起人として人格德望並び無きチエスカ氏は、太郎氏もたい子氏も共に素直な人で太郎氏は語學がよく出來るので飜譯を手傳つて吳れ、たい子氏は病弱ながらも相當敎育のある人で夫婦仲も良く適當な夫婦として夫の飜譯を手傳つて居ります、といふ最も誠實な供述を以て其の主張を是認して居ます。だから、判決書でも此の事實を「其の年齡に於いて、教育程度に於いて好配遇たるのみならず、兩者久しき間の相思相愛なれば――」と認めて居るではありませんか。

然かも尙あなた達の同棲を引き裂かうと云ふ判決文の說明は抑々何を意味するものでせうか？ 夫れは所謂自由結婚否認以外の何ものでもありません。だが、法律的に考察せられる、所謂自由結婚とは戶主の同意權を突發した婚姻のことで、民法第七百五十條の第一項「家族が婚姻又は養子緣組を爲すには、戶主の同意を得ることを要す。」に違反して第七百七十六條「戶籍吏」は婚姻が第七百五十條第一項の規定に違反せざることを認めたる後に非らざれば其の屆出を受理することを得ず、但し第七百五十條「戶籍吏」が注意したるに拘らず當事者が其屆出を爲さんと欲するときは此限に非らず」の結婚を指すのです。故にこの場合に許されたる戶主の權利は復籍拒絕の權限のみなのであつて、決して直系尊屬卑屬の扶養義務といふ戶籍の移動に關係のない血族關係の相互扶助を結びつけられたものまでを拒み得る權利を許してゐるのではありません、にも拘らず原告の扶養權利を主張する二つの理由即ち (1)あなたが彼等の戶主たる越野家の家族たる事と、(2)あなたがその直系一等親嫡孫たる事を認めてゐながら、漫然自から生活すること能はざるものは、すべからく戶主權の膝下に食を乞ひといふ戶主權專斷主義を眞向ふに振り翳した判決書は、所謂自由結婚の成法的に容認せられる現代に於いて、餘りにも沒常識な時代錯誤でなければなりません。と同時に法律的考察の粗笨、殆んど問題にならない暴斷であります。

況んや裁判所は四回の口頭辯論を開いて、原告の主張する全べての事實が立證せられさへすれば、其の請求を可なりとするか。故に、幾多の證據調べを許したのではありませんか？ そして結審せられたのでせう。第一にも戶主權の專斷に服せずして自由結婚の

戀愛に走つた嫡孫には、祖父に扶養の義務なしと言ふ最初からの意見だつたら、何にも四回の口頭辯論を開いて訴訟費用救助の國庫負擔を無駄費ひさせたる證據調べの必要が無かつたでせう。

然るに、事實は東京の裁判所に囑託したり在日外人を證人に煩したりした幾多の證據調べを容れて一端の結審をつけ乍ら、再び判決の言渡を延ばして、原告の請求全部棄却を言渡したところに、あなたのどうしても得心の行かない謎が潜められてゐるのかも知れません、だが、私は今、玆にそんなことは言ひません。

それよりももつと大事な問題として是非あなたに最後まで戰つて貰はねばならない事は扶養權利者の權利内容に關する判決書の暴斷です。何故なら、苟くも、人間が人間として生きるべく扶養の權利を主張することは決して犬や猫が飼殺しにして貰ふのとは違ふからです。

×　×

私共人間の最も人間らしく生くべき問題の戀愛こそは、眞に最も生き甲斐ある人間の尊嚴なのでせう。然かも、夫れが七年の久しき、…太郎君の思想事件に連坐した…あらゆる誹謗と嘲笑の中に血涙を以て耐へ忍んだあなたの鬪爭こそは、實に戀愛至上の何ものにも打ち勝つた凱旋の同棲でなければなりません。と同時に所謂戸主權專斷の反動的自由結婚否認論を以て引き裂れるやうな、安價な同棲では斷じてない筈です。

處が、不幸にも、亂暴にも、夫れを引き裂かう、夫れを蹂み躪らう、そして犬か猫かの飼殺をして貰ふやうに扶養して貰ふといふ第一審判決こそは、誠に人生の尊嚴冒瀆です又、戀愛神聖の汚損です。萬一にもあなたの扶養を受くる權利の内容が…果してそんなものだとしたら彼等の扶養義務はブルジヨア道德の飾物です。又、詐欺の看板です。これまで裁判所に持ち出された扶養義務請求事件の義務者は大概有産者です。而して社會的に、道德的に許されない近親者を見殺しにする冷血無情の沒義道漢のみなのです。にも拘らず、そうした沒義道漢に立派な扶養義務を認めながら、扶養權利者がその沒義道漢の膝下に屈伏しなければ扶養される拚扶持を投げ與へられないとは何事でせう。

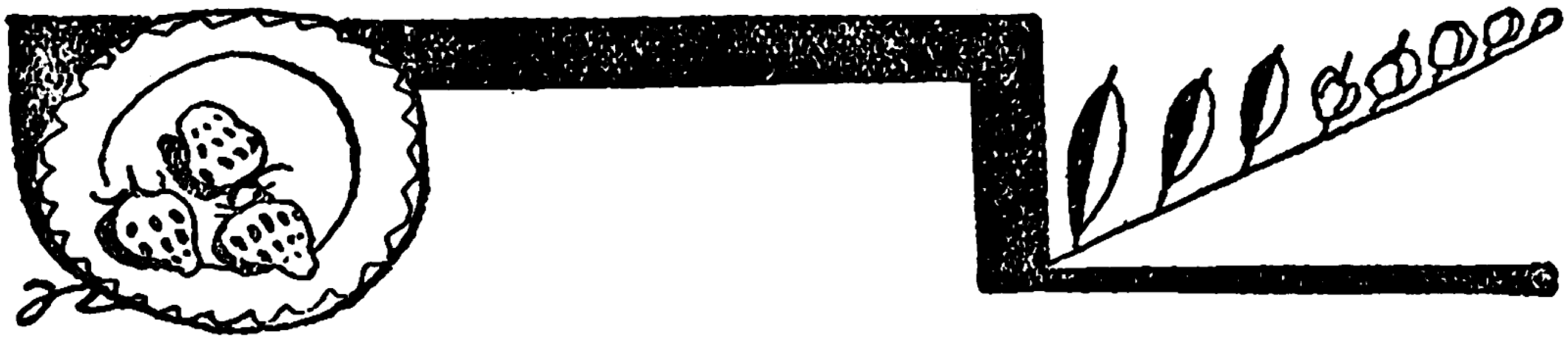
更らに、更らに、實は書かない心算だつた他の一通の手紙…あなたの祖父の放言を傳聞して通信して來た…「どうせ勝てる事件とは思つてゐなかつたが、どうしてか裁判所で勝たして貰つたのは有難い、一審で勝たして貰へば、此の後、控訴を申立てられた處で、夫れまでは肝心の本人が持たないだろうか…とあるのを讀んだ私はどうして此の事件を戰ひ拔かずに居られませう。

×　×

詳しい事は、控訴審の法廷戰に正々堂々の論陣を張つて、廣く、自由結婚者の爲に餘りにも時代錯誤な反動的戸主權專斷主義を粉碎するであらう事を期します。

新刊紹介

九條武子夫人書簡集──本書は九條武子夫人のつくりかざらざる人間的方面の姿を十分に傳へてくれてゐる。「馴れぬ仕事いたしをり候」とか、「梅の花もかはいさうに」とか、「心あわたゞしう」とか「よしきりの聲を夢にいれて」とかいふミダシを讀んでも分るとほり、こゝには素顔の麗容がほほゑんでゐる。宗教からの訓練と趣味生活からの練り上げられた女性美とがこの人一身によつて完成されてゐる觀がある。すでに良書の定評あるもの。(定價一圓五十錢　實業之日本社)



自畫像

小野春子

此方(こち)へ踏み入るほかに道はなかつたが幸福になるべき方向に走つてる道なのか知ら？
夢のやうに高く聳えてうち建てた希望の塔の壞(くづ)れたさみしさ
希望は見失ひ目的は奪はれ夢は破れ白痴(ばか)になつたこころ
何もかも失はれたがそれでもまだひとつの戰ひが殘つてる心
をんななみにとりあつかつてもちちははよあたしのこころがみとめないぢやないの？
あることをひそかにおもひめぐらせばははのなげきがふりかへられて
死ぬことをいつかおそれぬやうになり心の用意は出來たのだけど
ちちははの愁ひをよそに生きるのだひとつしかないいのちを惜しむで
なんと言つたつて死んでしまへばなにもかもゆるされるだろうとおもふなぐさめ
親の慾子の望みどちらを先(さき)にとほすのがほんとうだらうなんて！わかりきつたこと
自己を生かすことが第一ぢやないの？　まだこれからといふ若さじやないの？
一代をすぎてしまつたちちははよ知つてゐるでせう滿たぬがこの世のならひといふこと
おもひ〳〵に欲する道を踏むで來た親子ぢやないの？恨みつこなしよ
利己の一念に子等の自由をみとめないここにも見出だすどれいと專横

母にかはつて働いてゐるんだもの！それで滿足なの？さうして一生を棒にふる氣なの？
うす汚ないこの顏この手たれがためによそほひこらす必要もなく
世の中へはぢをさらしに來たあたしかとつく〴〵おもひしみ〴〵さびしむ
失つたはずだがとあたしはおどろく突然に浮んで來るまぼろしである
ぬりかへればま新らしくなる壁のしみのやうにあたしのこころのしみも消したい！
冷淡でそれをひとつの誇りにもしてゐたことがいま悔やまれる
そんなこともあつたつけか？とおもひ出してつく〴〵自分があさましくもなる
もしほんとうにそのほうに氣が向くのならそれもよからうと答へる心
春の土がもろくくづれてゆくやうに運命の前にくづれかけたこころ
だきしめても石のかなしさこの胸が冷えてくばかりよさみしいこのこころ
まぼろしをいつかつめたい石ころにみかへたあたしのかなしいこころ
石を抱けば石のつめたさ痛いほどあたしの胸の骨にしみ徹る
石とおもへど胸に抱けばしみ徹るつめたい石をつひになげうつ
やれ〳〵今日もまた暮れたぐつすりと寢入ろうそれだけが勞働の報酬なんだ
あーあ　どうにでもなるがいいんだと自分を放り出してまた拾ひこむ
こんなことにいつかなるのぢやなかろうか？とあやぶむだことだ優柔の子
自分にもどうなるのだかわからない轉々としてすぎた若い日の夢
行末のことはなるにまかせてをくことにしてぽかんとあいた心の洞窟をなんで埋めるの？
自分のことさへひとつもおもふやうにならないあたしあなたとの約束の果されないかなしさ
片戀とあざけりますないつまでも守りつゞけるすなほな心を



聖母のゐる黄昏

大田洋子

一

とろ〳〵と燃え乍ら太陽は水平線へ落ちて行つた。島の傾斜面に建つた燈臺守の白い洋館は薄桃色に濡れ初め、海は爛れるやうに眞赤な波をひろげて來た。
だが火喰鳥(ひくひどり)のやうに輝いてゐた海も、陽が沒してしまふと蒼白い空漠とした海に返つて、やがて潮の香から匂ふやうに浮び上つた滿月がのぼり、白帆をまつ蒼にぬらしながら、島をめがけて歸つて來る船が、町の港から黑黑と續くのだつた。
　海に面した丘には、月見草が一面に咲いて、したゝるやうに黄いろだつた。牙は月見草に包まれて、捨てられた小犬のやうに座つてゐた。彼女は白い手拭で小さい頭

を包んで、半幅の赤い帶を締めてゐた。眼は青く澄んでちつとも動かなかつた。ばら色の頬や、血の滲んだやうな唇や、ふつくらした耳朶などが、彼女をはつらつとした美しい娘に見せるのだつた。肩や、盛り上つた胸のなだらかな線は、島の若い男達の眼を惹いたが、彼女の若々しい下腹のふくらみは、誰にも氣づかれなかつた。彼女の足は、ひざ頭の關接から內側へ向つて彎曲してゐた。彼女の腰は步く度に踊るやうにゆれ動いた。

この小さい島は永い間無自覺に續けられた血族結婚のために、不幸なしめつぽい影につゝまれてゐた。暗い苦惱がどこの隅でもうごめいてゐた。低能兒や、狂人や、畸形兒が、亡靈のやうに土藏の窓や、檻の中から血の氣のない顏を浮び出させてゐた。同じ姓名を持つた子供たちは、學校でも、姓を呼ばないで、名前だけを呼び捨てにし合つた。島は肉親の集團だつた。

冴の兩親も、其の兩親も從兄妹同志の夫婦生活の中から暗い運命を自分の子供たちの上に落して死んで行つた。冴の兄は、何時も少し口を開けて笑つてゐる程度のお人よしだつた。そして彼女にはもう一人不幸な弟があつた。弟は十二の時、急性腦膜炎を起して白痴になつてしまつた。島の人達は狐がついたのだと云ひ張つた。

二

彼女はさつきまで丘のふもとで草を刈つてゐた。彼女は毎日たつた一人で野良の仕事をした。朝暗い內に食事が濟むと、兄は其の場で、その日の仕事を彼女に云ひつけた。彼女は素直にうなづくと、素足に草履を引つかけて、黑い手甲をはめると、鎌を持つて、山峽の家から快活に、露にぬれ乍ら丘の方へ降りて行つた。

彼女は今、自分で刈つた草に縋つて、家のことを思つた。兄には最近、花嫁が來てゐた。花嫁は脊の低い足の太い女だつたが、氣立のしつかりした優しい女だつた。夫婦は睦まじさうだつた。兄は牛を飼ふことを忘れて花嫁の顏ばかり見てゐた。花嫁は白粉を白く塗つて、いそ〳〵と家の中のことをした。あぐらをかいて間斷なくぶつ〳〵とつぶやいてゐる弟に、食事を進めてゐる花嫁の姿を見ると、冴はたまらない親しみを感じた。島の人達が漸く、血族結婚の弊害を口にするやうになつたのを、ぼんやり知り初めた冴は、自分達と花嫁とが、他人であることにも新鮮な幸福を感じてゐた。

彼女はもう、今までのやうに、自分は急いで家へ歸らなくてもいいのだと思つた。表の間で、海の見える方へ向いて坐つたまゝ、黃いろい歯をむいて無心にしやべり續けてゐる弟の姿は、彼女の心を鉛のやうにしたが、花嫁の側に坐つて、甘い思ひに浸つてゐる兄のことを思ふと、彼女はしみじみとした寂しさや、明るい安心につゝまれて放心した。

ふと、低い男の聲が彼女の方に流れて來た。『こんなに遲くまでやつてるのか』と男は云つた。彼女は腰を曲げて立つたまゝ身動きが出來なくてじつと男を見た。よく、いたづらにからかひかけて來る

島の若い男達ではなかつた。絣の着物を着て黒い兵古帶をしめた、背の高いきりつとした青年は、誘ふやうな微笑を浮べて彼女を見た。

『お前は冴と云ふ娘だらう。僕を知つてるかい』

冴は、その青年が徹司と云ふ名で、醫者の息子だと云ふことを知ると、なぜか、ぞつとした壓迫を感じた。彼女は何の親しみをも持てないこの青年の、美しさに淡い羞恥を感じ初めると、火のやうに心をおどらせた。彼女は、無意味ににツと笑ふと、徹司に生々しい眼を投げた、それは、許しを乞ふ奴れいのやうに儚い仕草だつた。彼女はよろ〳〵として、曲つた足を後ろへ引いた。

『あぶないよ、鎌があるぢやないか』

徹司は彼女の足元から鎌を拾ひ上げた。

『けがをしないでくれよ』

彼は親しみ深い眼を、彼女のひたいの方へ近づけるやうに立ちふさがつて來て、彼女の肩に手をかけた。

『もう歸るんだらう。遲いからもうお歸りよ。お前の家の近くまで送つて行つてやるよ』

冴は、うつとりとして歩き出した。

『お前のその足は痛くないのか』

『雪のふる頃になると、少し痛いけど』

冴は、あはてゝ轉ぶやうに丘の向ふ側を駈け降りた。降りるとすぐ、彼女は向ふの山峽に見える彼女の家の灯に吸ひよせられた。夏大根の葉が、むれてゐる畑の中の小徑へ彼女が足を踏み入れやうとした時だつた。彼女の體は、ふんわりと抱きかゝへられて、輕々と暗い萩の木の根元に持つてゆかれた。

『今夜俺のお嫁さんになるんだ』

青年は彼女の脊や腕をなでて、猫を馴らすやうに甘い聲で云つた。冴は死んだやうに眼を閉ぢて、息を殺してゐた。萩の花の苦甘い香が鼻の上をかすめてゐた。彼女は眼を開けて、星のいつぱいかゞやいた空を見ると驚いて眼を閉ぢてしまつた。怖ろしさが骨の髓まで滲みて來たが、聲を立てるわけにゆかなかつた。

『女と云ふものは、男から、みんな斯う云ふ風にされるものなのさ。お前は今まで誰からもこんな風にされた事はないんだね』

徹司は彼女の腕をつかんで、ずる〳〵と引きのばすやうに立たせると、彼女の顔を見ないで訊いた。

『お前ね、月經はいつからあつたんだ』

『おとゞしから。おとゞしの祭の時から』

『よし、それぢやあね、今夜のことはどんなことがあつても、人に云つてはいけないんだよ。だまつてさへゐれば、お前は俺のお嫁さん、もし誰にでも云つたら、決して承知しないぞ』

冴はふるへ上つて、唇を紫にした。

汽笛の音が、丘をすべつて二人の耳へ入つた。徹司は頭の毛を搔き上げ乍ら、

'これから、俺を見たら、すぐ俺のゆく方へだまつてついておいで。さあ、早く歸るんだよ』

そう云ふと、注意深く、あたりに目を配つてゐたが、彼女の手に鎌を握らせておいて、丘の上へ馳け上つて行つた。彼は一度も振り返らなかつた。冴は、初めてほつと、唾を呑み下した。雜草に押しつけられた脊中の骨が疼いてゐた。鈍い痛みが、頭の心や、首筋や腹のあたりを這ひ廻つた。彼女はしびれて感覺を失つた足で逃げ出そうとした。だが體は元のやうに動かなかつた。やつと足が自由に動き出すと、彼女は一目散に走り出した。走り乍ら彼女は張り切つた恐怖がゆるんで泣けて來た。畑のつきた處から低い山峽へ向つて白い小徑が流れてゐた。その細い小徑で涙をふいた冴は、仄明りの射してゐる臺所口へ廻つて、キイ〳〵と音を立てなければ開かない戸の前に立つた。彼女は戸のすき間から中を覗いた、兄は花嫁をしつかりと抱いて、彼女の髪の中にあごをうづめてゐた。冴はふるへの止まない體をのつそりと引き摺つて、表の戸を開けて中へ入つた。

『冴かい、今、もどつたのかいのう。何をしとつたんぢや。おそうまで――』

兄はやはらかくとがめた。

『あんまりおそいで、心配しとりましたで。今、迎ひにゆかうと思ふとりましたんぢやが』

兄嫁もそう云つたが、彼等は、大して心配そうにもなく、花嫁は、いそ〳〵と立つて彼女に夕食の膳を出してくれた。

三

冴は腰をくねらせて、山の腹で草を刈つてゐた。夕暮れが近づいて、あたりが一面に藍色に染つてしまふと、彼女はニッと白い齒並を見せて微笑み乍ら、うつとりと眼をうるませて、後ろを振り向くのだつた。けれど、沖の方から歸つて來る漁師や、隣の村から歸つて來る郵便配達などが、すつかり通つてしまつても、もう徹司は現はれて來なかつた。あれから二度許り徹司は彼女を自由にしたが、それきり近よらなくなつてゐた。彼女は小さい顏を雜草の中に埋めて、儚なげに眼を閉ぢたり開いたりした。彼女はしつとりと夢の中に入つて行つた。追想は彼女の胸に血を湧かせた。彼女は手の中に青年の温い首を感じた。何の卑下も屈辱もなしに、男の首に手を捲きつけられる瞬間の事を思ひ浮べた。

あの瞬間だけは、男のどこにからまうと自由だつた。彼女は其の名譽にだけ、無限の歡喜を感じた。其の時だけ彼女は、島の娘の誰よりも幸福で、秀れてゐて、明るい誇りでいつぱいになれた。彼女は自分の不具な體のことも、兄弟たちのことも、忘れてしまへるあの豐滿な感覺が戀しかつた。

だが徹司は、ほんの僅かな緊張の時間がすぎてしまふと、すつくりと立ち上つて、彼女に祕密を守る事だけ注意すると、さらりと行つてしまふのだつた。青年のすげない仕打や、冷く洗つたやうな態

度は、それが劇しければはげしいだけ、不思議な魅力だつた。
　冴は執拗に徹司の姿を待つた。自分の家の屋根からは、もうさつきもうくと煙が立ち上つてゐた。沖の方の人家の黒いかたまりへも電燈がついて、ちらくと明るい縞を流してゐた。海は黒づんでゐた。白い波は荒く砕けた。島かげの燈臺の灯は、冬が近くなつた事を知らせるやうに、赤々と明滅した。冴は口の中で數へ乍ら、燈臺の灯が百度、赤くなるまで、徹司の來ることを待んだが、いよいよ、駄目だと思ふと、涙がさんくと落ち初めた。彼女は追ひ立てられたやうにして家へ歸つた。彼女は夕飯がすむと、兄嫁と一緒に、濱の錢湯へ出かけて行つた。四角な小さい湯ぶねには、太つた、赤い體の女がいつぱいつかつて、喧噪の渦を巻いてゐた。兄嫁も娘の頃の友達とひとかたまりになつて、睦まじそうに話し込んだ。冴はだまつてたんねんに體を洗つた。すると彼女へ脊を向けた、腰の大きい若い娘が二三人、徹司のうわさをし初めた。脊が高いとか、髪が黒いとか、眼がきれいだとか、ステッキを持つて歩いてゐたとか、彼女等は、他愛もない笑ひ聲を立て乍ら、湯ぶねの中へ飛び込んで行つた。冴は、湯氣の中で醉ふやうに耳を染めた。彼女の眼は誇りがましく輝き、胸は、ふくくと息づいた。
『冴さんはまだ、白粉をつけんさらんのか』と、若い女がふり返つて訊いた。
『もう、少し位、つけて見なさいや。ほれ、これでといてつけりやア、きれいにつくけ』
　兄嫁も彼女の方へにじり寄つて來て、白粉や、青い瓶に入つた化粧水を入れた金だらひを押してよこした。冴は素直に白粉を手の裏に取つて見たが、ふとはげしい羞恥が脊筋を這ひ上つて來て、顔がほてつた。兄嫁はやはらかいひざがしらを、冴の腰に當てゝ、白粉を塗つてくれた。白粉はぷんと甘い匂ひがして、冷たかつたが、彼女は胸を躍らせてゐた。彼女は自分の體が、男に自由にされたのだと云ふあの秘密が、裸になつてゐる今、誰かにかぎつけられるのではないかと思つた。彼女は、どぶんと音を立てゝ湯ぶねに體を沈めてしまつた。みんな笑ひ聲を立てた。
　彼女達が、錢湯から出て來ると、きたない土間で、がやくと云つてゐた若い男たちがすぐ、ぞろくとついて來た。
『嫁も娘も、阿呆やないでのう。割合べんやしのう』
　若い男たちは無遠慮にさゝやいてゐた。その中には彼女の叔父に當る男なども交つてゐた。露路を曲ると目の前を、今、風呂から出た娘が、衿だけ白粉をつけて、友禪の前掛けの中に金だらひを包むやうにしてかゝへ乍ら、小走りに歸つてゐた。すると、横手の垣根の中から、鳥打帽子をかぶつた男が出て來て、勢ひよく娘の肩に抱きついた。娘は、きやつと、ふざけた甘へかゝるやうな聲をあげて男に連れられて垣根の中へ入つて行つた。
　兄嫁はくすつと笑つて冴の顔を見た。どこからか、柴笛が鳴り響

いてゐた。二人は大きい門の前を通つた。そこは徹司の家だつた。門の前を通つてしまふと、薬の匂ひがたゞよつてゐた。

『やつぱしのう、お醫者の匂ひがするの』と兄嫁は云つた。冴はだまつてうなづいた。

さつき海邊を駈け廻つて歌を歌つてゐた狂人が、まだ帶を胸の方へ引きあげたまゝ遊び狂つてゐた。畠の中の草屋根の家からも、うおう、うおう、と云ふ氣ちがひ女の聲がもれて來た。

家へ歸つてゆくと、冴は牛小屋の匂ひが胸をついて、胃の中が、たゞれてゞもゐるやうにはげしい嘔吐を感じた。彼女は暫く、家の外で、白粉をつけた顔を冷たい風に當てゝゐた。

海から這ひ上つた月が、大きくゆれて、海はきら／＼と照り輝いた。弟は手を振り上げて、烈しく吹鳴り初めた。

『何ぞ、欲しいんか、三吉』

無心に笑ふ許りで、何も云へない三吉の顔を彼女はじつと覗き込んだ、額や、鼻の下や生へ下りに、うぶ毛がぼう／＼とのびて、三吉は怪物のやうにまつ黒だつた。彼女はふと、三吉の體から發散する匂ひに、さつきと同じやうな胸わるさを感じた。劇しい嘔吐が咽喉元へつめかけて來た。彼女はとう／＼畑の中へ走り込んで吐いてしまつた。それはまるで、腸や胃や咽喉をゑぐり取られるやうな苦しさだつた。こめかみが、づき／＼と痛んで、汗がびつしより、胸のくぼみへたまつた。

その頃、兄嫁は毎朝流し元で、苦しさうに背を曲げてものを吐いてゐた。兄は心配さうにその背をなでゝやつた。兄嫁はそれをツワリだと云つた。ツワリがすむと、子供が生れるのだと云ふことを冴も知つてゐた。彼女は星空を見上げて、考へてゐたが、がくぜんとして肩を落した。そのまゝ體が破れたゴム風船のやうに、凋んでしまつて地べたにくつついてしまつたやうに彼女の小さい體は、うづくまつてしまつた。彼女は一生懸命に考へをまとめやうとした。もし、自分がそうであつたなら、今までのことはみんな、ばれてしまふのだと思つた。そうなると第一あの人が困るのだ、と彼女は思つた。何故、そんな心配をしなければならないのか彼女にはよく分らなかつたけれど、だまつてゐてはいけないらしい氣がして來た。

『姉さん、うちのう、夕方歸る時、山の下へ鎌を忘れて戻つたけん、取りに行つて來るけんのう』彼女は家の中へ向つて細い聲でそう云つた。

『一緒に行つて上げうかの』

と兄嫁が椽側へ顔を出した時は、冴はもう、畑の中の小徑へ下りてゐた。彼女の腰は、踊り人形のやうに、はね返つて踊つた。

四

徹司の家の門の前には白い大きなポインタアが、寢そべつてゐた。門の横手で、もじもじしてゐる冴を見て、犬は最初、低い呻き聲を立てゝゐたが、しまひには、のつそりと立ち上つて吠え初めた。門

の中で口笛が鳴つた。

『ネロ、ネロ！』

と呼ぶ若い生々しい男の聲がした。冴はじりじりと逃げ出すやうな格好をしてゐた。ふところ手をした徹司がふらつと出て來て、彼女を見ると、ペッと唾を吐くやうに云つた。

『あつちへ行つてゐるんだ』

彼は憎々しげに云つた。羞恥や、壓迫感でおしつぶされたやうになつた彼女は丘の上まで、目茶苦茶な足どりで歩いて來た。

『俺に用があつて來たのか』

丘の上へのつそり追ひついて來た徹司は冷く尋ねた。

『だまつてゐるとわるいだらうと思つたけん、云ひに來ました』

冴は首を垂れて、涙を見せまいとした。

『何を云ひに來たんだつて。用があつたつて、家の前をうろ〳〵しちや困るぢやないか、まるで、色氣違ひのやうだぜ』

徹司は、いたづららしく笑つた。

『何の用だ。早く云つてくれ。お前から俺に用なんかあるのか』

強い調子に彼女は責め立てられた罪人のやうにはつきり云つた。

『うち、おなかゞ大きう、なつたですけん』

彼女の顔は寂しく惱ましげだつた。眼だけが美しくうるんでゐた。房々とした彼女の髮の毛を見下してゐた徹司は、

『それは本當なのかい。さうかも知れないと思ふだけなんぢやないのか？』と念を押し乍ら、彼女の肩をつかんだ。

『ほんとうですけ』

冴の眼は、爛々と輝いて、徹司の眼の中を覗き上げた。

『さうか、それなら心配しなくてもいゝよ。他の者は誰が知つてる』

『うちだけですけん。誰にも云やせなんだけん』

『それならいゝよ。これからも誰にも云ふんぢやないよ。ぢやあね、こゝで待つてゐてくれ、一寸家へ歸つていゝものを持つて來てやる。直ぐ來るから、こゝを離れないでゐるんだ。いゝね、お前と俺とたつた二人だけのことなんだからね、誰にも云つてはいけないんだよ』

徹司は飽くまで強い聰明さに冴えた眼を上げて、沖の灯を眺めたが、びくともしない態度で丘を降りて行つた。彼が引つ返して來るまで、冴は冷い指先へふつふつと息を吹きかけ乍ら、やはらかい細るやうな心で彼を待つてゐた。

五

徹司は笑ひ乍らやつて來た。

『おい、巣のない小鳩のやうな奴』

と徹司は親しそうに近づいて彼女の頭をおさへた。彼女は疼くやうな悦樂の記憶を思ひ浮べてゐた。

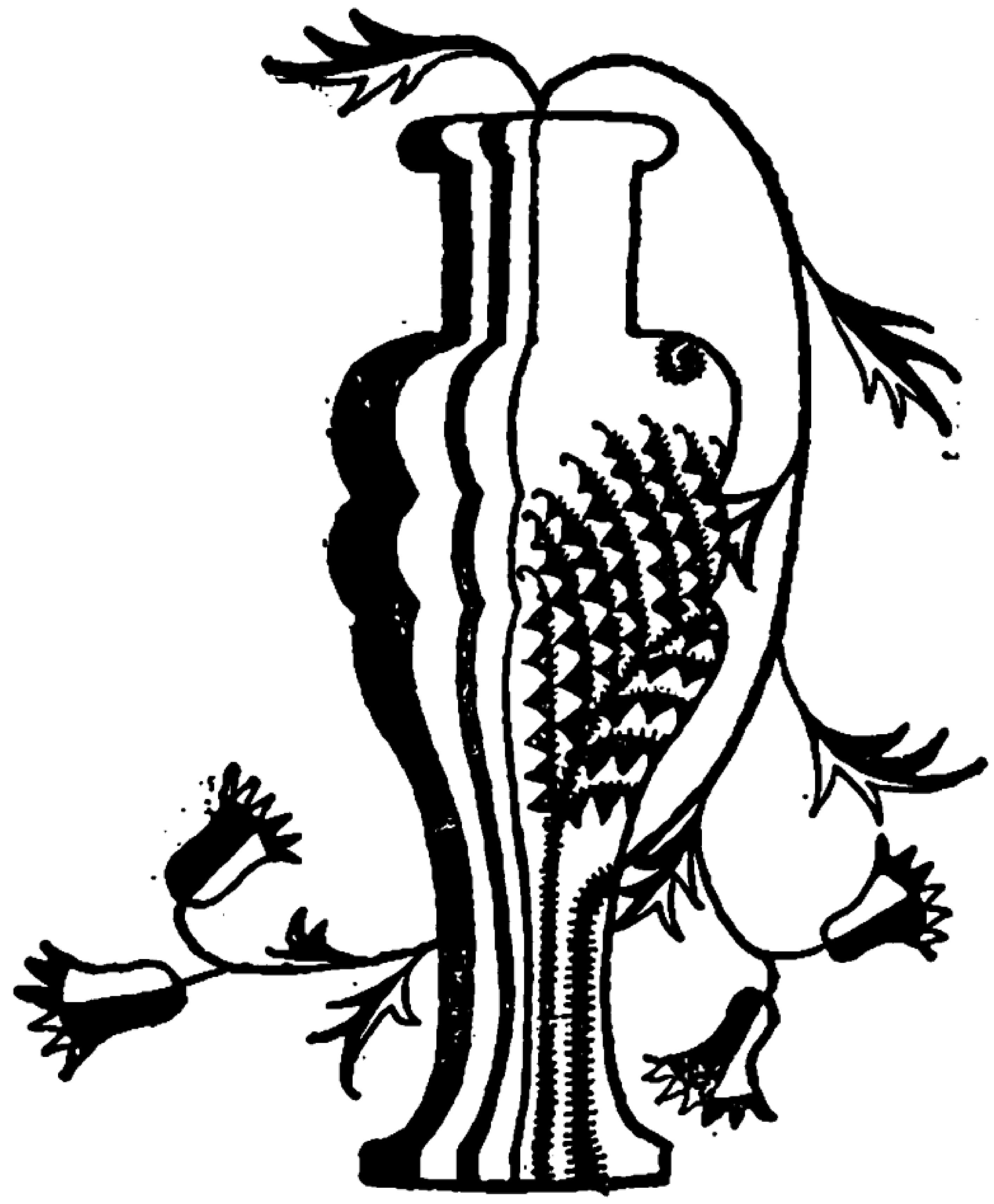
『あのね』

徹司はふところから、赤い包紙に包んだ藥を取り出した。

『これを飲むのだ。誰にも見られないやうにだよ。明日の朝、腹の減つてる間におのみ。いゝね、うまくやるんだよ。分つた？』
彼女は藥を帶の間へしまつたが、何のために腹の痛くなるやうな藥をこの男から飲まされるのか分らなかつた。
冴は、のび上るやうにして訊いた。
『この藥、なんのために、のむのです』
『お前のお腹を小つちやくする藥さ、心配することはないんだよ。それさへのめば。小つちやい子供が死んで出てしまふんぢや・うまく飲んだらいゝものを買つてやる。安心して歸るだ』
徹司に、からかふやうに云はれると、冴はがくぜんとして眼を見張つた。光を失つた眼は大きくのびて、放心したまゝ地へ落ちた。
彼女は、頭が眞二つに裂けてしまつたやうな氣がした。自分の姙娠とこの藥との關係が、はつきり分つて來た。彼女の幸福感は、ずた〳〵に破れてしまつた。初めて彼女はわつと聲を立てゝ泣いた。生れて初めて、死ぬやうに辛い耻と恨みと、なげきとが、肚の底からつき上げて來た。
『何だ、馬鹿、泣くことはないよ』
徹司は彼女の帶の間へ手を入れて、さつきの藥を引き出した。
『こゝで飲んでおしまひ、泣かなくても飲めるさ、俺が飲ませてやるから、口を開けるんだ』
徹司は彼女のあごを持つて仰向けやうとした。
冴は烈しく頭を振り動かした。彼女はいきなり紙の中の藥を、吹きとばしてしまつた。白い粉は、ぱつと散つてしまつた。彼女は火のやうに怒つて徹司によりかゝつてゆくと、彼の左の二の腕にがきッと嚙みついた。
彼女は眞白い眼をむいて徹司の顏に唾を吐いたかと思ふと、
『馬鹿、馬鹿!!』
と叫びながら、轉び落ちるやうに、畑の小徑へ飛び下りて行つた。

六

五月のさはやかな朝、冴は太つた男の子を生んで、すや〳〵とねむり續けた。ねむりからさめると彼女は毎日泣きつゞけた。其の爲に彼女の眼は腫れ上つてしまつた。彼女は泣いて泣いて、とう〳〵兄にも姉にも、相手の名前を打ち明けなかつた。
黄昏が島を包んでしまふ頃、兄夫婦がまだ野良から歸つて來ない時分に、冴は蒼白くやせ細つた胸を開いて、花のやうに盛り上つた二つの乳房の中に、赤ん坊を抱きかゝへて、弟の側ににじり寄つた。
『三吉や、赤ちやんの、お父つちやんを見てやらうかの、徹司さんぢやけんの、本當でよう。誰にも云ふといかんけんの』
冴はさうさゝやくと、赤ん坊の頰に唇を押し當てた。彼女は死んだやうに默り込んで、遠い思ひ出の中にとけて行つた。



歩む

戸田豐子

街で兄に遇つた。走つてる電車のなかで新聞を讀んでゐた。ハンドルを持つ手が、赤く大きく、じろりと、とも子を見た。

「仕事をみつけたのかい。」

いかにも疲れたらしい妹の恰好に眼をつけ乍ら、さう言つた。とも子は默つて肯いた。スカートがべと〳〵からみつく様な疾風に逆ひながら、一日ぐる〳〵歩きまはつた。訪問、契約、拒絶、報告、――。

「今度は何だい。また馘られんやうにした方がいいぜ」

「今度のは大丈夫。何故? 餘り金借りにゆかれると困るから?」

新聞を疊んでポケットへしまひながら、兄はにやりとした。組んでゐたズボンの片方を降して、一寸、窓を振り返つた。

とも子は挾みこまれたスカートを引つぱり、兄のカフスの汚れに目を止めた。土曜の此時刻には割に空いてる線だつた。

「近頃、新聞を讀んでるのかい」

「どんな新聞」

「ブルジョア新聞さ、俺の自動車の前でお婆さんがお叩頭しちやつたんだ、金持のご隱居だ相だが嫌になつちやつたよ。今度の爭議の計畫で會社側に睨まれてる最中だらう、いい解雇の口實を與へて了つたのさ、不利も不利――」

「お婆さんを――」とも子は複雑な唸り方をして、「そりや可哀相ね、まさか死にやしないでせうね」

兄は聞えない振りをした。

「罰金で濟むんでせうね」
「さあ、まだ引掛かつてるんだ――」
　電車の中ではそれ以上のことは聞けなかつた。兄は小指の先で耳が赤くなる程引かきまはした。カーブの所でぐつと聲を高めた。――
「おつ母さんから便りがある？」
「あ、時々」
「近頃、金を送つてやれないでるんだ、そんな事情で。お前の方で何とかしてやつてくれないかな、その代りお前が首になつた時には俺がやるよ」
　とも子は笑ひ乍ら頷いた。それからは、時々肩をぶつつけ合つて、默つて搖られた。二人の前へトランクを提げた男が立塞がつた。
「今日は急ぐの？　久し振りにご飯でも食べやうか――、さうか、ぢやまたこの次にしやう、渡君に會つたら宜しくね」
　さう言つて、兄は交叉點へ降りて行つた。
　――母は癖で、布團をたゝんだやうな恰好に平たく坐り、しよんぼり心の弱つた眼を瞬つてゐるかも知れない、疲れてゐるんだ。
　――彼女の蒼ざめた顔が迫つてくる、皺ばんだ枯れた腕をさし伸ばしてゐる、それから、おづ〱多勢の押しひしがれてる母たちの中へ呑みこまれてゆく、芥子粒のやうに小さくなる――。
「だからこそ――」
「兄の闘志を、こんな牧歌的な憂ひで曇らせては不可ない――」
　さう、さう、最近郷里の友から報告されてゐる、「縣で始めての立禁爭議――暴動化」について、一寸、知らせてやりたかつたのに、と思つた。
　しかし、何と言つても、とも子の心は渡の方へ惹かれて行つた。子供のやうに靴の踵で電車の床を叩きながら、頭だけは一足先に渡のゐるアパートへ吸はれてゐる。……狹い階段をぐる〱馳け上る、一階の突當りが茶色の扉でマツダ瓦斯入電球のポスターが貼りつけてある、二階目の踊り場の窓にはボール紙の札が下つて、「雨の降る時や風の強い時はこの窓をお締め下さい」しかし、窓は何時行つても半分と硝子の缺つてゐた例しがない……四階は獨身室で、巡査も、車掌も、教員も、下駄の歯入屋も職工もゐた。社會主義者もゐた。――どんな顔をしてるかしら――便所の臭氣が流れる薄暗い廊下に立つて、ドアにぴつたり體をくつつけて、叩く、すると、明り窓へ彼の影が搖れて……。
　のろいテムポで飛んでゆく町の灯を、まどろつこしく、神經的な眼で眺めた。
「食ふこと許り考へてるのね、貧乏人つて」
「何時」
「我々だつて、今」

「結構なことだよ――ぢや、ご飯とお新香を買つて來ようね」

とも子は持つて來たお菜を包紙のまま疊の上へ置いた。床はキルクで薄べりが眞新しかつた。銀貨と大丼を摑んで渡が食堂へ降りてゆく。

本箱から新刊書を抜き出してぺら〳〵繰りながら、さうさう、瓦斯へ湯を沸らしておく必要がある、と思つた。

二人ともがつがつ食べて、お湯を啜るとき顔を見合つて笑つた。

「これ染めたのよ、自分で。せんには何だか汚らしくやけてたでせう――」

はしやぎたくて堪らない小娘のやうに上衣を引張り、スカートのくぼへ飲みかけたコーヒを零した。

「今晩仕事があるの」

「いや、今晩は安息日だ、その代り明日は早いんだ」

それで自分でもホッとして、とも子の口からまじめな話や愚かな話が際限もなかつた。鼠をねらふ猫のやうな眼をしたり、ただの怠け猫のやうに眼を細めたりした。「ゴシップ屋が」と言はれて一寸ふくれ、煙草を挾めたままの指をぬつと突出した。

「モダンボーイが」

「ほら、灰が落ちる、頭が？」ポマードで固めた頭へ一寸觸つてみて、「馬鹿だな、こんなのカモフラージュつてんだよ、出來るだけ周圍に同化しなくちや不可ないんだ」

「さうを、そんなのお洒落の合理化つて言ふんでせうね」

「煙草を止しなさい、煙草を、又やり出したね」

「それはさうと――」急にまじめになり乍ら、「郷里の方の立入禁止、いよ〳〵激化したらしいの、巡査や區長が燃えさしの薪でぶん毆られたなんて痛快ね、そのうち新聞を送つてくれる筈　なつてるけど」

「向ふの方にはなか〳〵いい闘士がゐるらしい――」

「さう、――私も向ふで働かせて貰はふかとも思つてるんだけど。一日頸をたれて、カタカタ、カードを鳴らす…それもてんで無意味な仕事でせう…つく〴〵嫌になるわ」

「こつちの仕事をやる氣なら東京でもいくらも働けるさ」

それから、クスッと笑つて、

「郷里へ歸つたら息子とも闘はざるを得ないね」

「息子？　地主だから？　馬鹿にしてるわ、あんな小さいもの」

「小さいたつて地主は地主さ」

「彼の意識するとせざるとに係らず――ですか、そんなこと問題ぢやないわ、だけど地主の血つて妙なものね、――死んだ山本がね、村にゐた頃」

とも子は、自分にもそんな時代があつたといふことを、不思議な訝しいやうな氣持で回顧した。

「私はつまり、地主ののら息子が引張つて行つた雛つ子みたいな女

でしかなかつたんだわ――」

山本はルパシュカを着たり、モーニングを着たり、貧乏人の娘と結婚したり、政治屋として成功した親父（おやぢ）を輕蔑したりする樣なニヒリストだつたが、地主の家に育つただけに、

「今から考へると、かなり牧歌的なもんだけど――」

飢饉、不作、旱抜の秋にはどんな殺氣立つた掛合が、時には決死的でもある、小作人が、地主の家へ押しかけて來るか――そんな時は地主の心が石になり鉄になり刺になり、人の親でも子でも隣人でもなくなる不思議さ――について見てゐた。大地主でさへあれば、どんな馬鹿でもカバでも縣議や國議になれることや、そこから更に、小作や、小農のうだつにかけるくびきが、制度的に再生産されてくること――についても、或る觀祭を持つてゐた。

（もし、お父さんがここの田地を皆貴方に下すつたらどうなさるの）

（面倒くせい、早速賣つ拂つて洋行でもするな）

……そんな山本だつた。村端れには廣大な地域に渡る自家の落葉松林があつたが、閑な二人はよく其處へ寢そべりに行つた、そこでの、木一本、小さな菌類、土、虫、こぼれ葉のはてまでが、婉曲に所有者の有頂天を甘やかし、媚びてゐたのかも知れない。とに角非常に氣に入つてゐた、或る時もそんな山本と一緒に歩いてゐると、突然、彼が立停り、非常な大聲で喚いた、「誰だつ！」畜生！その時位昂奮しきつた彼の顔を、とも子はまだ見たことがなかつた。默つて指される方を見ると、熊のやうな大男がぎらぎらする手斧を提げて、慌てくさつて逃げてゆく後姿があつた。盗伐者と地主――から思ふと、變に擽たく、情なく、血の遠さを感じた。それが一種の表情になつてゐたのかも知れない。

山本はいくらか蒼ざめて、押つ被せる樣にさう言つた。――

（輕蔑してるんだらう、おい！）

……「何しろ七八年も前の話でせう。その頃の農民つたら、シチエドリンの諷刺小話へ出てくるやうな百姓――典型的なね、好人物で無智で狡猾の逸話的存在でしかなかつたわね――私つたら地主ののら息子が引張つて行つた、折つぺしよれ相な女つ子でしかなかつたし……」

時々、渡にひやかされ乍ら、ながながとそんなことを喋り、最後につけ加へた。

『子供について私、明るい希望をもつてるつもりよ、よくなるに決つてるんだもの」

豫期しない意地悪い現實にぶつかつた。

渡はさつと顔色を變へた。

指先にさはつたのを、悪戯半分に、彼のポケットから抜き出した

瓶を摑んで、とも子は戸迷ひし乍ら立上つた。
「これは厳粛なんだいね」
「言はうと思つてゐたんだ」
「何時から？」
「何だ、歸るのか」
ええ、歸るつもり、といふ代りに、
「そんなに現金ぢやないわ、そんな女ぢやないわ」
と言つて、坐つてしまつた。
「この前、皆で會つたのは何時だつけ、あの一週間許り前からなんだ」
「ほんとに酷い人ね」寝床へ腹這つてからとも子は子供のやうに眼を寄せてなじつた。
「豚だ。あんな下らない處へ行くなんて」
「あんな處へ行つたら何故惡い？」
「まあ」とも子はいよ〳〵眼を寄せて呆れ返つた、「それが解らないの」
「ぢや兄さんはあんな處へ行かないか――」
「兄は別よ、兄は勞働者だもの、それにあの年になつてまだ結婚もしないんでせう、その意味で許せるけど、知識分子はさうはゆかないわ。觀念的にも實踐的にも、資本主義的な腐敗から足を拔かなくちや不可ないし、拔きうるんだもの――」
「さうさ。だが僕のは異ふんだ。あんな處へ行つたんなら、こんなことにはならないさ、…牧井そめ子が…先月、家を出た時、實は僕の處へすぐやつて來たんだ、余り大きくもないバスケットを一つ提げて、いよ〳〵亭主と別れました、つて急に居所にも困る様子だつたから、あなたの處を敎へてやつたんだ、ところが――」
「もう解つたわ――私の處へ來たら留守だつたてんでせう、階下の小母さんが何べん賴んでも上げてやらなかつたてんでせう、知つてるわ、そのことなら」
それから枕へ耳を壓しつけて、白い壁の方を向いた。
――私が愛したのはこのひとの健康な肉體だけなんだ、このひとはそれを平氣で別の女に、相手が酌婦だらうが、社會主義者だらうが、變つたことぢやない。
――しかし、覺えておいで、こんな考へ方は最も下等だ、泥沼だ、ボロ屑だつてことを。
――しかし、とも子はも一度向き直つた、――
「病氣になつてどんな氣持がするか言つてごらん」
「そんなことを聞くひとがあるか。時間と金の浪費だもの困ることは解りきつてるぢやないか。而しそれ以上のもんぢやないよ」
「私がもう愛してやらなかつたらどうする？」
「煩いね、そんなことはさせないよ。あなたと僕については何も變つたことがないんだもの、病氣が療りさへすりや問題がないぢやな

いか」

「エゴイスト、もう眠つちまつてる」暫くして、とも子は相手の肩を揺つた。「私がどんな女だか言つたげようか、世間の馬鹿女みたいに婦人科のご厄介になつたり、眼のフチを黒ずませたり、ポケットへ挿入薬を入れて歩いたり、子供も産めない様な女になつたりする位なら……さうね、戀愛なんか要らないわ、牛か馬の背中でもパカパカ叩いてやる方がはるかましよ、豚だけはもうご免だけど。性慾なんて私にとつても重要なもんぢやないんだ」

「ヒステリさん」——とこれは心のなかでだけ呟いた。

彼はぐつすり眠つた。室中が彼の呼吸で充滿になり相だつた。時々廊下のコンクリを下駄や草履で鳴らしてゆく人があつた。淨水裝置の便所が、う、うう唸り、ガラ〳〵ひつくり返つた。アパートの四階——、

「さうだ、ここは箱のやうだ」

とも子は空間的に制限されてのび〳〵しない自分の感情をわらつた。朝になつたら何もかもさよならだ、だとも。——逞ましい脛で敷布をけり乍ら何度も寢床を泳いだ。夜明方だつた。起きて窓を明けた。

中庭の街燈が一つ灯つて子供等の滑臺や物置風の屋根が濡れて光つた。蹲くまつてゐた犬が吠え出した。壁から外した彼のレンコートを肩へ掛けて低い窓緣へ腰をのせる。煙草を啣んで口傍でマッチを擦つた。脛を眞すぐに伸ばして兩足を重ねる。廣庭を圍む無數の窓がピリ〳〵風に揺られ、換氣裝置の風車がくる〳〵廻つた。バルコンの鉢が枯れて轉がつてゐる、とも子が緣日から買つて來てやつた何とか言ふ西洋花だ、マッチはどうしてもつかなかつた。窓を締める。空が水色で雨でも持つてゐさうな模樣だつた。

室を明るくすると、彼が頸をあげて、片方の肩だけレーンを滑らしたとも子を見上げた。

「あなたは觀念的なことについては相當理解力を持つてるけど、自分の事となるとさつぱり感情的で、唯の駄々つ子にすぎなくなるね」

なあんだ、そんなことか、といふ風な顏をしてとも子は冷淡にぶつきら棒に頷いた。すぐ寢るつもりだつたのを止して彼に背中を向けた。

「さつきから煩さくて眠れんぢやないか。窓をあけたり、マッチを放り出したり、コーヒ茶椀を蹴つとばすやら、子供だよ、妥協するならしようよ、合理的に」

椅子に倚りかゝり煩さい髮毛を掻き上げた、こうして氣もなげに肘をつく自分の後姿が無限に頑なに見えることを望んだ。だのに、一つ年下の彼が「子供だね——」と言つたのがふいに可笑しくなり、投げ出した裸の脛が少し寒いとも思つた、一本のタバコを喫みつくさないうちに風邪をひいちまひ相な氣がしだした。そのうへ、赤いポスターをはつた壁へぷう、ぷう、烟りを吹きかける自分のポーズ

が頽廢的で、嫌味な、下らないものに思はれて來た。
目覺めたとき、とも子は一人であつた。白い壁が眩しく、そこにはもうレンコートが掛つてゐなかつた。眼覺しの鳴つたことや、枕元をさへぎつて動いた影や、お湯の沸る音も夢でのやうに覺えてゐた。陽のあたる机のはしから白い埃とパン屑を拭きとつて、原稿紙を擴げ、顏も洗はすにペンを掴んだ。
書きかけて、幾枚もビリビリ裂いた。
窓へ立つ。
屋上の物干に白い布が飜り、廣庭には水溜りがあつた。工事場の騷音がせき立てるやうだ。配達夫が腕を振りせか〱アパートへ入つた。中庭へ群れた子供等へ陽が當り、一階の入口で若い女が、はな緒の赤い下駄を敷石の上でパンパン叩いてゐた。
渡が眞中だけほじつて食べたらしい、キメの荒いパンが机の上にあつた。とも子はそれを噛り生ぬるい湯を呑んで外へ出た。
路地の角で、共同水道がよどんだ溝ぜきへよろけかかつてゐる。菜つぱを洗つてゐた女がひよいと腰をあげた。
泥濘へしやがんで濯ぎ物をしてゐる女の背中いつぱいに陽が當つて、そこへ括られた子供の手足が尻尾か何かのやうにぶら〱垂れた。厚い大きな女の尻が、敵意あるやうに路を狹くしてゐた。
とも子は誰にともなく會釋をしてそこを通り拔けた。眠つてる子供は汗をかいて、母親の油ぴかりする襟へ片頬をつぶしてゐた。
長屋の奧で誰かが雨戸を繰り開け、横顏へばつさり長髪をたらした男が頸を突きだして此方を見た。煮出うどんやの箱車の下で犬が二匹挑み合つてゐる。
「まあ、お珍らしい」
小母さんはにこ〱して、
「兄さんですか？　近頃さつぱり家へ歸つてこんのですよ、あなたの方へは？」
「昨日、電車のなかで一寸會つたつきり、さうですか、――としちやんは？」
「あの子はね、お蔭樣で、兄さんのお世話でガソリン賣の方へ出ることになつて、體も丈夫になるし、そりや喜んでましたよ」
小母さんは苦勞しすぎた故か、いくらかつんけんしたヒステリ性の女であつたが、今日はいかにも晴々しく笑つて見せた。色の白い細つそりしたとしちやんが百貨店の女給が任まるやうになつた當時は小母さんもいくらか幸福相だつたが、なか〱巧い具合にゆかないもので、最初は、食堂で渡される靴が足には小さいのを無理して穿いてるうちに、たちの惡い底豆が出て非常に惱まされた、母親にはがみ〱言はれるし、食堂で辛さうにしてゐては監督の重たい一

皮目が追ひまはすし……小さいとしちやんは淺草や上野を遊びまはるやうなことになつた、小母さんは持前の肝癪を起して、百貨店の人事課へ行つて怒鳴り散らして來た、それでやつと草履を穿く方へ廻されたかと思ふと今度はまたとしちやんが勤務中二度ばかり血を吐いたといふ事について出掛なくてはならなかつた。(あの娘に辭めてくれといふ話ですが……)今度は笑つて誰も取合なかつた。

「百貨店は空氣が悪いから――そりや、よかつたわ、ガソリンガールにね……」

――路地を出るとき、兄かな、と思つた、よく似てゐたが異ふ人だつた。腕を振つて大跨に歩いて行つた。

宿へ歸ると、お内儀さんが、

「兄さんがお見えになつてをりましたよ、朝方ちよつと――」

とも子はチッと舌打をした。

机の上は堆い塵であつた。爭議に關する郷里の新聞が來てゐた。

「小作人の覺悟は實に眞に悲壯なもので」

といふ所から聲を立てて讀み上げた。

「今回の判決に従ふことは生命とも言ふべき田を取上げられ、小作料はとられ、更に訴訟費用まで支拂はねばならず殆んど生きたまま埋められるも同じである、どうせ死ぬのならば死を以て對抗する」

「地主側を擁護する××團と爭議團の衝突――××日朝爭議團は決議文を携へ地主の家へ押しかけんとして路上警官と小競合を演じそのとき何者か警鐘を亂打したので消防組が出動しあはや一騷動起らんとしたが――」

「××日午前九時頃爭議團が事務所に於て對策協議中、突如、×××長の率ゐた警官隊が事務所を襲ひ、――爭議團幹部數名を檢束せんとしたところから××と爭議團と入亂れて格鬪し爐にあつた燃えさしの薪をもつて警官に渡り合ひ、――大亂鬪を演じた。

「この騷ぎに現場から檢束された十二名を橇にのせて、××署まで約五里の間を運んだが、途中勞働歌や萬歳を高唱しもの〳〵しい光景を呈した、××署は之等檢束者のために充滿し爭議團が用ひた尺余りのメスの凶器や負傷した××の繃帶姿等で凄慘の氣をたゞよはしてゐる。

「双方の對峙は益々深刻になりゆく模樣、

「さらに尖鋭なる鬪士××潜入、

――新聞から目を離し、とも子はぢつと窓をみつめた。

「自分は何だらう――」

久し振りでそんな疑問に突き當つた。これは非常に疲れてる故か、渡との交際がもはやお互を鼓舞し合ふ性質のものでなくなつてるためかどつちかにちがひない、――

農民の太い腕を「土への渇望」が貫いてゐる。

さらに闘士等の決死的を鋭い目！

「自分は何だらう——」

おもちやだ…ただの女だ…停滯してゐる…それに疲れてもゐる…

夕方、また埃つ風が吹いた。

とも子はスタンドを消して部屋を出た。讀みさしの本に指を挾めたままで、近くの公衆食堂へ數町の坂を登つてゆく。埃で覆れた空が薄赤く光を含み、膿んだ樣に濁つてゐた。

洗濯屋の開いた窓からむんとなまぬるい湯氣が顏を撫でる。のつそり背の高い渡が立塞がつた。

「おう」

「あら。戻りませうね——食堂へ行くとこなんだけど」

「まあ歩かうよ」

「今朝×君がやられたらしい」門口へスパイが張りこでんゐた、お晝頃別のものが見に行つたときもやはりさうだつた。——

「僕のとこも危いんだ。外にも二三人やられたんがゐるが、これ預つといてくれないか」

とも子は赤い包紙にくるんだ菓子折みたいなものを渡された。

あ、いいとも、ご飯はまだ？」

「まだだけど、さうしてられない——」

「ぢや、どこまで歩いてさよならにする」

「此處からでもいいな——急ぐんだ」

「さよなら、ぢや。體は大丈夫？」

「ふん、ぢや失敬」

雨外套の前を掻き合せながら彼が大急ぎで馳け出した。喧しく交叉線路を鳴らして、××行が丁度停つたとこであつた。四角へ巡査が群がり自働車の一齊檢閲がはじまつた。

とも子はも一度坂を下つて間借へ歸つた。

數日經つて兄がやつて來た。まだ坐らない內から、

「どうした、馬鹿に元氣がないな」と言つた。

「さう」

「なあんだ、さう、なんて——」

「こないだからちつと許り元氣がないの、下らない仕事ばつかし每日しなきや不可ないでせう、頭と手とバラ〳〵な生活をしてる樣な氣がして」

「元氣を出しなよ、元氣を、お前は頭だけがお先つ走りやつてるんだらうな、そんなの何にもならんぜ、今によくなるさ、どんな仕事をやつてるんだ」

「相變らずカードの整理」

「それでも結構ぢやないか。それはさうと、俺を少し休ませてくれ

ないか、非常に疲れてるんだ、連日のピケットだらう。今晩刷つて明日はまた早くビラ撒きにゆかなくちや不可ないんだ、――九時になつたら起してくれ」

兄はその時になつて始めて帽子をとり、疊へごろりと横になつた。とも子は立つて押入を開けた。

「あ、枕を借してくれんか」

「今布團も布いてあげるわ、九時半までならまだたつぷり眠れるもの」

暫して、とも子が買物から歸つてくると、兄は布團の上へ起上つてゐた。

「どうしたの」

「む、今便所へ行つて來たんだ、何だか熱がある樣でな――胸が苦しいんだ、アスピリンか何か買つて來てくれんか」

「おソバをさう言つて來たの、兄さんが好きだから」

「さうか、次手に速達も出して貰はう」

とも子は郵便局と薬局へ走つた。

アスピリンを飲むと兄はぐつすり眠つた。疲れてくた〳〵になつて來たものらしい。額がぐつしより濡れて鼻が油をぬつた樣にてらてらした。子供のやうに掛布團をはね上げて膝を立ててゐた、洋服を脱がしてやつた方がよかつたと思つた。

九時になつたが起さずにその儘にして置く。

スタンドの下へ頭を突きだし、兩手で額を支へて、農業問題に關する論文を讀み耽つた。とも子は時々振返つて兄の寢顔を眺めた。

「これは非常に珍らしい。殆んど何年振りかのことだ、一つの部屋で兄の寢顔を見るなんて――」

貧乏人は親子ちり〳〵に働かなくては食つてゆけない、――兄は小學卒業と同時に奉公に出された、それから轉々とあの勞働からこの勞働と渡り歩いて、郷里へも何年も歸つてないし、恐らく母だつて息子の寢顔がどうだつたかなんて事を、もう忘れちまつてるだらう。

彼女は「何も要らない、ただ子供等が優しい言葉を掛けてくれさへすれば」と思つてるのかも知れないのだが――母のことといふと、布團をたゝんだやうな恰好に平べつたく坐り、疊の目ばかり見てるやうな、母もそんな姿だけが眼に浮ぶ。それはとも子自身も、永いこと郷里へ歸らないでる故かも知れない。

階下のお内儀さんが襖の外から聲をかけた、

「お客樣ですよ平井さん」

裏口の明りの中で見知らぬ洋服の男が二人立つてゐた。

「僕、竹田ですよ、いつか兄さんのとこでお目に掛りましたね」、一人が、とも子の警戒心をもぎとるやうに、早口にさう言つた。

「あゝ」とも子はお叩頭して、「兄はぐつすり眠つてますよ」

「僕等、平井君と九時頃此處で落合ふ約束でした」

「今起して來ませう、熱があるつてアスピリンを飲んだもんですから、ぐつしより汗をかいて寢てますわ――」
「ぢや、その儘にしといた方がいいですね」
「何しろ碌に寢なかつたんだからな、僕らが來たことだけ言つといて下さい、朝またここへ來ますから」
「構はないんですか、一寸起して來ませうか――」
二人は振りもぎる樣にして歸つて行つた。
兄は壁の方へ傾いて逞しい腕で胸を壓しつけて眠つてゐた。とも子は一時間許り讀書し、それから搔卷だけで机へつつ伏して寢た。
朝早く、自動車が迎へに來た。

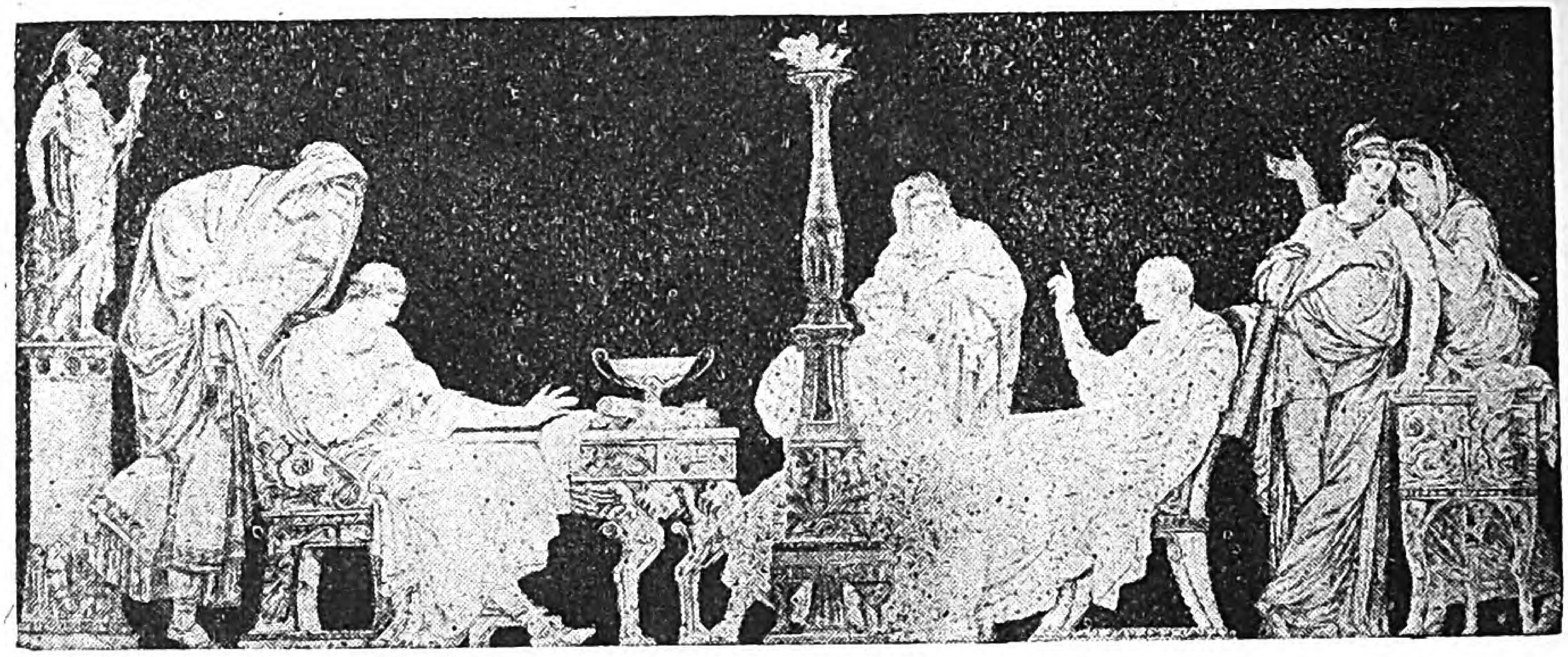
「私にもビラ撒きを手傳はしてくれない？」
「そんなことしてお前が首になつたら、おつ母さんと俺が困るだけさ――」
走る自動車のなかでとも子は晴々しい氣持になつた。昨夜の二人が運轉臺にゐた。
「としちやんがガソリン屋になつたんだつて？」
「あ、やつてるよ」
ビルデングの前で停めて貰つた。
兄はぞんざいに首を曲げ、運轉臺の二人へは叮寧にお叩頭して、ビルデングの廻轉ドアを目がけて、とも子は悠々と歩いて行つた。

略歴



戸川靜子

静岡市で、明治三十九年五月十五日に生れましたが、八つの時に一家こぞつて東京へ出ました。
女學校時代には、文學好きの娘と云ふ程度で過しましたが、卒業後、姉の手傳ひをして喫茶店にゐるうちに、早稲田出の人達がやつてゐた同人雜誌「各人」に加はつて、たどたどしくペンを握り、二三の幼いものを發表しました。その中、「銀座を歩く」が、片岡鐵兵氏に新聞で一頁批評を受けたりしました。
その頃から、漸くその道へ進みたいと望を持ちはじめ、郵便局員として働くかたはら、自分に望みを失つたり、望みをかけたりしながら、書きました「大洋文學」に、その頃のものが二つ活字になりました。
これからは、自分の周圍の生活だけではなく、廣い世の中の事々を書きたいと思つてます。それが充分力强くつかめる時こそ、私の望みが果せる事になるのですが――。



與謝野晶子氏

生誕祝賀藝術祭について

右祝賀藝術祭を來る六月九日(第二日曜)に、帝國劇場に於いて開催、終って東京會館に晩餐會相催す準備萬端調ひし處不幸晶子女史愛婿の物故に遇し、女史の哀悼を思ひ、遺憾ながら、女史の生誕月十二月に延期の止むなき事情となり、諸般の準備を犠牲として、右讀者に謹告し、合せて女史に悼意を表す。



貨物列車

猪川美都子

不完全なプラットフォームには横降りの氷雨がたゝきつけてゐた。乗客は皆、待合室につめ込んでゐる。清子も片隅に腰を下して毛糸の薄いショールで顔も手も一緒に包んで小さくちゞかんでゐた。霜やけで赤くふくれ上つた足は、もう冷たさを通り越して痛かつた。足袋はもう先刻からの長歩きで濡れて、ジク／＼してゐた。そして、履きたての足駄の赤い安鼻緒の色が足袋にしみついてぼやけてゐた。なるべく音を立てないやうにと思つて、ギユッと腹を引きしめて見たり、しばらく息の根を絶つて見たりしたが、やはり腹は不行儀にグー／＼鳴りつゞけてゐた。清子はもう周圍の人々に、はゞかる事もやめて、勝手にすればいゝと腹の鳴るにまかせた。そして一層深くショールの中に顔をうづめた。

氷雨を浴びて電車がやつて來た。いよ／＼車體がフォームに停つてしまふまで乗客は待合室を出ようともしない。清子も一番後からあはてゝ乗らうとすると、黒いかうもりの折れた一本の骨が女の人のコートの袖にひつかゝつてなか／＼とれなかつた。それでもやつと乗り得て空いた席に腰を下すと、もう軀はヘト／＼だつた。清子の隣の子供がしやぶつてゐるするめの匂ひが彼女のつい鼻先で匂つた。清子はつぶつてゐた眼を開けた。唾液が舌の兩側から流れ出した。彼女は何度もゴクリ／＼と音を立てゝそれを呑み下した。車窓の硝子に霙がぶつつかつては溶けて流れた。清子は自分の眞向ふのそれをぼんやり眺めながら、今度止れば下りるんだと思つてゐた。

清子は電車通りから少し入り込んだ芋屋へずん〳〵這入つて行つた。そして財布の底に三つあつた、穴のあいた十錢白銅貨の二つだけを殘して、後の一つで燒芋を買つた。包んでくれた新聞紙を透して湯氣の上る熱いやつを左の腕にかゝえ込んで、傘をすぼめるやうにしてさして、出來るだけ足早に自分の宿へと急いだ。

傾斜の急な階段をいつもよりは幾らか威勢よく登つて、たてつけの悪い襖を押し開けると、六疊の眞ン中に火の氣のない火鉢に凭つかゝつて伯母は一人ぽつねんと坐つてゐた。

清子はショールと足袋だけをとつて、別々に片すみの古新聞の上においた。十能に火を載せて持つて來た清子は、それを火鉢に移して炭をつぐと、待ちかねたやうに持つて歸つた包みを擴げた。よささうなのを一つつまんで伯母に渡すと、清子はムシャ〳〵食べ初めた。伯母がまだ皮をとつてゐる間に、彼女はもう三つ食べてゐた。そして伯母がそれを食べ終つた時には、彼女は一つ殘さずやつつけてしまつてゐた。

——どう？うまくやつて行けて？

しばらく、二人共默つてゐたが、急に伯母はかう聞いた。

——うまくやつて行ける。

清子はかう答へて、聲のない悲痛な笑ひ方をした。此の寒いのに何處へ行つてゐたのかと聞かれて、清子は一寸當惑したが、××商會に女事務員を募集してゐたので、採用試驗日だつたので行つて來たが、はつきりはわからないが多分駄目らしい。と言ふ事を短くかいつまんで話した。火鉢の火はたつて行く一方だつた。白く灰がかぶさると、清子は意味もなくそれを火箸でかきのけ、かきのけしてゐたが、思ひ出したやうに座を立つた。

——お茶でも入れませう。

氣分を換へるために、清子は押入から粗末な茶器を出して來て、もう大分冷めかゝつてゐる藥罐を火鉢にかけた。

何にもなしで二人はお茶ばかり飲んだ。伯母は、自分の家の事を話したりしてゐたが、不意に伯母はYの事を聞きだした。清子はその話には觸れたくなかつたので、いやな氣がした。

——此の頃、逢ふの？

伯母は誰とも名をさゝなかつたが、それはYの事にきまつてゐた。

——いゝえ。ちつとも。と清子はありのまゝ答へた。

伯母はまだ何か聞きたさうだつたが、清子が浮かぬ顏をしてゐるので、ためらつてゐるらしかつた。彼女は話が進展して行かないうちに、喰ひ止めておく必要を感じた。

——ねえ、Yのことはもう話すのは止しませうねえ。

と、精一杯の氣持で言つた。

夕方近くなつて、伯母は十圓紙幣一枚、清子の手に渡して、遊びに來るやうにと言つて歸つて行つた。

一人きりの間借りの自炊生活、それは卽ち清子にとつては反省の

生活だと言つてよかつた。否、それに反省ばかりではなかつた。反省しながら、清算し揚棄して行かうとする生活であつた。清子は此の生活に這入るまでには隨分苦しんだ。現在だつて苦しんではゐるが、過去のそれとは違つて、希望につながつた苦しみである。

清子は二十で上京すると、今の生活に引き移るまでの四年間を伯母の家で過した。此の四年間は、まるで何も氣づかない人にとつては、唯、何でもない四年間の年月であるが、清子にとつては全く變化の多い四年間であつた。

清子の上京した當時の社會狀態はまだ現在程までには發展して來てゐなかつた。その頃、彼女は獨立してやつて行かうと言ふ考へもなかつたし、又何を專門に研究しようと言ふ頭もなかつた。彼女の兩親にしても、東京へ出して、伯母夫婦に面倒を見てもらつてゐるうちには、相當の嫁入りの資格もつくだらう位な氣持で手離したに過ぎなかつた。清子は別に何をするでもなく、唯、プチ・ブル的な生活の中に自分を溶けこましてゐた。その中に得たものは、耳隱しに髮が結へるやうになつたこと、化粧が上手になつた事、着物の柄の選り好みをするやうになり、從つて着つけがうまくなつた事、それから、文學書や雜誌までを亂讀したおかげでハイカラな言葉が使へるやうになつた事位のものだつた。それ等はその頃の若い男達を惹きつけるためには必須的な條件でもあつた。そこへ現はれたのはYだつた。併し、Yは、女の結髮や化粧や言葉等のみを戀するやうな性質の男ではなかつたが、戀愛讃美期にゐる若い男女は、自分の身邊に最初に現はれた異性を戀し勝なものである。で、Yと清子は戀愛に落ちた。Yはその頃大學の文科に籍をおいてゐた。

時は同じ所にのみ停滯してはゐなかつた。人間の思想も亦その通りであつた。Yは時代と共に步調を合せて進んで行つたが、清子の步調は一人おくれ勝だつた。清子が取り殘されてゐるぞ、とはつきり感じ出した頃には、Yはもう餘程先を步いてゐた。從つて、二人の間にはギャップが出來た。

Yが或る旅行から歸つて來た時、清子は、一ヶ月振り位でYの下宿を訪ねて行つた。彼は旅行前よりは、瘠せて見えた。そして何處と言ふことなしに全體が別人のやうに感じられた。清子はいつものやうに、溶け込んで行くやうな親しさが二人の間には失はれてゐる事に氣がついた。Yが默り勝なので、清子も仕方なく默つて坐つてゐたが、何故かゐたゝまれないやうな焦燥を感じ出した。彼女の軀からは絕えず油汗がにじみ出してゐた。放り出されてゐる雜誌を無意味に頁を繰つて見てゐたが、心は非常に壓迫を感じてゐた。

Yは讀みさしの書物を膝の上に載せて、猫脊になつて目を通し出した。清子はいよ〳〵息づまるやうな空氣の中に自分を落しこんでしまはねばならなかつた。

彼女はぢつとうつむいてゐるYの長い頭髮を見つめてゐるうちに

いきなり、彼の頸つたまに兩腕を捲きつけて飛びついて行きたい衝動を感じ出した。併し、それもなしかねて、目を閉ぢて首をたれると、齒を喰ひしばつた。軀がふるへて來た。

――もう春なんだなア。

其時Yは何事もなささうにずつと本を放り出すと、立ち上つて窓の硝子を開けた。淸子はおし默つてゐた。Yは窓の外に首をつき出して夜の空を眺めながら、口笛を吹き出した。それは革命歌の譜であつたが、淸子は知らなかつた。彼女は、彼の心が柔いで來てゐるらしいと思ふと、いくらか氣分が輕くなつて淸子は顔を上げた。すると、恰度こつち向きになつたYとバッタリ目が合つた。

――どうしたの。氣分が惡い？

と、突然Yは言つた。それほど彼女の顔色はよくなかつた。九時過ぎになつて、淸子が歸らうとすると、此の本を讀んで見給へとYは言つて、二三冊、彼女の手に渡した。彼女は本を揃へて脊文字を讀んでゐると。

――わからない所は飛ばして、わかる所だけ讀めばいゝ。そのうちにわかつて來るから。今度來る時、わからない所を記して持つて來て御覽。

とYが言つた。彼女はそれを小脇にかゝえて彼の下宿を出た。外にはなま暖い風が吹いてゐた。淸子は、Yが別に怒つてゐない事だけはわかつて安心したけれど、どうもふに落ちない點が大分あつた。彼女は先刻のYの話振りや態度について、色々思ひめぐらしながら、足は停留所の方に向けて歩いてゐた。

その後、時々淸子はYに逢つた。そしてその度に、Yの氣持も少しづつわかりかけて來た。このごろでは、二人が逢つても、Yの話す事は、以前とはすつかり變つて來てゐた。それは、個人的なものから社會的なものへと、唯心的なものから唯物的なものへと變化して來てゐた。併し、彼女は、Yの氣持そつくりに自分の氣持が同化出來ないものが、まだ多分に殘つてゐる事を感じてゐた。その主なる證據は、Yが以前程に彼女を思つてゐないのではなからうか。と言ふ疑ひとそれに對する不平だつた。二人の逢ふ日もいつとはなく段々に遠ざかつて行つた。それはYの多忙な事にも原因したが、二人の思想のギャップが一層さうさせて行つた。

淸子の氣持は非常に不徹底だつた。Yがいつか彼女を許して、君は非常に間口が廣い。と言つたのはよく當つてゐた。何處までもYとくつついて共に歩かねばならないのだと知りつゝも、他の男に興味を持つたりした。自分の本心は、ひどくそれを輕蔑し、何の價値をも認めてゐないにも關らず、人に誘はれるがまゝに、ブルジョアを相手にした歌舞伎や映畫を觀て、甘い感激に浸つたりした。淸子は、すつかり、何にでも合はして行く事の出來る、融通のきく人間になりきつてゐた。

或る日、淸子はYの部屋で、彼の歸りを待つてYの本箱から一番

わかりさうな氣がしたので、プレハノフの『藝術論』と言ふのを取り出した。Yのお蔭で社會科學に關係した書物をいくらか讀まされてもゐるし、說明も聞かされてゐるので、しばらく讀みつゞけてゐたが、そのうちにYが歸つて來た。彼はかなり疲れてゐるらしい樣子だつた。上衣を脫ぎ捨てゝドカンとあぐらをかくと、ズボンのポケットから煙草とマッチを取り出してやがてふかし出した。淸子はぢつと彼の樣子を見てゐた。白いカラーとカフスが汗と油で薄黑く汚れてゐるのが一番に彼女の目についた。併し彼女は見て見ない振りをしてゐた。相變らず、その場の空氣が、彼女に、氣輕く、もうそのワイシャツは汚れたわね。とは言はせなかつた。そんな事は、Yにとつては、どうでもいゝので、下らないおせつかいはしない方がいゝ事が淸子にはわかつてゐた。

――今日はビラ撒きをやつて來たよ。

突然、Yは元氣よく言つた。

――さう。

とだけ淸子は答へた。Yの快活な調子に對してそれは餘りに弱々しく不調和だつた。どうもそぐはない。どうして自分にはかう不純物が多いんだらう。何故Yの悅びを悅びとし、又悲しみを悲しみとする事が出來ないのだらう。と、淸子の胸には又此の自己呵責がやつて來た。Yは何と思つたかそれきり又默つた。淸子の心の中は苦悶をつゞけた。人々の雜沓した或る街角である。Y達の手によつて多くのビラが撒かれる。人々はそれを拾ひ上げて讀む。そして人々の心はそこに書かれた力强い言葉によつて………。彼女はかう想像して見た。そして、Yが實踐によつて得た感激と、自分の想像によつて造り出した感激とを一緒に結びつけて、一つの同じ感激を持たうと彼女は努力した。

――何のビラを何處で撒いたの。

と彼女は聞いて見た。そしてYの表情に注意した。彼は不機嫌らしい。今の場合、彼は確かに自分の存在をうるさいものに感じてゐるに違ひないと彼女は見てとると、不幸を感じ出した。

――それはねえ、……さう言ふことはあんたには別に興味がないだらう？

彼は靜かにかう言ふと、眼を上げて淸子の顏を一寸見た。人種の違ふものに、自分達の尊い感激を矢鱈に分け與へる事はいかにも惜しいと言ふやうな態度に淸子にはとれた。ムッとするものを彼女は感じた。で、融和しようとした初めの氣持は消えて、唯、目の前に起つてゐるこぢれを心の中でまさぐつてゐた。

それから、一時間半の後、淸子は日の暮れた街を重々しい足どりで步いてゐた。氣候は十月に間もなかつた。うすら寒い風が街を流れてゐた。淸子はもう精も根もなかつた。無茶苦茶に打ちのめされた後のやうに體も心も疲れきつてゐるやうだつた。その上非常に憂鬱だつた。併し、別に後悔はしてゐなかつた。當然のなりゆきだら

うと言ふあきらめのやうな氣持を持つてゐた。

――僕はそんな事は思つてゐない。併し、いつまでもこのまゝぢやこまるなァ。僕は別に君に何もかもわかつて貰ひたい、えらくなつて貰ひたいとは思はない。そりやその人の頭の問題で、出來ない事は仕方がないんだから。併し、たゞねえ、信念だけは持つてゐて貰ひたいと思ふんだ。信念、しつかりした信念だね。それだけは是非必要だ。

淸子が、貴方は今ではもう私をあき足りなく思つてゐるだらう。私はもうそれは夙うから感づいてゐる。それで私も貴方に負けず勉强して行つてわかるやうにならうとは思つてゐるが、どうもさう思ふやうには行かない。こんな私をいつまでも引きづつてゐなければならないのは貴方の苦痛だらう。ほんとに貴方は私と別れたい氣持があるんだらう。それをはつきり言つて貰ひたい。と言つたのに對して、Yはかう答へたのであつた。今、淸子は再びそのYの言葉を思ひ出してゐた。又、彼はかうも言つた。

――併し、君が僕のやつてゐる事がどうしてもいやなのならば仕方がない。君が別れたいのを無理に僕は引きとめはしない。君は自分でよく考へて見給へ。僕につくつもりなら、さつきにも言つた通り、しつかりした信念があつて欲しい。どうだ？君の氣持は。二年前のあの頃の氣持も二年後の今の氣持も同じものであつては困る。此の際、僕は忌憚なく言つてしまふが、君の氣持は、あの頃と今と何等違つては來てゐないんぢやないかなァ。僕には、相變らずプチブルジョアのお孃さんとしか思へないね。君はそれで滿足に思つてるんだらうか。實際、あんたなんか暇なんだからグン／＼本を讀んで勉强すればいゝんだ。それに、君はどう思つてゐるか知らんが、僕はまだなか／＼結婚は出來ないよ。例へこれから先、結婚してもだ。現在君が着たり食つたりしてゐる通りの生活が出來るものと思つたら大間違ひだよ。僕達は永久に貧乏であるかも知れない。知れないどころぢやない。それにきまつてる。僕の收入きりで足りない場合は、君にも働いて貰はねばならない。そんな事に君が堪えて行かれるかどうか。それは君一人の覺悟にあるんだから。……僕の言つてゐる事が君のふに落ちない事があつたら遠慮なく質問してくれ給へ。こう言ふことはお互ひに、はつきりさせておかねばならない事なんだから。もつと早く僕は言つておかうと思つてゐたんだ。併し、一寸機會がなかつたもんだから今までのびてゐた。

淸子は、Yの言葉をぢつと聞いてゐた。彼の言ふことはよくわかつた。そして、今までの自分のあいまいな態度のいけなかつた事も一層はつきりわかつて來た。彼女は、Yのやつて行かうとしてゐるそして現在もうそれに向つて足を踏み出してゐる仕事に對して不贊成ではなかつた。又、信念云々の事や、これからの苦難の生活に對する覺悟等々についても肯定する事が出來た。併し、一方彼女はYの立場に立つて、彼自身の身について考へた時には、此處で今二

人は別れてしまつた方がいゝのではないか知らんと思ひ出した。Ｙは彼自身さへまだ鍛へ上げられてゐないのに、まだ彼にも及ばない自分を引き上げて行く事は大きな負擔であらう。併し、そんな事はＹの當然の義務だと言へば言へない事もなかつたが――そして彼も亦さう言ふであらうけれど、彼女自身にとつては、Ｙを、責任も束縛もない、自由な體にさせて、グン／＼と自らの道に突き進んで行かせたいと思つた。自分は自分で、過去の態度、生活を批判して、その中の惡いものは捨てていゝものは拾ひ上げて、さうして自分と言ふ人間を高い所へ引き擧げて行かう。かう彼女は決心した。そして、今度逢ふ時には、必ず、今よりはしつかりしてゐるだらう事を誓つて、清子は大きな決心と共に、潔くＹと個人的な關係の手をきつたのであつた。

清子は、おほひかゝつて來る暗いものを拂ひのけるやうにしながら、電燈の明い街から横道にそれた。Ｙの下宿を出た時は、それでも希望と決心に燃えてゐた一脈の淋しさをも感じなかつたが、今となつては、懸命に築き上げて來たものが、一時に破壞されてしまつた後のやうな氣持だつた。

清子は彼の事を考へ通しながら歩いてゐると、唯一の光明を、わざと吹き消して眞暗がりの中に自ら取り殘つた自分をこれからどう處分して行けばいゝのかわからないやうな氣がした。

八月だといふのに、まるで、梅雨期のやうに雨ばかりつゞいた或る朝、清子は目を覺すと、戸の隙間から陽がさし込んでゐた。十幾日振りで太陽の顔が見られると思ふと、活氣づいて來た。勢よく床を離れると、一番に蚊帳の四角をはづしてから二方の戸を全部開け放した。流石に八月だつた。天氣さへよければ朝からもう光線は强烈だつた。永い間、降り込められて充分に濕氣を含んでゐた心は、どうやら今日は乾いてくれさうな氣がした。何もかも洗つて乾さう。さう思ふと彼女は大急ぎで朝食の支度をしに、炊事道具を引き下げて階段を下りて行つた。

六疊一間の二階がり生活を清子の兩親は快く思はなかつた。勝手な振舞ひには送金は斷はるといつてきた。相變らずの味噌汁と漬物で簡單な朝食をすませると、彼女は汚れ物を山積みにして井戸端に出た。井戸は五軒ばかりの共同で使つてゐる。もう二軒ばかり洗濯を初めてゐた。困つたなと彼女は思つた。今に階下(した)の主婦も初めるだらう。さうすれば此の盥を早くあけて返さなければ……。

――私はもうすみますから、こゝへいらつしやいまし。

ぼんやり立つてゐた清子に六十近い婆さんがかう言つた。越して來て以來初めて見る婆さんである。彼女は昔からの癖で自分の方から先に挨拶をすると言ふことをしないので、近所の人々とは氣まづい思ひで相對してゐた。初めて此の婆さんにかう聲をかけられて、

救はれたやうなホッとした氣持になつた。
――ハア。有難うございます。
一寸固くなつて答へて、云はれる通りその後へ跼を据えた。ポンプで汲み出すと、水は盥の底に當つてはじけて散つた。
――アラ、すみません。
――いゝえ、お互ひさまです。
かう答へたのは、いかにもガッシリと丈夫さうな隣りの土方の女房だつた。口をきいて見れば、皆いゝ人だつた。
彼女は、なるべく邪魔にならない所に盥をよせると、そこにしやがんで次々と洗ひ出した。石鹸の泡が四散した。陽は彼女の脊中にヂリ〱と段々に灼きつけて來た。しやがんでゐると、足がしびれるので、彼女は途中で時々立ち上つた。肌はもうしつとり汗ばんでゐた。彼女がもう殆んど洗ひ終へても、隣りの女房は夫のものや子供のもの、汚れたものをまだ積み重ねて持つてゐた。それに、女房は落ちついて洗ひつゞける事は出來なかつた。家の日蔭にござを敷いて坐らせてあつた子供は怠屈して何度でも泣いた。泣く度にその女は立つて行かねばならなかつた。やがて、母親は十か十一位の上の女の子が歸つて來ると、それにその乳呑み子を脊負はせた。
――いつまでたつても片づきやしない。乾しとけばひとりで乾くんだが。
母親は獨語のやうにかう言ふと、夫のらしい薄黒く汚れた地の厚いシャッらしいものを、やけに洗濯板にこすりつけた。
――大變ですね。お子さんがおありになると。済子はほんに大變だらうと思つた。
――手間がとれて、手間がとれて全くやりきれません。
と母親は答へて愛想笑ひをした。
兩側で二人はしばらく洗ひつゞけた。
――母ちやん。ねえ母ちやん。母ちやんてばねえ、ねえ。
赤坊を負ぶつた先刻の女の子だ。聲を鼻にかけて哀願の調子で、しやがんでうつむいてゐる母親の顏をのぞき込んで言つた。
――何だよオ。
――ねえ母ちやん。もう言はないから、一錢だけ、ねえ一錢だけでいんだからよオ。
――うるさいねえ。又か。何を買ふんだよオ。
――もう言はないからさア。一錢だけ、いゝでせう。
――さうおあしばかり使へつて先生が言つたかい?
かう言はれて、子供は默つてゐた。
済子は、そんな事をしていゝのだつたら――母親が氣の毒がつたり、馬鹿にされてると思つたりしないのだつたら、悦んでその子供に自分の懷から出してやりたかつた。女の子は、つまらなさうに鼻汁をすゝると同時に脊中の子供をゆすり上げた。赤坊は頭をつるつるに剃り上げられて、むざんにも陽に直射されてゐた。そして顏は

眼が開いてゐるのか閉ぢてゐるのかわからない程くしや〳〵になつて姉の子の狹い肩におしつけられてゐた。

——もうこれつきりだよ。いゝか。

それでも母親は不承々々に立上つて家の中に這入つて行つた。女の子の顏は急にはれやかになつた。そして、脊に子供の乘つかつてゐる事を忘れて、小踊りしながら母親の後をつけて行つた。淸子は無意識に手を休めてそれを見てゐた。が、やがて一人きり取り殘された事に氣づくと、ビックリしたやうにまた手を動かし出した。すぐ前に鉢合せしてゐる盥の中にはまだ〳〵洗物が殘つてゐた。そして、その洗ひ汁は淸子のなどとは比較にもならない程ドス黑く、白い垢のかたまりが表面に浮いてゐた。

淸子は腰をのばして立ち上つた。額から汗が玉になつて流れた。彼女はそれを袖口で拭つた。そして、日蔭の材木を積み重ねてある所へ行つて休んだ。

淸子は或る胸騷ぎを感じながら、十間ばかり隔つた柵の向ふの山手線の線路を見てゐた。線路は太陽に反射して銀色に輝いてゐた。その上を何臺かの電車が左右から驅けて行つた。と、今度はシュッシュッシュッとすさまじい音を立てて濛々と黑煙を吐きながら、別の線路を汽車がやつて來た。汽車は貨物列車であつた。淸子の二階は、それが通る度に、まるで地震のやうに搖れるのであつた。彼女は初めはそれを非常に氣にして、一々神經を尖らせてゐたが、此の頃では大分慣れて來てゐた。又やつて來るなと思ひながら、まるで何か珍らしいものをでも見る時のやうに、ぢつと目を据えて車體の現はれるのを待つてゐた。煙を吐く音につゞいて、ゴットン〳〵ゴットン〳〵と重々しく、石炭、土砂、材木等を積んだトロにつゞいて、唯眞黑な箱が現はれ出した。貨車は驛の坑內に這入らうとして速力をゆるめてゐた。一つの箱が消えると、又一つ、又一つ……それは馬鹿々々しい程長い行列だつた。もうこれでいよ〳〵おしまひなんだなと思つてゐると、まだつゞいてゐた。連つた長い羅列のうちの一つ〳〵の箱はまるで意識あり、自力あるものゝやうに思はれた。地響きを立てゝ押し並んで、自信あるものゝ如く重々しく進行して行く威力！　さうだ。これはもうたしかに威力を備へてゐるやうに淸子には思はれた。

馬鹿な。貨物列車位、始終二階の窓から見てゐるぢやないか。珍らしくも何ともない。彼女はすぐから思ひ返した。これは、きつと自分はかつて見たメーデーの示威運動の行列に結びつけて考へてゐるのだなと思つた。若しその貨物列車が勞働者のデモストレーションであつたにしても、今まではこれ程までの感激を持たなかつたであらう。彼女はそこに一足一足とプロレタリアートのイデオロギーなるものに近づきつゝある自分を見た。

その夜、淸子はどうしても眠られなかつた。昂奮してゐる神經に一定の時間をおいて走つて來る電車の音がひどくわざわひした。電

車のなくなる時刻まで起きてゐて、机の抽出の中のものをゴソ〱整理などしてゐたが、二時が來ても、二時半が來ても、いやに頭は冴えて來る一方だつた。三時になつて蚊帳の中にもぐり込んだ。電燈を消すと、一枚だけ戸のない窓から薄明るく月がさし込んだ。清子は仰向けに寢て、大きく眼を開いたまゝ蚊帳の天井を見てゐた。

——僕は何も別に君にえらくなつてもらひたい、何もかもわかつて貰ひたいとは思はない。……併し、唯、信念だけは持つてゐて貰ひたいと思ふんだ。信念、しつかりした眞面目な信念だけはねえ。

と、Yは、かつてM町の下宿の彼の部屋で感慨深くかう言つた。又、彼はかうも言つた。

——君の氣持は、あの頃も今も何等變つて來てはゐないんぢやないかなア。僕には、やはりプチ・ブルのお孃さんとしか思へないねえ。君はそれで滿足に思つてるんだらうか。

——清子の目の前に、あのがつしりと引きしまつたYの顔がはつきりと現はれて來た。あの頃の自分は、いつかは現在のやうな氣持になる事を豫想してゐただらうか。いや、決して、かうまで確實にかうまで早くやつて來ようとは思つてゐなかつた。何故、自分はあゝ未練もなくYと別れてきてしまつたのだらうか。Yを自由に生かせるために、そして、自分は自分自身で清算して行くために、などとあの時はいゝ立派な理屈をつけて手を切つたが、今考へて見れば、決してそれは本心ではなかつた。七分はさうであつたかも知れない。併し後の三分は？　小ブルヂョア根性の滓が取りきれず、後方への生活に執着を持つてゐなかつたとは誰が言ひ得よう。

清子は初めて目覺めた。現在の自分があの頃の自分であつたならば、決して、あんな態度は取らなかつたであらう。あの時は、よし別れたにしても、きつと自分一人で彼に追つつき、追ひ越して行くであらうと未來に對して何の不安も感じはしなかつた。併し、想像と實踐には差がある。今實踐に移らうとする下準備の第一歩に於て彼女は、現在の社會制度に於ては女性が裸一貫で立つて行く——のみならず、何等かの運動にたづさはつて行く事がいかに困難で又不可能な事であるかゞ實際にわかつて來た。自分の場合はやはりYに結びついて行動を共にした方が賢明なやり方だつたのだ。と彼女には思はれて來た。

その翌朝も、貨物列車は赤旗のやうに、黑煙を幅廣く靡らせながら先頭に押し立てゝ清子の部屋の窓の下をまつしぐらに走つた。彼女は窓に寄つて又それを見た。はつきり見た。確かにそれは人間の行列ではない。貨物を運ぶための車の長い〱行列に過ぎない。さうわかつてゐた彼女は胸が躍つた。そして、どの箱の上にもYが乘つてゐるやうに思へて仕方がなかつた。瞬間！　彼女はYの軀をめがけて、窓から黑い貨物車の上に飛び移つた幻惑を感じた。

午後、清子はゐるかゐないかもわからないM町のYの下宿に向つて驅けつけてゐた。



みちづれ

ヴィクトオル・マルグリット
望月百合子譯

第一章——六

『イヴリンにて——ローザ嬰兒殺しにて投獄。私はホテル、ポストにゐる。來てくれ。メレット』

『何んて恐ろしいことだ』とアニックは事務机の上に、今受取つたばかりの電報を投げ出し乍ら叫んだ。『私達は私達の肉の牢獄にとぢ込められて生きてゐる。他人のことは何にも知らない……だが自分自身のことも何を知つてゐるだらう？……可哀さうな女！……やつと確かな場所に着いたのに、やつと生活が立ちなをらうとしてゐたのに！……あと二三日で、オオトイスの家が、惠みの港のやうに、彼女のために開らかれたであらうに……メレットの手紙は、愚かな殺人のすぐあとへ屆いたのだらう……

アニックはすぐ決心した。彼女はマドモアゼル・アルデイをまごつかせも、罪の女を放任しもしないであらう。彼女は早く樣子を知りたいと思つた。そして必要に應じて助力したいと思つた。このローザには、その野蠻な行爲を思ふと怒りと悲しみで胸がいつぱいになるけれど、辯護者が要るだらう……誰がこのまゝの罪に對して、少くとも熟考し、同情を寄せる理由を、彼女の辯護を他にして、見出さうとするであらう？

彼女は急いで旅行鞄を整へ乍ら、不意に、今日の午後アメデエとランデヴウがしてあることを思ひ出した……眼と眼が愛の契約を結んでしまつてからは、彼等の間では、もうジャクマンもランベエ

ルも問題ではなくなつてゐた。彼等は氣に入り合つた男と女であつた。そして彼等は時の流れに、徐かに身を任せてゐる。完全な精神的同感に、不思議な肉體的磁力が加はつた…明日のことを考へることなしに、それが共に過す長いお祭のやうではないにしても、彼等は現在と、暗默の結合とを享樂してゐる。彼等はまだ約束の言葉も、決定の接吻も交はしてはゐなかつた。けれども言葉と接吻とは毎日徐々に、彼等の心から唇に登りつゝあつた…

『あの人のところに廻つて行く時間がある。知らせて行かう』

彼女はメトロで、ブウルヴアル・ラスパイスに着いた。丁度エレベーターが登る處だつたので、彼女は一氣に六階まで登つた。鞄をあづけた門番の女は、彼が出かけたのを見なかつたと言つた。けれども彼は居なかつた…彼女の顔を知つてゐる——アニックはブルウサ夫人やゼロノフと度々晝餐に招ばれてこゝに來たので——家政婦兼料理番のダンヴオア婆さんは

『旦那様はバレエ・ブルボンにいらつしやいました。お仲間のお集りがございますので…旦那様はさぞ殘念にお思ひになるでございませう！』と言つた。

アニックの顔はあり〳〵と失望の色を浮べた。會ひに行かうか知ら？併し若し日中にイヴリンに着かうとすれば、やつと停車場に行く時間しかない…

『若し何かお言づてがございましたら？』

『えゝ。私達は今日の午後ゼロノフさんの處でお會ひするお約束をしてゐたのです。ルウソオさんにお目にかゝりに行くために…』

『ルウソオ？』

『さう仰有れば分ります…美術學校の校長です…で、私が今すぐイヴリンに出發しなければならなくなつたことを、お正午前にジクマンさんにお知らせしなければならないんです…私を當てになさらないやうに…心配なさらないやうに！ある訴訟のためですつて…今晩すぐ手紙を書きますけれど…』

失望が彼女の屈托顔にはつきりと讀めたので、婆やはすぐ言つた。

『御安心なさいませ。旦那様からお電話がある筈でございますからその時申上げます』

『ありがたう、婆やさん』

人の好い婆やは、やさしい微笑を浮べて、彼女が降りて行くのを見送つてゐた。多分主人よりもよく、婆やは彼がアニックに對して抱いてゐる感情を知つてゐた。この診斷のために彼女は少しも占ひを用ゐる必要はなかつた。彼女は只家で見てゐただけだ。證據は毎日ある。

アニックは、サン・ラザアル驛へのタキシイの中で思ひ沈んでゐた。彼女は單なる當外れ以上に、アメ・エに會へなかつたことを感じた。愉快な日が失はれた殘念さ、それはほんとの悲しみだつた……この悲しみは、訪問を中止しなければならないためか知ら？あの

熱烈な才能を、殊に最近の作『凱旋門の下を通過する諸元帥』といふあの壁畫を讃美して、あれ程會ひたいと思つてゐた有名な畫家に會へないためか知ら?……それは勿論だ。けれど殊にアメデエと一緒にゐる喜びが……つどひにが缺けるための悲しみだ。

それに、彼女はまつさきに彼にこの事件を話したいと思つた。そして彼の考察や、意見をきゝたいと思つたのに……

彼女は停車場の雜音や、プラットフォームの雜鬧や列車や、出發に押し包まれた。窓外を走る風景に、いつか歩いた道をふと見出してその時のことがはつきりと、セーヌ河のキラキラする曲線や、ポプラ並木の間に見えるルイ十四世式のお城や、牧場ののどけさを破るモト・ペンゾルの廣告板と一緒に彼女の記憶から迸つた……イヴリンの郊外や、苔むした家々を包む城砦や、小さな町のあらゆる粗野な幻が、彼女の少女時代と共に彼女のうちに甦へつた。それは時の流れに忘れられた異邦人のやうな感じがする……彼女自身思ひ出せないやうな小さなアニックの遠い遠い面影だ。

ホテル・ド・ラ・ポストにはアルデイはゐなかつた。

『今しがたスウリオさんの處へお出かけになりました。ローザが働らいてゐた肉屋で、ジョルジ・クレマンソオ廣場です……』

『クレマンソオ?』

『はい、もと市場の廣場と申した處で』

『あゝ、さう、分りました……』

何百年といふ菩提樹があつて、瓦屋根の上に鳩がクウ／＼飛び交つてゐる、低い市場の建物に圍まれてゐた市場の廣場！……そしてエショオデエ町の角には、綠色の窓わくのある店があつて、そこで彼女は蒼白めた弱い子供として、母の手に育てられたのだ……信用の店、ラムベエルの家で……その頃はクレマンソオの廣場といふ名前はなかつた。それは遠い、遠い昔のことで……ただローザも彼女も學校に行つてゐた時分で、大洪水の前……あの戰爭の赤い大洪水の前のことだ。

彼女は――ペエル・ラ・ヴイクトアールの名札を皮肉な眼でみるまでもなく――屋根よりも高い花盛りの菩提樹のある、昔のまゝの廣場をみつけた。彼女は眼でエショオデエ町の角のなつかしい昔の家を探した。その家は正面が血のやうな赤色に塗られて、そこに白い文字で、スウリオと書いてあるのが見えた。そして店には茶褐色の肉の塊が、吊してあつたり、並べてあつたり、それに蠅がぶん／＼群れ集つてゐた……

彼女は小鼻を摘んで、息をつめ乍らはいつて行つた。マドモアゼル・アルデイは彼女を見つけて、接吻で迎へた。

『來てくれてありがたう……お前さんがあの子を辯護してくれると思つたものだから』

アニックは、呆然として、すつかり變つてしまつた壁や、彼女が生れた奥の部屋の、硝子張りの扉を見まわした……いやな臭ひが咽

喉を息づまらせ、死の味はこゝのあらゆるものが呼吸してゐる。豚に肉斬り鉋刀を突きさし、どす黒い汚點で汚れた前掛を出張つたお腹につつかけてゐるこの肥大な男までが。

『マドモアゼル・ラムペエルです。巴里の控訴院の辯護士で……さうです。こゝの元の所有主の娘です……』とアルデイは紹介した。

肉屋は驚いて挨拶した。そしてねつとりと笑ひ乍ら、

『御自分のお家にお歸りになつたおつもりで』と言つた。

それから彼は、イヴリン中の評判になつたこのドラムの重要人物の一人であることに滿足を感じ乍ら、自分勝手に結び合せた話を、また繰返へし始めた。アニックは今にも吐き出しさうなのを努めて耐え乍らきいてゐた。恐ろしい憂欝がその嘔氣にまざり合つた……

『私はあの子を食べるだけの約束で雇つたんです。あの子の狀態ぢやそれだけのこともやつとだつたんでさ！併しま、こゝにや、仕事が無いわけぢやありません……それに、私はよく、『お上り！……お前は大忙しをしなくちやならないんだから、二人分食べる位何んでもないよ……』と言つたものです。肉だつて殘物が澤山ありまさあ。暑いんで賣るよりも腐らせる方が多い位なんですからね……それでもいつ頃からかローザは妙に陰氣になつてしまつたんですよ。あの子はいつぱい食物を盛つたお皿の前に坐つても、まるで馬鹿みたいにぼんやり何かみつめてゐるんです。そしてお腹が大きくなればなる程、頰がこけてしまひましてね。その上みんなから意地惡をされるものだからだん〱氣をもむやうになつたんですよ。町で餓鬼共には追つかけられるし、溝泥の芥を投げつけられるし……そしてたう〱ある日、あの子はお産のために姿をかくしてしまつたんです。それは木曜日でした。そして昨日の日曜日に、あの子は町役場に行つて子供を殺したことを白狀したんでさ……木靴で頭を踏み潰したんださうですよ、可哀相に！何んと慘めぢやありませんか……とある垣根の後から碎かれた骨がみつかりましたよ。その垣……だが、貴女は眞靑なお顏色ですが……何か少し召上りませんか？搾り滓でも如何です？きつといいですよ……でなけれやうつぼ草の實でも？』

アニックはあわてゝ辭退した。彼女はアルデイを引つぱつて、この窒息するやうな檻の外に出て、胸の底まで生き〱とした酸素を吸ひ込んだ。

『何んて空氣はいいでせう。あの惡臭に汚されない空氣は！』と彼女は嘆息した。

『さあ今度は一番辛らいことが殘つてゐる。牢舍へ行かう。ローザに會ふことが出來たので、お前を辯護士に賴むことを話しておいたよ……ルウアンに送られる前に多分あの子に會ふことが許されるだらうから』

イヴリンは小さな町ではあるが、二千人以上の人口を數えながら憲兵隊の區隊以外の司法機關を有たなかつた。それで、隊長の軍曹は町長と相談した上で、アニックに必要な許可を與へた。

牢舍は憲兵隊の建物に隣接してゐる狹い物置小舍の中にあつて、光りは、野に向つて開かれてゐる鐵格子のはまつた小さな窓からしかさゝなかつた。下士官はこんな素晴らしい辯護士のために敬意を表して、自身で扉を開けに來た。若し前の學校の先生の保證がなかつたなら、彼は決して『女が辯護士の服裝をする！』なんて云ふ可能性を信じなかつたであらう。

アニックは板の寢床に横たわつてゐるローザをみて、びつくりして立ち止つた。その板の寢床も、バケツも、水差しも、この白い石灰塗りの部屋を牢獄だと云ふ感じと同時に、風紀衞兵隊のやうな感じにしてゐた。‥‥さうだ、彼女の前に、壁に向つて寢轉がつて強情に身動きさへもしないでゐるのはまるでけだもののやうだ。兩腕の中に頭をかくしてゐるローザは、若し聲もなく泣いてゐないとすれば眠つてゐたのだ‥‥

アニックは彼女を呼んだ。彼女の腕に觸つた。

『私よ、アニックよ！アニック・ラムペエルよ。貴女の友達の、貴女の辯護士の！』

何の答へもない。まるで着物の包みを搖すつてゐるやうだ。この張合のない沈默の前で、アニックは優しく、或は命令的に、遂には母性的に、說服せずにはゐないやうな調子になつて、その聲が石の心にも通じるまで話しに話した。

ローザは遂に振り向いて見た。そして坐りなほした。彼女は今は陰鬱に耳を傾けてゐる‥‥けれどもやはり不可解と怒りとからくる同じ反抗心と、一種呆然とした態度で、强情に壁をみつめつゞけた。

太陽の一線の光りが、青空の小さなかけらが、格子越しに輝やいてゐた‥‥本能的に、ヴェルシエスの音律が、アニックの心で唄つた。

『お前は何をしたの、こんな處にゐて、お前の若さで？‥‥』アニックは一層やさしくなつて寢床の上に身を屈めた。

『可哀さうなローザ、何んていふ不仕合せだらう！私達は貴女を救はうとしてゐたのに‥‥アルデイさんがすつかり私にお話しになつたのよ‥‥でも私は今更ら、貴女の過去のいたづらを咎めはしません。貴女は下らない男の約束を信じた間違ひではもう十分苦しんで來たのだから‥‥だけど、貴女が今度やつたことは？貴女の子供、貴女の肉ぢやなくつて！‥‥貴女にはそんな權利はなかつたのに‥‥呼吸をし始めた瞬間から、子供は貴女にとつて神聖でなければならなかつたのに‥‥』

ローザは、その暗澹とした、深淵のやうな魂の底から、歸つて來るやうに見えた。

『それや、墮胎した方がよかつたに違ひありません。あの寶石屋のお神さんのやうに‥‥あの人は無事に濟んで‥‥私はこゝに！』

『貴女は自分の子供の頭を、木靴で踏み潰したりして、罪を犯したから、こゝにゐるんです‥‥それは自然に反した恐ろしい罪です

……」
「ぢや、戰爭で、人を殺すのは？少くともその人達は爆彈で潰ぶされる前に、死ぬ程お腹が空いてはゐないでせうに」
「貴女はその子を育てゝ……敎育すべきだつたんです……人間が改良されるのは……平和が準備されるのは、敎育に依るのです……」
「そんなことを言つたつて！」
「まあ考へて御覽なさい、ローザ……母親が！……自分の子供を殺すなんて。可愛がつたり、いたわつたりする代りに……」
「何んで可愛がるんです？骨だらけの貧乏で？」
「働いて！」
「一人で生きて行くだけだつて可成り苦しいのに」
「後になれば、その子は貴女を助けたり、慰さめたりしただらうに……その子は貴女に報ひただらうに……」
「貧乏人共は、犬の家族のやうなもんだもの……大きくなりや、分らなくなつちまふわ……私のお母さんにしたつて、あゝ、私はどんなに泣いたつて！……そしてお父さんは、いつでも！……」
「貴女は後悔しないの？だつて、ローザ、侵してはならない者を、ぴち〳〵する小さなひとつの生命を！……恐ろしいことだ。どうして貴女はそんな殘忍なことを考へついたの？」
「私は肉屋で小羊達を殺す時よりも苦しめようとは思はなかつたわ……何故あんた方は父親に向つて自分の子供ぢやないなんて言ふ勇氣があつたかお訊きにならないの？……あの人だつて牢舍に入れられるのが本當だわ。でなきや正義なんてものがあるもんか！……」
「で、誰が父親なの？」
「あんたよく知つてるくせに、だつてあの人があんたを寄越したんだらうもの！」
「私が？馬鹿な。私は貴女を辯護しに來たのよ」
「さうさ、だけどあんたはあの人に使はれてゐる人だもの！……」
「もう私はさうぢやないのよ」
「まだあんなことを言つて！……もう澤山、お休みなさい」
　ローザはまた背を向けてゴロリと横になつて、頭を板床にすりつけるやうに押しつけた。アニックは怒りよりも恐れをもつて、髮を振り亂し、眞蒼な顏色をしたこの大きな娘を見つめた。その手が小さな頭を粉碎したのだ。昔、一年程机を並べてゐたこの美しい馬鹿娘の面影は何んにも殘つてはゐなかつた。そしてルボオ……。彼女は、額を寢床にすりつけて、淚も浮べてゐないローザの前で、何を言つても無駄なことを覺つた……自分が生んだばかりの子供を殺すのを犬の仔をでも川に投げ込む以上に、惡いことゝ思つてゐない、この粗暴な百姓女に、義務や、人生の意義を話すことは……それは壁を崩さうとするのと同じにむつかしい！只時のみがこの硬ばつた心を和らげることが出來るのだ。
　アニックは悲しみに滿されて引き退つた……

彼女の仕事は困難であらう！併し彼女は冷淡になるどころではなく、この光景を見て一層女性的憐れみや、人間的情けやを喚られるのであつた……彼女は貧乏の味を知つてゐるので、ローザの氣持ちはよく分つた。けれどもローザの眼にはアニックは不正と不公平の化身のやうにしか映らなかつた。アニックには自分がローザに對して代表するものが、ローザの肉までも食つて罪に落し込んだ揚句、情容赦もなく彼女を罰する階級の幻影であることを覺つた。彼女はどうしたらいいか分らずに苦しんだ。

『どうだつたの？』とアルデイはアニックの手をとり乍らきいた。

『むつかしいでせう』

ホテル、ド・ラ・ポストの食堂で硬い肉ばかりの味のない食事の後に、公證人と、獨身者の藥劑師との訪問を受けなければならなかつた。――それからやつと汽車に乘ることが出來た。巴里への歸途はマントまで――そこで乘換へて、メレットは眞直にヴエルサイユへ歸ることが出來た……メレットが一緒だつたのに、アニックは待長くて困つた。

たつたひとつの考へ――アメデエに會へるといふ――が淸涼劑のやうに、アニックの苛々しさや、不條理な人間の生活に對する反感をしづめることが出來た……大抵の人々が、底無しの暗い井戸の中でもがくやうなこの大きな、際限のない馬鹿らしさ……。

メトロの入口は閉ざされてゐた。彼女はプラス・ド・アーブルのビアホールの前でタキシーを呼んだ。その時、角の卓子にビールを前にして腰かけてゐる一組の男女が目についた。

おや、おかしい！』と彼女は呟いた。

彼女は姉の婚約者、ルイ・マルチネを認めたのだつた……。彼等の結婚の日はこの月の末と定つてゐた。

『ポオルは自分ばつかり愛されてゐると思つてゐる！たしかに間違ひはない。あの脂ぎつたモオル人とカタラン人の混血兒らしい厚ぼつたい顏や、挑發的な口髭や、出張つたお腹は、たしかにあの仲買人だ……隣席にゐる女の腰に一方の腕をまわして、彼は何かみだらなことを囁いてゐたに違ひない。……女は怪しげな、滿足した表情で笑つた。……若くはない。そしていやにごてごて着飾つてゐた……髮を染めてゐるが四十位にはなるであらう。

それはマルチネが仕事を始めた時に助けたリズ・ペルタと云ふ帽子造りの女だつた。この古い關係はもうずつと以前から斷れようとしてゐた。彼は丁度、心の底では彼女しか愛してはゐない、だからこれからも會はうと言つて、彼女を宥めてゐる處だつた……

彼等は立ち上つて、やさしく寄り添つて、靜かに家に歸る夫婦者のやうな步調で步き出した……

彼女は二人をぢつと見送つてゐた。ポオルに知らせようか知ら？知らせよう……只併し、心の命ずるまゝに……何故なら、それは些の疑ひもないからである。即ちマルチネがあらゆる關係、あらゆる

悪德を持つてゐる以上、ポオルは結婚を中止しなければならない……若しポオルに誤解されたら？さうだ、初めはきつと……だつて仕方がない。ポオルはあんなに言つてゐるけれど、多分自分でも知らないで、この男の佃強な體軀に心を惹かれたのかも知れない？……彼女だつて、不快を感ぜずにルポオを考へてゐたのは錯誤を持つてゐたからではないか？……彼女を誘惑した男を思ひ出すと、彼女の心は一層アメデエに惹きつけられた。彼女はその思ひの中に、熱い巣の中にでも蹲まるやうに、蹲まつた……

日は速かに過ぎた。奔流する時は、彼女を坂の上に運んで行つた。そこから彼女は幸福な感覺をもつて辷り落ちるやうな自分を感じた。アメデエは彼女を、ローザが裁判される筈のルウアンにつれて行き、知合の控訴院長に共働者の一人として紹介した。

彼等はローザを一緒に訪問さへした。けれども強情なローザからは、前と同じ憎惡に引き歪んだ表情しか報ひられなかつた。犯した恐ろしい行爲の觀念も、後悔を示す感情も、アニックの努力にも拘らず、ローザの閉された額の下には入らなかつた……併しアニックは、多分裁判が開かれるであらう秋までには、ローザを說服する希望を失はなかつた。

アニックとアメデエはもう少しも離れなかつた。婉曲に、そして彼女のおかげで大いに助かるといふ口實の下に、彼はアニックにいくつかの訴訟記錄を渡した。二人も秘書がゐるのに、間に合はない程の仕事がある……議會と、裁判所と……若し彼女が、彼のために働らいてくれるなら！……彼はどんなに嬉しいであらう……と言つて。

彼は十分彼女が拒絕するかも知れない程の感じ易い誇をもつてゐることを知つてゐた。殊に、二人の間に戀愛が生じてゐる今日、辯護士としてよりも、女であるがための親切だと思つたならば、彼女は必らず拒絕するであらうことを知つてゐた……。併し今彼女は辯護の準備のために無駄ではないと思つて、毎朝彼の家に行き、郵便物を整理したり、タイピスト達の仕事を指導したりするやうになつた。

婦人彙報

◇婦選同盟がガス問題を

東京瓦斯株式會社が二億萬圓增資に絡んで瓦斯料金値下問題が起り目下紛糾中であるが、婦選獲得同盟の委員達によつて組織されてゐる東京市會委員會では五月二日同事務所に於て協議會を開き無產黨市議馬島僴氏に就いて瓦斯問題の內容、會社の內容市議の態度等を訊き今後の方針を決する上の參考とした。從來政治方面に活動してゐた同同盟が今回の瓦斯問題に對して積極的に活躍せんとしたことは注目に價する。

◇瓦斯値下げと堀切市長

堀切市長並に白上助役は五月二日帝大大島工學博士を招いて瓦斯製造に關する詳細なる說明を聞き協議を行つた結果堀切市長はこの問題を市民生活に直接影響ある重大なものとし緊急に値下せしめる事に態度を決し、就任最初の仕事として極力その實現を期することゝなつた。尙市長は三日ガス會社長岩崎淸七氏に宛て公文を以て會社の生產費用、炭價、計畫の未實施地域等に就て回答を求めた。

◇伯林の暴動死傷者三百名

伯林市の共產黨員は五月一日のメーデーにおける官憲の遣り口に憤慨し更に抗議的示威運動を起し各所で警官と衝突して大騷動となつたが特に最も激しかつたのはノイチルン區。今回騷擾の結果死者二十五名、重傷者三十六名を出し、輕傷者は二百名を超えた。

◇婦人の立候補六十四名

英國の總選擧には全國にわたり婦人の立候補既に六十四名を算して有權男子と雌雄を爭つてゐる。內二十名が勞働黨、二十五名が自由黨、八名が保守黨で共產黨及び中立若干名といふ狀態であるが、新選擧法で二十一歲から三十歲までの婦人五百萬を增加して各區とも婦人有權者が多數を占めてゐる。

◇長唄科の新入生

洋樂萬能の上野の東京音樂學校に今年から唯一の邦樂として新設された長唄科の試驗は終り二百人の應募者中から三十八名が合格、五月八日から新學期開始された。合格者中男女八名で中には十四歲の一中學生があり、女子には創作家岸田國士氏の令妹朝子氏や大岡賞勳局長令孃仲子氏等がある同科は本年は技術專門の選科として來年度からは學科も加へ正科とし中等學校卒業生のみを入れるといふ

◇亡夫の父との結婚を恥ぢ
二兒を抱いて心中

福島縣相馬郡日立中村警察署長折笠勇(六二)長男一の妻きん(三〇)は長女はな(九つ)を抱いて五月三日夜常磐線の汽車に轢かれて母子共に死んだ。原因は昨年きんの夫一が死亡したので舅たる勇の家に歸つてゐたところ同署長は數年前妻を亡ひ後妻を求めんとしてゐる折柄なので親族會議の結果きんを後妻に迎へることに決した。きんは亡夫の父と夫婦になることを恥ぢ遂に家出して親子心中をとげた

◇全町千五十戶が消燈同盟

北海道渡島國江差町では電燈値下運動を起しつゝあつたが廿三日に至り爭議化し、全戶數千三百戶中千五十五戶は消燈同盟を組織した處江差電燈會社では同夜斷線を決行したので事態險惡となり町民大擧して示威運動を行ひ遂に警官出動檢束者十數名を出すに至つた。消燈同盟は社民黨一派に指導されてゐるので更に紛糾する模樣

◇ガリクルチ女史の來朝

世界的女流聲樂家ガリクルチ夫人は目下來朝中であるが日本の婦人に就て左のごとく語つた。「日本の人は肉體が歐米人より劣つてゐるから洋樂では器樂も特にヴオーカルでは到底歐米人に及ばない等といふ迷論を聞かされるが大間違ひである。大きな肉體には音樂的・美しさは生れにくい。世界的なヴオーカリストはみな小柄な方で音樂は肉體の力ばかりではなく魂から生れる。例へばカナリアはあんなに小さいのに美しい聲をもち駝鳥はどうでせうか。まあ私をごらんなさい。この樣に小さいでせう」

◇新裝の基督敎女子青年會館

東京基督敎女子青年會では駿河臺に新築した新館を開館した。白と綠の鐵筋コンクリートの五層樓で設備は最新式。八百人を入れる講堂、百五十人の椅子をもつ小講堂を始め體操場、敎室、クラブ室禮拜室、醫務室、屋上運動場など完備してゐるが地下室の女子專門のプールは一ケ年を通じて水泳が出來る設備だから近代スポーツガールの大滿悅を得るであらう。入口に近い食堂は一般にも公開して安價な料理をウエーターなしで提供する。その他初めて外國へ行く婦人のために洋風の生活一式を備へたアパートメントがある。

◇ソプラノ松平夫人が日
本大學の藝術科講師に

日本大學が新しき試みとして五

月中旬から開講される藝術科では凡ゆる藝術に關する部門をさせる爲音樂學講座を設けて講師にソプラノの松平佐登子夫人バリトンの內田榮一、ピアノはジェームス・ダン、ヴァイオリンに鈴木鎭夫の諸氏を招聘することになつた。

◇二巡査拔劍し裸で暴れる

五月五日夜東京府下目黒町上目黒附近を官服のまゝ泥醉した警官が通行中の婦人や子供を追ひまはし、果ては亂暴にも二名とも拔劍して暴れまはり悲鳴をあげて逃げ廻るに一名は官服まで脫いで眞裸となり浪籍を極めた、この騷ぎに目黒署から數名の警官が急行して暴れ狂ふ兩人から劍をもぎとりなほも嚙みつくのを漸くとり押へ一先づ目黒署に檢束、取調べの結果兩名共六日付で免官となつた兩名とは西平野署勤務の巡査小林秀雄と柴田實、その夜は警視廳屬某警部の自宅で鱈腹御馳走になつた揚句の出來ごとである。

◇女性の不良少年少女係

この三月目白の女子大學社會學部を卒業するとすぐ司法省の少年審判所に不良少年少女保護に入つた女性――齋藤政子さんは語る。「實際問題は今まで想像してゐた樣な簡單なものではありません。疑問ばかりですが併し此所へ來る子供の犯罪の殆どがその家庭に原因してゐるのを見ても人間にとつて環境がいかに大切であるかを感じます。

◇佛敎研究の米婦人

アメリカの佛敎研究家として知られてゐるウヰリアム・サラヂウト女史（四九 は去る二十九日正午郵船サイベリア丸で神戶に着き京都紫野大德寺代表井口義男師等に迎へられて入洛した。

◇國畫展、春陽展開かる

葉櫻の上野は春陽、新興大和繪、朝倉展國畫展が三日から開かれた春陽會の女流入選者は佐藤淸子、能戶幸、鈴木ちか子、阿部みどり伊勢八重子、松本マサ子、吉田節子の諸氏、國畫展の方では今澤澄子、服部伺子、西脇マジョリー、堀房子、千葉宮士子、土田つぎ江山川美耶子、松本滿子、福島慶子明石光子、齋藤順子、小諸女史、その中で福島慶子氏はパリにあり彼地の作品である。

◇圓タクガール出現

ダンサーの上を往く圓タクガールが出現した。それは朦朧運轉手と謀つて助手臺に乘りこみ宵の口から銀座を中心に流してあるき浮かれ男やモボを捉へて自働車にのせ暗黒の代々木練兵場や戶山ケ原に行つて風紀を紊すのである。圓タクガール、ストリートガールにステッキガール。警視廳でもこの種の取締にはだいぶ手を燒いて嘆息してゐる。

◇同志社女學校生も騷動の渦中に入る

さきに敎授の免職問題に端を發した京都同志社大學では今尙ほ紛擾をつゞけ容易に解決の曙光も見えないが、五月二日同志社女學校專門學部生徒三百名は放課後公會堂で時局に關し有志大會を開き「我々は法學部敎授等の運動を支持する」と聲明し六十名の實行委員を擧げて實行方法を協議し、西村理事の卽時辭職、解職の敎授の卽時復職を要求すべく決議し拍手歡聲をあげた。これで全同志社大學專門學校男女生徒は全部結束し運動は尖銳化されてきた。

◇婦人宣敎師等が婦人運動へ

基督敎婦人矯風會の西洋婦人關東敎會の總會が東京で最近開かれ宣敎敎育に携つてゐる人達の集まつた數六十名、席上ガントレット恒子女史は日本の婦人運動に就き河井道子女史は日本に於ける基督敎々育の意義について講演あり、今後同會は婦人參政權運動でも廢娼運動でも實際に働くものに合流してその運動を援けることに贊成した。

◇大杉あやめ女史逝く

肺患のため四月卄日以來芝區白金臺町傳染病研究所附屬病院に入院加療中であつた故大杉榮氏實妹あやめ女史は病勢進み七日夜夫君の近藤憲二氏始め知友の多くに護られつゝ永逝した。享年三十。同女史は一子宗一君が大震災の時大杉榮氏夫妻と共に殺された時は米國にありその後歸朝して夫橘惣三郎氏と別れて無政府主義運動をなし勞働運動社近藤憲二氏と結婚してその仕事を援けつゝ今日に至つたのだつた。

◇三越爭議双方の會見

調停課で斡旋

三越配達員爭議につき警視廳の有松調停課長の斡旋で左の腹案に基き十三日に勞資双方の會見を調停課で行ふことゝなつた

一、解雇者の內若干名復職二、解雇手當の支給三、爭議手當の支給四、爭議解決の形式右の中第四は調停課に委任するか否かが注目されてゐるが、大體に於て遲くも十五六日頃までには解決する見込とある。

編輯後記

さて、いよ〳〵苗代田の仕事は終つた。これからが植附けである。皆さん聲を揃へて元氣よく一週年號をむかへる唄をうたはうではありませんか、それにしても、はやく「全女性の唄」がほしいものです。この十二册目の編輯を終つて、かく健かに成長したのも、去年初めての女人大會の集りのあの潑溂さを見れば當り前だといへます。

それにしても、よき紀念號を出すと共に、去年にまさつた集りを催したいものです、其節は振つて參會して下さい。お願ひします。（時雨）

いつか青葉の美しい窓の近くに全女性進出行進曲をつのるのビラが下つてゐる。いい歌がほしいものだ。詩歌に對する愛着を深くもつ私は心よりいい歌の應募されんことを祈つてゐる。らいてう氏がこの計畫を稱賛されたことをも附記したい氣がする。

なほ此の女人藝術の仕事は全般的女人進出と各個人的發展との二途をめがけてゐるのだから、一朝一夕の仕事ではない。野心も野心大野心なのだから。さて、いつの日ぞこの野心の達成を喜べる日は。忠告、苦言はもつともつと私たちをはげますのだ。卒直に言を寄してもらひたい。仕事をしてゐるものの心は決して決して狹隘ではあり得ないものだから受け入れる力はもつ。受け入れる力の少ないものは自滅のみちをたどることは眞理なのだと編輯室一同自戒するのである。（花世）

五月號は大變おくれて出た。今度こそは奮發して早く出しませうとどなつて皆に笑はれた。後になる程よい物がみつかるからと編輯長がおつしやる。けれど今月はこんなに早く出來た。どなつて笑はれたおかげか。兎も角もうれしい。この嬉しい中に皆様に御知らせしなければならない悲しい事が持上つた。私共協力してやつて居た與謝野氏生誕祝賀會の準備中突然、氏の愛婿が逝去されたので、遺憾ながら十二月迄延期する事になつた。一生懸命に描いたポスターもそれ迄顔を出さない事になつた。併し十二月を期待されよ。（熱田）

空に潑溂と若葉のもえる音がする。來るべき旺んな夏を迎へんための若やいだ力だ。青葉のやうに清新な女人藝術は創刊一週年紀念號を迎へやうとしてはちきれるやうな元氣に滿ちてゐる。愛讀者の皆さまの生々とした力ある投書や通信をお待ちしてゐる。水田にはもう田植がはじまつてゐるでせうか。（八木）

若竹がすんなり伸びて細い葉尖が露に光り、野生の苺が赤く大きく下敷の葉の間に鈴生りに置かれる時、女人藝術も一週年が來て益々潑溂と初夏の風に胸を張つて全國の同盟の間に進んで行く。記念號の新らしい種々な仕事に讀者諸姉の御期待を乞ふ。（西村）

太陽の黑點のおかげだらうと思ふのだが、五月だといふゝにちつともいいお天氣がないのでつまらない。先月は旅行や其他の事情で發行が遲れてそれもつまらない。しかし今月は皆一生けんめいだからきつと早く出る。それから先號の最近世相漫談會で一四頁下段に重大な誤のある事を發見し一言御わびを申上げる。それは林氏にはまだ奥さんがなく、お釜の蓋で擲つたのは葉山氏であつたといふことです。（みどり）

時々は間違へたり、やり損つたりしながら、ともかくも一年間、活字の勘定を仕通した事を思つて、私らしくしみ〴〵してゐる。

煤拂ひ、棚下しのつもりで、女人藝術批評會を開いて、寄稿家の方か・ら、きたんのない批評をして頂いた。これは今後の新らしい活躍を一層生彩あるものにする、よき糧になるのであらうと思ふ。殊に座談會といふものは各人の感じが充分出て面白い。讀者も明瞭した批評眼と期待とを以つて正しく讀んで頂きたいと思ふ。

來月一週年紀念號が出るとすぐ日比谷の音樂堂で、紀念講演會を催して大いに女人進出を實際化さうと企てゝゐる。日が定り次第新聞紙上で發表す筈だが、出來る丈盛會にしたいものである。（素子）

昭和四年五月廿日印刷（毎月一回）
昭和四年六月一日發行（一日發行）

送料一部壹錢五厘

定價 1部……40錢 6部……2.30錢 12部……4.50錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ。
□郵便切手代用は一割増の事。

發行者——長谷川時雨
編輯者——素川絹子
印刷者——生田花世
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂——大東館
　　　——北隆館——東海堂

發行所 東京市牛込區左內町三十一地番
女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京七五八二五

原作　三上於菟吉

監督　村田實

撮影　青島順一郎

激流

後編

岡田時彦　中野英治

入江たか子　夏川靜江

島耕二　高木永二

小杉勇　主演

日活秋季超特作

人生の激流の波に流され、溺れ、歎き、悲しみ、沈む人間生活のあらゆる姿を盛れる激流一卷は今、後編を市に出すにあたり既に高評嘖々、愛好者の高覽を待つ。